筑波大学博士（言語学）学位請求論文

日本語の句構造

―述語の等位接続を手がかりに―

平田　一郎

２０１０年度

[目次]

日本語の句構造 ―述語の等位接続を手がかりに―

１．問題提起.....1

２．理論的枠組み.....9

２．１．大きな枠組み 9

２．２．より詳細な理論的枠組み 15

３．TP 領域への繰り上げ 21

３．１．繰り上げ　支持できるもの 21

３．１．１．否定のスコープとかき混ぜ 21

３．１．２．不定代名詞 25

３．１．３．数量詞遊離 28

３．１．４．否定極性項目 36

３．２．繰り上げを支持するとされている他の証拠 40

３．２．１．「する」挿入 40

３．２．２．ゆるやかな同一性 44

３．２．３．目的語-遊離数量詞の等位接続 49

３．３．非時制等位節の中の繰り上げと３つの分析の可能性 53

４．諸問題.....59

４．１．等位接続/従属節 59

４．１．１．範疇に制約されない等位 60

４．１．２．複数の等位節 61

４．１．３．入れ替え可能性 62

４．１．４．「と」との共起 63

４．１．５．等位構造制約と全域的適用 64

４．１．６．等位構造制約の違反と「そして」の削除 66

４．１．７．「違う」「異なる」「別々の」の解釈 67
４．１．８．空所化/右接点繰り上げ 71
４．１．９．等位接続の句構造 73

４．２．TP 分析 75
４．２．１．空所化 76
４．２．２．右接点繰り上げ 78
４．２．３．空の T 83
４．２．４．T-to-C 86
４．２．５．T-to-Fin 88
４．２．６．Tomioka (1993)の TP 理論 94

４．３．が/の交替 98
４．３．１．*TP & TP 100
４．３．２．「が/の」交替とその適用条件 105
４．３．３．等位接続部分削除と「が/の」交替 110
４．３．４．空の T と「が/の」交替 116
４．３．５．「テ形」と「が/の」交替 118

４．４．残された問題 121

５．分析.....124
５．１．XP 124
５．１．１．AgrP 125
５．１．２．AspP/ModalP 131
５．１．３．FocP 132

５．２．PolP 分析 133
５．２．１．[neg] PolP 134
５．２．１．１．範疇[neg] PolP の動機付け 134

５．２．１．２．[neg]の PolP に基づいた繰り上げの説明 139
５．２．２．[aff]の PolP 146

５．３．繰り上げ 154
５．３．１．EPP 156
５．３．２．語彙動詞と Pol の関係 160
５．３．３．主要移動と「する」挿入のメカニズム 167
５．３．４．Pol と T の関係 173
５．３．５．Pol-to-T 182
５．３．６．「が/の」交替と Pol+T 190
５．３．７．分散形態論による対案 196
５．３．８．「が/の」交替の局所性 200
５．３．９．日本語の TP の不完全性について 205

５．４．等位節両否定の可能性 207

５．５．動詞以外の述語の否定 209

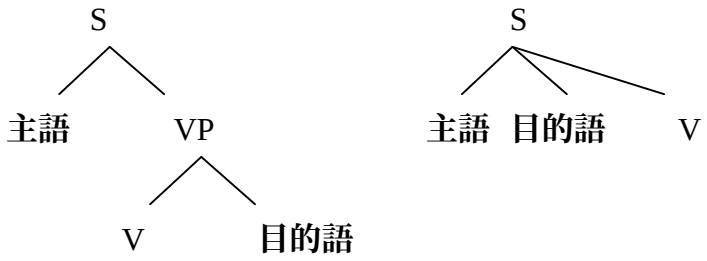
６．まとめ 215

参考文献.....219

１．問題提起

Kuroda (1965)に始まる日本語の生成文法的研究において, その句構造の解明は常に大きな関心を集めてきた。1980 年初頭には，Hale (1980, 1983)がいわゆる階層性のパラメターを提唱した（Farmer 1984 も参照されたい）。階層性のパラメターによれば，言語は大きく２つの下位グループに分けられる。階層的な言語では比較的厳格な語順の制約があり，句構造が立体的に分析できるとされる(1a)。他方非階層的な言語では，語順が比較的自由で，句構造は平板的な形を取るとされた(1b)。

(1)　a. 階層的な言語　　b. 非階層的な言語



英語は代表的な階層的言語で，日本語は非階層的言語の典型であると考えられていた。しかし，その後 1980 年代半ばになると，日本語も英語と同様に階層的構造を持つ言語であるという指摘がなされ，多くの証拠が提示された（Saito and Hoji 1983，Hoji 1985，Saito 1985，Ueda 1986，1990，Whitman 1987，Miyagawa 1989 等の議論を参照されたい）。そして(1a)で示したように，日本語にも英語同様，主語と目的語の句構造上の生成位置を区別する VP 投射が存在し, 比較的自由な語順は，かき混ぜ規則と呼ばれる語順を入れ替える統語規則の適用の結果生じる現象であると主張された（Saito 1985 は，この立場での先駆的で網羅的な研究である）。

現在生成文法的研究において，日本語も英語等の言語と同様に，ある程度階層的な構造を持つ言語であるという認識は広く共有されていると考えていいだろう。その一方で，具体的な構造やその構造に基づく文の派生過程となると，数多くの異なった分析が提示され，広く受け入れられた，いわば日本語生成文法研究の標準理論のようなものはないといっていいだろう。そもそも日本語には英語と同じように DP や TP (IP)，CP といった（機能的な）範疇が存在するか否かが議論された（Fukui 1986，Fukui and Speas 1986，Kuroda 1988 など）。また

1990 年前後に，相次いで提唱された動詞句内主語仮説がさらに状況を複雑にした（Kitagawa 1986，Fukui 1986，Koopman and Sportiche 1991）。それまでも受け身文(2a)や繰り上げ構文(2b)が，目的語位置や埋め込み文主語位置に基底生成された主語が，主文主語位置へと移動することで派生されるという分析は，英語では一般的であった。

(2) a. John was scolded t by his teacher.
b. John seems [t to be a good linguist].

これに加え，通常の主格主語も，動詞句内部に基底生成され，その位置から主語位置へと移動するというのが動詞句内主語仮説の考え方である(3)。

(3) John has [t gone to San Diego].

SVO 言語である英語の場合，動詞（was scolded）や主節動詞（seems），助動詞（has）といった要素が手がかりとなって，主語の移動が明確な形で現れる。これに対し，SOV 言語の日本語の場合，主語は通常文頭の位置に現れるため，移動が起こっているのか否かが直ちには明らかでない。

(4) a. 太郎が (t) 先生にしかられた.
b. 太郎が (t) 優秀な言語学者のようだ.
c. 太郎が (t) サンディエゴに行ってしまった.

(4)で示したように，主語はもともと文頭にあるので，ここからさらに左方に移動が起こっているのかどうか語順からは判断がつかない。

同じことが述語（動詞）の繰り上げにもいえる。英語の完了助動詞 have や受け身の助動詞 be は T より下の位置に現れうる。これは副詞との相対的位置関係からわかる。動詞句修飾の副詞が VP に付加した位置に生成されるとすると，他の助動詞（法の助動詞など）が T 位置をしめる場合，have/be は VP 内部に留まっていると考えることができる（Emonds 1976，Pollock 1989）。

(5) a. John [$_{T}$ will] always [$_{VP}$ have completed assignments by the deadlines].

b. John [$_T$ will] always [$_{VP}$ be respected].

一方，他の助動詞が T 位置に現れない場合，have/be は副詞よりも左に現れ，これらの要素が VP 内部から T 位置へと繰り上げられていることがわかる。

(6) a. John [$_T$ has] always [$_{VP}$ t completed assignments by the dead lines].
b. John [$_T$ is] always [$_{VP}$ t respected].

これに対し日本語では，副詞が時制辞と動詞の間に現れることがなく，英語のような（助）動詞の繰り上げが起こっているのかどうかすぐには判断がつかない。

(7) a. 太郎はいつも課題を期日通りに (t) 終える.
b. 太郎はいつもみんなから (t) 尊敬される.

日本語が英語と同じような階層言語であったとしても，そして英語と同じ句構造を基本的に持っていたとしても，主語位置や動詞の位置に関しては英語と同じように繰り上げが起こっているのか，にわかには判断がつかないのである。

こうした中，日本語も英語と同様に主語や動詞の繰り上げが起こる言語であるとする研究が数多くなされてきている。たとえば Ueda (1986, 1990)や Miyagawa (1989)は，数量詞の遊離現象を根拠に日本語にも主語繰り上げが存在すると主張をする[1]。

(8) a. 食堂で [２，３人の学生が] 酒を飲んだ.
b. 学生が 食堂で [２，３人 t] 酒を飲んだ.

(8a)では，数量詞「２，３人」と主語「学生が」が１つの名詞句となって主語の役割を果たしている。それに対し，(8b)では，「２，３人」が主語名詞句から遊離し，主語が副詞「食堂で」を超えて文頭に移動していて，ある種の「主語繰り上げ」が起こっているように見える[2]。

---

[1] この現象の観察は黒田 (1980)に遡る。
[2] 数量詞遊離と主語繰り上げの関係は３．１．３で詳しく検討する。

また，一見日本語の動詞繰り上げを示唆するように思える現象もある。伝統文法（国語学）で副助詞や係助詞と呼ばれる「も」「は」「さえ」などの要素は，文中の様々な構成素に付随する[3]。

(9) a. 太郎は/も/さえ 次郎に花束を卒業式に贈った.
b. 太郎が 次郎には/にも/にさえ 花束を卒業式に贈った.
c. 太郎が次郎に 花束は/も/ さえ 卒業式に贈った.
d. 太郎が次郎に花束を 卒業式には/にも/にさえ 贈った.

(9a)では主語名詞句に，(9b, c)では目的語名詞句に，(9d)では付加詞の後置詞句にそれぞれ助詞がついている。これらの助詞は動詞につくことも可能で，その場合，補助動詞「する」の挿入が起こる（Kuroda 1965）。

(10) 太郎が次郎に花束を卒業式に 贈りは/も/さえ した.

この現象は，英語の現在形や過去形の一般動詞文を否定した場合，T 位置に do が挿入される現象と平行しているように思える。

(11) a. John ran really fast.
b. John runs really fast.
(12) a. John did not run fast.
b. John does not run fast.

(12)のような場合，否定辞 not が，時制辞と語彙動詞の間の何らかの関係を阻害するので，T 位置に時制の形態素を支えるための形式動詞 do が挿入されると考えることができる。これになぞらえる形で，日本語の(10)では，助詞が語彙動詞の時制辞位置への主要部移動を阻むため，T 位置に「する」挿入が適用されていると考えることができる。

しかし，主語繰り上げや動詞繰り上げというのが，英語と同様，主節名詞句や動詞の TP 領域への繰り上げを意味するとすれば，この分析には疑念の余地が

[3] これらの助詞は，沼田 (1986, 2008)が「とりたて詞」と呼ぶ範疇としてまとめられる可能性がある。

ある。というのも，(13a)のように，日本語では時制要素を除外した形での「主語-目的語-動詞」の等位接続が可能で，(13b)のようにそうした等位接続構造内部でも数量詞の遊離が可能だからである。

(13) a. [食堂で２，３人の学生が酒を飲み] そして [居酒屋で２，３人の教員がビールを飲ん] だ.

b. [学生が食堂で２，３人 t 酒を飲み] そして [教員が居酒屋で２，３人 t ビールを飲ん] だ.

(13b)の[ ]内部に時制要素（すなわち T）が現れていないにもかかわらず，主語は数量詞を元の位置に残す形で節の頭へと繰り上げられているように見える。同様のことが「する」挿入に基づく動詞繰り上げにもいえる。(10)のような，動詞への助詞の付加とそれに伴う「する」挿入は，時制辞が現れない等位接続構造内部でも可能である。

(14) [太郎が笑いは/も/さえし] そして [次郎が泣きは/も/さえし] た.

もし動詞に付加された助詞が V-to-T の移動を妨げ，その結果「する」が T 位置に挿入されるとするなら，時制辞の現れない(14)のような等位接続構造内部でなぜ「する」挿入が起こるのか，説明がつかなくなる。Hirata (2005)が指摘するように，日本語の主語，動詞の繰り上げを示すとされるほぼすべての現象がこうした時制辞なしの等位接続構造で観察される（４．３節で,「が/の」交替の現象がこの例外となることを見る）。

少なくとも３つの分析が可能である。１つめは，(13)-(14)の構造は等位接続ではなく，何らかの形の従属構造で，それに基づいて繰り上げの（繰り上げに見える）現象が説明されるという可能性である。２つめは，(13)-(14)のような等位接続構造は，（見かけに反して）TP のレベルの等位接続で，何らかの操作で（１つの）T の要素が空範疇として具現されているという分析である。３つめは TP の下（そして VP の上）に別の投射があり，繰り上げと見える現象はその範疇の内部で起こっているとする分析である(Hirata 2006b)[4]。本研究の主な目的は，３

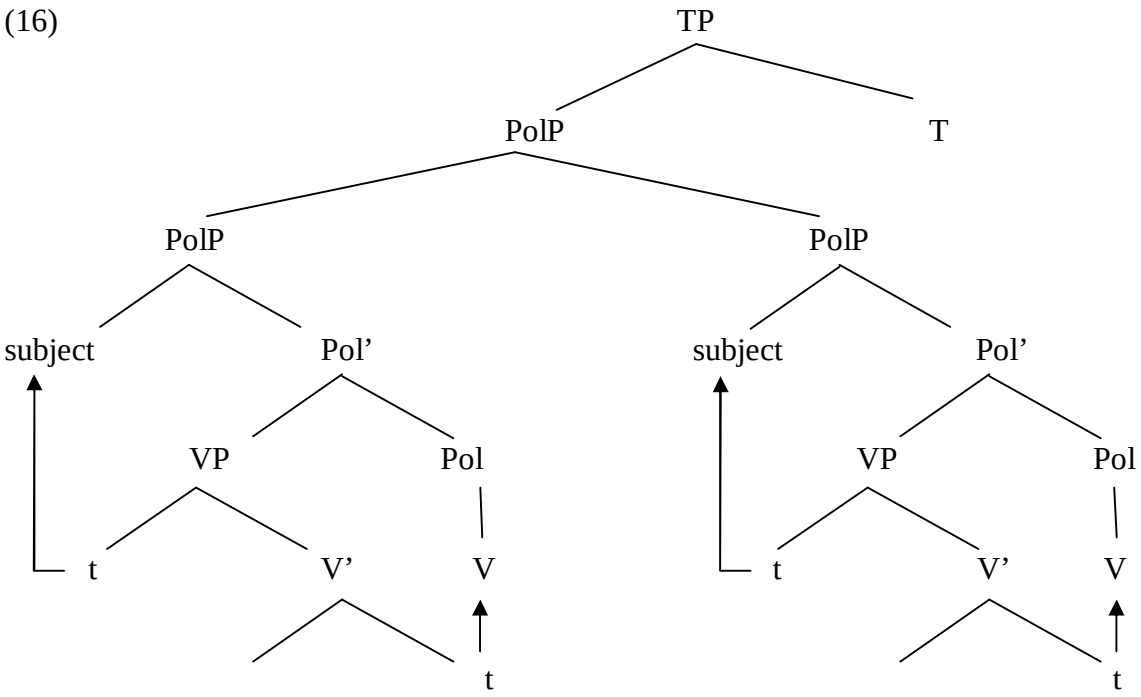
[4] 現在，標準的な生成文法の研究では，通常の語彙動詞の投射する VP の上に，他動性（使役）の意味を担う軽動詞 v が主要部となる vP がさらに投射されると考えられている。本研

つの可能性のうち最後が正しいこと，すなわち TP-VP の間には別の投射が存在し，その投射と VP との間で主語や動詞の繰り上げが起こっていることを示すことである。より具体的には，述語の肯定/否定を指定する範疇 PolP (Polarity Phrase) が TP-VP の間に投射されていると主張する(15)[5]。

(15) $[_{TP}\ [_{PolP}\ subject_i\ [_{VP}\ t_i\ t_j\ ]\ V_j\text{-}Pol]\ T]$

(15)では，VP と TP の間に肯定/否定を現す範疇 PolP が投射され，主語名詞句，動詞がそれぞれ PolP 領域へと繰り上げられている。この分析によれば，(13b)は(16)のような PolP の等位接続として分析されることになる。

(16)



(16)では，TP の下で２つの PolP が等位接続構造を作り，各々の PolP の内部で，主語と動詞が VP から PolP 領域へと繰り上げられている。この分析によれば，

究の議論の大半は，この仮説に左右されないため，以下では自由に vP と VP そして vP/VP という表示を場合に応じて使うこととする。

[5] PolP という用語は，Culicover (1991)から採用する。（文が否定の場合に，否定辞を主要部とする投射が形成されるという仮定に加え）肯定/否定の値を決める投射が常に句構造上に存在するという仮定の先行研究として，Laka (1990)の ΣP 分析，Frampton (1991), Zanuttini (1991)，Akahane (2006, 2008)等の NegP 分析などがある。

(13)-(14)のような時制辞を除外した形での等位接続構造内部で繰り上げを示す現象が観察されることが，繰り上げに関する仮説に変更を加えることなく，説明される。（各々の PolP 内部にある subject への主格付与は，T が全域的適用の形の「例外的格付与」を行うと考える。５．３．６節で詳しく論じる。）また，提案する PolP という投射は，動詞や主語の繰り上げの着地点となることとは別に，統語的・形態的・意味的に独立した範疇として機能することも示す。

TP と VP の間に PolP の投射を想定する一番の根拠は，(13)-(14)のような時制辞を除外した形での等位接続構造内部に否定辞が現れるという観察である(17)。

(17) [太郎がりんごを食べず] そして [二郎はイチゴを食べな] い.

これは，VP と TP の間に，否定辞を主要部とする投射（PolP）があり，これが TP の下で等位接続構造を構成していると考えることで説明される。さらに, PolP が，否定辞が現れないときにも（述語の肯定の値を指定するために）投射しているという仮定は，(18)のような例の意味解釈が重要な根拠となる。

(18) 太郎がリンゴを食べ　そして 二郎がイチゴを食べない.

(18)は，一見２つの「主語-目的語-動詞」という連鎖が，否定辞の下に等位接続されているかに見える。(19a)がこの分析を表す。

(19) a. [太郎がリンゴを食べ そして 二郎がイチゴを食べ] ない.
b. [[太郎がリンゴを食べ e] そして [二郎がイチゴを食べな]] い.

しかし(19a)の構造は，(18)の意味を正しく反映していない。というのも，(18)の左の被接続要素「太郎がリンゴを食べ」は，「ない」のスコープには入らず，肯定の意味しか持たないからである（「太郎がリンゴを食べない」とは解釈されない）。したがって(18)の正しい構造分析は(19b)でなければならない。(19b)では，「二郎がイチゴを食べな」という右の否定の句に対応する形で左の「太郎がリンゴを食べ」が構成素をなし，この２つが時制辞の下で等位接続されている。(19b)の分析が成立するためには，（表示のように）右の句の否定辞「な」に対応する形で，形態音声的実態を持たない要素「e」が左の句に存在すると考えざる

をえない。そしてこの事実は，否定辞「ない」が現れた場合だけでなく，述語が肯定の場合にもその値を指定する投射（PolP）が存在していることを裏付ける（詳しくは，５．２．２で論じる）。

本研究の構成は以下の通りである。２では，本研究が採用する理論的枠組みとその根拠を示す。３では，これまでに提案された日本語の主語・動詞の繰り上げを示す現象を紹介し，それらがすべて時制辞を欠いた等位接続構造の中でも観察されることを指摘する。４では，本研究で主要な役割を果たす(13a)のような構造が紛れもなく等位接続構造であること，そしてその構造を TP レベルでの等位接続であると分析することはできないことを示す。５では，TP と VP の間に常に文（述部）の肯定/否定を示す PolP が投射され，これによってすべての繰り上げ現象が説明できること見る。さらに同節では，V の Pol への繰り上げが普通は義務的であること，そして助詞の介在で繰り上げが阻止されることを見る。６で本研究の結論を述べるとともに，本研究で提案する分析の一部が，伝統文法での研究の分析の一部と合致することを指摘する。

２．理論的枠組み

２．１．大きな枠組み

本論に入る前に本研究の採用する研究の枠組みと仮説を，若干の動機付けを交えながら明らかにしたい。本研究は，日本語の基本的な句構造の研究である。また，比較言語的手法を前提とした研究である。比較言語学といった場合，３つの異なるアプローチがある。１つは言語間の近親性に基づく系統樹的研究である。この研究方法によれば，お互いに共通の祖語を持つ言語は，ある歴史的な段階において別の言語になり，さらにその言語が親言語となって別の複数の言語へと分岐していくことになる。比較的歴史的関係が密な言語，たとえばドイツ語と英語では，かなりの部分で共通性が見られ，また共通点や差異を探ることで，互いの言語に対する理解が深まり，それが親言語の姿の解明を助ける。また，お互いに関係が近しくない言語同士であっても，古い形を保持しているのが見つかる場合もあるだろう。しかし，日本語の場合，系統的にはっきりと同じ語族に属すると分析できる言語は今のところ見つかっていない。したがって，言語系統樹に基づく日本語の比較研究は難しいのが現状であろう。

２つめの比較言語学的手法は，言語類型論に基づくアプローチである。この考え方によると，世界の言語は，全く不規則にお互いが異なっているのではなく，異なり具合に一定の傾向の集合があるとされる。その傾向の集合に基づいて言語を類型化し，研究するのが言語類型論のアプローチである。たとえば，ある言語で，基本語順が VO であれば，かなりの確率で後置詞ではなく前置詞が用いられる，といった具合である（たとえば Greenberg 1963 など）。この研究方法は最後に述べる生成文法的なアプローチと似ているものの，仮に言語間に相違があった場合でも，それは単に別の類型に属しているからか，あるいは偶然の現象としてそれ以上の説明を必要としない。

最後は本研究が採用する生成文法的なアプローチである。このアプローチの特徴は，人間が生まれながらにして一定の言語知識（普遍文法）を持っていると仮定することである。この言語知識にはパラメターと呼ばれる，二者択一の選択肢がいくつもあると考えられている[1]。たとえば，主要部のパラメターは，主要部と補部の語順に関する選択を決定する。このパラメターで，「主要部先頭」が選択されると，英語のように基本語順が VO となり，前置詞は目的語に先行

[1] Chomsky (2008:135)では，パラメターの値が素性の束として語彙項目の中に記載されているとされる。

することになる。逆に日本語のように「主要部末尾」の値が選択されると，基本語順が OV となり，前置詞ではなく後置詞が用いられることになる。

普遍文法というものが存在するにしても，どの程度までそれが個別文法の形を制約しているかはさらに議論が分かれるところである。言うまでもなく，Lexicon に記載される語彙項目の内容は，大部分が後得的に獲得されたものである。たとえば，英語の cat と日本語の猫は，同じ意味内容を持つことが明らかであるが，別の発音を持つ別の単語である。人間が生まれながらにしてすべての単語を知っているのではないことは明らかである。同様に統語的な規則にも後得的な部分が全く無いとは当然言い切れない。普遍文法の存在自体が証明されていない現時点において，作業仮説としては様々な立場が可能であろう。たとえば，語彙の獲得以外の言語の統語的側面すべてが普遍文法によってあらかじめ決められていると仮定して，言語間の差異を限りなくゼロに近づけるべく理論を構築していくといやり方があるであろう。反対に，言語間に克服困難な差異が存在する場合，パラメターの値の違いにその原因求めるというやり方もあるだろう。もしくは，語彙と同じように，統語的操作の中には，後得的な部分として説明するのが最も現実的である場合もあるかもしれない。

主要部のパラメターは比較的広く受け入れられたパラメターの１つである。言語間に基本的語順の差があることは明確で，また様々な語順を統語的操作によって導くのは困難であると考えられたため，パラメターの違いにその原因が帰せられていた。しかし，Kayne (1994)などは，すべての言語の基本語順を SVO とし，その他の語順を句構造と移動の相互作用で導こうとする。このアプローチの背後には，言語間の違いをできる限り普遍文法の中へと取り込み，後得的な部分に説明を委ねまいとする方向性があると考えられる。

普遍文法を標榜する生成文法の研究では，理論の中で後得的な部分に委ねられる割合がより少ないことが望ましい。普遍文法の究明の出発点の１つには，母語を習得中に子供に提供される言語資料は，質的に不完全かつ量的に不十分であるにもかかわらず，習得された文法が，完全で一様であるのはなぜかという疑問がある。最も簡単な説明法は，ほとんどの言語知識が生得的であると考えることである。文法の説明で後得的部分に依存する割合が高くなればなるほど，この最も重要な疑問に答えられなくなるのである。したがって生成文法的な研究において，理想的には統語部門の説明が全言語に共通していることが望ましい。説明や仕組みがただ１つであれば，それこそが普遍文法であると主張

できるからである。

その一方で，説明は簡潔簡素である必要がある。従来から「説明的妥当性」という表現で，常に説明自体の簡素性が求められてきた（Chomsky 1965）。この要請は極小主義へと枠組みが推移する中で，正面から追求されるようになった。言語の完全性（最も経済的に作られているという意味において）を標榜する極小主義の枠組みでは，不要な投射や移動などを極力廃止して，最小限の道具立てで言語を説明することが要求される（Chomsky 1995）。

共通した説明を異なる言語に与えようとすると，説明は抽象的で，道具立てが煩瑣になる傾向にある。たとえば，AgroP による目的格認可の説明などはその代表例であろう。AgrsP-TP-AgroP-VP という句構造を採用するなら，英語の大部分の主格名詞句が表面上 AgrsP の指定部に移動されると仮定することになる（1章の(2)-(3)を参照されたい）。主語は通常動詞との間で，数や人称の一致を見せるから，SpecAgrsP は主格名詞句と動詞の一致を確認する位置であると考えることができる。一方フランス語では，目的語の wh 句が文頭に移動すると，過去分詞が目的語との間で性と数の一致を見せることが知られている。

(1) a. Quel texte as-tu lu?
which text have-you read.Masc.Sg
b. Quels textes as-tu lus?
which texts have-you read.Masc.Pl
c. Quelle revue as-tu lue?
which journal have-you read.Fem.Sg
d. Quelles revues as-tu lues?
which journals have-you read.Fem.Pl

(Haegeman and Guéron 1999:509)

目的語名詞句が(1a)のように男性・単数であれば，それに伴って完了助動詞も男性・単数の lu となり，(1b)のように男性・複数の目的語に対しては，男性・複数の完了助動詞形 lus が用いられるといった具合である。英語の主格名詞句は SpecAgrsP で助動詞との一致を確認する。これと平行するように，フランス語の目的語名詞句は，VP の外側にもう一つ投射があって（AgroP），そこで完了助動詞との一致関係が確認されると分析することが可能である。(2)がこの分析の派

生を段階的に示す。

(2) a. [$_{CP}$...[$_{AgroP}$ Agro[$_{VP}$ V wh]]
b. [$_{CP}$...[$_{AgroP}$ wh Agro[$_{VP}$ V t]]
c. [$_{CP}$ wh [$_{AgroP}$ t' Agro [$_{VP}$ V t]]

(2b)では，文頭に向かう途中に wh 目的語が SpecAgroP に立ち寄り，そこで Agro（そして V）との一致が認可されている。

もし，フランス語でこのように目的語が SpecAgroP で認可されているとするなら，同様のことが英語でも起こっていると分析することが，普遍文法の観点からは望ましい。英語の場合，完了助動詞であれ他の助動詞であれ，動詞的要素が目的語と一致を見せることはない。それでも，LF で，目的語が SpecAgroP に移動し，そこで認可を受けると分析することは可能である（Chomsky 1995:chapter 3）。

(3) a. [$_{AgroP}$...[$_{VP}$ V object]]
b. [$_{AgroP}$ object [$_{VP}$ V t]]

(3a)のように，可視統語部門では VP 補部にある目的語が，LF で(3b)のように SpecAgroP へ移動するとすれば，フランス語の(2b)と同様の統語構造で目的語の認可が行えることになる。

この AgroP による目的語認可の説明は，１つの方策によって異なる言語の目的語認可を説明できるという利点がもちろんあるが，英語の分析に AgroP という範疇を仮定しなければいけなくなるという欠点もある。一般的に，豊かな階層的句構造を仮定すれば，それだけいろいろな説明の可能性が生まれ，言語間の差異も説明しやすくなる。逆に，豊かな構造はそれだけ抽象性が増し，場合によっては動機付けが乏しい範疇を仮定することになる。この例が示すのは，異なった言語の一見異なる言語現象を説明するには，豊かで複雑な構造を想定するのが１つのやり方ではあるが，そのやり方だと説明的妥当性を満たしたり，簡潔な派生の説明をすることが難しくなるということである。言語間の差異の説明と簡潔性の間には常に緊張関係があるのだ。したがって，言語に対する理解を深めていくにはこの２つのバランスを上手に取ることが必要だと考えられ

る。とりわけ，機能範疇の仮定は，慎重になる必要がある。機能範疇を増やすことは，いわば普遍文法を標榜する統語研究にとっては禁断の果実なのである。機能範疇が多ければ多いほど言語間の差異の説明はたやすくなり，逆に機能範疇が多ければ多いほど言語生成の説明は煩雑で複雑なものとなる。そこで本研究では，（機能）範疇の想定に関して，やや保守的な次の条件を拠り所とする[2]。

(4)　（機能）範疇の満たすべき条件

a.　他の形態素の出現に依存しない独立した形態素を持ちうる.

b.　意味解釈上の影響を与えうる.

c.　範疇の選択関係に影響を与える.

機能範疇がはじめて生成文法理論で提案されたのは Chomsky (1986)であろう。とりわけ，それまでは S に付加されることで S'が投射されるとされていた補文標識が，CP という独自の投射をなすと提案された。(4)の条件を，CP と AgroP を比較することで明らかにしておく。まず形態素と意味に関する(4a, b)の条件から見よう。

(5)　a.　I wonder [$_{CP}$ whether [the teacher eats sushi]].

b.　I believe [$_{CP}$ that [the teacher eats sushi]].

(6)　a.　The teacher will [$_{AgroP}$ [eat sushi]].

b.　The teacher has [$_{AgroP}$ [eaten sushi]].

補文標識 C は，音声的に空であることもあるが（that の省略），(5)の whether/that のように独立した形態素としても現れる。一方英語の場合，いかなる状況でも目的語と動詞が性・数・人称といった一致を見せることはない(6)。また，C は一般に[±interrogative]の意味素性を持つと考えられている。とりわけ，[+interrogative]の場合は，C という範疇が意味解釈に貢献することは明らかである。それに対して Agro 場合，仮に性・数・人称が現れる場合であっても，動詞

[2] Fukui and Sakai (2003)は，「機能範疇は主要な言語資料からその存在を確認し得るものでなければならない」との指針を示している。(4)は，この提案をより具体化し，経験的事実を検証する目安としたものである。Fukui (1986)，Fukui and Takano (1998)も参照されたい。

に反映される一致形は意味解釈上積極的な役割があるとは考えられない（その情報は既に目的語名詞句に現れているはずであるから）。まして英語の場合，一致の形態が動詞の上に現れることはなく，意味解釈上も Agro は(4b)の条件を満たさないと思われる。

最後に選択の問題を考える。英語では補部として CP，DP ともに取る know のような動詞(7)，CP だけを取る wonder のような動詞(8)，そして DP だけを取る discuss のような動詞(9)があって，CP という範疇が統語的選択に影響を与えることは明らかである。

(7) a. John knows [$_{CP}$ that the concert is held].
b. John knows [$_{DP}$ the problem].
(8) a. John wonders [$_{CP}$ where the concert is held].
b. *John wonders [$_{DP}$ the problem].
(9) a. *John discussed [$_{CP}$ that the concert is held].
b. John discussed [$_{DP}$ the fact that the concert is held].

一方 AgroP の場合，理論的には AgroP 自身が T/Agrs に選択されることになる。しかし実際は，目的語を取るか否かは V の特性であるから，T/Agrs が AgroP の選択に関して条件を課しているとは考えにくい。また，AgroP と VP の関係で言えば，選択はむしろ VP が AgroP を選択すると考えるのが妥当だろう（他動詞でなければ，AgroP によって認可されるべき目的語も現れないから）。主要部が補部を選択する形で範疇の選択がなされるという一般的な仮定を保持するとするなら，T/Agrs が他動詞を選択することが指定された[+transitive] AgroP を選択する場合と，自動詞を選択することが指定された[-transitive] AgroP を選択する場合とがあると考えることで，一応のつじつまが通る。

(10) a. T/Agrs-[+transitive] AgroP-[+transitive] VP
b. T/Agrs-[-transitive] AgroP-[-transitive] VP

しかし，CP のパラダイム(7)-(9)とは違い，(10)は要するに動詞には他動詞と自動詞があるといっているに過ぎない。また，T/Agrs の種類によって選択する AgroP の種類が異なるということを示す積極的な証拠が少なくとも現代英語にはない

から，最後の条件(4c)に関しても AgroP を仮定する根拠は乏しいと思われる。

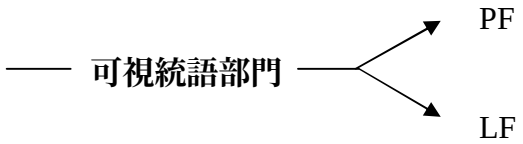
以上，かつて独自の範疇を投射するとは考えられていなかった補文標識も，これら形態的，意味的，統語的な観点からは十分に独立した範疇を構成すると仮定する根拠があることを見た。AgroP は逆に C 範疇を支持するような性質のどれも兼ね備えていないことを見た[3]。この観察を手本に，本研究では(4)の条件を満たす範疇だけに制限して議論を展開し，理論を構築することを目指す。(4)は，普遍文法的な説明の均一性と理論の簡潔性のバランスを取る上での，唯一絶対の基準ではないかもしれない。それでも，最も広く受け入れられている機能範疇である CP が(4)の条件を満たすことから，(4)の条件がある程度信頼に足る作業仮説を与えてくれるといえるであろう。

２．２．より詳細な理論的枠組み

前節で述べたように，本研究は普遍文法の存在を仮定する生成文法の枠組みで議論を行う。また，理論的に新たな提案をするというよりも，経験的なデータに基づいて日本語の句構造を解明することに主眼がある。したがって現在最も標準的と考えられる極小主義の基本的な枠組みを踏襲したい（前節(4)の提案は，この枠組みからやや外れるかもしれない）。この節では，本研究の議論の前提となる作業仮説を簡単に見ておく。

まず，文の産出に関して，いわゆる Y 字の派生モデルを想定する。この仮定によれば，可視統語部門における統語構造の組立が済んだ後，文の派生は音声部門（PF）と論理形式部門（LF）へと分岐することになる。

(11)　文の産出過程

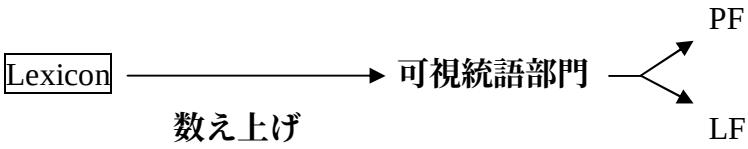


そして可視統語部門で単語が句構造へと導入されていくに先だって，数え上げ（Numeration）という操作が，当該言語表現で使われるべき語彙項目を辞書（Lexicon）から選び出すと考える。選ばれた語彙項目は，併合（Merge），移動

[3] Chomsky (1995:chapter 4)の議論も参照されたい

（Move）などの可視統語部門での操作を受けながら句構造を構築していく。この過程を組み込むと，文の産出は(12)となる。

(12) 文の産出



一方，辞書での語彙項目は，すべて素性で表されると仮定する。素性には，音声素性，意味素性，統語素性の３種があって，これらの素性の集合として１語彙項目は定義されることになる。

(13) 辞書での１語彙項目の記載形式

音声素性
意味素性
統語素性

たとえば，cat という語彙項目であれば，/cæt/という音声素性，[+animal]，[+mammal]等の意味素性，そして noun といった統語素性が束となって辞書に記載されていると仮定する。

(14) cat の辞書記載項目

音声素性：/cæt/
意味素性：[+animal], [+mammal]…
統語素性：N

語彙項目によっては，３種の素性のいくつかが空集合の場合もあると考える。

(15) a. John wanted [PRO to kill himself].

b. John did not kill himself.

(15a)の PRO は，kill から動作主の意味役割をもらい（統語範疇として NP，もしくは DP であると考えられる），また himself の束縛子として機能する（少なくとも意味素性として[+male]を持つと考えられる）が，音声素性は持っていない。一方(15b)の虚辞 did（do）は，T の音声的具現のためだけに現れているから，意味素性，統語素性は持っていないと考えられる。

(16) a. PRO の辞書記載項目

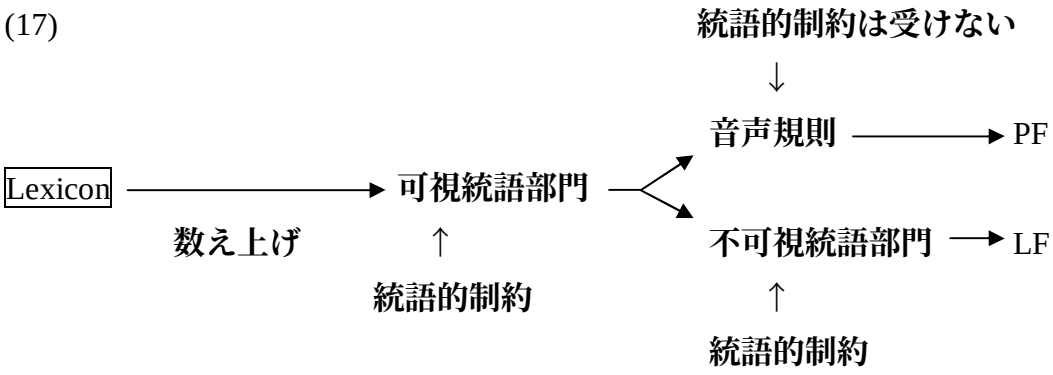
音声素性：Ø
意味素性：[+male]
統語素性：N

b. do の語彙記載項目

音声素性：/du:/
意味素性：Ø
統語素性：Ø

ある言語表現を作るのに必要な語彙項目は，このような素性の束として数え上げで選ばれ，可視統語部門において句構造に導入される。そして，句構造が一定の大きさの単位になると，Spell-Out という操作により，素性の束のうち，音声素性だけが PF 部門へと送られる。PF と LF への分岐後，PF 部門では，統語構造や統語素性・意味素性を利用することはできない。また，統語構造が存在しないことから，PF への分岐後は統語的制約も受けないと考える。逆に LF 部門に送られた意味素性と統語素性は，不可視統語部門において一定の操作を受けて LF のインターフェイスへと送られることになる。LF 部門では，PF への分岐後と異なり，統語構造が残るため，派生は一定の統語的制約にしたがうと考える。PF 部門では，音声素性が線形的隣接性のもと，音声的規則の適用を受ける。以上の仮定をまとめると(17)のような派生過程が想定される。

(17)



英語では，動詞が代名詞目的語を取る場合，後続する代名詞の先頭の子音が脱落するという現象が見られる。たとえば，like her は，her の/h/が脱落して/ə:r/のように発音されることがある。動詞句 like her の派生を(17)のモデルに基づいて（やや実際よりも簡略化して）示しておく。まず，like と her には次のような語彙項目記載があると考えられる。

(18) a. like の辞書記載項目

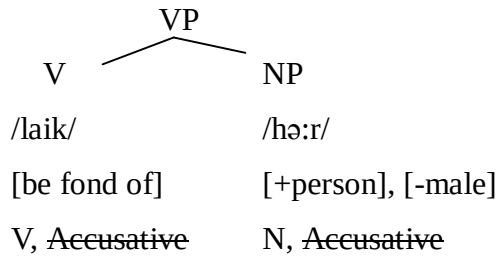
音声素性：/laik/
意味素性：[be fond of]
統語素性：V, Accusative

b. her の語彙記載項目

音声素性：/hə:r/
意味素性：[+person], [-male]
統語素性：N, Accusative

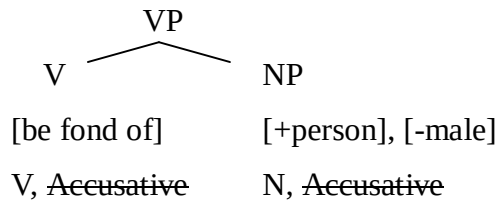
like，her ともに意味を持つ音声的な要素であるから，空になっている語彙項目事項はない。数え上げでこの２つの語彙項目が辞書から選ばれると，これらは可視統語部門において句構造に導入される。２つは直ちに併合を受け，VP を形成する。like は他動詞であるから，目的語の持つ Accusative の素性を一致（Agree）によって認可する素性（Accusative）を持つと仮定する（格の素性は意味解釈を持たないと考えられるので，素性の照合の後は消去されると仮定する）。一致は，一致を示す要素が句構造に導入されるとすぐに適用されるとすると，like と her が導入された後，(19)のような構造が可視統語部門で得られることになる。

(19) **可視統語部門での** like her



こうしてできた VP **から，** LF **と** PF **への分岐点で，音声素性だけが** PF **部門へと送られることになる。一方統語素性，意味素性は統語構造とともに不可視統語部門へと送られる。**

(20) **不可視統語部門での** like her



(21) PF **部門での** like her

/laik/ /hə:r/

さらに，PF **部門では，後続する** her **から**/h/**が脱落する音声規則が働いて，最終的な** PF **インターフェイスでの形が作られる。**

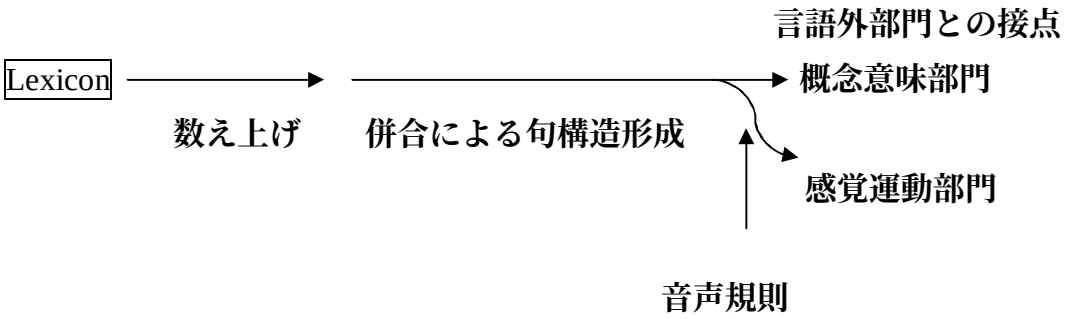
(22) PF **インターフェイスでの** like her

/laik/ /ə:r/

PF **部門では音声素性だけしか存在しないので，構造に関する制約はかからない。また，**PF **部門での規則は，**LF **への分岐後なので構造や解釈に影響を与えることはない。**

Chomsky (2007, 2008)**では，**(17)**に代わり**(23)**のような（より簡素化された）モデルが提案されている。**

(23)



(23)のモデルでは，LF/PF という言語システム内部の独自の表示レベルが廃止され，派生によって構築された対象が，言語内システムと言語外システムとの接点（インターフェース）に直接出力される形となっている。派生の分岐点は Spell-Out と呼ばれ，ここでは統語的に構築された対象から感覚運動（発音を制御する）部門で必要とされる音声的な素性だけが引きはがされ，送られることになる。音声的な素性はさらに音声独自の規則の適用を受け，最終的に感覚運動部門へ送られる。可視統語部門/不可視統語部門の区別がなくなり，統語部門では，すべての過程で併合による句構造形成が一貫して行われると仮定される。

(17)と(23)のモデルの一番大きな違いは，PF/LF といった独自の言語的表示レベルを認めるか否かという点である。また，可視統語部門/不可視統語部門という区別ができないという意味で，(23)はより簡潔な言語生成モデルとなっている。しかしながら，本研究に関する限り，(17)のモデルと(23)のモデルの差が決定的となる事例はないため，便宜的に(17)のモデルにしたがっておくこととする。

３．TP 領域への繰り上げ

この章では，日本語の研究においてこれまでに提案されてきた主語や動詞，そして主要部（否定辞）の TP 領域への繰り上げの証拠とされる代表的な現象を取り上げる。その中から，確かに繰り上げの証拠となりうる現象を選別して採用する。また，繰り上げを示す現象として提案はされたものの，そのまま証拠とするには不十分なものに関しては，十分に検討した上で退ける。さらに繰り上げの証拠となるように思える現象も，１章の(13a)のような，時制辞を除外した形での等位接続構造内部に含まれることを示す。言い換えれば，TP への繰り上げを示す確かな証拠がありながら，同時にそれらの現象が T を含まない等位接続構造ないでも観察されるという矛盾を指摘する。この矛盾を解決するために，TP と VP との間に PolP が投射されていると，５章で主張される。

３．１．繰り上げ　支持できるもの

この節では，まず TP 領域への繰り上げを示す現象として支持できるものを列挙する。現象はそれぞれ，否定のスコープとかき混ぜの相互作用，不定代名詞の認可，数量詞の遊離，主語の否定極性項目の認可である。次の節では繰り上げを示す現象として提案されたものの，異論が多く，本研究では採用しないものを検証する。

３．１．１．否定のスコープとかき混ぜ

Miyagawa (2001)および Miyagawa and Arikawa (2007)は，否定のスコープとかき混ぜの相互作用に基づいて，日本語には名詞句の TP 領域への繰り上げが存在すると主張する。１章で見たように，現在日本語の生成文法の研究において，日本語の基本語順は SOV であること，そして(1b)のような OSV の語順は，目的語が，主語の左に「かき混ぜ規則」の適用を受けて派生されることは広く受け入れられた仮定である。

(1)　a.　太郎がそのテストを受けた.
　　b.　そのテストを 太郎が t 受けた.

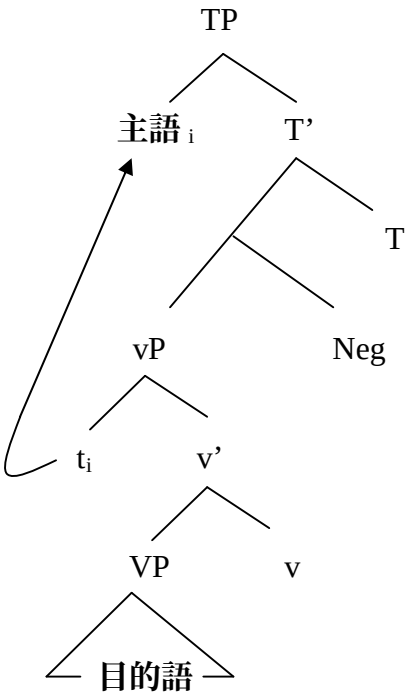
Miyagawa (2001)と Miyagawa and Arikawa (2007)の一番の関心事は，この移動を促す駆動力である。Saito (1985)以降，(1b)のような例は，随意的に適用されたかき

混ぜ規則の結果，目的語が IP/TP へ付加されたものとして分析されてきた。彼らはこうした従来の主張に対し，日本語にも拡大投射の原理（EPP）が働き，T の持つ EPP 素性が目的語の移動を促すと考える（目的語は TP 付加位置ではなく，SpecTP へと代入されることになる）。彼らの出発点は，次のような否定のスコープに関する観察である[1]。

(2) a. 太郎が全員を褒めなかった．（全員＞ない，全員＜ない）
b. 全員がそのテストを受けなかった．（全員＞ない，*全員＜ない）
（Miyagawa 2001:298）

(2a)のように，「全員」が目的語として現れる場合，この目的語は否定辞「ない」のスコープに入り，「太郎が褒めたのは全員ではない（褒められた人と褒められなかった人がいる）」という解釈になる。これに対し，「全員」が主語となっている(2b)では，主語が否定のスコープから外れ，「そのテストを受けた人は一人もいなかった」という解釈となる。否定辞が動詞句の上，そして TP の下に生成されるとすると，この主語/目的語の対比は次のように説明される。

(3)



[1] Kato Yasuhiko (1988)で観察されている現象である。

動詞句内主語仮説を採用するなら，日本語でも主語は vP の指定部に基底生成されることになる。そして，彼らによれば，通常主格主語は T の持つ EPP 素性を満たすために SpecTP へと繰り上げられることになる。否定辞が，(3)で示したように TP の下，そして vP の上に生成されているとすると，この繰り上げによって主語は Neg のスコープ（Neg の c 統御領域）から外れて，(2a)の全否定の解釈が得られることになる。これに対し，目的語は，VP の中に含まれ，Neg のスコープに入って(2b)の部分否定の解釈が得られることが適切に予測される[2]。

興味深いケースは，(4)である。

(4)　そのテストを 全員が t 受けなかった.（全員＞ない，全員＜ない）
（Miyagawa 2001:299）

(4)は，(2b)の目的語を文頭に移動した形である。(2b)と違い，(4)では主語の「全員」が「ない」の否定のスコープに入る部分否定の解釈が可能である（テストを受けた人もいる，という解釈）。これは，日本語で T が要請する EPP 素性を満たすことができる要素が，主格名詞句に限られないからであると Miyagawa (2001)，Miyagawa and Arikawa (2007)は主張する。(4)で，一見かき混ぜ規則によって随意的に文頭に移動しているように見える目的語名詞句は，T の持つ EPP 素性の要請を満たすために SpecTP へと繰り上げられているとされる[3]。そうだとすれば，主語名詞句は，もはや EPP の要請を満たすために繰り上がる必要はなく，SpecvP の位置にとどまることが許される。(5)がこの過程を示す[4]。

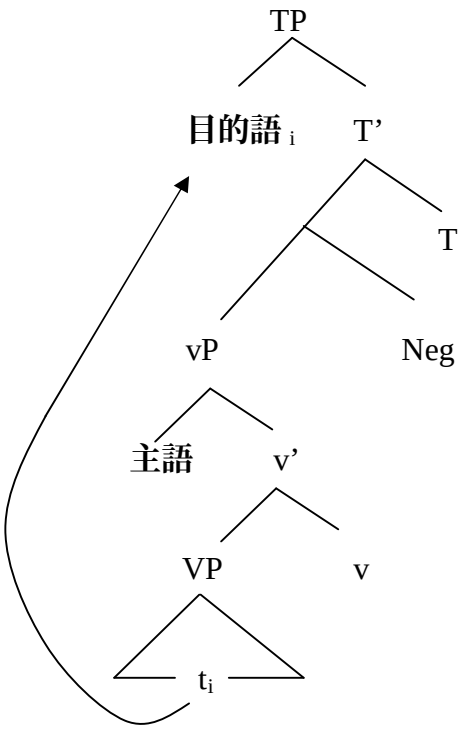
---

[2] (2a)の目的語「全員を」が否定のスコープから外れるという解釈（誰一人太郎が褒めなかったという解釈）が可能な話者いる。これに関して，Miyagawa (2001:329，注 10)は，「全員」に，各個人の集まりを指すのではなく，集合的にある集団の所属人全体を指す解釈があるからであるとしている。Miyagawa and Arikawa (2007:654)でも同趣旨の説明がなされている。しかし，(2a)が全否定となる解釈は，Miyagawa and Arikawa の提案する理論からはむしろ当然の帰結として予測される。この点は注の 9 を見よ。

[3] Miyagawa (2001)ではこの移動の前提として，動詞の T 位置への主要部移動が仮定されている（この移動によりいわゆる「等距離」が確立され，目的語が SpecvP に基底生成された主語を超えて A 移動することが可能となる）。Miyagawa and Arikawa (2007:653)では，V-to-T の移動については触れられておらず，その代わりに目的語が vP の２つめの（主語の基底生成位置の上の）指定部に立ち寄るという派生が仮定されている。Chomsky (2001)で提案されている，位相（phase）としての vP を通過するためであると考えられる）。

[4] 日本語の主格名詞句が必ずしも可視統語部門において SpecTP で認可されなくてもよい，という主張（やその根拠）については，Takezawa (1993, 1994)，Yatsushiro (1999)，

(5)

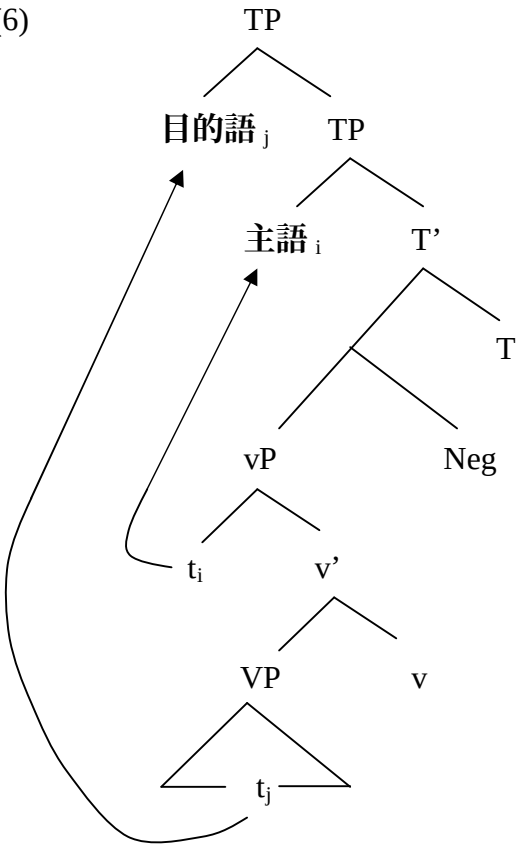


繰り上がった目的語が EPP を満たすので，主語は SpecvP にとどまったままとなる。そのため主語が Neg のスコープに収まる（Neg に c 統御される）ことが構造上保証される。これにより「全員」の部分否定の解釈が得られるのである。

(4)では，(2b)と同様に，「全員」が「ない」のスコープから外れる全否定の解釈も得られる。これについては，まず主格名詞句が T の EPP 素性を満たすために SpecTP へと（繰り上げによる）移動をし，その後目的語名詞句が通常のかき混ぜ規則を受けて文頭の位置へと移動する派生が提案されている。

Kishimoto (2001)等を参照されたい。この点については，５．３．６節で詳述する。

(6)



この派生によれば主語は再び否定辞の c 統御領域から外れて，全否定の解釈が得られることになる。

通常の SOV 語順で主語が否定辞のスコープから外れること，そして目的語の前置（SpecTP への繰り上げ）が，主語に対する否定辞のスコープを変えることは日本語にも vP の外側への「繰り上げ」操作があることを明確に示している[5]。

３．１．２．不定代名詞

TP 領域への繰り上げを示す次の現象は，Kishimoto (2001)で論じられた，不定代名詞の認可の主語/目的語の非対称性である。日本語には，「誰」「何」「どこ」のような不定代名詞表現があり，これらは，助詞「も」で束縛され場合に否定極性項目として機能する（McGloin 1976 を参照のこと）。(7)のように「も」が直接名詞句に付随する場合は，目的語でも主語でも，不定代名詞として適切に認可される。

[5] Kishimoto (2007:268)は，「全員」を用いた Miyagawa (2001)の議論を疑問視している。

(7) a. **太郎は何も買わなかった.**
b. **誰もその本を買わなかった.**

「も」は名詞句の他に動詞(8a)**や補文標識**(8b)**に付随することもある。**

(8) a. **太郎は何を買いもしなかった.**
b. **花子は** [**太郎が何を買ったとも**] **思わなかった.**

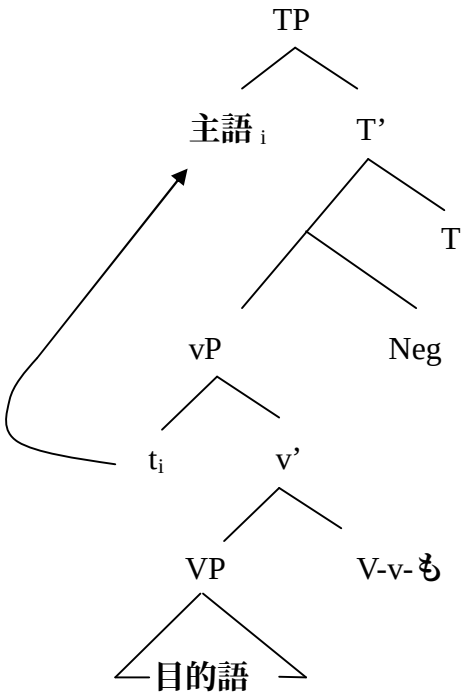
動詞に助詞「も」が付随した場合，不定代名詞の認可に関して主語/目的語の非対称性が観察される。目的語の不定代名詞は動詞付随の「も」に認可されるのに対し(9)**，主語の不定代名詞は動詞に付随した「も」では認可されない**(10)。

(9) a. **太郎は何を買いもしなかった.**
b. **太郎は誰に会いもしなかった.**
(10) a. ***誰が笑いもしなかった.**
b. ***誰が花子を褒めもしなかった.**

（Kishimoto 2001:600）

この対比は主語の SpecTP **への繰り上げが存在すると仮定することで説明される。日本語の語彙動詞** V **は, 軽動詞** v **へと主要部移動を受けると想定すると,** (9)-(10) **には**(11)**のような句構造が与えられることになる。**

(11)



(11)の表示では，主語名詞句が繰り上げにより SpecTP の位置に，そして目的語は基底生成の VP 内部の位置にある。「も」を含む最小の最大投射に含まれる不定代名詞だけが「も」に認可されるとすると（Kishimoto 2001:601），(11)における主語/目的語の非対称性が説明される。主語は，「も」を含む最小の最大投射である vP の外へと移動され，対照的に目的語は vP（VP）の中にとどまるからである。仮に主語が SpecvP 位置にとどまっているとしたら，その位置は「も」を含む最小の最大投射である vP の内側なり，主語の不定代名詞も「も」に認可されることが予測される。(10)が非文法的であることから，主語は SpecTP へと繰り上げられていることがわかる。

前節の Miyagawa (2001), Miyagawa and Arikawa (2007)との関連から，(10b)で，目的語が先に SpecTP へと EPP の照合のために移動されると，主語名詞句は SpecvP にとどまれることになる。そうだとすれば，その場合は主語の不定代名詞も「褒めも」に認可されると予測される。判断は微妙であるが，概ねその傾向があると思われる。

(12) ?花子 i を 誰が t_i 褒めもしなかった.

このように不定代名詞の解釈に見られる主語/目的語の非対称性も，主語名詞句

や他の要素がSpecTPへと繰り上げられていることを示唆していると考えることができる。

３．１．３．数量詞遊離

１章で見たように，数量詞の遊離は，日本語にもTP領域への名詞句の繰り上げがあることを示唆する現象であると考えられてきた（Ueda 1986, 1990, Miyagawa 1989など）。日本語の数量詞は，(13)のように所有格（の）によって名詞を直接に修飾することもできるが，(14)のようにそれが修飾する名詞句に隣接した位置に「裸で」現れることもできる。

(13) a. [３人の学生が] 酒を飲んだ.
b. 学生が [２冊の本を] 買った.
(14) a. [学生が３人] 酒を飲んだ.
b. 学生が [本を２冊] 買った.

神尾（1977, 1983），Kawashima (1998)，Watanabe (2004)，Miyagawa and Arikawa (2007)にしたがい，(14)のように数量詞とそれが修飾する名詞句が隣接する場合，数量詞と名詞句が「数量詞句」のような構成素をなすと仮定する。数量詞に隣接する名詞句は，Sportiche (1988)の意味での，「数量詞の残留」をさせる形で移動操作を受ける。

(15) 本$_i$を 学生が [t_i ２冊] 買った.

(15)では，数量詞句内部に残された痕跡を通じて，「本」と「２冊」の隣接性が保たれ，数量詞は適切に目的語名詞句を修飾することができる。

Miyagawa (1989)はこのような数量詞遊離の現象を用いて，日本語にも受け身文（や非対格構文）における主格名詞句の繰り上げがあると主張した[6]。

[6] Terada (1990)も受け身文，非対格構文での主格名詞句の繰り上げを支持する。Yatsushiro (1999)は，受け身文で可視統語部門での繰り上げはあるものの，非対格構文では，（可視統語部門で）主格名詞句がVP内部にとどまると主張する（スコープやVP前置などが例証として挙げられている）。

(16) a. 車$_i$が 泥棒に [t_i ２台] 盗まれた.

b. 泥棒$_i$が 警察に [t_i ２人] 捕まえられた.

(16)では，それぞれの数量詞句から主格名詞句が「数量詞残留」をさせる形で文頭に移動している。これらの例で数量詞は適切に主格名詞句を修飾することが可能なので，日本語でも TP 領域への主語の繰り上げが起こることがわかる。

これに対し，他動詞の主格主語は，目的語をまたぐ形で数量詞を残留させることができない。

(17) a. *学生が 酒を ３人 飲んだ.

b. *泥棒が 車を ２人 盗んだ.

(17)では，それぞれ主格主語「学生が」と「泥棒が」を修飾することが期待された数量詞「３人」と「２人」が目的語の右に現れているが，これら数量詞を主語と結びつけて解釈することはできない。これは，他動詞の主語がもともと TP の指定部に生成されるため，繰り上げを受ける可能性が無いからであると説明された。表示のように数量詞に隣接する位置に被修飾の名詞句（主格名詞句）もないし，またその痕跡もない。したがって派生のいかなる段階でも数量詞と被修飾名詞句は隣接することがなく，両者の適切な意味関係が結べないために(17)は非文となる，というのである。

以上の Miyagawa (1989)の説明には，しかしながら，少なくても３つの問題点がある。まず，(16)に関与しているのが本当に SpecTP への移動であるのかという問題である。日本語には，主語の繰り上げに加えて，かき混ぜ規則が存在することが知られており（実際のところ，(15)ではかき混ぜ規則によって数量詞の残留が起こっているように見える），当該移動が本当に SpecTP への繰り上げであることを示す必要がある。もしもかき混ぜ規則の結果(16)が派生されているなら，その移動は VP への付加でもありうるので，(16)の文法性は，TP 領域への繰り上げの証拠とはならない。

２点目は，もし日本語にかき混ぜ規則の適用が自由に許されるなら，(17)も次のような連続的なかき混ぜ規則の適用で合法的に派生できると間違って予測されてしまうことである。

(18) a. [$_{TP}$ [**主語 数量詞**] [$_{VP}$ **目的語**] T]

b. **目的語** $_i$ [$_{TP}$ [**主語 数量詞**] [$_{VP}$ t_i] T]

c. **主語** $_j$ **目的語** $_i$ [$_{TP}$ [t_j **数量詞**] [$_{VP}$ t_i] T]

(18a)**では数量詞を伴った主語が** SpecTP **に，そして目的語名詞句が** VP **内部に生成されている。はじめに目的語がかき混ぜ規則の適用を受け,** (18b)**が生成され, 続いて主語名詞句にかき混ぜ規則が適用されると**(18c)**が生成される。その際,** (16)**のように数量詞句が残留すれば（実際は非文となる）**(17)**が生成されるはずである。したがって，何らかの方策でこの派生を除外しなければならない。**

この２つの問題（とその他の問題）に対処するために，Saito (1985:chapter 3)**は,「主格名詞句はかき混ぜ規則の対象にならない」と仮定した。この仮定により,** (18c)**の移動は阻まれ,** (17)**の文は生成されなくなる。また, この仮定により,** (16)**がかき混ぜ規則によって派生されることがなくなる。そうであるなら，**(16)**の語順を可能にするのは，名詞句移動のような** SpecTP **への繰り上げ移動であるということになる。**

しかし，実際，日本語の主格名詞句がかき混ぜ規則の適用を受けると考えるべき理由がある。(19)**は英語での典型的な繰り上げ構文である。**

(19) John seems to Mary [t to be happy].

これに対応する日本語の「思える」も，補部として非時制節を選択する。

(20) a. **メアリーがジョンに** [t **とても素敵に**] **思えた.**

b. **メアリーがジョンに** [t **とても美しく**] **思えた.**

(20)**では, 英語の**(19)**と同様に主格名詞句が文頭へと移動している。それでも各々の文で「メアリー」に意味役割を与えているのは埋め込み文の形容詞であると考えられるから，もとは痕跡の位置に「メアリーが」は生成されていたと考えることができる。実際，英語とは異なり，これらの文の主格名詞句は基底生成の位置にとどまることもできる。**

(21) a. **ジョンに** [**メアリーがとても素敵に**] **思えた.**

b.　ジョンに [メアリーがとても美しく] 思えた.

問題は，(20)の文が(21)の文から，主節主語位置への（SpecTP への）繰り上げで派生されているのか，あるいはかき混ぜ規則によって派生されているのか，である。Takezawa (1993, 1994)は，再帰代名詞「自分」の主語指向性の性質を利用して，この移動が SpecTP への移動ではないことを示した。(22)では，再帰代名詞「自分」の潜在的な先行詞として「メアリー」と「ジョン」がある。

(22)　メアリー$_i$がジョン$_j$に自分$_{i/*j}$の本を渡した.

しかし，「自分」の先行詞になれるのは主語の「メアリー」だけである。この「自分」の主語指向性を利用すると，(20)で関与している移動が，主節の SpecTP への繰り上げ移動ではあり得ないことがわかる。

(23)　*メアリー$_i$が 自分$_i$の息子に [t_i とても素敵に] 思えた.

(23)では，「思える」の非時制補文主語「メアリーが」が文頭に移動している。そして，主節動詞「思える」の項の内部に主語指向の再帰代名詞「自分」が現れている。しかし，(23)の「自分」が主格名詞句の「メアリー」はさせないから，この移動が主節主語位置への繰り上げではないことがわかる（「メアリー」は文法的に主節主語の資格を得ていない）。(23)に対応する英語の例では，her が問題なく派生主語を先行詞として取り得る。

(24)　Mary$_i$ seems to her$_i$ mother [t to be pretty nice].

(23)と(24)の対比は，(20)の移動が繰り上げではないことを明確に示している。それでも(20)の文は文法的であるから，日本語の主格名詞句もかき混ぜ規則の適用を受けることになる[7]。そうだとすると，上で述べた２つの問題点は，依然として解決されていないことになる。

Miyagawa (1989)の３つめの問題点は，動詞句内主語仮説と(17)の派生の関係で

[7] 日本語の繰り上げ構文は５．３．６で再び取り上げる。

ある。もし動詞句内主語仮説が正しいとするなら，(17)の各文の基底生成時の形は，(25a)のようになっているはずである（動詞句内主語仮説を採用した，新たな枠組みの議論なので，vP の投射も示している）。

(25) a. $[_{vP}$ [主語 数量詞] $[_{VP}$ 目的語]] T

b. 目的語 $_i$ $[_{vP}$ [主語 数量詞] $[_{VP}$ t_i]] T

c. $[_{TP}$ 主語 $_j$ 目的語 $_i$ $[_{vP}$ [t_j 数量詞] $[_{VP}$ t_i]] T

主語は SpecvP 位置に数量詞とともに基底生成され，目的語は VP 内部にある。次に(25b)のように目的語が vP 付加位置へと移動される。最後に主語が数量詞を残留させる形で繰り上げ移動を受け，(25c)が（合法的手順によって）派生される。この（ミニマリストプログラムではごく標準的な）派生によれば，むしろ(17)の文は文法的となるはずであるが，実際は非文であり，なぜ主語の基底生成位置では数量詞残留が不可能であるのか説明が必要である。

主にこうした３つの問題点を解決し，数量詞遊離現象がやはり日本語の主語への繰り上げを支持する証拠となりうることを示したのが Miyagawa and Arikawa (2007)である。彼らは，まず，(17)の文法性の再検討をする。主語を修飾する残留数量詞が目的語の右に現れる(17)のような例文は，（文脈や単語を慎重に選択すれば）文法的となることがあると，多くの研究者に指摘されている（Gunji and Hasida 1998，Ishii 1998，高見 1998，Kuno and Takami 2003，西垣内/石井 2003）。

(26) a. 学生が 酒を 今までに [t ３人] 飲んだ.

（Gunji and Hasida 1998:57）

b. 学生が 私の本を [t ２人しか] 買わなかった.

こうした例文は，Ueda (1986, 1990)，Miyagawa (1989)といった数量詞遊離に基づく主語繰り上げ説への反証として挙げられてきた。Miyagawa and Arikawa (2007)はこうした反例の文法性を積極的に認め，むしろ(17)がなぜ非文であるのかを問題とする。(25)で示したように，動詞句内主語仮説を採用するミニマリストプログラムにおいては，(17)や(26)は文法的であると予測される。そうだとすれば，問題とすべきことは，なぜ(17)は非文法的なのか，ということである。それは韻

律上の問題であると彼らは指摘する。仮定しているように，数量詞とそれが隣接する名詞句が，全体として数量詞句という構成素を形成するとすると，(17)の各文は容易に（過って）(27)のように（韻律的に）分析されてしまう。

(27) a. *学生が [酒を３人] 飲んだ.
b. *泥棒が [車を２人] 盗んだ.

(27)の表示では，目的語名詞句と隣接する数量詞が構成素をなし，目的語名詞句と数量詞の性質上の組み合わせが不適切であるため非文となっている（酒や車は「人」では数えない）。これに対し，文法的な(26a)では，目的語名詞句と数量詞の間に，副詞「今までに」が介在し，(27)のような過った分析をしてしまうことを防いでいる。また(26b)では，強調の助詞「しか」があるため，数量詞が韻律的に強勢を与えられ，直前の目的語とは別の構成素であることが示される。これが過った分析を防いでいるのである。(17)の文でさえ，目的語と数量詞の間に一定の休止をおいて読むと文法的になる，と彼らは指摘する。

(28) a. ?学生が 酒を－[t ３人] 飲んだ.
b. ?泥棒が 車を－[t ２人] 盗んだ.

これで第３の問題点は解決された。また第２の問題点も，派生に関与する着地点こそ違え，派生の手順は第３の問題点と同じなので，(26)や(28)が文法的であると考えることで克服されたといえる。

第１の問題点を克服するには，(26)や(28)で関与している移動が，vP を着地点としたかき混ぜ規則ではなく，SpecTP への繰り上げであることを示す必要がある。(26)や(28)の例文の派生は，次の３通りが想定できる[8]。

[8] 本研究と Miyagawa and Arikawa (2007:653)では仮定が異なるため，検討する派生に違いがある。彼らの論文では(29a)の派生は検討されておらず，また(31a)から(31b)に至る際に，目的語が一度 SpecvP に立ち寄るとされている（連続循環移動によって vP の位相（phase）を通過させるためであると考えられる）。本研究では，この部分は省略する。

(29) a. [$_{vP}$ [**主語 数量詞**] [$_{VP}$ **目的語**]] T

b. [$_{vP}$ **目的語** $_{i}$ [$_{vP}$ [**主語 数量詞**] [$_{VP}$ t_i]]] T

c. [$_{vP}$ **主語** $_{j}$ [$_{vP}$ **目的語** $_{i}$ [$_{vP}$ [t_j **数量詞**] [$_{VP}$ t_i]]] T

(30) a. [$_{vP}$ [**主語 数量詞**] [$_{VP}$ **目的語**]] T

b. [$_{vP}$ **目的語** $_{i}$ [$_{vP}$ [**主語 数量詞**] [$_{VP}$ t_i]]] T

c. [$_{TP}$ **主語** $_{j}$ [$_{vP}$ **目的語** $_{i}$ [$_{vP}$ [t_j **数量詞**] [$_{VP}$ t_i]]] T

(31) a. [$_{vP}$ [**主語 数量詞**] [$_{VP}$ **目的語**]] T

b. [$_{TP}$ **目的語** $_{i}$ [$_{vP}$ [**主語 数量詞**] [$_{VP}$ t_i]]] T

c. [$_{TP}$ **主語** $_{j}$ [$_{TP}$ **目的語** $_{i}$ [$_{vP}$ [t_j **数量詞**] [$_{VP}$ t_i]]] T

移動はどの場合も，目的語がはじめに動き，主語が後に動くことになる。(29)**では, どちらの移動も** vP **への付加, あるいは** SpecvP **への代入である。**(30)**では, 目的語は** vP **へ，主語は** SpecTP **へ移動され，**(31)**では目的語が** SpecTP **へ移動された後，主語は** TP **へ付加されるか，あるいは** TP **の２つめの指定部へと代入されている。これらの派生のうち，**(30)**あるいは**(31)**が正しければ，日本語にも** TP **領域への繰り上げ移動が存在することの証拠となる。**

Miyagawa and Arikawa (2007)**は,** (31)**が正しい派生であると主張する。３．１．１で見たように,「全員」のような数量詞が否定文で使われる場合,「全員」が主語位置に現れると，否定のスコープから外れて全否定の解釈が得られ，目的語位置に現れると否定のスコープに入って部分否定の解釈が得られるのであった**(32a, b)。

(32) a. **太郎が全員を褒めなかった.（全員＞ない，全員＜ない）**

b. **全員がそのテストを受けなかった.（全員＞ない，*全員＜ない）**

c. **そのテストを 全員が** t **受けなかった.（全員＞ない，全員＜ない）**

また，目的語が文頭へとかき混ぜ規則を受けると，(32c)**のように主語の「全員」は（**SpecvP **にとどまることができるので）否定のスコープに入るのであった。これを念頭に次の例の目的語「全員」と否定のスコープの関係を観察する。**

(33) a. **学生が２人全員を見なかった.（全員＞ない，全員＜ない）**

b. **学生が全員を２人とも見なかった.（全員＞ない，*全員＜ない）**

c. **学生が全員を２人だけ見なかった.（全員＞ない，*全員＜ない）**

（Miyagawa and Arikawa 2007:657）

(33a)**で，目的語「全員」は** VP **内部で否定のスコープに入り，部分否定の解釈を受ける。一方，主語からの数量詞遊離のある**(33b, c)**では，目的語が数量詞に先行している。どちらも「全員」は否定辞のスコープから外れ，全否定の解釈だけが得られる。目的語が否定のスコープから外れるには，否定辞よりも上，つまり** TP **領域まで移動されている必要がある。また，さらにその外側に生起する主格主語は** TP **の２つめの指定部か，あるいは** TP **付加の位置まで移動する必要があり，**(33b, c)**が**(31)**の派生を経ていることがわかる**[9]**。**

また，３．１．２で，不定代名詞の「も」による名詞句繰り上げの現象を見た。目的語が不定代名詞となっている場合，通常は vP **の下（**VP **内部）に位置するので，語彙動詞に付随した「も」に認可されるのであった。**

(34) a. **太郎は何を買いもしなかった.**

b. **太郎は誰に会いもしなかった.**

主語修飾の数量詞が，主語に隣接する位置に現れている(35a)**も同様に説明される（主語を含む数量詞句全体が** SpecTP **へと繰り上げられていると考えられる）。ところが，目的語が主語と関係する遊離数量詞に先行する**(35b)**では，目的語の不定代名詞が認可されない。**

(35) a. **子供が３人どの映画を見もしなかった.**

b. ***子供がどの映画を今までに３人見もしなかった.**

（Miyagawa and Arikawa 2007:658-659）

この事実は，主語-目的語-主語修飾遊離数量詞-動詞という語順になっている場

[9] (2a)/(32a)**で，目的語が否定辞のスコープから外れる解釈も可能な話者がいる，と** Miyagawa (2001)**で報告されている。**Miyagawa and Arikawa **の理論からは，そのような判断をする話者がいて当然であると予測される。はじめに（主語ではなく）目的語が** EPP **の要請を満たすため** SpecTP **に移動し，その後主語が，移動された目的語の外側へと移動するという派生**(31)**が可能である。この派生では，目的語「全員を」は否定辞の** c **統御領域から外れ，全否定の解釈が得られることになる。**

合，(31c)のように目的語も（主語同様）TP 領域へと繰り上げられているためであると説明することができる。TP まで繰り上げられた目的語は,「も」を含む最小の最大投射である vP の外側に位置することになるので，不定代名詞として認可されないのである。

これらの議論を踏まえると, はじめの受け身文の例でも, 主語名詞句は SpecTP へと繰り上げられていると考えることができる。

(36) a. [$_{TP}$ 車$_i$が 泥棒に [t_i ２台] 盗まれた].
b. [$_{TP}$ 泥棒$_i$が 警察に [t_i ２人] 捕まえられた].

これらの主語名詞句が確かに vP の外まで移動していることは,「全員」と否定のスコープからも確認することができる。

(37) a. 警察が全員を逮捕しなかった.（全員＞ない，全員＜ない）
b. 全員が警察に逮捕されなかった.（全員＞ない，*全員＜ない）

「全員」が(37b)のように文頭に移動すると，部分否定の解釈が得難くなることから，ここで関与している移動が（vP へのかき混ぜによる付加ではなく）TP 領域への繰り上げであることがわかる。

以上のように，数量詞遊離は（賛否両論が長く続いた現象ではあるが）未だに日本語の主語繰り上げを示す現象と認められる。

３．１．４．否定極性項目

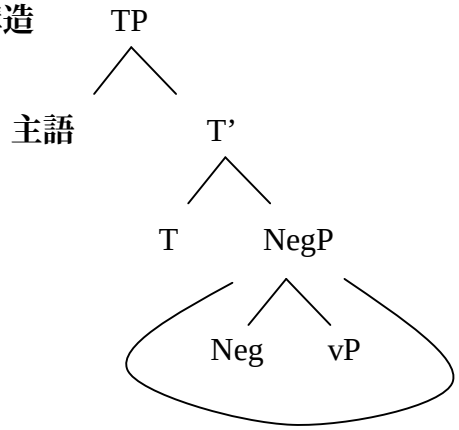
つづいての TP 領域への繰り上げを支持する現象として, 否定辞の T への繰り上げを見る。Kishimoto (2007, 2008)は，(38)と(39)のような日英語の否定極性項目の認可の差に基づいて，日本語では Neg が T 位置へと主要部移動を起こしていると主張する（否定極性項目の認可に関して，英語は Klima 1964，Laka 1990 を，日本語は Oyakawa 1975，Kato 1985，Kato and Kato 1997 等を参照のこと）。

(38) a. John did not read any book.
b. *Anyone did not read the book.
(39) a. 学生が 本しか/何一つ本を 読まなかった.

b.　学生しか/誰一人 本を読まなかった.

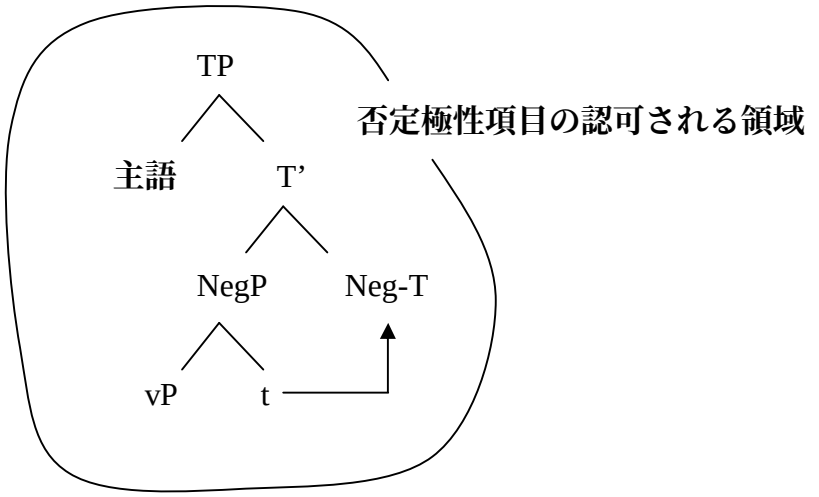
英語では，目的語の否定極性項目（any）は否定辞に認可されるが，主語の否定極性項目は認可されない(38)。一方日本語では，目的語とともに主語の否定極性項目も否定辞によって認可される(39)。日本語も英語も，主語と目的語が句構造上でしめる位置が同じであるとすると（主語は SpecTP，目的語は VP 内部），この対比は Neg-to-T 移動の有無に原因が帰せられると Kishimoto は主張する。英語では Neg が NegP 内部にとどまったままなのに対し，日本語では Neg が T 位置まで動く。これによって Neg の認可範囲が TP まで広がり，日本語では主語の否定極性項目も否定辞に認可されるという説明である。

(40) 英語の句構造



否定極性項目の認可される領域

(41) 日本語の句構造



ここで１つ注意が必要である。３．１．１および３．１．３では，主語の数

量詞（全員）が否定辞のスコープから外れること見た。

(42) 全員がそのテストを受けなかった.（全員＞ない，*全員＜ない）

否定極性項目（学生しか/誰一人）は SpecTP で認可されるのに対し，単なる数量詞（全員）は，SpecTP にあって否定辞のスコープから外れる。これはどのように説明されるであろうか。これは否定極性項目や否定のスコープの本質に関わる問題であると考えられ，その解明は本研究の及ぶ範囲ではない。しかしさしあたって次のように考えておく[10]。

(43) a. 否定極性項目は，否定辞に m 統御もしくは c 統御される位置にある場合に認可される.

b. 数量詞は，否定辞に c 統御される位置にある場合，当該否定辞のスコープに入る.

Kishimoto (2007, 2008)にしたがい, 日本語では Neg-to-T 移動が起こっていると考えよう。それでも，主語位置は Neg-T の複合範疇に m 統御されるにすぎず（c 統御はされず），単なる数量詞は，(43b)によって否定のスコープから外れることになる(42)。一方，否定極性項目は，否定辞に m 統御されれば認可されるとすれば(43a)，同じ SpecTP にあっても否定辞に適切に認可されることになる(39b)。

(43)の区別は，概念的にも合点のいく仮定であると思われる。Chomsky (2007, 2008)では, 統語的操作としての指定部-主要部の一致が廃止され, 検索子（Probe）が c 統御の条件の下，対象（Goal）を探る操作だけが認められている。数量詞の否定が c 統御の条件にしたがうことは，この統語操作の１つとして直接的に説明される。検索子は否定辞で，数量詞が対象として機能すると考えればよい。これに対し，否定極性項目は，否定辞に m 統御されれば認可される。否定極性項目が数量詞を m 統御するということは，逆に否定極性項目は否定辞を c 統御するということでもある。このように逆転させて考えると，数量詞と違い，否定極性項目は探索子として働くと考える可能性が出てくる。

数量詞と否定極性項目の差は，(43)の否定辞に対する相対的統語位置の違いに

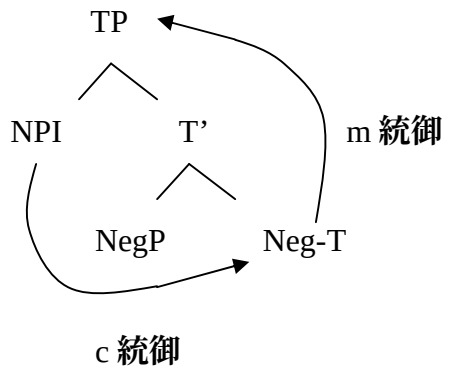
[10] スコープと統語構造の関係については, Reinhart (1976), May (1977)等の研究を見よ。

とどまらない。数量詞は，否定辞なしに単独で使うことができるのに対し(44)，否定極性項目は，否定辞なしに単独で用いることはできない(45)。

(44) a. 学生が全員を褒めた.
b. 全員が授業に出席した.
(45) a. *学生が 本しか/何一つ本を 読んだ.
b. *学生しか/誰一人 本を読んだ.

このことは，数量詞が何らかの対象を求めて統語構造内を探る探索子ではないのに対し（単独で成立する表現であるから），否定極性項目は，その認可子を求めて自らが統語構造内を探る探索子であるという可能性を示唆している。そうであるなら，否定極性項目は，否定極性項目が c 統御する（そして否定極性項目を m 統御する）否定辞に認可されると考えることができる。 (46)がこの逆転の過程を示す。

(46)



言い換えれば，数量詞の場合は，否定辞に c 統御されることでそのスコープに入り，否定極性項目は，否定辞を c 統御することでその存在が認可されることになる（片岡 2006: 6 章に同趣旨の詳細な議論がある）[11]。この仮定が正しいと

[11] 否定極性項目と否定辞とは概ね「同一節内になければならない」という制限もある（Kato 1994，片岡 2006）。したがって，否定極性項目がただ，否定辞を c 統御すればいいということではない。

(i) *誰も [太郎が泣かないと] 思った.

(i)では，否定極性項目「誰も」が，従属節の否定辞を c 統御しているが，両者が同一節内に無いので，非文となっている。

するなら，Miyagawa (2001)と Kishimoto (2007, 2008)の説明は両立可能で，なおかつ，数量詞のスコープの現象，そして否定極性項目認可の現象ともに TP 領域への vP/VP および NegP からの繰り上げの存在を示していると考えられる。

３．２．繰り上げを支持するとされている他の証拠

この節では，３．１で見た現象以外で，TP への繰り上げを支持するとして指摘されてきた現象，もしくは支持されると考えられそうな現象の中で，本研究では採用しないものを慎重に検証する。その中のいくつかの現象は，後の議論で重要な役割を果たす。

３．２．１.「する」挿入

１章で見たように，日本語には「さえ」「も」「は」などの副助詞や係助詞が存在し，これら助詞は語彙動詞に付随することも可能である。

(47) a. 太郎はリンゴを 食べた.
b. 太郎はリンゴを 食べさえ/食べも/食べは した.

(47b)で示したように，助詞が動詞と時制辞の間に介在すると，「する」挿入が適用され，時制辞を支える形になる（「する」挿入に関しては，Kuroda 1965，Miyara 1991，Ohkado 1991，Kageyama 1992 など多くの先行研究が存在する）。この現象は一見，日本語に V-to-T 移動があるためであると説明できそうである。英語の助動詞移動と同じ制約にしたがっているように見えるからである。

英語では助動詞を文頭に出すことで疑問文を作る。

(48) a. John was divorced by his wife.
b. Was John t divorced by his wife?
(49) a. John has divorced his wife.
b. Has John t divorced his wife?

(48)，(49)ではそれぞれ，受け身の助動詞 be と完了の助動詞 have が文頭へと主要部移動され，疑問文が形成されている。ところが，他の助動詞がこれらに先行する場合，移動を受けるのは先行する助動詞で，後続する助動詞が先行する

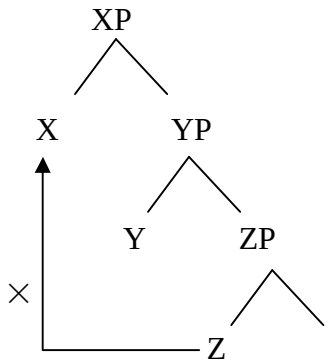
助動詞をまたぐ形で前置されることはない。

(50) a. John will be divorced by his wife.
b. Will John t be divorced by his wife?
c. *Be John will t divorced by his wife?

(51) a. John will have divorced his wife by next summer.
b. Will John t have divorced his wife by next summer?
c. *Have John will t divorced his wife by next summer?

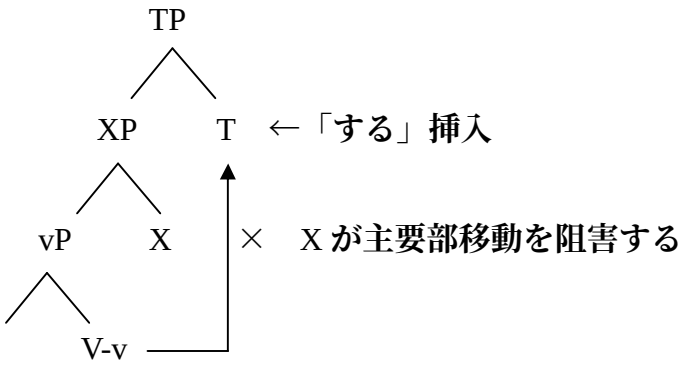
(50c)では，will be という助動詞の連続から be が文頭へと移動され，(51c)では will have という連続から have が文頭へと移動されているが，これらは非文となっている。これは一般に，主要部が，それを c 統御する他の主要部を超えて主要部移動されてはならないという制約にしたがっているからだと考えられる。（Travis 1984 の主要部移動制約。他に Baker 1988 も参照されたい）。

(52)



(47)に戻ると，次のようなシナリオが考えられる。すなわち，日本語では語彙動詞の T への移動が義務的である（より正確には V が軽動詞 v に移動され，さらにその複合述語が T に移動される）。しかし，助詞が V-v の T への主要部移動を阻害すると，T の形態素を支えるために「する」挿入が適用されると考えること可能である。

(53)



この説明が正しいとすると，日本語には語彙動詞の T への繰り上げがあることになる。しかし，この説明にはいくつか問題点があり，現在では，少なくともこの形のままでは支持され得ない。

第 1 の問題点は，Sells (1995)，Aoyagi (1998a, 1998b)，青柳 (2001, 2006, 2008)，Sakai (1998)，酒井 (2000)らが指摘する，範疇選択の問題である。これらの研究では，語彙動詞の後に現れる「は」「さえ」「も」のような助詞が，範疇同士の選択関係に影響を与えるような最大投射を形成しないことが示されている（(53)の説明が成立するためには，X が v や T とは独立の範疇として最大投射を形成している必要がある）。ここでは，補助動詞「する」と「ある」を例に，これを見る。語彙動詞と T の間に助詞が現れる(47)のような場合，補助動詞は「する」が用いられる。語彙動詞ではなく，形容詞，形容動詞，もしくは名詞＋断定の助動詞が述語として用いられた場合，助詞の介在で現れるのは「する」ではなく「ある」である[12]。

(54) a. 花子は 美しい/親切だ/善人だ.
b. 花子は 美しくも/親切でさえ/善人では ある.

もちろん，各々逆の補助動詞が用いられると非文となる。

(55) a. *太郎はリンゴを 食べさえ/食べも/食べは ある.
b. *花子は 美しくも/親切でさえ/善人では する.

[12] 生成文法的な日本語の研究では Nakau (1973)にすでにこの現象への言及がある。

通常，主要部による範疇の選択制約は，それが直接 c 統御する補部に限られる。たとえば，discuss は補部として DP/NP を要求するが(56a, b), (56c)のように DP/NP にさらに CP が埋め込まれていてもこれを規制することはない。

(56) a. John discussed [$_{DP/NP}$ the fact].
b. *John discussed [$_{CP}$ that global warming is for real].
c. John discussed [$_{DP/NP}$ the fact [$_{CP}$ that global warming is for real]].

(53)の説明で，助詞が範疇 X で，最大投射 XP を投射しているとする（そう仮定しなければ主要部移動の制約による説明は成り立たない）。しかしながら，(54)と(55)のデータは「する」が XP をまたぐ形でその下の範疇として動詞（句）を選択し，「ある」は XP をまたぐ形で「形容詞」「形容動詞」「名詞＋断定の助動詞」を選択していると言わなければいけない。範疇の選択は主要部が直接 c 統御する補部に限られる，という一般化のもとでは，(53)の説明は成立しないことになる。

第２の問題点は，「する」挿入が語彙動詞と T の間に限られないことである。Keiko Miyagawa (1998)がこの点を一番明白に指摘している。

(57) a. この論文は読まれない.
b. この論文は 読みも されない.
(58) a. この本を読まない.
b. この本を 読みさえ しない.
(59) a. お茶を習い始めた.
b. お茶を 習いさえ し始めた.

(57b)では，語彙動詞-受け身形態素の間，(58b)では語彙動詞-否定辞の間，(59b)では複合動詞の間に助詞が介在し，それによって「する」挿入が適用されている。(47)のような場合には，「する」挿入は T の位置を満たすためと考えることもできるが（英語の He did not deserve that の様な例を想起されたい），これらの例の場合，どんなスロットを埋めるために「する」挿入が適用されているのか不明である。(57b)や(58b)に関しては，それぞれ受け身形態素の V 位置，あるいは否定辞の Neg 位置を埋めるための「する」挿入であると主張することもでき

ようが，(59b)のような場合は，それも成り立たない。このような場合と，(47)のような場合を分けて考えることももちろん可能であるが，それでは日本語の「する」挿入に関する重大な一般化は損なわれてしまうであろう。以上の様な理由から，主要部移動制約による(47)の説明は成立せず，また「する」挿入に基づく V-to-T 移動の分析も放棄せざるをえないことになる[13]。

「する」挿入に関して５章（５．３．３）で本研究の分析を提示するにあたって，次の例文を吟味しておくのが適切である。

(60)　多くの建物がまだ 壊さ-れ-始め-な-い.

(60)の述部は，語彙動詞-受け身形態素-相助動詞-否定辞-時制辞という複合述語である。これらの連続の中で，最後の「否定辞-時制辞」の部分だけが，助詞の介在と「する」挿入によって分断し得ない。

(61)　a.　壊しも されい始めない
　　b.　壊されも し始めない
　　c.　壊され始めも しない
　　d.　*壊され始めなくも する/ある

(61)の事実は，否定辞と時制辞の関係は，他の動詞的形態素同士の関係とは性質が異なることを示している。詳述は５章に譲りたい。

３．２．２．ゆるやかな同一性

Otani and Whitman (1991)は動詞句削除の示す「ゆるやかな同一性」に基づいて日本語で V-to-T 移動が起こっていると主張する。英語には動詞句削除という操作（現象）がある。動詞句削除とは，(62a)のように，同一の VP が連続して現れる場合，(62b)のように後続する VP が音声的に実現されない現象である。

(62)　a.　John [$_{VP}$ threw away old pictures] and Tom [$_{VP}$ threw away old pictures] too.

[13] ５．３．３では，主要部移動によらない「する」挿入の分析を提示する。

b. John threw away old pictures and Tom did [$_{VP}$ Ø] too.

動詞句削除は「ゆるやかな同一性」を示すことが知られている（Sag 1976, Williams 1977）。(63a, b)では，等位接続された文のそれぞれの動詞句内に，所有格代名詞 his が現れている。

(63) a. John$_i$ [threw away his$_i$ letter] and Tom$_j$ [threw away his$_i$ letter] too.
b. John$_i$ [threw away his$_i$ letter] and Tom$_j$ [threw away his$_j$ letter] too.
c. John threw away old pictures and Tom did [$_{VP}$ Ø] too.

左の被接続要素内の his は，その文の主語に束縛され，「John が自分の手紙を捨てた」という解釈になる。これに対し，右の his は，左の his と同じように John を指すこともできるし(63a)，また，右の文の主語である Tom を指すこともできる(63b)。この環境で VP 削除が起こると，(63c)が派生される。(63c)は，厳密な意味で「同一」の VP が削除された(63a)の解釈とともに，厳密な意味では「同一ではない」VP が削除された(63b)の解釈も可能である。言い換えれば，(63c)で削除された動詞句は Tom が「John の手紙を捨てたと」いう厳密な意味で同一の解釈に加え「Tom 自身の手紙を捨てた」という同一ではない解釈も可能である。(63c)が，厳密な意味での同一の VP が削除された解釈ではなく，所有格代名詞の指示対象が（John から Tom へと）ゆるやかにスイッチした解釈を持つ場合を「ゆるやかな同一性」と呼ぶ。(63c)のように英語の VP 削除は，ゆるやかな同一性を示すのである。

Otani and Whitman (1991)は，日本語の空目的語構文もゆるやかな同一性を示すと主張する。英語と違い，日本語の目的語は音声的に実現されなくてもよい[14]。

(64) a. John bought an apple and ate *(it).
b. 太郎がリンゴを買い，（それを）食べた.

英語の(64a)では，後続する ate it の目的語は必ず必要であるが，日本語の(64b)では，目的語はあってもなくてもよい（音声的に実現されなくてもよい）。これ

[14] Hasegawa (1984/5)では，空の目的語が，音声的に実現されていない話題に束縛される変項であるとの分析が示されている。

を念頭に(65)の解釈を考える。

(65) a. ジョンは [自分の手紙]-を 捨てた.
b. メアリーも e 捨てた.
(Otani and Whitman 1991:346-347)

(65b)は空目的語構文であるが，ここではゆるやかな同一性の解釈が可能である。すなわち，(65b)は，「メアリーが（ジョンの手紙ではなく）メアリーの手紙を捨てた」と解釈することも可能である。このように，日本語の空目的語構文が英語の動詞句削除と同じ性質を示すことから，Otani and Whitman は，(65b)のような場合，語彙動詞は V-to-T 移動を起こしており，その結果英語と同じように VP 削除が働いていると主張する。(65b)の基底生成時には，(66a)のように語彙動詞「捨て」が VP 内部にある。

(66) a. メアリー$_i$も [$_{VP}$ 自分$_i$の手紙を 捨て] た.
b. メアリー$_i$も [$_{VP}$ 自分$_i$の手紙を t] 捨て-た.
c. メアリー$_i$も ~~[$_{VP}$ 自分$_i$の手紙を t]~~ 捨て-た.

そして(66b)のように語彙動詞「捨て」が T 位置へと繰り上がり，最後に VP 削除が適用される(66c)。その結果（(63c)と同じように）ゆるやかな同一性が得られると考えるわけである。

ゆるやかな同一性はまた，ある種の局所性を示すことも知られている（Huang, 1988, 1991）。(67a)では，削除の対象となる等位接続構造の右の被接続要素内が that による補文構造を取っている。

(67) a. John$_i$ saw his$_i$ mother , and Mary knew that Bill did [$_{VP}$ e] too.
b. Mary knew that Bill saw Bill’s mother.
c. Mary knew that Bill saw Mary’s mother.

この場合，削除された VP 内は「Bill が Bill の母親に会った」というゆるやかな同一性の解釈(67b)と「Bill が Mary の母親に会った」というゆるやかな同一性の解釈(67c)の可能性がある。しかし実際は，(67a)に対し，Bill が局所的な（同一

節内の）指示対象を持つ(67b)の解釈は許されるが，非局所的な解釈の(67c)は除外される。同様の局所性が日本語の空目的語構文にも見られると，Otani and Whitman は主張する（例文は Hoji 1998:129 より）。

(68) a. ジョンは自分の学生を推薦した.
b. メアリーは［$_{CP}$ ビルも e 推薦したと］思った.

(68b)の埋め込み文に対して，局所的な「ビルがビルの学生を推薦した」という解釈だけが可能で，非局所的な「ビルがメアリーの学生を推薦した」という解釈は得られない，という。そうだとすれば，日本語の空目的語構文は英語の VP 削除と同じゆるやかな同一性の性質を示すことになり，(66)のような動詞の T 位置への繰り上げとそれに引き続く VP 削除による説明が支持されることになる。

こうした説明に反論したのが Hoji (1998)である。Otani and Whitman は，日本語の空目的語構文が，ゆるやかな同一性を示すこと，そしてゆるやかな同一性が局所性を示すこと，の２点から日本語の動詞繰り上げを主張した。Hoji はどちらの点も，経験的な事実の認定に誤りがあり，したがって動詞繰り上げの議論も成立しない，と指摘する。まず，ゆるやかな同一性に関して，(69b)は VP 削除の分析の予測に反してゆるやかな同一性の解釈が得られない。

(69) a. ジョン$_i$は自分$_i$（自身）を慰めた.
b. ビルも e 慰めた.
(70) a. John consoled himself.
b. Bill did too.

(Hoji 1998:131)

(69b)で唯一可能なのは，「ビルもジョンを慰めた」という厳密な同一性の解釈である。この英語での対応文(70b)では，対照的にゆるやかな同一性の解釈が可能である。この対比は，明らかにゆるやかな同一性とそれに基づく動詞繰り上げの説明が成立していないことを示している。(71)-(72)も同様のことを示している。

(71) a. すべての日本人夫婦がお互いを慰めた.
b. すべてのアメリカ人夫婦も e 慰めた.

(72) a. Every Japanese couple consoled each other.

b. Every American couple did too.

(Hoji 1998:131)

(71b)は，ゆるやかな同一性の解釈「すべてのアメリカ人夫婦がお互いを慰めた」という解釈は不可能であるが，これに対し英語の(72b)はゆるやかな同一性の解釈が可能である。

ゆるやかな同一性の示す局所性に関しても，同じように日本語と英語とで同じ振る舞いにはならない。先に見た，日本語でもゆるやかな同一性に関して局所性が見られるとする根拠となった(68b)の例文も，埋め込み文主語の助詞「ビルも」を「ビルが」に変更することで，非局所的な，メアリーを先行詞とする解釈が可能になる(73b)。

(73) a. ジョンは自分の学生を推薦した.

b. メアリーは [$_{CP}$ ビルが e 推薦したと] 思った.

(Hoji 1998:136)

(73b)で，「ビルがメアリーの学生を推薦した」という解釈は，たとえば次のような文脈で自然に得られる。ジョンとメアリーは教師で，それぞれが自分の教え子を推薦して何らかの職につけたいと思っている。ビルはメアリーのかつての教え子で，メアリーと利害関係の点で一致している。普通であれば，自分で自分の教え子を推薦するが，メアリーはすでに（自分の影響下にある）ビルが推薦したと思っていた。そんな場面で(74)のように言えば，((73b)でも同じであるが)「ビルがメアリーの学生を推薦した」という解釈がたやすく得られる。

(74) （でも）メアリーは [ビルが e 推薦したと] 思っていた.（だから自分では何もしなかった).

同様の文脈で，英語の「も」にあたる too を省略しても，やはりゆるやかな同一性の示す局所性は解消されない。

(75) John recommended his student, but (since) Mary thought that Bill did [$_{VP}$ e], (she did not do anything (about recommending her own student)).

(75)で唯一可能なのは,「ビルがビルの学生を推薦した」という解釈で，やはりゆるやかな同一性の局所性は守られている。

以上のように，Hoji (1998)は，ゆるやかな同一性とその局所性に基づいた，V-to-T 移動による日本語の空目的語構文の分析が成立しないことを示した。本研究では Hoji にしたがい，この現象は TP 領域への繰り上げを示す現象としては有用ではないという立場を取ることとする[15]。

３．２．３．目的語-遊離数量詞の等位接続

TP 領域への繰り上げを支持する証拠として提案されながらも，本研究では採用しない最後の現象として, Koizumi (1995, 2000)で示された等位接続構造での動詞の繰り上げの現象を見ていく。日本語は，等位接続に用いられる接続詞として「と」と「そして」がある。

(76) a. 太郎が [リンゴとバナナ]-を 食べた.
b. 太郎が [水を飲み（そして）バナナを食べ] た.

通常，(76a)のように「と」は（裸の）名詞句を連結し，動詞句や述語は(76b)のように「そして」を用いて連結する。また，動詞句や格助詞付き名詞句を「と」を用いて連結することはできない。

(77) a. *太郎が [水を飲み] と [バナナを食べ] た.
b. *太郎が [リンゴを] と [バナナを] 食べた.

等位接続構造の末尾に数量詞が用いられた合，一見したところ構成素をなさない範疇の「と」による等位接続が可能となる。

[15] (65)や(68)でなぜ日本語の空目的語構文が，一見ゆるやかな同一性の性質を示すのか，そして，実際に日本語の空目的語構文がどのように解釈されるのかに関しては Hoji (1998)の論文を参照されたい。

(78) メアリーが [ジョンにリンゴを２つ] と [ボブにバナナを 3 本] あげた.
(Koizumi 2000:228)

(78)の例文は，日本語に V-to-T の繰り上げ操作があることの証拠となるとKoizumi は主張する。まず，(78)で,「と」で連結された等位接続構造全体を文頭へとかき混ぜ規則で移動することが可能なので，語彙動詞「あげた」が右の被接続要素に含まれていないことがわかる。

(79) [[ジョンにリンゴを２つ] と [ボブにバナナを 3 本]] メアリーが t あげた.
(Koizumi 2000:231)

次に, 構成素だけが等位接続し得るという一般的な仮定にしたがえば, (78)や(79)のような，間接目的語-直接目的語-（数量詞）の連続を含みうる最小の範疇は動詞句ということになる。

(80) メアリーが [$_{VP}$ [$_{VP}$ ジョンにリンゴを２つ] と [$_{VP}$ ボブにバナナを 3 本] あげた.

そして等位接続構造内部には動詞が存在しないことから，もともと動詞句に含まれていた語彙動詞「あげ」が全域的適用（Across the Board）による V-to-T 移動を起こし，当該文が生成されると Koizumi (1995, 2000)は主張する。(81)がこの派生を示す。

(81) a. メアリーが [$_{VP}$ [$_{VP}$ ジョンにリンゴを２つあげ] と [$_{VP}$ ボブにバナナを 3 本あげ]] た.
b. メアリーが [$_{VP}$ [$_{VP}$ ジョンにリンゴを２つ t_i] と [$_{VP}$ ボブにバナナを 3 本 t_i]] あげ $_i$-た.

(81a)では，左右の VP に語彙動詞「あげ」が含まれ，(81b)ではこれらが V-to-T 移動を受けている。

この等位接続による動詞繰り上げの議論には，多くの反論が出された。Kawashima (1998)，川添 (2002)は，このような等位接続は数量詞が等位接続構造

の末尾にくるときに限られ，そうではない場合になぜ等位接続が可能ではないのか不明であると指摘する。(77b)がその代表例である。Koizumi は接続詞「と」が，名詞的要素に限って付加することができる旨のフィルターを仮定し，(77b)のような例はこのフィルターによって排除されるとする。

しかし，そのようなフィルターでも説明できない例がある。時を表す「昨日」や「今日」は，「と」による連結が可能なので，Koizumi の基準からは「名詞的」であると判断される。

(82) [昨日と今日]-は 忙しかった.（Kawashima 1998:18）

それでも，(83)のように，「昨日」や「今日」が末尾にくる（数量詞を含まない）動詞句の等位接続は不可能である。

(83) *太郎が [次郎にリンゴを昨日] と [三郎にイチゴを今日] あげた.

この観察は，少なくとも「名詞的要素にだけ『と』が付随し得る」という以上の何らかの仮定が必要であることを示している。また，数量詞以外にこのような等位接続が不可能であれば，むしろこの現象の真の説明は数量詞の性質に求められるべきであると考えられる（川添 2002）。

(83)のような例は，「と」ではなく「そして」を用いれば等位接続が可能である。

(84) 太郎が [次郎にリンゴを昨日] そして [三郎にイチゴを今日] あげた.

しかしながら Koizumi (2000:277)は，「そして」を用いた等位接続が(85)のように明らかに構成素ではない要素を接続することができるので，（動詞句のような）構成素性をはかるテストとしては機能しないとする[16]。

(85) メアリーはスタンフォードの そして ジョンはハーバートの 医学部に入った.

[16] Kuno (1978)，影山 (1993)，Abe and Hoshi (1997)等に当該現象の指摘と説明がある。

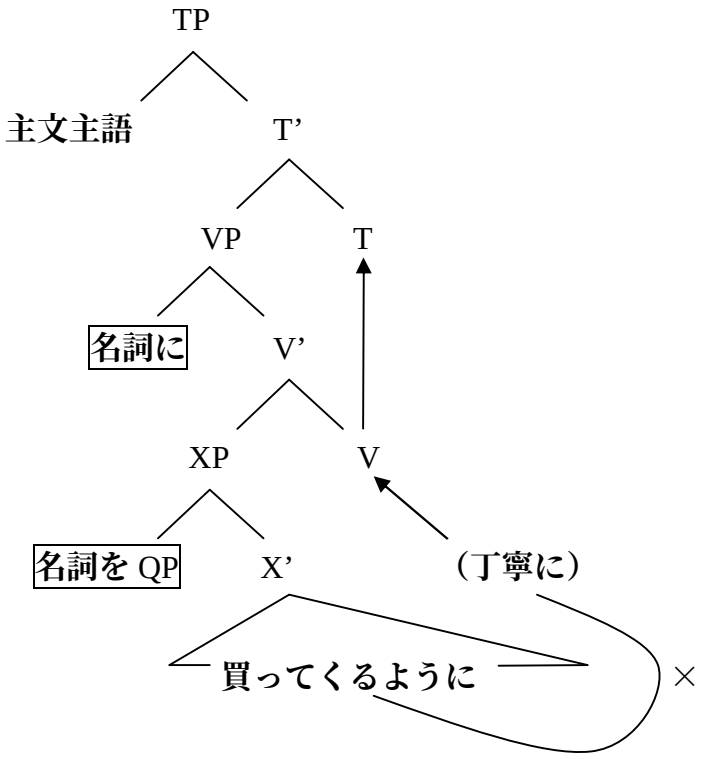
Koizumi (1995, 2000)の示す「と」による等位接続と(85)のような例は，４．３．３節で改めて取り上げる。そこでは，Koizumi が示した例が，V-to-T の移動ではなく，等位接続構造の左の（T までを含んだ）述語の削除として分析されることを示す。

Koizumi に対する２番目の反証は，Fukui and Sakai (2003)が指摘する，動詞繰り上げでは説明できない等位接続構造の例の存在である。

(86) 太郎が [花子にリンゴを３つ] と [久美子にバナナを３本] 買ってくるように（丁寧に）頼んだ. （Fukui and Sakai 2003:346）

(86)で等位接続の対象となっているのは，「頼んだ」を述語動詞とする主節の目的語「花子」（と「久美子」），そして「買ってくるように」を述部とする埋め込み文の目的語「リンゴを」（と「バナナを」）とその遊離数量詞「３つ」（と「３本」）である。(86)のような文の（等位接続されていない）句構造の概略を示すと(87)となる。

(87)



主節の目的語と従属節の目的語（および遊離数量詞）が構成素となるためには，従属節の述語「買ってくるように」が主節動詞「頼む」に繰り上げられ，その後「買ってくるように頼む」全体が T 位置へと繰り上げられなければならない。こうした連続的主要部移動が起これば，主節の VP が，主節目的語と従属節目的語並びに数量詞を含み，なおかつ動詞的要素を一切含まない構成素を形成し得る。しかし，Fukui and Sakai は，主節動詞を修飾する副詞「丁寧に」が主節語彙動詞と従属節述語の間に自由に生起できるので，このような埋め込み述部が主節へと繰り上げられているという派生は考えにくいと指摘する。そうだとすると，Koizumi の指摘する現象は主要部移動を用いて分析することは難しく，TP 領域への繰り上げの証拠とはなり得ないことになる。

Koizumi の主要部移動分析に対するもう１つの反証は，(78)のように等位接続された要素の対格助詞が，（個々の目的語にではなく）等位接続構造全体につくことがあるという事実である（Fukui and Sakai 2003:345）。

(88) メアリーが [$_{VP}$ [$_{VP}$ ジョンにリンゴ２つ] と [$_{VP}$ ボブにバナナ 3 本（と）]-を あげた.

日本語の格助詞は名詞的要素にだけつくことが知られており，(88)のように，格助詞「を」が等位接続構造に付くことは，これらの構造を VP として分析することはできなということを示している[17]。

以上，これまでに TP 領域への繰り上げの証拠として（時として）指摘されながら，本研究では採用しないものとして「する」挿入，「動詞句削除が示すゆるやかな同一性」そして「目的語-遊離数量詞の等位接続」の３つを見た。

３．３．非時制等位節の中の繰り上げと３つの分析の可能性

３．１では，日本語の TP 領域への繰り上げを支持する現象として，否定のスコープとかき混ぜ規則の相互作用，不定代名詞の認可，数量詞の遊離，主語の否定極性項目の認可，の４つの現象を見た。ここにそれぞれの現象の代表的例文を再録する。

[17] Fukushima (2003)にも同趣旨の主張がある。このような反論に対し，Matsui (2005), Vermulen (2005, 2008)は，動詞句繰り上げを支持する議論を展開している。

(89) **否定のスコープとかき混ぜ規則の相互作用**

a. **太郎が全員を褒めなかった.（全員＞ない，全員＜ない）**

b. **全員がそのテストを受けなかった.（全員＞ない，*全員＜ない）**

c. **そのテストを 全員が** t **受けなかった.（全員＞ない，全員＜ない）**

(90) **不定代名詞の認可**

a. **太郎は何を買いもしなかった.**

b. ***誰が花子を褒めもしなかった.**

(91) **数量詞の遊離**

a. **車**$_i$**が 泥棒に** [t_i **２台**] **盗まれた.**

b. **泥棒**$_i$**が 警察に** [t_i **２人**] **捕まえられた.**

(92) **主語の否定極性項目の認可**

a. **学生しか本を読まなかった.**

b. **誰一人本を読まなかった.**

これらは，現段階において，日本語の TP **領域への繰り上げの存在を示す有力な証拠と考えられる。**

ところが，一見するとこれとは相容れないように思える現象がある。日本語の等位接続詞「そして」は, 動詞(93a)**, 目的語-動詞**(93b)**, 主語-目的語-動詞**(93c)**, 主語-目的語-動詞-否定辞**(93d)**のように，様々な大きさの述語を接続することができる。**

(93) a. **太郎がリンゴを** [**買い（そして）食べ**] **た.**

b. **太郎が** [**水を飲み（そして）りんごを食べ**] **た.**

c. [**コアラがユーカリを食べ**]（**そして**）[**リスがクルミを食べ**] **る（こと）.**

d. [**コアラがクルミを食べず**]（**そして**）[**リスがユーカリを食べな**] **い（こと）.**

Hirata (2005, 2006a, 2006b)**が指摘するように，このような「そして」を用いた述語の等位接続構造では，被接続要素（等位節）内に時制辞が含まれることはない。（以降，**(93)**のような等位接続構造を「述語等位接続構造」，そして等位接続されている被接続要素を「等位節」と呼ぶこととする。）**

(94) a. *太郎がリンゴを [買った（そして）食べた].
b. *太郎が [水を飲んだ（そして）りんごを食べた].
c. *[コアラがユーカリを食べる]（そして）[リスがクルミを食べる].
d. *[コアラがクルミを食べない]（そして）[リスがユーカリを食べない].

右の等位節は，時制辞が常に後続するので，等位節に時制辞が入れるかどうかにわかには判断ができないが，左の等位節に時制辞の入った(94)は非文となる。(94)の各文は，連続する２つの文という解釈はできるが，１文とは見なしえない。時制辞を含まない(93)のような例と，時制辞を含む(94)のような例を，従属節に埋め込むと，さらに違いは明瞭となる。

(95) a. 太郎は [[コアラがユーカリを食べ]（そして）[リスがクルミを食べる と] 思っている.
b. 太郎は [[コアラがクルミを食べず]（そして）[リスがユーカリを食べな] い と] 思っている.
(96) a. ??太郎は [[コアラがユーカリを食べる]（そして）[リスがクルミを食べる] と] 思っている.
b. ??太郎は [[コアラがクルミを食べない]（そして）[リスがユーカリを食べない] と] 思っている.

時制辞が等位節に含まれない(95)は文法的であるのに対し，時制辞が含まれた(96)はかなりつながりの悪い文となっている[18]。一般的に日本語の生成文法研究において，時制辞が T 位置をしめると考えられているから，その考えを踏襲するなら，(93)と(95)の等位節は最大でも TP ではあり得ないことになる。

(97)のように，等位接続構造から全域的適用の移動を適用した例では，「そして」による等位接続でも，時制辞を含んだ TP を連結できるように思えるかもしれない。

(97) その人に$_i$ [[太郎が t_i 電話した]（そして）[二郎が t_i 手紙を書いた]].

[18] (96)のような例も文法的となる場合がある。４．３．１で詳しく取り上げる。

しかし，(97)の例は、「その人に」にかき混ぜ規則が適用された左の文と，一見痕跡があるように見える右の等位節には（痕跡の代わりに）pro がある，２つの独立した文として分析すべきものと思われる。

(98)　その人に$_i$ [太郎が t_i 電話した]．（そして）[二郎が pro_i 手紙を書いた].

このことも，(97)を従属節に入れると明らかな非文となることからわかる。

(99)　*私は [その人に$_i$ [太郎が t_i 電話した]（そして）[二郎が t_i 手紙を書いた]] と思う．

ところがこうした（時制辞が生起しない）述語等位接続構造の等位節でも，(89)-(92)の TP への繰り上げを示す現象が観察される。

(100) 否定のスコープとかき混ぜ規則の相互作用

a.　[太郎が全員をほめず]（そして）[次郎が全員をしからなかっ] た．
（全員＞ない，全員＜ない）

b.　[全員がそのテストを受けず]（そして）[全員が単位をとれなかっ] た．
（全員＞ない，*全員＜ない）

c.　[そのテストを全員が t 受けず]（そして）[その単位を全員が t とれなかっ] た．　（全員＞ない，全員＜ない）

(101) 不定代名詞の認可

a.　[太郎が何を買いもせず]（そして）[次郎が何を売りもしなかっ] た．

b.　*[誰が花子を褒めもせず]（そして）[誰が昌子を叱りもしなかっ] た．

(102) 数量詞の遊離

[車が泥棒に t ２台盗まれ]（そして）[泥棒が警察に t ２人捕まえられ] た．

(103) 主語の否定極性項目の認可

[誰一人本を読まず]（そして）[誰一人論文を書かなかっ] た．

つまり，TP への繰り上げを示す現象が，TP よりも小さいと考えられる投射の中で起こるという矛盾がここに見られる。(100)-(103)のデータ（時制辞の入れない

等位節に繰り上げを示す現象が見られること）の説明方法として，３つの可能性がある。第１の可能性は，述語等位接続構造が実は等位接続構造ではなく，何らかの従属節構造であると考えることである。たとえば英語でも，例外的格付与構文や分詞構文では，従属節において時制辞が現れることがない。

(104) a. John believed [Mary to be a genius].
b. [Someone standing there], they kept silent.

同じように，日本語の述語等位接続構造も，左の等位節が何らかの形の従属節で，主節だけが時制辞を持っていると分析することができるかもしれない（この場合, 左の等位節は不定形の T を主要部とする TP 投射として分析されることになる）。

(105) [主語 目的語 V]（そして）[主語 目的語 V T]
従属節 主節

第２の可能性は，述語等位接続構造の等位節が見かけに反して TP であると主張することである。等位節が TP であれば，TP 領域への繰り上げの理論を変更することなしに(100)-(103)の事実を説明することができる。この方策では，（少なくとも左の）等位節に時制辞が現れないことを説明する必要がある。たとえば，(106a)のように，T 要素が左の等位節から削除を受けていると考えるなり，(106b)のように, 左右の等位節から T 要素が右接点繰り上げ規則を受けていると考えるなりする必要がある。

(106) a. [主語 目的語 V T]（そして）[主語目 的語 V T]
b. [主語 目的語 V t]（そして）[主語目 的語 V t] T
c. [主語 目的語 V [$_T$ e]]（そして）[主語目 的語 V T]

あるいは(106c)のように，音声的に空の時制辞が左の等位節の主要部に基底生成されると主張することもできるかもしれない。

第３の可能性は，述語等位接続構造の等位節内部に，TP よりも小さい，そし

て vP/VP より大きな範疇が投射されていると主張することである。こう考えることで，一見 TP 領域への繰り上げと見える現象は，この TP と vP/VP に挟まれた範疇への繰り上げであると説明することができる（Hirata 2006b）。第４章では，はじめの２つの可能性が支持できないことを詳細に論じ，５章では第３の可能性に基づく現象の説明を試みる。

４．諸問題

３章では，日本語で TP 領域への繰り上げを示すとして指摘されてきた現象を再検討し，その中のいくつかが，確かに繰り上げの証左となり得ることを見た。そして，繰り上げを示す現象が，時制辞の生起を許さない述語等位接続構造の等位節でも観察されることを示した。この事実を説明するには，（１）述語等位接続構造が，何らかの形の従属節構造であることを示す，（２）述語等位接続構造の等位節が（見かけに反して）TP まで投射されていることを示す，（３）TP と vP/VP の間に別の投射の存在を想定し，TP 領域への繰り上げと見える現象は，この中間投射への繰り上げであることを示す，という３つの可能性があることを示唆した。この章では，（１）と（２）の方策が支持できないことを論じ，次章では，（３）による問題の解決を探る。４．１では述語等位接続構造が従属節構造ではないことを経験的に示す。４．２では述語の等位接続構造を TP の等位接続として分析することはできないことを見る。続いて４．３では，いわゆる「が/の」交替の適用制約に基づいて，述語等位接続構造の TP 分析が不適切であると主張する。４．４では，この章では説明しきれない経験的事実を指摘し，５章への導入をする。

４．１．等位接続/従属節

３章では日本語にも確かに主語が vP/VP の外へと繰り上がっていることを示す現象があること（否定のスコープとかき混ぜの相互作用，数量詞の遊離，不定代名詞の束縛），また否定辞の主要部 Neg が NegP の外へと繰り上がっていることを示す現象があること（主語の否定極性項目の認可）を見た。そしてこれらの現象が時制辞を伴わない等位接続構造の中で現れることを確認した。

この節では，３章で見た等位接続構造の例が，本当に等位構造であることを確認する。すなわち，(1)のような例が，何らかの補部構造や付加詞構造ではなく，統語的に「等位」であることを確認する。

(1) a. [太郎が泣き]（そして）[二郎が笑っ] た.
b. [太郎がリンゴを食べ]（そして）[二郎がイチゴを食べ] た.

これは３章での結論，すなわち繰り上げを示す現象が時制辞を伴わない構造の中で起こることを示す上で重要である。補部構造や付加詞の構造では（たとえ

ば英語の「例外的格付与構造」や動名詞句など），時制辞が現れない形で繰り上げを示す現象が見られることがあるからである。

(2) a. They believed [Tom to be deceived t by the real estate company].
b. [My passport being stolen t], I visited a local police station.

(2a)では，不定詞の従属節内で，そして(2b)では分詞構文内でそれぞれ受け身による繰り上げが起こっている。同様の分析が日本語の述語等位接続構造の左の等位節にも潜在的には可能なので，この分析を退けることがこの節の目的である。４．１．１～４．１．８で，述語等位接続構造が本当に等位接続を構成していることを経験的に示した後，４．１．９では，本研究で採用する述語等位接続構造の具体的な句構造を提示する。

４．１．１．範疇に制約されない等位

「そして」を用いた接続構造が，等位接続構造であることを示すにあたって，可能な限り英語の等位接続詞 and との性質の対比を試みたい。and は，最も広く認められた代表的な等位接続詞だからである。and にも「等位接続」からはずれた用法があるが，この点でも「そして」は共通した性質を持っていることを見る。

英語の and は，代表的な等位接続詞である。and は，被接続要素が同じ範疇である限りは，範疇の種類に関係なく等位接続構造を作る[1]。

(3) a. John reads [$_{DP}$ many books] and [$_{DP}$ some magazines].
b. John is [$_{AP}$ rather clever] and [$_{AP}$ very intelligent].
c. Many mails are sent [$_{PP}$ to Japan] and [$_{PP}$ to Korea].
d. John will [$_{VP}$ sing songs] and [$_{VP}$ play the guitar].
e. John believes [$_{TP}$ Tom to be a doctor] and [$_{TP}$ Mary to be a teacher].
f. John believes [$_{CP}$ that Tom is a doctor] and [$_{CP}$ that Mary is a teacher].

日本語の「そして」も同じ性質を示す。

[1] 左右の等位節が同じ範疇にならない場合があるが，この点に対は５．２．２節を見よ。

(4) a. **太郎が** [$_{DP}$ **白いシャツ**] **そして** [$_{DP}$ **赤い帽子**]-**を 買った.**

b. **太郎は** [$_{AP}$ **とても賢く**] **（そして）**[$_{AP}$ **かなり優し**] **い.**

c. **多くの手紙が** [$_{PP}$ **アメリカへ**] **そして** [$_{PP}$ **韓国へ**] **送られた.**

d. **太郎は** [$_{VP}$ **歌を歌い**] **（そして）**[$_{VP}$ **ギターを弾**] **く.**

e. *[$_{TP}$ **太郎は背が高い**] **（そして）**[$_{TP}$ **二郎は足が長い**]**.**

f. **太郎は** [$_{CP}$ **次郎が背が高いと**] **（そして）**[$_{CP}$ **三郎が足が長いと**] **思っている.**

３．３節で見たように，そして(4e)**が示すように，日本語では通常** TP **の「そして」による等位接続はできない。しかし，４．３．１で見るように，**(4e)**の非文法性は，**TP **という範疇によるのではなく，左の等位節の述語が終止形であるという事実に起因する。詳細は後述するので，ここでは**(4e)**が非文であることを問題視しないで議論を進める。**

また，and **による等位接続は，構造上の位置にも縛られない。すなわち，指定部**(5a)**, 主要部**(5b)**, 補部**(5c)**, 付加部**(5d)**のどの位置でも等位接続が可能である。**

(5) a. [$_{TP}$ [John and Mary] [$_{T'}$ looked at each other].

b. John will [$_{T}$ read and write] many papers.

c. John believes [[$_{TP}$ Tom to be a doctor] and [$_{TP}$ Mary to be a teacher]].

d. John met a man [[$_{CP}$ who looked like a doctor] and [$_{CP}$ who was actually a teacher]].

「そして」も構造上の位置に関係なく接続関係を示すことができる。

(6) a. **太郎が** [$_{VP}$ [**素早く（そして）丁寧に**] **芝を刈っ**] **た.**

b. **太郎が** [$_{VP}$ [**リンゴを そして バナナを**] **食べ**] **た.**

c. **太郎がリンゴを** [**買い（そして）食べ**] **た.**

d. **太郎は** [[**東大を卒業し**] **（そして）**[**検事となった**]] **女性に会った.**

４．１．２．複数の等位節

and **による等位接続は，事実上無限の要素を接続し得る。**

(7) a. John woke up.
b. John woke up and ate breakfast.
c. John woke up, ate breakfast, and left the room.
d. John woke up, ate breakfast, left the room, and got on the bus.

「そして」による等位接続も同じである。

(8) a. **太郎が目を覚ました.**
b. **太郎が目を覚まし（そして）朝食を食べた.**
c. **太郎が目を覚まし（そして）朝食を食べ（そして）靴を履いた.**
d. **太郎が目を覚まし（そして）朝食を食べ（そして）靴を履き（そして）家を出た.**

同種の補部は（等位接続構造を用いない限り）１つに限られ，また付加詞は複数であり得るかもしれないが，等位接続の等位節の数が無限であるという意味では，無限ではない。等位節の数が無限でありうるという性質は，and **そして「そして」の共通の性質で，両者が等位接続詞であることを示しているといえる。**

４．１．３．入れ替え可能性

４．１．６で見るような，接続された要素同士に因果関係や，時間的前後関係が含意される場合を除き，and **で等位接続された要素は，論理的意味内容を変更することなく，左右を入れ替えることが可能である。**

(9) a. John reads books and magazines.
b. John reads magazines and books.
(10) a. John reads journals and writes papers.
b. John writes papers and reads journals.
(11) a. Mary is tall and beautiful.
b. Mary is beautiful and tall.

「そして」も同じ性質を示す。

(12) a. **太郎が雑誌を そして 本を読んだ.**
b. **太郎が本を そして 雑誌を読んだ.**
(13) a. **太郎が論文を書き（そして）研究誌を読む.**
b. **太郎が研究誌を読み（そして）論文を書く.**
(14) a. **花子は背が高く（そして）頭がよい.**
b. **花子は頭がよく（そして）背が高い.**

補部や付加詞構造は，もちろん意味の変更なくして左右の節を入れ替えることはできない。

(15) a. [John believes] that [Tom believes] Sally.
b. [Tom believes] that [John believes] Sally. （≠ (15a)）
(16) a. [John is happy] if [Tom is sad].
b. [Tom is sad] if [John is happy]. （≠ (16a)）

４．１．４.「と」との共起

これまでも見てきたように，日本語のもうひとつの代表的な等位接続詞に「と」がある。「と」は，名詞的な要素だけを接続する。

(17) a. **太郎が [本と雑誌]-を 読む.**
b. **[太郎と二郎]-が 論文を書く.**
(18) a. ***太郎が [研究誌を読み]と[論文を書] く.**
b. ***花子は [背が高く]と[頭がよ] い.**

「そして」は,「と」の後に随意的に生起し得る。

(19) a. **太郎が [本と（そして）雑誌]-を 読む.**
b. **[太郎と（そして）二郎]-が 論文を書く.**

補部(20)や付加詞(21)の後には決して「そして」は現れることがなく，(19)の事実は「そして」が等位接続要素であることを示しているといえる。

(20) a. **太郎が二郎に（*そして）バナナをあげた.**

b. **太郎が** [**二郎が頭がいいと**]**（*そして）思っている.**

(21) a. **太郎が** [**音楽室で**]**（*そして）歌を歌った.**

b. **太郎が** [**学校へ行く前に**]**（*そして）歯を磨いた.**

４．１．５．等位構造制約と全域的適用

等位接続構造では，接続されている等位節や等位節の一部を片方だけ移動させてはならないという制約がある（Ross 1967 **の等位構造制約）**[2]**。**

(22) a. John will [read magazines] and [watch movies].

b. *Which movie will John [read magazines] and [watch t]?

c. *This is the movie [which John will [read magazines] and [watch t]].

「そして」による接続構造も同じ効果を示す。(23b)**はかき混ぜ規則，**(23c)**は関係節化の例である。**

(23) a. **太郎が** [**新聞を読み（そして）映画を見**] **る.**

b. ***映画を 太郎が** [**新聞を読み（そして）**t **見**] **る.**

c. *[**太郎が** [**新聞を読み（そして）**t **見**] **る**] **映画**

and **による等位接続構造では，左右の等位節に含まれる共通の要素を，全域的適用の形で移動させることができる。**

(24) a. John will [buy some books$_i$] and [read them$_i$].

b. Which book$_i$ will John [buy t_i] and [read t_i]?

c. This is the book [which$_i$ John will [buy t_i] and [read t_i]]

「そして」による接続構造でも同じ現象が観察される。

[2] **ここでは，等位節の一部の移動に関する制約だけを見ておく。等位構造制約の２つの条項（直接の被接続要素の取り出しと，等位節の一部の取り出し）が実は別の制約であるという主張ある。この点は** Grosu (1973, 1981)**，** Merchant (2001)**を見よ。**

(25) a. 太郎が [本を買い（そして）それを読ん] だ.
b. その本を 太郎が [t 買い（そして）t 読ん] だ.
c. [太郎が [t 買い（そして）t 読ん] だ] 本

一見，日本語の従属接続詞，「後に」や「ので」も同じ性質を示すようにも見える。

(26) a. 太郎が [リンゴを買った] 後に [それを食べた].
b. そのリンゴを 太郎が [t 買った] 後に [t 食べた].
c. [太郎が [t 買った] 後に [t 食べた]] リンゴ
(27) a. [太郎がリンゴを買った] ので [二郎がそれを食べた].
b. そのリンゴを [[太郎が t 買った] ので [二郎が t 食べた]].
c. [[太郎が t 買った] ので [二郎が t 食べた]] リンゴ

しかし，(26b, c)や(27b, c)で痕跡で示している位置の内，従属節の中に示した痕跡は，痕跡ではなく，pro であると考えられる。というのも，「（その）リンゴ」を元の位置に戻しても，相変わらず従属節の痕跡で示した位置は音声的に空でありうるからである[3]。

(28) a. 太郎が [pro 買った] 後に [リンゴを食べた].
b. [太郎が pro 買った] ので [二郎がリンゴを食べた].

「けれど」や「ので」で連結された要素は，逆に等位構造制約に規制されない。(23)とは違い，これらの接続構造では，痕跡（音声的に実現されない要素）は主節だけが持てばよい。

(29) a. [太郎がバナナを食べた] 後に [二郎が水を飲んだ].
b. 水を [[太郎がバナナを食べた] 後に [二郎が t 飲んだ]].
c. [[太郎がバナナを食べた] 後に [二郎が t 飲んだ]] 水

[3] Hasegawa (1984/5)は，Huang (1984)の分析を採用し，日本語の pro が話題に束縛された変項であると主張している。

(30) a. [太郎が歌を歌った] ので [二郎がギターを弾いた].
b. ギターを [[太郎が歌を歌った] ので [二郎が t 弾いた]].
c. [[太郎が歌を歌った] ので [二郎が t を弾いた]] ギター

このように and と「そして」で接続された構造は，等位構造制約にしたがい，また全域的適用による移動を受ける。「後に」や「ので」で接続された構造は，等位構造制約の規制は受けない。一見全域的適用による移動のケースも，pro による分析が可能である。したがって，and と「そして」による接続構造は，他の接続構造と違い「等位接続」をなしていると考えることができる。

４．１．６．等位構造制約の違反と「そして」の削除

４．１．５で見たような等位構造制約は，左右の等位節に何らかの因果関係や時間的継続関係が含意される場合に違反することが可能である（Ross 1967, Goldsmith 1985，Lakoff 1986，Deane 1991，Culicover and Jackendoff 1997, 2005, Postal 1998）。

(31) a. John [went to the store] and [bought beer].
b. What did John [go to the store] and [buy t]?
c. This is the beer [which John [went to the store] and [bought t]].
(32) a. John [studied really hard] and [got the scholarship].
b. Which scholarship did John [study really hard] and [get t]?
c. This is the scholarship [which John [studied really hard] and [got t]].

(31b)や(32b)では，and で連結された右の等位節からだけ，目的語が wh 移動を起こしている。(31c)と(32c)でも同様に，右の等位節からだけ関係詞化が行われているが，これらは容認可能な文である。前節で見た，等位構造制約に違反して非文となる(22b, c)とこれらの文を比較して明らかなのは，これら文法的な文では，左右の等位節が平等の立場で連結されているのではなく，時間的順序関係や，因果関係が両者の間に含意されていることである。(31)では，「はじめに店に行き，その店で買い物をした」という含意があり，(32)では，「一生懸命に勉強したら，その結果が認められて奨学金が取れた」という含意がある。こうした場合，少なくても意味的には等位節同士が対等の立場ではなく，そうした場

合に等位構造制約を違反することが可能なのである。

これを念頭に日本語の(33)-(34)を観察する。

(33) a. 太郎が [店に行き（??そして）ビールを買っ] た.
b. ビールを太郎が [店に行き（??そして）t 買っ] た.
c. [太郎が [店に行き（??そして）t 買っ] た] ビール

(34) a. ジョンが [一生懸命に勉強し（??そして）奨学金を獲得し] た.
b. 奨学金を ジョンが [一生懸命に勉強し（??そして）t 獲得し] た.
c. ジョンが [一生懸命に勉強し（??そして）t 獲得し] た 奨学金

２つのことがこれらのデータからわかる。まず，これらの文では，時間的前後関係(33)と因果関係(34)が等位節の間に含意されているが，その解釈の元で「そして」が生起すると，等位節のつながりがかなりぎこちなくなる。これまでは明確に述べてはこなかったが,「そして」による述語等位接続構造では，通常「そして」の生起は随意的で，多くの場合ない方が自然である。それでも，多くの場合,「そして」の生起は文法性を損なうほどの不自然さはない。

(35) a. 太郎は [ピアノを弾き]（そして）[太鼓をたた] く.
b. 太郎は [数学が得意で]（そして）[物理が苦手] だ.

しかし(33)-(34)のように等位節が対等な立場ではない場合は，不自然さが増す。これは，(33)-(34)が，本来の等位接続から意味的に逸脱していることを示していると思われる（「そして」は対等な連結を含意するから）。

また, (33b, c)と(34b, c)では, 等位節の右からだけ摘出移動が行われているが, 等位構造制約を破っている(23b, c)に比べ，はるかに容認性の高い文となっている。このこと自体は「そして」による接続が等位接続であることを示していることにはならない。しかし，これは典型的な等位接続詞である and と平行した性質であるから，少なくとも「そして」による接続構造を，and と同様の形で分析することに正当性を与えることになるだろう。

４．１．７.「違う」「異なる」「別々の」の解釈

Takano (2004)は Carlson (1987)の研究に基づき，述語等位接続構造が，何らか

の従属接続ではなく，真の等位接続構造であることを示した。Carlson (1987)は，まず，different の持つ２通りの解釈を問題にする。

(36)　John went to a different place on his vacation this year.

(36)では John がこれまでに彼が行ったことがある場所とは別の場所に，休暇を過ごしに行ったことが述べられている。このような different の解釈は「外的解釈」と呼ばれる（比較の対象がこの文の外にあるからである）。次に(37)の意味を吟味する。

(37)　John and Mary attend different classes.

(37)の different も，もちろん外的解釈を持つ。この場合，John と Mary はこれまでに出席していたのとは違う授業に出席することになる。しかし，(37)の different にはこれとは別の解釈も可能である。その解釈とは，John と Mary が互いに別の授業に主席するという解釈である。たとえば，John は物理の授業に，そして Mary は社会学の授業に出席するといった具合である。こうした解釈は「内的解釈」と呼ばれる（比較の対象が文の中に含まれているからである）。Carlson によれば，こうした different のような語が持つ内的解釈は，等位接続構造の診断に用いることができるという。当該文が等位接続構造を含むのであれば，文の内部での比較が可能なため，内的解釈が得られることになる。

Takano (2004)は日本語の「違う」「異なる」「別々の」といった単語を用いることで，述語等位接続構造（厳密には V と VP による述語等位接続構造）が，真の等位接続構造であることを示した。これらの表現は，日本語の(38)のような文において内的解釈が可能となる。

(38)　a.　ジョンとビルが 違う/異なる/別々の 映画を見た.
　　b.　ジョンが 違う/異なる/*別々の 映画を見た.
（Takano 2004:174）

(38a)では，内的解釈が可能で，たとえばジョンは「エデンの東」を，ビルは「第３の男」を見たという解釈が可能である（したがって，「と」を用いた接続構造

が，間違いなく等位接続構造であるということになる）。また，(38b)には等位接続構造がなく，「違う」と「異なる」は，外的解釈だけを持つことになる（ジョンがこれまで見たのとは「違う」あるいは「異なる」映画を見た）。「別々の」は，内的解釈だけしか持たないため，等位接続構造を含まない(38b)は非文となっている。

こうした内的解釈の可能性は，次の例に見られる動詞連結が，確かに等位接続であることを示していることになる。

(39) ジョンが 違う/異なる/別々の 論文を [コピーし ファイルし] た.
（Takano 2004:175）

(39)では，内的解釈，すなわちジョンがコピーとファイルをした論文が別のものであるという解釈が得られ，確かにこれが V & V という等位接続構造をなしていると Takano は主張する。(40)は，同じ趣旨の VP 等位接続の例である。

(40) 違う/異なる/別々の 犬が [ジョンを追いかけ] [ビルを噛ん] だ.
（Takano 2004:177，注 11）

(40)でもやはり，「ジョンを追いかけた犬」と「ビルを噛んだ犬」が別であるという内的解釈が可能で，ここにも確かに等位接続構造が関与していると判断される。

Hirata (2006b)は，さらにこのような内的解釈による等位接続の診断は，主語までを含んだ述語等位接続構造にも拡張できることを示している。Carlson の内的解釈による等位接続構造の診断は，英語の TP による等位接続でも有効である。

(41) a. In different rooms [John played the guitar] and [Mary played the piano].
b. On different days [John went skiing] and [Mary went skating].

(41)のそれぞれの文で内的な different の解釈が可能である。例えば(41a)では，ジョンがギターを弾いたのが教室で，メアリーがピアノを弾いたのが音楽室である，と解釈することができる。同じことが，時制辞を除外した，日本語の「主語-目的語-動詞」の等位接続にもいえる。

(42) a. 別々の部屋で [太郎がギターを弾き] (そして) [二郎がピアノを弾い] た.

b. 別々の日に [太郎がスキーをし] (そして) [メアリーがスケートをし] た.

(42)の各例文が文法的であることから，これらの文が表示したような等位接続構造を含むことがわかる（「別々の」は外的解釈が不可能であることを想起せよ）。

Takano (2004:175)は，(39)のような例文で，通常随意的である「そして」が生起すると，内的解釈は得られなくなると判断している（Daisuke Inagaki と Akira Watanabe の指摘だとされている）。

(43) ジョンが 違う/異なる/*別々の 論文を [コピーし そして ファイルし] た.

確かに，(43)では，「コピーしてからファイルした」という含意が強く感じられて，「違う」「異なる」は外的解釈を受けるのが自然に思える。また，「別々の」は内的解釈しか許されないので，(43)では「別々の」を使うと非文となるように思える。しかし，「そして」が入ると常に内的解釈が不可能かといえば，そうではない。(42)のように，「主語-目的語-動詞」の等位接続の場合は，「そして」があっても問題なく内的解釈が可能である（むしろ筆者の耳には「そして」があった方が内的解釈がより強く感じられる）。また，VP 接続の(40)も，「そして」があっても内的解釈は不可能ではないように感じられる。

(44) 違う/異なる/別々の 犬が [ジョンを追いかけ] (そして) [ビルを噛ん] だ.

(45)のように多少の（VP で記述されていることがらが，それぞれ別々の出来事であることが明瞭となるような）文脈を与えると，内的解釈が強まるように思える。

(45) 昨日の午後 太郎は 違う/異なる/別々の 時間に [庭に水を撒き（そして）犬に餌を与え] た.

(43)のような動詞の等位接続では,「そして」の存在によってなぜ内的解釈が得難いのかは，残された問題である。内的解釈の本質は，等位構造が並立的に複数の出来事を記述することに起因すると思われる。問題となっている例文の「コピーする」と「ファイルする」は，あまりにその因果関係が明らかであるために（コピーしてからでないとファイルできない），２つの独立した出来事として解釈するのが難しいのかもしれない。この２つの動詞を入れ替えて，因果関係（前後関係）を消すと,「そして」があっても内的解釈は可能であるように筆者には判断される。

(46)　ジョンが 違う/異なる/別々の 論文を [ファイルし（そして）コピーし] た.

また，(47)のように，語用論的知識により，１つの出来事とは考えられないような動詞を連結すると，より内的解釈は得やすくなると思われる。

(47)　太郎が その映画の別々の場面で [笑い（そして）泣い] た.

これらの観察が正しいとしたら,「そして」を用いた述語の連結は，等位接続構造を確かに含むといえる。

４．１．８．空所化/右接点繰り上げ

Ross (1970)，Jackendoff (1971)，Terazu (1975)，Kuno (1976)，Sag (1976)らは，等位接続構造で，後続する等位節の中の，先行する等位節と共通する部分が削除される現象があることを指摘する。

(48)　a.　John ate the apple and Mary ~~ate~~ the strawberry.
　　b.　John took Mary to the movies and Tom ~~took~~ Sally ~~to the movies~~.

(48a)では，後続節の ate が，そして(48b)では took と to the movie が先行節と共通し，削除を受けている。また，Ross (1967)は，左右の等位節に共通する要素を文末位置に全域的適用の形で移動する規則を提案する。

(49)　a.　John bought t and Mary sold t, [old books on theoretical linguistics].

b. John loves t and Mary hates t, [the guy from Japan whose major is sociology].

それぞれの文で，左右の等位節に共通する，old books on theoretical linguistics，the guy from Japan whose major is sociology が文末へと全域的適用の形で移動されている。どちらの規則も等位接続構造だけで適用が可能であることが知られている。日本語にもこれらの規則に似た，空所化/右接点繰り上げの規則がある（Ross 1970，Kuno 1978，Saito 1987，Abe and Hoshi 1997）[4]。

(50) a. 太郎が二郎にバナナをあげた（そして）花子が昌子にイチゴをあげた.
b. 太郎が~~二郎にバナナをあげた~~（そして）花子が二郎にバナナをあげた.
c. 太郎が二郎に~~バナナをあげた~~（そして）花子が昌子にバナナをあげた.
d. 太郎が二郎にバナナを~~あげた~~（そして）花子が昌子にイチゴをあげた.

(51) a. 太郎が二郎にバナナをあげた（そして）花子も二郎にバナナをあげた.
b 太郎が t （そして）花子も t [二郎にバナナをあげた].

(52) a. 太郎が二郎にバナナをあげた（そして）花子が昌子にバナナをあげた.
b. 太郎が二郎に t （そして） t 花子が昌子に [バナナをあげた].

(53) a. 太郎が二郎にバナナをあげた（そして）花子が昌子にイチゴをあげた.
b. 太郎が二郎にバナナを t（そして）花子が昌子にイチゴを t [あげた].

(50)が削除規則の適用過程を，(51)-(53)が右接点繰り上げ規則の適用過程をそれぞれ示している。日本語と英語では，SOV と SVO という基本語順をはじめ，数多くの語順の違いが見られ，日本語には空所化が存在するのか，あるいは右接

[4] (50)-(53)の(a)の例文は，全体で１つの文と解釈することはできない。４．３．１でこの問題を取り上げる。

点繰り上げが存在するのか議論が分かれるところである。しかしここでは，英語の空所化/右接点繰り上げに対応するような操作が「そして」による接続構造に観察されることから，「そして」が確かに英語の and に対応するような等位接続詞であるということを確認するにとどめたい[5]。

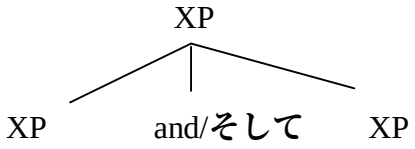
以上見てきたように，「そして」による接続構造は，ほとんどすべての性質を英語の and を用いた接続構造と共有する。時として and の接続構造，「そして」の接続構造ともに，等位節同士が対等の意味にはならない場合が見られたが，それでも両者の振る舞いは同じであった。このことは and による接続構造を等位構造と見なせるのと同じ意味で，「そして」による述語接続構造を等位構造として見なせることを強く示唆していると解釈される。

４．１．９．等位接続の句構造

本研究は，等位接続構造の解明の研究ではなく，等位接続構造を用いた日本語の基本的な句構造の解明の研究である。したがって，等位接続一般の統語的句構造の解明に寄与するものではない。しかし，基本的な等位接続の句構造に関して，若干の仮定を明確にしておきたい。

等位接続構造では，通常左右の被接続要素は同じ文法範疇に属し，等位接続構造全体の範疇も，and や「そして」ではなく，接続されている各々の被接続要素が決める。すなわち，and や「そして」は独立した語彙項目でありながら，主要部としての機能を持たない。また，接続し得る要素の数は，理論的には無限で，この点でも and や「そして」による構造は他の X'スキーマにしたがった範疇の投射とは明らかに異なる。(54)は，こうした点を加味した（X'スキーマの観点からは例外的となる）等位接続の句構造である。

(54)

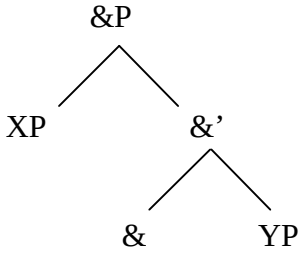


その一方で，等位接続も X'スキーマにしたがった，内心構造となっているという分析が次々と提案されている（Munn 1993, Zoerner 1995, Johannessen 1998,

[5] 空所化/右接点繰り上げは，４．３．３で再び詳しく取り上げる。

Progovac 2003，金子/遠藤 2001，Oshima and Kotani 2008，Kitada 2009）。各分析で違いはあるが，それらに共通しているのは，and や「そして」といった等位接続詞も X’スキーマの意味での主要部であり，指定部，補部を通常の範疇と同じように取って&P という最大投射を構成するという考え方である。

(55)



本研究では，これらの２つの構造が排他的にどちらか一方になるのではなく，等位接続の意味的性質に基づいてどちらの構造にもなり得るという，金子/遠藤(2001)や Kitada (2009)の立場を取っておきたい。具体的には，等位節同士が対等の意味関係となる，典型的な等位接続の場合には，伝統的な(54)の構造を取り，等位節同士に時間的含意や因果関係の含意がある場合，X’スキーマにしたがった(55)の構造を取ると考える。この方策にはいくつかの利点がある。先に，等位節同士に時間的継続関係が含意される場合，等位構造制約の違反が回避されることを見た。

(56) a. John [went to the store] and [bought beer].
b. What did John [go to the store] and [buy t]?
c. This is the beer [which John [went to the store] and [bought t]].

(57) a. 太郎が［店に行き（??そして）ビールを買っ］た.
b. ビールを太郎が［店に行き（??そして）t 買っ］た.
c. ［太郎が［店に行き（??そして）t 買っ］た］ビール

(56b, c)，(57b, c)では，右の等位節からだけ摘出移動が適用されているが，文法性の低下はあまりなく，ここでは等位構造制約の違反が回避されている。これらの構造が，通常の等位接続構造と同じ(54)の形をしているとすれば，通常の等位構造制約違反の例と時間的含意によって等位構造制約が回避される例とを，句構造を用いて区別することはできない。しかし，時間的含意のあるこれらの

例が，X’スキーマにしたがった(55)の構造を持っているとすれば，その文法性を説明することができる。(55)によれば，右の等位節は補部であるから，補部からの抜き出し移動は通常許されるという一般化（Huang 1982）の１つとして等位構造制約違反の例外を扱うことができる（金子/遠藤 2001）。

また，(54)-(55)のように２つの等位接続構造を仮定することは，次のような文の曖昧性を説明するためにも有用である（Kitada 2009:106）。

(58) [John and Mary] laughed.

(58)は，主語 John と Mary に関して「集合的な」解釈と「分配的な」解釈の両方が可能である。集合的な読みでは，John と Mary が同時に笑ったか，あるいは，１つの出来事として２人が笑った，という解釈になる。一方，分配的な読みでは，John がある出来事に関して笑い，また Mary はまた別の事柄に関して笑ったという解釈になる。これら２つの解釈の違いは，等位接続が(54)と(55)の２つの構造の可能性を持つと考えることで説明される。(54)の構造では，それぞれの XP が別の最大投射として独立し，各々が別のできごとを描写する分配的な読みが保証される。一方(55)の構造では，左右の等位節が&P のもとにまとめられ，全体として集合的な解釈が得られるとされる[6]。

本研究では，左右の等位節が対等の立場となる述語等位接続構造の例文を主に用いるので，基本的に従来型の(54)の等位接続の句構造を仮定する。けれども，(55)の形の等位接続構造の理論を否定するという意図はもちろんない。

４．２．TP 分析

３章では，日本語にも TP 領域への繰り上げが存在することを示す現象がある

[6] (54)の構造で，左右の等位節が（等位接続構造全体としてではなく）それぞれ別の投射としてカウントされるという考え方に関しては，Citko (2005)の並行的併合に基づくさらなる仮定が必要である。また，(56)や(57)では，右の等位節からだけ摘出移動が適用されているが，左の等位節からだけ摘出移動が適用され，なおかつ等位構造制約が回避される例があることが Culicover and Jackendoff (1997, 2005)で報告されている。

(i) ?This is the loot that [you just identify t and we arrest the thief on the spot].
(Culicover and Jackendoff 1997:206)

こうした例を扱うためにも，Citko (2005)で提案されている並行的併合の枠組みを用いることが必要であろう。詳しくは Kitada (2009)を参照されたい。

一方で，そうした現象が時制辞の生起を許さない「そして」による述語等位接続構造の等位節でも観察されることを指摘した。前節では，述語等位接続構造を，「実は等位接続構造ではない」と考えることで問題を解決することはできないことを，「そして」による接続構造が，首尾一貫して英語の and による接続構造と性質をともにすることで示した。時制辞が現れない等位節で TP 領域への繰り上げを示す現象が観察されることは，また，等位節が（見かけに反して）TP であると主張することでも解決し得る。この節では，そうした等位節の様々な TP 分析を検討し，いずれの TP 分析も維持しがたいことを示す[7]。TP 分析が説得力を持つ対案となり得るか否かは，述語等位接続構造の左の等位節に時制要素が現れないことをいかに説明することができるかにかかっている。しかし，どの分析でも時制要素の扱いが不十分であることを見る。４．２．１～４．１．５では想定しうる TP 分析を検討し，４．１．６では Tomioka (1993)の提案する TP 分析の不十分な点を指摘する。

４．２．１．空所化

前節で見たように，英語には空所化と呼ばれる現象があることが Ross (1970)以来知られ，その性質は詳しく究明されている（Jackendoff 1971, Hankamer 1973, Terazu 1975，Kuno 1976，Sag 1976，Williams 1977 など）。空所化は，(59)のように，左右に等しい要素（この場合動詞）が等位接続構造に含まれている場合，後続する要素を削除することができる現象をいう。

(59) a. John ate the apple and Tom ~~ate~~ the hamburger.
b. John read books and Tom ~~read~~ magazines.

(60)のような，主語を含み，時制要素が（少なくとも左の等位節には）現れない述語等位接続構造も，(61)で示すように，はじめは時制要素がそれぞれの等位節にあって（それぞれ等位節は TP まで投射され），左の等位節の時制辞が派生の後の段階で空所化によって消去されたと分析できるかもしれない[8]。

---

[7] TP 理論は，Tomioka (1993)，三原 (1997)，Nakatani (2004)によって提唱されている。また，Kato (2006:7.3)では TP 理論に対する反論が展開されている。

[8] 日本語と英語では SOV と SVO の基本語順が異なるため，空所化の適用も左右で異なると考える。Ross (1970)の論考を見よ。また空所化による TP 理論（に類する分析）は Nakau (1973:259)に見られる。

(60) a. **太郎がリンゴを食べ（そして）二郎がイチゴを食べた.**
b. **太郎がギターを弾き（そして）二郎がピアノを弾いた.**
(61) a. **太郎がリンゴを食べた（そして）二郎がイチゴを食べた.**
b. **太郎がギターを弾きた（そして）二郎がピアノを弾いた.**

英語も，(59)**のような語彙動詞に加え，**(61)**平行する形で** T **に生成される助動詞を単独で削除することも可能である。**

(62) a. John can clean the shed and Sidney ~~can~~ feed the chickens.
b. John will play the guitar and Tom ~~will~~ play the violin.
（Hirata 2006a:77）

しかしこのような空所化による TP **分析は，多くの点で支持されない。まず，これまでにも見てきたように，述語等位接続構造では，左の等位節に時制要素が現れてはならない。したがって空所化が適用されない形だと**(61)**の各文は非文となる。英語の**(59)**や**(62)**は，空所化の適用/不適用は文法性に影響を与えないから，少なくともなぜ日本語の** T **要素の空所化は（そうした操作があるにしても）義務的に適用されなければいけないのか，説明が必要である（この点は４．３．１で吟味する）。**

また，日本語は，過去時制になると多くの動詞が「音便形」という特殊な形を取る。下一段活用の「食べる」のような場合には，音便形を持たないため，単純な時制要素の空所化によって(61a)**から**(60a)**を派生することができるが，音便形を持つ**(61b)**の場合，単なる空所化だけでは目的を達成できない。「弾く」の過去形は，音便形の「弾いた」であって「弾きた」ではないから，単に「弾いた」から「た」を削除しても，正しい「弾き」という形は得られない。仮に** T **の空所化という操作があるとしても，さらなる仮定を積み上げなければ，問題の時制辞なしの等位節を作ることはできない。**

空所化は，and **の他に** or **でも可能である（**but **は容認性が著しく落ちるとされている）。**

(63) a. I can call you or you ~~can call~~ me.

b. You can betray Sally or Sally ~~can betray~~ you.

日本語にも or に相当する接続詞「か」が存在する。

(64) a. 太郎が二郎の家に来る か 二郎が太郎の家に行く.
b. 父が息子を褒める か 母が娘をしかる.

「か」による接続も等位接続であることは，全域的適用移動が可能で(65)，等位構造制約にしたがうことでわかる(66)。

(65) a. その人に [太郎が t 電話した] か [二郎が t 手紙を書いた].
b. [太郎が t 電話した] か [二郎が t 手紙を書いた] 人
(66) a. *その人に [太郎が花子に電話した] か [二郎が t 手紙を書いた].
b. *[太郎が t 電話した] か [二郎が花子に手紙を書いた] 人

そして，「そして」による等位接続とは違い，「か」による等位接続では等位節に時制要素が入り，明確に TP & TP という形での等位接続構造が可能である(64)-(65)。しかし，「か」による等位接続は，英語の or とは異なり，空所化の適用を受けない。

(67) a. *太郎が二郎の家に来~~る~~ か 二郎が太郎の家に行く.
b. *父が息子を褒め~~る~~ か 母が娘をしかる.

上で見たように「そして」による等位接続の場合，（空所化という操作があるとしても）空所化の入力は非文となり，「か」による等位接続の場合は，出力が非文となる。これらの事実から，日本語には少なくとも T 要素単独にかかるような空所化の操作は存在しないと考えるのが一番自然であろう。

４．２．２．右接点繰り上げ

次に，右接点繰り上げによる TP 理論を検討する。４．１．８で見たように英語には，左右の等位節に共通した要素がある場合，共通した要素を残りの要素と音声的に休止で区切って，文末位置に全域的に移動する規則（現象がある）。

(68) a. Louise writes [epic poetry] and Thelma recites [epic poetry].

b. Louise writes t, and Thelma recites, [epic poetry].

（Haegeman and Guéron 1999:52）

(69) a. John conceivably could [have stolen the money that was in your safe last year] and Bill definitely would [have stolen the money that was in your safe last year].

b. John conceivably could, t and Bill definitely would t, [have stolen the money that was in your safe last year]

（安井稔編 1987:592）

これと同じように，述語等位接続構造も，はじめは左右の等位節が時制辞を含んだ形で生成され，後に「共通の時制辞」が右接点繰り上げ規則によって文末に移動して派生されると考えることができるかもしれない。(70)がこの，右接点繰り上げによる TP 理論を概略的に示す。

(70) a. [$_{TP}$ 太郎がリンゴを食べた]（そして）[$_{TP}$ 二郎がイチゴを食べた].

b. [$_{TP}$ 太郎がリンゴを食べ t]（そして）[$_{TP}$ 二郎がイチゴを食べ t] た.

この説明が支持されるなら，述語等位接続構造の等位節に TP 領域への繰り上げの現象が現れることが，問題なく説明される。しかし，(70)のような説明は多くの点で支持されない。

まず，空所化による TP 理論と同様，この右接点繰り上げによる TP 理論でも，右接点繰り上げの適用は義務的と考えなければならない。等位節には（４．３で詳述する例外的な場合を除いては）時制要素が現れてはならないからである。英語の場合，右接点繰り上げは随意的に適用される規則である（右接点繰り上げを適用しなければ，かなりまわりくどい表現となるが，それで文が非文となることはない）。この点で，すでに右接点繰り上げによる TP 理論は動機付けが弱いといえる。

次に，英語の右接点繰り上げでは，（おそらく繰り上げを受けた要素が右の等位節だけではなく左右の等位節両方に関係することを示すために），繰り上げら

れた要素と残りの要素の間に音声的な休止が現れる（(68b), (69b)を参照のこと）。これに対し，日本語の述語等位接続構造では，T とその直前の右の等位節は連続して発音されなければいけない。

(71) [$_{TP}$ 太郎がリンゴを食べ t]（そして）[$_{TP}$ 二郎がイチゴを食べ t](*,) た.

この点でも，述語等位接続構造を空所化によって分析することは不適切であるといえる。

しかしその一方で，日本語に右接点繰り上げ，あるいはそれに類する規則があることは度々指摘され，様々な研究がなされてきた（Kuno 1978，Saito 1987，Abe and Hoshi 1997 など）[9]。たとえば Kuno (1978:132)は，(72a)の「行き/行った」に右接点繰り上げ移動を適用することで(72b)が派生されるとしている（Kuno 1978 では，「そして」が省略された例文が用いられている）。

(72) a. 太郎がアメリカに [行き]（そして）花子がフランスに [行った].
b. 太郎がアメリカに t （そして）花子がフランスへ t [行った].

実際日本語のこの規則はかなり自由に適用され，構成素をなさないと考えられる語群にも適用されることが知られている（(73)-(76)も，「そして」の省略された例文がオリジナルである）。

(73) a. 兄は国立大学の [法学部に入り]（そして）弟は私立大学の [法学部に入った].
b. 兄は国立大学の t（そして）弟は私立大学の t [法学部に入った].
(74) a. 兄は国立大学の [中で最高だと言われている大学に入り]（そして）弟は私立大学の [中で最高だと言われている大学に入った].
b. 兄は国立大学の t（そして）弟は私立大学の t [中で最高だと言われている大学に入った].

（影山 1993:76-77）

[9] ４．３．３でこの規則を「等位節部分削除」という削除の規則として再び取り上げる。ここでは右接点繰り上げによる TP 理論を検証するため，便宜的に移動規則としてこの規則を扱うこととする。

(73)では「法学部に入る」が，それを修飾する「国立大学の」や「私立大学の」を無視する形で規則の適用を受けている。(74)ではさらに，節をまたぐ形での規則の適用がなされているが，これも文法的である。

しかしながら，日本語のこうした右接点繰り上げは，形態的に緊密な関係にある２つの要素を分断する形で適用することはできないと影山は指摘する。すなわち(75b)のように「国立大学/私立大学」を分断したり，(76b)のように複合動詞「飲み歩く/食べ歩く」を分断する形でこの規則を適用することはできない。

(75) a. 兄は国立 [大学の法学部に入り]（そして）弟は私立 [大学の法学部に入った].
b. *兄は国立 t（そして）弟は私立 t [大学の法学部に入った].
(76) a. その夜, 兄は神戸で飲み [歩き]（そして）弟は大阪で食べ [歩いた].
b. *その夜，兄は神戸で飲み t（そして）弟は大阪で食べ t [歩いた].

形態的緊密性は，また，日本語の間投詞「ね」や「よ」の介在が許されるかどうかでも調べることができる。日本語の「ね」や「よ」は，国語学で言う分節の単位を区切る手段として用いられる。

(77) a. 太郎が（ね）二郎に（ね）本を（ね）図書館で（ね）貸した（よ）.
b. 太郎（*ね）が二郎（*ね）に借金（*ね）を頼み（*ね）込んだ（よ）.

(77a)のように，DP/NP や PP の間には間投詞が入るが，(77b)のように DP/NP や PP の内部，複合動詞の内部には間投詞は入らない。

ここで，間投詞が間に入る場合，右接点の繰り上げが可能で，そうではない場合には右接点繰り上げが不可能であるという規則性がある。(72)-(74)のように繰り上げが可能な場合，繰り上げの対象となる句とそれに先行する句の間に「ね」を入れることが可能である(78)。それに対し，(75)-(76)のように繰り上げが不可能な場合，その位置に「ね」を介在させることはできない(79)。

(78) a. 太郎がアメリカに（ね）[行った]（よ）.
b. 兄は国立大学の（ね）[法学部に入った]（よ）.

c. 兄は国立大学の（ね）[中で最高だと言われる大学に入った]（よ）.

(79) a. 兄は国立（*ね）[大学の法学部に入った]（よ）.

b. 兄は神戸で飲み（*ね）[歩いた]（よ）.

したがって，時制辞を欠いた述語等位接続構造が，T 要素の右接点への繰り上げによって派生されるとするなら，「ね」が語彙動詞と時制辞の間に入ることが予測される。しかし，実際はその位置に「ね」を介在させることができない[10]。

(80) a. 太郎がりんごを食べ（*ね）た（よ）.

b. 二郎が水を飲ん（*ね）た（よ）.

このことは，述語等位接続構造を，T の右接点繰り上げによって説明することが不適切であることをさらに示しているといえる。

右接点繰り上げによる TP 分析の最後の反証は，時制要素の形態的不一致に関するデータである。日本語の過去の形態素は（音便形による多少の調整を除いて）動詞述語でも形容詞述語でも基本的に「た」である。

(81) a. 太郎はリンゴを食べた.

b. 太郎は背が高かった.

これに対し，現在（非過去）形は，動詞では「る」を，形容詞では「い」を用いる。

---

[10] (80)の各文も，副助詞を語彙動詞につけ，「する」挿入を適用すると間投詞の挿入が可能となる。

(i) a. 太郎がリンゴを食べさえ（ね）した（よ）.

b. 二郎が水を飲みさえ（ね）した（よ）.

そして予測通り，これらの場合，右接点繰り上げの適用が可能である。

(ii) 太郎が [リンゴを食べさえ t]（そして）[水を飲みさえ t] した.

この点は４．３．３節，及び５．３．６節で詳述する。

(82) a. **太郎はリンゴを食べる.**
b. **太郎は背が高い.**

また，否定辞「ない」は活用上形容詞であるため（Kishimoto 2007, 2008**），動詞が述語として用いられても，否定文では現在形に「い」が使われる。**

(83) a. **太郎はリンゴを食べない.**
b. **二郎は水を飲まない.**

述語等位接続構造で，片方の等位節だけが否定辞を含む場合がある。

(84) a. [**太郎がリンゴを食べ** t]（**そして**）[**二郎が水を飲まな** t] **い.**
b. [**太郎がリンゴを食べず** t]（**そして**）[**二郎が水を飲** t] **む.**

こうした場合，右接点繰り上げの入力として，左右の等位節に別々の現在形形態素を想定しなければならない。

(85) a. [**太郎がリンゴを食べる**]（**そして**）[**二郎が水を飲まない**].
b. [**太郎がリンゴを食べない**]（**そして**）[**二郎が水を飲む**].

影山 (1993)**が指摘するように，日本語のこうした（右接点繰り上げのように見える）規則は統語的構成素に無頓着な，音声的な規則であると考えられる（影山は削除規則であるとしている）。そうであるなら，音声的に一致していない**(85)**から，**(84)**を派生することはできず，右接点繰り上げによる** TP **理論は破綻しているといえる。**

４．２．３．空の T

空所化による TP **理論では，左の等位節の** T **要素が，削除規則によって空となっていると仮定した，その代わりに，日本語には，もともと音声形式を持たない** T **の要素があって，これが左の等位節に基底生成されていると考えることもできるかもしれない。これがこの節で検討する「空の** T**」による** TP **分析である。**

(86) **空所化による TP 分析**

a. **太郎がリンゴを食べた（そして）二郎がイチゴを食べた.**

b. **太郎がギターを弾きた（そして）二郎がピアノを弾いた.**

(87) **空の T による TP 分析**

a. **太郎がリンゴを食べ[$_{T}$ Ø]（そして）二郎がイチゴを食べた.**

b. **太郎がギターを弾き[$_{T}$ Ø]（そして）二郎がピアノを弾いた.**

英語でも，しばしば音声的に空の T を想定する必要性が指摘されている。たとえば Radford (2004:121-124)**は，**(88)**の埋め込み文に（通常の不定節に現れる T 要素** to **に対応する）音声的に空の T が生成されていると主張する。**

(88) a. I have never known [$_{TP}$ Tom Ø criticize anyone].

b. A reporter saw [$_{TP}$ Senator Sleaze Ø leave Benny's Bunny Bar].

その根拠として，現代英語でも，know **の補部に** to **を伴う補文がくることがあったり，従属節が受け身文になると** to **が現れることが挙げられている**[11]**。**

(89) a. I have never known [$_{TP}$ Tom (to) criticize anyone].

b. Senator Sleaze was seen [$_{TP}$ t to leave Benny's Bunny Bar].

したがって，述語等位接続構造においても，空の T が左の等位節に基底生成されているという可能性は検討に値する。

しかし，この空の T による TP 分析も多くの問題点がある。まず，その統語上の分布である。英語の(88)**のような空の T は，一定の語彙動詞に選択された補部にあるので，これらの場合，語彙動詞（**know/see**）の補部の選択特性として「空の T」の分布を予測できる。しかし日本語の述語等位接続構造は，主節として用いられるので，英語にならった形での分布の規定ができない。**

次に, 空の T による TP 分析が仮に正しいとしてみよう。そうだとすると, 様々な予測ができるが，その予測はどれも正しくない。まず，空の T による TP の構造が可能であるとすると，述語等位接続構造は TP & TP **の形をしていることに**

[11] Basilico (2003)**は，**(88b)**に対する受け身文が**(89b)**であるとするような分析を否定している。**

なる。「そして」による等位接続構造は一般的に左右の接等位節を入れ替えることが可能だから（例文(12)-(14)を参照），TP による構造でも左右の入れ替えが可能なはずである。ところが，（空の T 分析に基づく）TP & TP による述語等位接続構造では，等位節の入れ替えは許されない。

(90) a. [太郎が泣き Ø]（そして）[二郎が笑った].
b. [太郎がリンゴを食べ Ø]（そして）[二郎がイチゴを食べた].
(91) a. *[二郎が笑った]（そして）[太郎が泣き Ø].
b. *[二郎がイチゴを食べた]（そして）[太郎がリンゴを食べ Ø].

先に接続詞「か」による構造も等位接続であることを見た。そして「か」の場合，左右の等位節は時制辞を伴った TP となるのであった。

(92) a. [$_{TP}$ 太郎が二郎の家に来る] か [$_{TP}$ 二郎が太郎の家に行く].
b. [$_{TP}$ 父が息子を褒める] か [$_{TP}$ 母が娘をしかる].

「か」による等位接続の場合，実際左右の TP の入れ替えが可能である。

(93) a. [$_{TP}$ 二郎が太郎の家に行く] か [$_{TP}$ 太郎が二郎の家に来る].
b. [$_{TP}$ 母が娘をしかる] か [$_{TP}$ 父が息子を褒める].

したがって，(91)の非文法性を，TP という範疇に帰することもできない（TP という範疇が特別に等位節の交替を許さない，という具合に(91)の非文法性を説明することはできない）。

日本語の T 要素は様々な位置に現れる。文末や，補文標識の直前がその代表である。

(94) a. 太郎が泣い [$_{T}$ た].
b. [太郎が泣い [$_{T}$ た]] と思います.

また，「そうだ」「ようだ」「らしい」のような述部は，補文標識のない TP だけを選択し，これらの補文の T 位置も典型的に時制辞が現れる位置である。

(95) a. [$_{TP}$ 太郎が泣い [$_{T}$ た]]（*と）らしい.
b. [$_{TP}$ 太郎が泣い [$_{T}$ た]]（*と）ようだ.
c. [$_{TP}$ 太郎が泣い [$_{T}$ た]]（*と）そうだ.

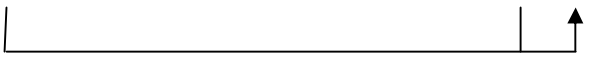
(95)で示したように, これらの補文に補文標識が後続すると, 非文となる。また, 補文は時制辞を含んでいるから, これらの述部が TP を補部として取っていることがわかる。しかし, (94)-(95)のどの位置にも空の T が現れることはなく, 日本語に空の T があるという分析は, 動機付けに乏しいと思われる（４．３．４で空の T を想定することも可能な文脈をもうひとつ見る)。

(96) a. *太郎が泣い [$_{T}$ Ø].
b. *[太郎が泣い [$_{T}$ Ø]] と思います.
c. *[$_{TP}$ 太郎が泣い [$_{T}$ Ø]] らしい.
d. *[$_{TP}$ 太郎が泣い [$_{T}$ Ø]] ようだ.
e. *[$_{TP}$ 太郎が泣い [$_{T}$ Ø]] そうだ.

４．２．４．T-to-C

右接点繰り上げによる TP 分析では, 等位節に基底生成された T が, 全域的適用による右方移動を受け, 述語等位接続構造が派生される可能性を検討した。

(97) a. [$_{TP}$ 太郎がリンゴを食べた]（そして）[$_{TP}$ 二郎がイチゴを食べた].
b. [$_{TP}$ 太郎がリンゴを食べ t]（そして）[$_{TP}$ 二郎がイチゴを食べ t] た.



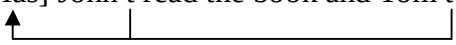
しかし, この派生にはもう一つの可能性がある。英語の疑問文では, 一般的に T 要素は C 位置へと繰り上げられていると考えられている。

(98) a. John has eaten the apple.
b. [$_{C}$ Has] John t eaten the apple?

そしてこの T-to-C 移動は, 全域的適用が可能である。

(99) a. John has read the book and Tom has written the paper.

b. [$_C$ Has] John t read the book and Tom t written the paper?



これと同じように，(97b)においても，T の移動は右接点繰り上げの移動ではなく，T-to-C の全域的適用による移動であると考えることも可能であろう。この節では，この方策を検討する（Tomioka 1993，Koizumi 1995, 2000 が，実際こうした派生を提案している）。

T-to-C 移動による TP 分析のまずはじめの問題点は，補文標識と T 要素に相補分布関係が見られないことである。T が C 位置へ移動するという考え方の出発点には，ドイツ語のような，いわゆる V2 現象が見られる言語において，T 要素と補文標識が相補分布をなすという観察があった。

(100) a. Ich weiß, [$_{CP}$ John [$_C$ hat] den Wagen verkauft t].
I know John has the car sold

b. Ich weiß, [$_{CP}$ [$_C$ dass] John den Wagen verkauft hat].
I know that John the car sold has

(100a)では，埋め込み文に補文標識 dass が現れないため，助動詞の has が C 位置へと繰り上げられ，補文内で V2 の現象が現れている。一方(100b)では，埋め込み文 CP に補文標識が現れているため，助動詞の T-to-C 移動が阻まれている。同じ観察は英語でもなされる。主文の疑問文の場合，助動詞は T-to-C 移動を起こすが，間接疑問文の場合，whether/if が C 位置をしめるため，助動詞の移動は起こらない。

(101) a. [$_C$ Has] John t eaten the apple?

b. I asked her [[$_C$ whether] John has eaten the apple].

c. *I asked her [[$_C$ whether has] John t eaten the apple].

したがって，(101c)のように補文標識と移動した T が，同時に C 位置をしめると非文となる。

T-to-C による TP 理論が正しいとするなら，述語等位接続構造は，補文標識の現れる CP に埋め込むことはできないと予測される。というのも補文標識があれば，(101c)と同じように T-to-C 移動が阻まれるはずであるからである。しかし，述語等位接続構造は，問題なく CP の補文内に生起する。

(102) a. [[太郎が笑い（そして）二郎が泣いた]と] 思います.
b. 太郎は私に [二郎が笑い（そして）花子が泣いた]か] 尋ねた.

この事実は，少なくともさらに仮定を積み重ねない限りは，T-to-C による TP 分析が維持しがたいことを示している。

２つめの問題点は，述語等位接続構造が CP の投射を伴わない言語環境にも現れることである。先に述語「そうだ」「ようだ」「らしい」のような述部が，補文標識のない，TP だけを選択することを見た。

(103) a. [$_{TP}$ 太郎が泣い [$_{T}$ た]]（*と）らしい.
b. [$_{TP}$ 太郎が泣い [$_{T}$ た]]（*と）ようだ.
c. [$_{TP}$ 太郎が泣い [$_{T}$ た]]（*と）そうだ.

T-to-C 分析が正しければ，これらの述語の補文に述語等位接続構造は現れないと予測される。しかし予測に反し，述語等位接続構造は問題なくこれらの述語の補部となる。

(104) [太郎が泣き（そして）二郎が笑った] らしい/ようだ/そうだ.

したがって，T-to-C による TP 分析も維持しがたいと考えられる。

４．２．５．T-to-Fin

Bresnan (1977)，Culicover (1993)，Rizzi (1997)は，英語の wh 疑問文形成などに見られる，いわゆる that-痕跡効果が，副詞が前置されることによって回避されるという指摘をしている。

(105) a. *Who do you think [t’ that [t will win the prize]]?

b. Who do you think [t' that [next year t will win the prize]]?

（Rizzi 1997:312-313）

(105a)は，補文標識 that ではじまる埋め込み文から，従属節主語 who が抜き出し移動を受けて非文，(105b)では，前置された副詞が主語の痕跡の前の位置をしめ，文法的となっている。Rizzi (1997)は，次のような仮説を立てることで，この対比を説明する。

(106) a. 空の補文標識は適正統率に必要な Agr 素性を持つ.

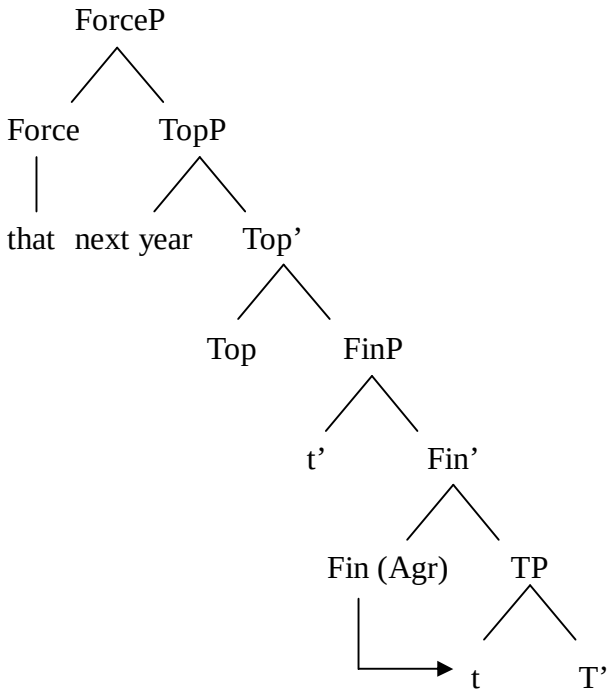
b. CP 領域には，文の意味上の性質（断定文，命令文，疑問文等）を決める force の素性と，文の定/不定を決める finite の素性が実現される。

c. 通常 force と finite の素性は，C という単一の主要部に実現される。

d. 副詞の前置によって force と finite はそれぞれ別の投射（ForceP と FinP）に実現される。

(105a)では，従属節で副詞の前置が起こっておらず，force/finite は単一の主要部 C に同時に実現される(106c)。空の補文標識は Agr の素性を持つが，that は持たないため(106a)，(105a)では，主語の痕跡が適正統率をされずに非文となる（基本的に Rizzi 1990 の説明を踏襲している）。これに対し，(105b)では，従属節で副詞が前置されている。この前置された副詞を格納するため，TopP（話題句）が投射され，副詞はその指定部にあるとされる。仮説(106d)により，force と finite は別の投射として実現される。(107)がこの分析を表す。

(107)



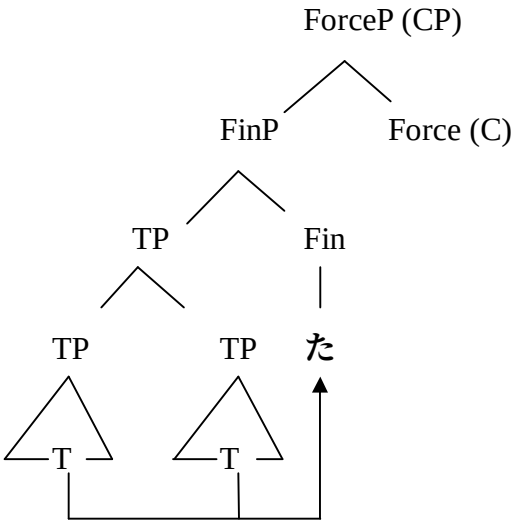
適正統率

Fin **も補文標識の担う** finite **の素性を実現しているが，音声的に空であるため，適正統率に必要な** Agr **の素性を持つ**(106a)**。そのため，**(107)**のように，主語の痕跡は** Fin **によって適正統率を受け，**(105b)**の文法性が説明されるのである。**

この説明の重要な点は，CP **の** ForceP **と** FinP **への分裂に副詞の前置が前提とされていることである。もし，常に** CP **の分裂が起こっているなら，**(105a)**も同様に文法的と予測されてしまうからである（**Rizzi 1997:314**）。**

この CP **の** ForceP **と** FinP **への分裂を利用して，述語等位接続構造を** TP & TP **として分析することができるかもしれない。すなわち，述語等位接続構造は，** TP & TP **の形をしていて，もとはどちらの等位節も時制要素を含んでいる。そして両等位節から** T **が** Fin **位置へと，全域的適用の形で主要部移動を起こしている，と主張することができかもしれない。**

(108)



この T-to-Fin による TP 分析は，前節で見た T-to-C 分析と似ているが，1 点だけ異なる点がある。T-to-Fin 分析によれば，FinP は分裂した CP の片方であって，もう一方は ForceP として独立して投射される。したがって，述語等位接続構造が，補文標識を伴った CP 内部に埋め込まれうることを示す(102)のような例が，T-to-Fin の分析では問題とならないのである[12]。

しかしこのような T-to-Fin による分析も，説得力があるとは言い難い。Rizzi (1997)の出発点は，(105)の対比であった。とりわけ，副詞前置が行われていない(105a)で，CP の ForceP と FinP への分裂が起こらないことは，Rizzi の説明にとって生命線である。これまで本研究で見てきた述語等位接続構造では，副詞の前置は全く起こっていない。したがって Rizzi の分析をそのまま踏襲するなら，T-to-Fin 分析は成立しないことになる。

それでも，このように他の言語で CP の分裂が起こるなら，日本語では，常に CP の分裂が起こっていると（そして T-to-Fin 分析が支持できると）主張できるかもしれない。ここでは，1 章で見た，普遍文法の追求と個別文法の記述的簡素性とのせめぎ合いが前面に現れる。確かに，他言語の一定の言語現象を説明するために利用可能な範疇が確認されているとするなら，日本語の別の現象でそれを利用した分析が許されていいはずである。しかし 1 章で力説したように，そうした方策を無際限に採用するなら，恐らくすべての言語のすべての言語現象が，念入りに細分化された複雑な句構造を採用することによって説明が可能

[12] Rizzi (1997)の枠組みを前提とした，日本語の生成文法的研究の先駆けとして，長谷川編 (2007)，Endo (2007)などがある。

となるであろう。しかし，そうなれば，もはや説明の簡素性は望むべくもない。１章ではそのような複雑化を避け，なおかつ普遍文法（すべての言語に共通する言語規則）の解明を進める指針として，(109)を提案した。

(109) （機能）範疇の満たすべき条件
a. 他の形態素の出現に依存しない独立した形態素を持ちうる.
b. 意味解釈上の影響を与えうる.
c. 範疇の選択関係に影響を与える.

そして，機能範疇の典型として CP を検証し，CP はこれらの基準をすべて満たすことを見た。以下では，提案されている FinP が(109)の基準を満たすかどうかを検証し，T-to-Fin 分析が支持できるかどうか検討する。

日本語の動詞は，もちろん時制辞と結合する。

(110) a. 食べ る/た
b. 笑 う/った

さらに時制辞には，補文標識が後続する。

(111) a. [食べ る/た] と-思う/か-尋ねた
b. [笑 う/った] と-思う/か-尋ねた

T-to-Fin 分析では，従来の主要部 C が Force と Fin(ite)に分化されるという仮定であるから，(111)の形で，時制要素（T）と補文標識（Fin）が何らかの形の，独立した形態素を見せなければ(109a)の基準を満たせない。しかし筆者の知る限り，そのような形態素は日本語に存在しない。候補としては，丁寧語の「ます」や尊敬語の「お-になる」が挙げられるかもしれない。

(112) a. [*笑います/*笑いました] と-思う/か-尋ねた
b. [お食べになる] と-思う/か-尋ねた

しかし，丁寧語(112a)の場合，従属節に埋め込むと極端に座りがわるく感じられ

る。一見尊敬語の(112b)は，T の上，そして C の下（まさしく Fin 要素が現れると予測される位置）に生起しているように思える。しかし，実際は，尊敬語の形態素「お-になる」は T よりも下にある。これは，(113)のような述語等位接続構造で，等位節に尊敬語の形態素を含みうることで確認できる[13]。

(113) [[田中先生がお笑いになり]（そして）[山田先生がお泣きになっ]] た（と思います） .

T-to-Fin による TP 分析では，時制辞より上に，そして補文標識より下に独立した範疇が現れる必要がある。しかし尊敬語の形態素は T より下に現れることから，その候補とはならない。したがって Fin という範疇は(109a)の基準を満たさない。

また，このことから，Fin は意味解釈上の差をもたらすこともなく（形態素が見えないのであるから，意味を持ちようがなく），(109b)の基準を満たすこともない。最後の(109c)の基準は確認することが難しい。もちろんその理由は，（仮にそのような範疇を認めるとしても）Fin が独立した形態素を持たないからである。理論的には次のような確認法が考えられる。本研究で問題としている，主格主語を等位節に含む述語等位接続構造は補文標識に導かれた述語の補部として機能する。

(114) [[太郎が笑い]（そして）[二郎が泣い] た] と-思います.

T-to-Fin 分析では，その派生は(115a)のように表せる。

(115) a. $[_{TP}\ [_{TP}\ \ t_i]\ \&\ [_{TP}\ \ t_i]]\ T_i$-Fin Force/C
b. $[_{TP}\ \ ]$ X

(115a)では，TP まで投射した各々の等位節から，T 要素が全域的適用の形で Fin へと繰り上げられている。言い換えれば，通常の補文標識（C あるいは Force）は FinP-TP 構造の補部を取っていると分析される。次に，ある範疇 X（述語であ

[13] Hirata (2006b)が指摘する現象である。尊敬語の形態素については，５．１．１節で再び取り上げる。

るにせよ，接続要素であるにせよ）があって，その範疇が(115b)のように時制辞を含む, かつ補文標識に導かれない TP を補部として取るとする。その範疇 X が，補部に(114)/(115a)のような述語等位接続構造の形を許さないなら，その範疇 X は FinP-TP ではなく，TP を選択しているといえる（すなわち，FinP/TP の範疇の区別が，X の選択素性を決定する上で不可欠であるといえる）。T が移動するべき Fin が存在しないことになるからである。これまでに「らしい」「そうだ」「ようだ」といった述語が補文標識に導かれない定型節だけを補部として取ることを見た。

(116) [$_{TP}$ 太郎が泣い [$_{T}$ た]]（*と）らしい/そうだ/ようだ.

しかし，V-to-Fin 分析の予測に反し，これらの述部の補部に述語等位接続構造は問題なく現れる。

(117) [太郎が笑い（そして）二郎が泣いた] らしい/そうだ/ようだ.

したがって，日本語に「TP を選択し，かつ FinP は選択しない」という選択のパターンが観察されることはなく, FinP は選択に関する(109c)の基準も満たしていないことになる。このように，that-痕跡効果の議論とは別に日本語に ForceP-FinP-TP という構造が存在すると仮定した T-to-Fin 分析による TP 理論も，機能範疇の認定に関する(109)のどの基準を満たすことがなく，支持することはできない。

４．２．６．Tomioka (1993)の TP 理論

以上，様々な述語等位接続構造の TP 理論（もしくはこれに類する理論）を見てきた。最後に Tomioka (1993)の，主に時の副詞の分布を証拠とする TP 理論を検討する。Tomioka (1993:487)は，(118)のような例に基づき述語等位接続構造の TP 理論を提唱する。

(118) [昨日クリスが帰り] & [明日パットが帰る].

(118)では，左右の等位節にそれぞれ別の時の副詞（「昨日」と「明日」）が現れ，

時制の指定が左右で違っていても非文とはなっていない[14]。したがって，左の等位節は，独自に TP まで投射され，そこで副詞「昨日」が認可されているという主張である（より正確には，副詞「昨日」によって左の等位節の T の値が決定されると提案されている）[15]。この分析は，時制要素（T）の存在が時の副詞を認可するという仮定と，過去-未来を組み合わせた(118)のような例が等位接続であるという仮定を前提としている。しかし，これら２つの仮定はどちらも十分な経験的裏付けを持たないと思われる。

例えば，時の副詞の出現は必ずしも，時制辞に依存することはない（Hirata 2006a:87 も参照されたい）。

(119) a. [昨日発売の本]-が 明日届く予定だ.
b. [明日発売の雑誌]-が 昨日入荷した.

(119)では，時制辞を含まない名詞句の中に時制副詞が現れているが，非文とはなっていない[16]。

また，(120)のように，述語は，尊敬の形態素「お～になる」を伴うと（述語全体が名詞化するため）所有格相当の助詞「の」に導かれた形で名詞修飾することが可能となる（Suzuki 1989，Ivana and Sakai 2007）

(120) a. *[田中先生の書きの] 本
b. [田中先生のお書き（*になった）の] 本

(120b)のように，このような名詞修飾の述語節には時制辞が現れない。それでもこのような名詞修飾節に時の副詞を入れることが可能である。

---

[14] 西山佑司氏からも同様の指摘を受けた（第 127 回日本言語学会大会研究発表にて）。また，三原 (1997)でもこの問題が論じられ，音声的に空の T を仮定した TP 分析が提案されている。

[15] Tomioka (1993)は，左の等位節の T 位置に音声的に空の時制辞が基底生成され，右の等位節の T は（V とともに）C 位置にまで繰り上がるという分析をしている。

(i) $[_{TP}\ [_{TP}\ [_{T}\ e]\ \&\ [_{TP}\ t_i]]\ V\text{-}T_i\text{-}C$

[16] (118)の文の副詞認可については，Kato (2006:7. 4. 4)の分析を参照されたい。

(121) a. [昨日お越しの] 際（これをお忘れになりましたよ）
b. [明日お立ち寄りの] 際（まずお声をおかけ下さい）

したがって，副詞の認可に基づいた TP 理論は基盤が弱いといえる。

さらに，４．１．３で見たように「そして」によって連結された述語等位接続構造の等位節は，論理的意味の変更を伴わずに左右を入れ替えることが可能である。

(122) a. 太郎が笑い（そして）二郎が泣いた.
b. 二郎が泣き（そして）太郎が笑った.

しかし，(118)のような，過去-未来の組み合わせでの等位節は入れ替えることができない（平田 2010）。

(123) *明日パットが帰り そして 昨日クリスが帰った.

これは，(118)のような例が純粋な等位接続ではないことを示している。

４．１．７では，「違う」「異なる」「別々の」などの表現が，同文中に等位接続構造が存在するかどうかの診断に用いることができることを見た。この点でも過去-未来の組み合わせの構文は純粋な等位接続ではない可能性が高い。(124)（= (42)）では，主語を含む大きさの節が連結され，「別々の」が認可されている。

(124) a. 別々の部屋で [太郎がギターを弾き]（そして）[二郎がピアノを弾い]た.
b. 別々の日に [太郎がスキーをし]（そして）[メアリーがスケートをし]た.

(124a)の例では，等位節同士に時間的な差がない（あるいは，あったとしても時間差が問題となっていない）。また(124b)の例では，等位節同士の出来事が時間的に別であるものの，その前後関係は問題となっていない。これを念頭に，過去-未来の組み合わせと「別々の」の共起関係を観察する。

(125) a. ??別々の飛行機で 昨日クリスが帰り（そして）明日パットが帰る.
b. ??別々の会場で 昨日太郎が受験し（そして）明日二郎が受験する.
c. ??別々の場所で　昨日雪が降り（そして）明日みぞれが降る.

(125)の各文の文法性は（あるいは過去-未来と「別々の」の組み合わせの例の文法性は）大変微妙で，また話者による揺れも大きい。しかし「別々の」が両等位節にかかるように慎重に判断すると，どの文も一様にぎこちないことがわかる。このことは，同じ内容の文を過去-過去，もしくは未来-未来に時制の組み合わせを変更してみることでより明確となる。

(126) a. 別々の飛行機で 一昨日クリスが帰り（そして）昨日パットが帰った.
b. 別々の飛行機で 明日クリスが帰り（そして）明後日パットが帰る.

(126)は，(125a)と同じ内容の文を過去-過去と未来-未来の組み合わせにしたものであるが，これらには(125a)に感じられる文のぎこちなさがない。同じことは(125b, c)でもいえる。

(127) a. 別々の会場で 一昨日太郎が受験し（そして）昨日二郎が受験した.
b. 別々の会場で 明日太郎が受験し（そして）明後日二郎が受験する.
(128) a. 別々の場所で　一昨日雪が降り（そして）昨日みぞれが降った.
b. 別々の場所で　明日雪が降り（そして）明後日みぞれが降る.

「別々の」のような表現が，等位接続の判別に用いることができるのは，等位接続構造によって意味的に同質なセットが１文中に形成され，そのセットのそれぞれに「別々の」が意味的に連絡することができるからであると考えられる。

(129) 別々の → 対象１
&
対象２

過去-未来の接続と「別々の」の組み合わせがぎこちなく感じられるのは，過去の出来事と未来の予定という，意味的にやや異質な組み合わせのメンバーに「別々の」が関係しなければならないことが理由であるように思える（平田2010）。同じように時間差があっても，過去-過去の場合や未来-未来の場合には，それらの対象を容易に意味的に同質なセットとみることができるため，過去-未来に感じられる分配読みのぎこちなさが見られない。

時間差があっても，過去-過去や未来-未来の組み合わせが，純粋な等位接続構造をなしていることは，それらの例文で（時間的順序関係を逆転させて）等位節を入れ替えることが可能であることからもわかる。

(130) a. 別々の飛行機で 昨日クリスが帰り（そして）一昨日パットが帰った.
b. 別々の飛行機で 明後日クリスが帰り（そして）明日パットが帰る.
(131) a. 別々の会場で 昨日太郎が受験し（そして）一昨日二郎が受験した.
b. 別々の会場で 明後日太郎が受験し（そして）明日二郎が受験する.
(132) a. 別々の場所で 昨日雪が降り（そして）一昨日みぞれが降った.
b. 別々の場所で 明後日雪が降り（そして）明日みぞれが降る.

このように，過去-未来を組み合わせた例は，少なくとも典型的な等位接続構造であるとは言い難い。また，時の副詞の生起も必ずしも T の存在を前提としておらず，副詞の生起に基づいて TP 理論を維持することは難しいと考えられる。

４．３．が/の交替

この節では，前節に引き続き述語等位接続構造の等位節を TP と分析することはできないことを「が/の」交替の現象をもとに見る。

４．２．１では空所化による TP 分析を，４．２．２では右接点繰り上げによる TP 分析を，そして４．２．３では空の T による TP 分析を取り上げ，それぞれの分析が支持しがたいことを示した。しかし，４．２．２で見たように，日本語には右接点繰り上げ（あるいは削除）の規則があることは間違いがない。また，この規則は英語の右接点繰り上げ規則と異なり，構成素をなさない語群に適用することも可能なのであった。逆に英語の空所化は，ここで「日本語の右接点繰り上げ」と呼んでいる規則同様，構成素ではない様々な要素に適用が可能であることが度々指摘されている（Jackendoff 1971, Terazu 1975, Kuno 1976,

Abe and Hoshi 1997，Fukui and Sakai 2003）。

(133) a. Max seemed to be trying to begin to love Harriet, and Fred [~~seemed to be trying to begin to love~~ Sue].

b. Max seemed to be trying to force Ted to leave the room, and Walt [~~seemed [to be trying to force~~ (,) Ira ~~to leave the room~~].

（Jackendoff 1971:25）

(133a)で削除されているのは，幾重にも埋め込まれた述語の連なりで，その結果，主文主語と最も埋め込みの深い節の目的語が残されている。(133b)では，主文主語と幾重にも埋め込まれた述語の，途中の項を残してあとの要素が削除されている。どちらの場合も削除された要素が構成素をなさないことは明らかである。

また，どちらの言語でも，定型節を超えての操作の適用は許されない。

(134) a. *John thinks that Bill will see Susan and Harry [~~thinks that Bill will see~~ Mary]]. （Abe and Hoshi 1997:103）

b. ***太郎は [花子が~~泣いたと] 思い~~（そして）二郎は [昌子が泣いたと] 思った.**

(134)では，主文主語と埋め込み文の目的語を残し，定型節をまたぐ形で間にある主節の一部と従属定型節が移動/削除されているが，これは日英語とも非文となる。したがって両言語に共通してあるのは，右接点繰り上げではなく，削除規則であると考えるのが妥当であろう（影山 1993，Fukui and Sakai 2003）[17]。

その一方で，英語の削除規則には，「残された構成素は２つでなければならない」という制限がある（Jackendoff 1971，Jayaseelan 1990，Abe and Hoshi 1997）。

(135) a. *Arizona elected Goldwater Senator, and Massachusetts (,) McCormack (,) Congressman.

[17] **４．２．２では右接点繰り上げによる** TP **分析の可能性を検証するために，便宜的に削除ではなく繰り上げの派生で考察を行った。**

b. *Millie will send the President an obscene telegram, and Paul (,) the Queen (,) a pregnant duck.

（Jackendoff 1971:25）

(135)では，右の等位節に３つの構成素が残され，非文となっている。日本語の場合，この制約はあてはまらない。

(136) a. **太郎が 花子に スカーフを（そして）二郎が 昌子に ネックレスを贈った.**

b. **太郎が 昨日 図書館で（そして）二郎が 今日 自分の部屋で 英語の予習をした.**

したがって，日本語のこの削除規則は，英語の空所化とも右接点繰り上げとも違う種類の操作であることになる。本研究では，これ以上，当該操作の性質を掘り下げず，以下では，日本語の削除操作を一貫して「等位節部分削除」と呼んでいくことにする（等位節部分削除の最近の分析に関しては，Mukai 2003 を見よ）。

日本語にはとりもなおさず等位節部分削除の操作がある。また，以下で見るように日本語にも空の T を仮定することができる，ごく限られた文脈が存在する。本節では，それでも（等位節部分削除や空の T を想定した）TP 分析は成立しないことを，「が/の」交替の現象から立証していく。「が/の」交替の現象は，慎重な議論とデータの積み重ねによる検証が必要であるため，節を別にして議論する。

４．３．１．*TP & TP

日本語では，通常主格に「が」が用いられ，主文で所有格の「の」を使うことはできない。

(137) **太郎が/*の笑った.**

しかし，一定の従属節では，「が」の代わりに「の」も用いることができる。

(138) [太郎が/の笑った] 理由

この現象は「が/の」交替と呼ばれ，Harada (1971, 1976)以降，日本語の生成文法で精力的に研究されてきた（Bedel 1972，Shibatani 1975, 1977，柴谷 1978，井上 1976，Miyagawa 1993，Sakai 1994，Watanabe 1996，Murasugi 1991，Ochi 2001，Hiraiwa 2002, 2005，三原/平岩 2006，Maki and Uchibori 2008 他多数）。とりわけ，(138)のような，複合名詞句の従属節中で，もっとも典型的に「が/の」交替の現象は観察される。述語等位接続構造の TP 分析を検討するにあたって「が/の」交替を精査する理由は，複合名詞句の従属節が，TP & TP の等位接続が許される唯一の環境だからである。そして「が/の」交替の可否が述語等位接続構造の派生を考える上で貴重なデータを提供する。この節では，「が/の」交替の現象を見るに先立って，複合名詞句内が，TP 分析を検討する上で理想的な言語環境であることを見る。

これまで見てきたように，通常日本語の「そして」を用いた述語等位接続構造で，時制辞を伴った２つ（複数の）の等位節を連結することはできない。

(139) 太郎が笑った（そして）二郎が泣いた.

３．３で見たように，(139)のような文は，独立した２つの文であるという解釈は可能であるが，１文とは見なせない。それは(139)の先行する文「太郎が笑った」で，動詞に終止形が使われているためであると，反論することができるかもしれない（それゆえに，ここで「文の切れ目」が感じられてしまう，と考えるわけである）。しかし，この説明は維持できない。もうひとつの等位接続詞である「か」は，同じように先行する等位節末に終止形で終わる述語を要求するが，問題なく等位接続の解釈（全体で１文となる解釈）が得られるからである

(140) 太郎が笑った か 二郎が泣いた.

また，「が」という逆接の接続詞がある。これも終止形で終わる時制節同士を連結する（(139)とは違い，全体を１文とする解釈が得られる）。

(141) 太郎が笑った が 二郎が泣いた.

「が」による接続も，全域的適用による移動操作が可能で(142a)，等位構造制約にしたがうことから(142b, c)，等位接続であるといえる。

(142) a. その論文を [太郎は t 読んだ] が [二郎は t 読まなかった].
b. *その論文を [太郎はその本を読んだ] が [二郎は t 読まなかった].
c. *[[太郎がその本を読んだ] が [二郎が読まなかった]] 論文

(139)は単一の文と解釈できず，(140)や(141)は単一の文と解釈できることは，やはり通常「そして」を用いた述語等位接続構造では，時制節同士を連結することができないことを示している。

このことは，(139)-(141)を従属節に埋め込むとさらに明確となる。従属節に埋め込むと(139)はもはや２文という解釈も成り立たずに非文となり，(140)と(141)は問題なく１文の解釈が与えられる。

(143) a. *私は [太郎が笑った（そして）二郎が泣いた] と思う.
b. 私は [太郎が笑った か 二郎が泣いた] と思う.
c. 私は [太郎が笑った が 二郎が泣いた] と思う.

もし時制節の「そして」による連結の(139)が，「か」(140)や「が」(141)の連結と同じように可能であれば，それを非時制節が連結された(144)と比較することで，両者の共通点や差異が調べられるはずである。しかし実際には(139)の（１文の解釈としての）非文法性が妨げとなって，述語等位接続構造に基づいた理論の組み立てが難しくなっているのである。

(144) [太郎が笑い]（そして）[二郎が泣い] た.

ところが，おもしろいことに，(139)-(142)が複合名詞句の従属節に埋め込まれると，(140)や(141)だけではなく，(139)も容認可能となる。

(145) a. [太郎が笑った（そして）二郎が泣いた] 理由
b. [太郎が笑った か 二郎が泣いた] 理由

c. [太郎が笑った が 二郎が泣いた] 理由

(145a)では，(139)と異なり，「笑った」の後で文が途切れることなく，「理由」へと接続していると感じられる。これはどうしてなのであろうか。理由は動詞の活用形にある。伝統文法によると，日本語の活用語は，「未然」「連用」「終止」「連体」「仮定」「命令」の６つの変化形を持つとされる。動詞や形容詞では，「終止」と「連体」は同じ形になる。以下の例では，(a)が終止形，(b)が連体形である。

(146) a. 太郎が笑う.
b. 太郎が笑う 理由
(147) a. 脚が短い.
b. 脚が短い 犬

ところが，形容動詞では「終止」と「連体」は別の形態素で表される（２つの活用形を区別するのは，形容動詞でこの区別が形として残っているためである）。

(148) a. 体が *健康な/健康だ.
b. 体が 健康な/*健康だ 人

(148)のように，形容動詞では，終止形に「だ」，連体形に「な」が用いられる。述語等位接続構造を含む複合名詞句に形容動詞を入れて確認してみると，左右の等位節が連体形となる場合にだけ，文法的となることがわかる。

(149) a. *[心が健全だ]（そして）[体が健康だ] 人
b. [心が健全な]（そして）[体が健康な] 人
c. *[心が健全だ]（そして）[体が健康な] 人
d. *[心が健全な]（そして）[体が健康だ] 人

(149a)は左右ともに終止形，(149c, d)では左右どちらかが連体形で，どれも非文法的である。そして左右で連体形が用いられた(149b)だけが文法的となるのである。(145a)が(139)に比べて１文としての解釈が得やすいのは，動詞の場合形態的

に終止形と連体形の区別はないものの，両等位節の動詞が複合名詞句の補部にあるため「連体形」と認定されるからであると考えられる。

TP & TP が，主節（複合名詞句内部以外）では許されない，ということには言及がないものの，伝統文法（国語学）の研究でも同様の（複合名詞句内では TP & TP の形が可能であるとの）観察がなされている。渡辺 (1971:224)は(150)のような例に関して，「『枝ぶりがよい』という叙述内容は，連体展述の力によって直接に『桜』を限定」すると説明している。

(150) [枝ぶりのよい] [二メートル以上ある] 桜

渡辺は，上記の終止形と連体形に関する区別の指摘をしていないが，「連体展述の力」とは「枝ぶりがよい」の「よい」が，連体形であるという直感を述べたものであると解釈できる[18]。

「か」や「が」による等位接続の(140)や(141)に「複合名詞句内部」という制約がないのは，これらの等位接続では，逆に左の等位節に連体形ではなく終止形が指定されているからだと考えられる。これらの等位接続の場合，複合名詞句の中であっても，左の述語は終止形でなければ非文である[19]。

(151) a. *[心が健全だ] が [体が健康だ] 人
b. *[心が健全な] が [体が健康な] 人
c. [心が健全だ] が [体が健康な] 人
d. *[心が健全な] が [体が健康だ] 人

(149)でも(151)でも，右の等位節は連体形でなければ非文である。これは複合名詞句内の主要部である名詞が要求しているからであろう。他方，左の述語に関

[18] 渡辺 (1971)の第６節「並列の職能」は，このほかにも本研究で追究している直感の多くを，伝統文法の枠組みで考察している。たとえば，伝統的には，述語等位接続構造の，左の（末尾以外の）等位節の述語が「連用形」であるとされている。しかし渡辺は，こうした呼び名は誤解を招くのであって（他の連用形とは明らかに用法が異なるので），左の等位節の述語は「並列形」と呼ぶべきであると主張している。

[19] (151c)で，左の等位節が，複合名詞句の中にありながら「連体形」が要求されないことは，さらなる仮説を立てて説明する必要がある。ここでは「複合名詞句内では，述語は連体形でなければならない」という規則よりも，(152b)の形態に関する規則が優先されているためであると考えておく。

しては，(151)では終止形が，そして(149)では連体形が要求されている。このことは，左の等位節の活用形は，(152)で示したように，直後の接続詞が決めていると考えれば説明が付く。

(152) a.　連体形←（そして）
　　b.　終止形←　か/が

一般的には終止形で終わる２つの時制節を「そして」によって連結することは，(152a)の制約に抵触するためできない。しかし，複合名詞句内では，(152a)にしたがう形で動詞を活用させることが可能なので，時制節同士の等位接続が可能なのである。また，複合名詞句の補部には，時制辞を欠いた述語等位接続構造も現れる。

(153) [[太郎が笑い（そして）二郎が泣い] た] 理由

このように，複合名詞句の内部は，（時制辞付きの等位節と非時制の等位節のどちらもが現れるので）述語等位接続構造の性質を調べるのに理想的な言語環境なのである[20]。また，はじめに見たように，複合名詞句の補文では，「が/の」交替現象が観察され，これが述語等位接続構造と興味深い相互作用を見せる。以下では複合名詞句内での「が/の」交替を精査することで，再び TP 理論による（非時制の等位節の）述語等位接続構造の分析が成立しないことを示していく。

４．３．２．「が/の」交替とその適用条件

この節では「が/の」交替の現象とその適用条件を，述語の変化形との関連で確認しておく。

---

[20] 等位節部分削除は，(152a)の違反を修復する効果がある。

(i)　a.　*[太郎が泣いた] そして [二郎が笑った].
　　b.　[太郎が~~泣いた~~] そして [二郎が笑った].

(ia)は，左の等位節に過去形（終止）の「た」があり，これは，(152a)により排除される。違反を犯している(ia)の左の等位節の時制辞「た」が，等位節部分削除によって消去されると(ib)，非文法性が解消される。削除によって「島の効果の修復」に類する効果が現れていると理解できる（Ross 1969，Chomsky 1972，Merchant 2001）。

「が/の」交替は，一定の従属節中で，主格と所有格が入れ替わる現象である。この現象は日本語だけでなく，広く世界の言語に観察される（Watanabe 1996, Hiraiwa 2005）。典型的には，複合名詞句中の従属節内で交替が可能である。

(154) a, [太郎が/の泣いた] 理由
b. [太郎が/の二郎にあげた] 辞書
c. [太郎が/の笑う] 声

そして，通常所有格は，名詞句内で観察される。

(155) a. The doctor examines the patient.
b. the doctor's examination of the patient
(156) a. 医者が患者を診察した.
b. 医者の患者の診察（には初診料がかかる）

したがって複合名詞句の主要部である DP/NP が「が/の」交替に関与していると考えるのが自然であるし, そのような提案がなされてきた（Bedel 1972, Miyagawa 1993，Ochi 2001 など）。これらの提案では，なんらかの形（基底生成や移動など）で所有格名詞句が，主要部の DP/NP 内部に現れ，それにより所有格が認可されるとされる。

(157) a. [$_{DP/NP}$ 太郎の [泣いた] 理由]
b. [$_{DP/NP}$ 太郎の [二郎にあげた] 辞書]
c. [$_{DP/NP}$ 太郎の [笑う] 声]

これに対し，所有格を認可しているのは DP/NP 自体ではなく，従属節に現れる述語の変化形であると主張したのが Hiraiwa (2002, 2005)，三原/平岩 (2006)である。日本語の述語の持つ，「未然」「連用」「終止」「連体」「仮定」「命令」という６つの変化形のうち，複合名詞句の従属節中で用いられるのは「連体形」である。前節で見たように，動詞や形容詞の場合は，主文で使われる終止形（現在時制）と，名詞修飾節内で使われる連体形（現在時制）とは同じ形態になる.

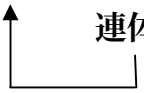
(158) a. **太郎が笑う.**
b. **[太郎が笑う] 理由**
(159) a. **脚が短い.**
b. **[脚が短い] 犬**

これに対し，形容動詞では「終止」と「連体」は別の形態素で表されるのであった。

(160) a. **体が *健康な/健康だ.**
b. **[体が 健康な/*健康だ] 人**

この観察から，名詞（あるいは複合名詞句の従属節を導く補文標識）が，従属節の述部に「連体形」を要求し，「連体形の述語」が主語名詞句の所有格を認可する，と Hiraiwa (2002, 2005)**，三原/平岩** (2006)**は考えた**[21]**。**

(161) **[体の 健康な] 人**



認可

Hiraiwa **が，**(157)**で示したような** DP/NP **領域に所有格名詞句を（顕示的であれ，非顕示的であれ）繰り上げる分析を否定したのは，主要部の** DP **がない場合でも，従属節中で「が/の」交替が許される場合があるからだ。**

(162) a. **[太郎は雨が/の止むまで] オフィスにいた.**
b. **[この辺りは日が/の暮れるにつれて] 冷え込んでくる.**
c. **[先月１回電話が/のあったきり] 花子からは何の連絡もない.**
d. **[君が/の好きなだけ] 食べていいよ.**

（三原/平岩 2006:319-320）

[21] Hiraiwa (2002)**と，とりわけ** Hiraiwa (2005)**は，さらに入念な句構造と詳細な分析を展開している。詳しくはこれらの論文を参照されたい。また** Watanabe (1996)**は，演算詞移動を仮定した独自の「が/の」交替の分析を提案している。**

(162)の各文で，従属節内部には名詞表現が見あたらないが，それでも「が/の」交替が起こっている。このことは，「が/の」交替を認可する決定要因は，名詞句ではなく，従属節中の述語の変化形であることを強く示唆している。動詞や形容詞の場合，明瞭に「連体形」の形が現れないため，(162a-c)では，これらの動詞が連体形であるという完全な保証はないが，述語が形容動詞の(162d)では，明確な形で連体形が（主要部の名詞句がない従属節中に）現れている。その言語環境で「が/の」交替が許されているという事実は，交替の認可子が DP/NP ではなく，述語の連体形であることを明確に示している。

次に，述語の「連体形」に関して，伝統文法と生成文法との用語の対応や，理論的関係を確認しておきたい。日本語の述語の６変化形である「未然」「連用」「終止」「連体」「仮定」「命令」は，伝統文法の中で主に形態的な基準をもとに立てられた変化のパラダイムである。時制と変化形，用法の関係を整理すると(163)のようになる

(163)		現在時制	過去時制
a.	言い切りの形	健康だ（現在形）	健康だった
b.	名詞修飾の形	健康な（連体形）	健康だった

伝統文法で「終止形」と呼ばれる形は，（主に）主節で使われる，現在時制での言い切りの形である。過去時制は，「連用形」に過去の形態素「た」をつけて表現される。名詞修飾の場合，(163b)のように，現在時制では独自の変化形態素「な」が現れ（連体形），過去時制になると言い切りの形と名詞修飾の形の形態上の区別は失われる。生成文法的な分析で問題となるのは，「動詞の連体形」といった場合，それが V の形を意味するのか，あるいは T の形を意味するのかである[22]。（伝統文法のパラダイムでの用語とズレが生じるが）それは T のことであると考えられる。現在形と過去形それぞれで考えてみる。

(164) a. [丈夫な] 柱
b. [丈夫だった] 柱

[22] Hiraiwa (2002)は，V (v)と解釈しているようであるが，Hiraiwa (2005)，三原/平岩 (2006)では，T と解釈されているようである。

過去形の(164b)では，（撥音便）の連用形「丈夫だっ」に過去の時制辞「た」が付き，全体が名詞「柱」を修飾している。過去の時制「た」は「終止形」と「連体形」の形態的差を持たない。しかし(164b)で，名詞修飾を可能にしているのは，過去時制辞の「た」であることは間違いない。というのも，「丈夫だっ」の方は，明らかに撥音便の連用形で，これ自体は「が/の」交替の認可には関係していないと考えられるからである。また，現在形の(164a)に関しても，実際「丈夫な」という述語の連体形部分は，この中の時制を担う形態素であると考えられる。これは，形容動詞の連体形を，(164a)のように１語で表現することもできるが，(165)のように，２つの形態素でより分析的に表現することもできることからわかる。

(165) [丈夫である] 柱

(165)では，形容動詞の連用形「丈夫で」に，形式動詞「ある」が接続している。「ある」自身は終止形と連体形の区別はないが，「丈夫で」が連体形ではないことが明らかなので，時制を担っている「ある」が連体形であると結論される。

以上のことから，Hiraiwa (2005)，三原/平岩 (2006)が示したように，「が/の」交替を認可するのは，変化形述語の連体形の T の部分であることがわかった[23]。以下ではこの観察を念頭に，複合名詞句内の述語等位接続構造と「が/の」交替の関係を検証していく。

[23] 「が/の」交替は，これとは別にいくつかの適用制約があることが知られている。Harada (1971:28)は，一定の話者が，主語と動詞の間に他の要素（目的語）が介在する場合，容認性が落ちると指摘する。

(i) a. 私は [ニクソンが/*の嘘をついていること]-を 悟った.
b. 太郎は [米軍が/*のラオスに進行したの]-に 驚いた.

また，「が/の」交替は，交替の対象となる名詞句と認可する連体形述語との間に，補文標識が現れると非文となるとされる（Ura 1993，Watanabe 1996，Hiraiwa 2002, 2005）。

(ii) a. [将来大地震が/の起きる] 可能性
b. [将来大地震が/*の起きるという] 可能性
（Hiraiwa 2005:129）

４．３．３．等位節部分削除と「が/の」交替

先に見たように，複合名詞句の補文には，例外的に時制辞を含む TP & TP の形で述語等位接続構造が現れるのであった。

(166) a. [太郎が昨日図書館で書いた]（そして）[二郎が今日書斎で読んだ] 論文
b. [太郎が去年飛行機で行った]（そして）[二郎が今年船で行った] 国

これが可能なのは，等位接続詞「そして」が先行する述語に「連体形」という形態的制約を加え，複合名詞句の補文中では，連体形の使用が適切であるからだと考えた。

当然のことながら，こうした複合名詞句の従属節の中で「が/の」交替を適用することが可能である。

(167) a. [太郎の昨日図書館で読んだ]（そして）[二郎の今日書斎で読んだ] 論文
b. [太郎の去年飛行機で行った]（そして）[二郎の今年船で行った] 国

従属節中に連体形（と考えられる）の T が現れ，これが各々の等位節で主語の所有格を認可している。

本研究にとって非常に重要なのは，等位節部分削除が，「が/の」交替の適用に影響を与えないという観察である[24, 25]。

(168) a. [太郎の~~昨日図書館で読んだ~~] そして [二郎の昨日図書館で読んだ] 論文
b. [太郎の~~去年飛行機で行った~~] そして [二郎の去年飛行機で行った] 国

[24] 言い換えれば，「の」格の認可が，等位節部分削除に先行して行われるということである。
[25] 等位節部分削除を適用した場合，(168)では「そして」がないと文法性が落ちる。削除の結果，左の等位節に１つしか構成素が残されない場合，この傾向があるようである。

(i) a. [太郎が~~図書館で勉強した~~] *（そして）[二郎が図書館で勉強した].
b. [太郎に~~たくさん友達がいる~~] *（そして）[二郎にたくさん友達がいる].

(169) a. [太郎の昨日図書館~~で読んだ~~]（そして）[二郎の今日図書館で読んだ] 論文

b. [太郎の今年飛行機~~で行った~~]（そして）[二郎の去年飛行機で行った] 国

(170) a. [太郎の昨日書斎で~~読んだ~~]（そして）[二郎の今日図書館で読んだ] 論文

b. [太郎の今年船で~~行った~~]（そして）[二郎の去年飛行機で行った] 国

(168)では「時の副詞句-場所/手段の副詞句-V-T」が，(169)では「場所/手段の副詞句-V-T」が，そして(170)では「V-T」がそれぞれ左の等位節で等位節部分削除を受けているが，その適用に関係なく「が/の」交替は可能である。

等位節部分削除による TP 理論によれば，主語を含みながら，時制辞を欠いた等位節は，左の等位節から T 要素を削除することで派生されるとされる。(171a)は具体例，(171b)はその概略的な派生と構造を示している。

(171) a. [太郎がリンゴを食べた]（そして）[二郎が水を飲んだ].

b. $[_{TP}$ V-~~T~~] & $[_{TP}$ V-T]

そうだとすれば，(168)-(170)と同様，左の等位節の T 要素だけに等位節部分削除を適用しても，「が/の」交替の適用は影響を受けないはずである。ところが，T 要素単独に等位節削除を適用すると，「が/の」交替は適用不可能となる[26]。

(172) a. *[太郎の昨日書斎で読み~~た~~]（そして）[二郎の今日図書館で読んだ] 論文

b. *[太郎の今年船で行き~~た~~]（そして）[二郎の去年飛行機で行った] 国

また，(172)の等位節の主語が主格であれば，非文とはならない。

(173) a. [太郎が昨日書斎で読みた]（そして）[二郎が今日図書館で読んだ] 論文

[26] 以下で主張するように，(172)のような，TP & TP の左の T 部分に等位節部分削除を適用する派生はないが，ここでは理論上の可能性として議論している。

b. [太郎が今年船で行きた]（そして）[二郎が去年飛行機で行った] 国

(168)-(170)のデータは，日本語には確かに等位節部分削除という操作が存在すること，そしてその適用は「が/の」交替可否に影響を与えないことを示す。(172)-(173)のデータは，等位接続部分削除が，T 要素単独に作用することはないこと，そして主語を含み時制辞を含まない述語等位接続構造が，等位節部分削除が適用されて派生されるのではないことを示している[27]。(173)の文は，表示のように削除によって派生されるではなく，(174)のようにもともと等位節に T は含まれていないのである。

(174) a. [太郎が昨日書斎で読み]（そして）[二郎が今日図書館で読ん] だ 論文

b. [太郎が今年船で行き]（そして）[二郎が去年飛行機で行っ] た 国

「が/の」交替が名詞修飾として機能する T に認可されるという事実は，等位接続構造が，((174)のように）基底生成によって作られているのか，あるいは（((168)-(170)のように）等位節部分削除によって派生されているのかを区別する上で，大変有用である。３．２．３で Koizumi (1995, 2000)が，目的語-遊離数量詞の等位接続を用いて V-to-T 移動の存在を示そうとしたことを見た。

(175) メアリーが [ジョンにリンゴを２つ] と [ボブにバナナを３本] あげた.

しかし，(175)は，（V-to-T 移動ではなく）左の等位節に時制辞までを含んだ「あげた」が基底生成され，そこから「あげた」が等位節部分削除を受けて派生されたものと考えられる。

(176) メアリーが [ジョンにリンゴを２つ ~~あげた~~] と [ボブにバナナを３本 あげた].

なぜなら，(175)のような例が，複合名詞句に埋め込まれると，「が/の」交替の

[27] 等位接続部分削除が T 要素単独には適用できない理由については，以下で議論する。また５．３．４で追加の説明をする。

適用が可能となるからである（Fukui and Sakai 2003 の分析を裏付けることになる）[28]。

(177) a. [メアリーが [ジョンに t ２つ] と [ボブに t ４つ] あげた] リンゴ
b. [メアリーの [ジョンに t ２つ] と [ボブに t ４つ] あげた] リンゴ

また Matsui (2005)は，(178)のように，述語等位接続構造の等位節に否定極性項目が現れることから，Koizumi (1995, 2000)流の繰り上げ理論を支持している。

(178) a. [太郎が図書館でしか] そして [二郎が書斎でしか] 勉強しない.
b. [太郎が今年しか] そして [二郎が来年しか] 渡米しない.

(178)の（とりわけ左の）等位節には，否定極性項目「NP（で）しか」があり，また一見等位節にはそれを認可する否定辞が存在しない。Koizumi の分析に倣って，V-Neg が全域的適用による T への繰り上げを受けていると考えれば，(178)の文法性が説明されると Matsui は主張する。(179)が移動前の構造である。

(179) a. [太郎が図書館でしか勉強しな] そして [二郎が書斎でしか勉強しな] い.
b. [太郎が今年しか渡米しな] そして [二郎が来年しか渡米しな] い.

(179)の下線部が，T 位置へ（全域的適用による）繰り上げを受け，(178)が派生されると考えれば，一見否定辞を欠いた等位節で否定極性項目が認可されることが説明できるという。しかし，(178)は，(179)のように，等位節から否定辞を含む述部を T 位置に繰り上げて生成するのではなく，等位節部分削除によって左の等位節の時制辞付き述語を削除することによって派生すると分析するのがより適切であると考えられる。(178)の等位節で「が/の」交替を適用することが可能だからである。

(180) a. [太郎の図書館でしか そして 二郎の書斎でしか勉強しない] 理由

[28] (177b)では，所有格主語と「あげた」の間に「に」格目的語が介在しているため，やや文法性は劣るが，(172)よりはるかに容認可能性は高い。

b. [太郎の今年しか そして 二郎の来年しか渡米しない] 理由

ということは，(180)のもとの形は，両等位節に時制辞を含む(181)であり，(178)のもとの形は(182)であることになる[29]。

(181) a. [太郎の図書館でしか勉強しない（そして）二郎の書斎でしか勉強しない] 理由
b. [太郎の今年しか渡米しない(そして)二郎の来年しか渡米しない] 理由
(182) a. [太郎が図書館でしか勉強しない]（そして）[二郎が書斎でしか勉強しない].
b. [太郎が今年しか渡米しない](そして)[二郎が来年しか渡米しない].

では，なぜ，時制辞単独に等位節部分削除を適用することができないのであろうか。それは，（４．２．２で見たように）等位節部分削除には音声的１語（分節）を分断する形で規則を適用してはならない，という条件が課せられているからだと説明される。ここでは，複合述語の例でこれを再び検証する。(183)は「語彙動詞-使役」の複合述語で，(184)は「語彙動詞-受け身」の複合述語の例である。

(183) a. ギターを 弟に 弾か（*ね）せる.
b. ギターを 弟に 弾きも （ね）させる（よ）.
(184) a. ギターを 弟に 弾か（*ね）れた.
b. ギターを 弟に 弾きも（ね）された（よ）.

(183a)，(184a)が示すように，通常語彙動詞とこれらの形態素の間に間投詞を介在させることはできない（つまり，これらは全体で１分節となっている)。しかし，(183b)や(1834)のように，語彙動詞に助詞を付加し「する」挿入を適用することによって，間投詞が介在できるようになる。これを念頭に，(185)と(186)の

[29] (178)の，等位節部分削除適用前の(182)は，「そして」が直前の述語に連体形を要求するという(152a)を違反して，それ自身では非文である。等位節部分削除を適用すれば，(152a)の違反は回避される。注 20 を見よ。

例を観察する。

(185) a. *私は [弟にギターを弾か] ~~せた~~（そして）[妹にピアノを弾か] せた.
b. 私は [弟にギターを弾きも] ~~させた~~（そして）[妹にピアノを弾きも] させた.

(186) a. *私は [弟にギターを弾か] ~~れた~~（そして）[妹にピアノを弾か] れた.
b. 私は [弟にギターを弾きも] ~~された~~（そして）[妹にピアノを弾きも] された.

「ね」で区切ることができる場合，使役や受け身の形態素に等位節部分削除を適用することが可能で（(185b)及び(186b)），区切ることができない場合，その適用が不可能である（(185a)及び(186a)）。

V-T の関係についても同様のことがいえる。通常，V と T の間には「ね」が入らない(187a)。

(187) a. 食べ（*ね）る
b. 食べも（ね）する（よ）

したがって, (172)のような等位節部分削除は適用できないことになる。しかし, (187b)のように助詞と「する」挿入によって V と T を２語化（２分節化）することができ, この場合には, T 要素単独への等位節部分削除適用が可能である[30]。

(188) [[太郎が/の笑いも~~した~~]（そして）[二郎が/の泣きもした]] 理由

以上，この節では，等位節部分削除による TP 分析が成立しないことを，等位節部分削除が「が/の」交替の適用に影響を与えないことをもとに示した。また，通常 T 要素単独に等位節部分削除を適用できないのは，V-T が１語化（１分節化）しているためであると主張した。

[30] 本研究では最終的に，V-T（より正確には Pol-T）を助詞と「する」挿入で分断することはできないと提案する。(187b)で分断されているのは，語彙動詞 V と音声的に空の主要部 Pol（この例では affirmative の指定を受けている）である。詳細は５．３．４を見よ。

４．３．４．空のTと「が/の」交替

４．２．３節で，音声的に空のTを想定する形のTP分析は維持しがたいことを見た（日本語に音声的に空の T を想定することが難しいという議論が主であった)。この節では，日本語でも，ごく限られた環境で音声的に空の時制辞を想定することが可能な場合があることを見る。しかしそれでも空の T に基づいたTP理論が成立しないことを示す。

Shibatani and Kageyama (1988)は，一見時制辞や変化形の述語を伴わない名詞的な述語が，通常の文のように主語や目的語を取る場合があることを指摘した。

(189) a. [家内がアメリカを訪問]-の 折りには いろいろお世話になりました.
b. [息子が国立大学に合格]-の あかつきには 自動車をかってやるつもりだ.
c. [オーケストラがセレナーデを演奏]-中に 聴衆は居眠りをしてしまった.
d. [飛行機がホノルル空港に着陸]-直後に 爆発が起こった.

（Shibatani and Kageyama 1988:455）

(189)の各文では，[ ]内部に変化形を伴った述語的要素は見あたらないが（節末尾の名詞表現が述語として機能している)，それでも主格や目的格名詞が従属節中に現れていて，従属節が「文」として機能していることがわかる。彼らが指摘する大部分の例で，(189)のように主要述部は名詞化している。しかし，その中で，従属節に述語の連用形が用いられる場合がある。それが「～次第」の場合である。

(190) a. [太郎君が帰り]-次第 至急電話を下さい.
b. [ご主人が出発され]-次第 保険が発効されます.

「次第」は，漢語系の日本語で，ちょうど英語の（接続詞としての）the moment と同じような使われ方をする。

(191) I recognized you [the moment I saw you].

したがって,「次第」で導かれる節は，全体として名詞節が副詞的に用いられていると分析するのが妥当であろう。そうだとすると，名詞的副詞表現「次第」を修飾する従属節は，連体的な要素であると考えられる。この考えが概ね正しいことは,「次第」の従属節で「が/の」交替が可能なことからわかる。

(192) a. [太郎君の帰り]-次第 至急電話を下さい.
b. [ご主人の出発され]-次第 保険が発効されます.

しかし，従属節で用いられている述語「帰り」「出発され」はどちらも連用形であるから，これら自身は「が/の」交替を認可しないはずである。(192)の（唯一ではないにせよ）可能な分析は，(193)のように，従属節中に空の T 要素（Ø と表記）の存在を仮定することである。

(193) a. [太郎君の帰り [$_T$ Ø]]-次第 至急電話を下さい.
b. [ご主人の出発され [$_T$ Ø]]-次第 保険が発効されます.

(193)では，連用形の述語に続いて空の T 要素 Ø が生成され，これが主語名詞句上の所有格を認可するという説明が可能である。(193)の分析で重要なのは，空の T 要素 Ø が連体形であると考えなければならないことである（そうでなければ「の」格の認可がされないはずである）。したがって，日本語には空の T が存在し,なおかつその空の T が連体形であると仮定できる場合があることになる。

ここで，空の T による TP 分析を今一度思い出してみる。

(194) [$_{TP}$ 太郎が笑い e]（そして）[$_{TP}$ 二郎が泣いた]

(194)のように，左の等位節中に「e」と表記した空の T が基底生成されているというのが空の T による TP 分析である。ここで，(193)で見たように，日本語には連体形で音声的に空の T（すなわち Ø）が存在するなら，述語等位接続構造でもこれを用いて，(195a)のような TP & TP を作り，これを(195b)のように複合名詞句に埋め込めば,「が/の」交替を主格名詞句に適用することができるはずである（「そして」が左の等位節に連体形を要求することも思い出されたい(152a)）。

(195) a. [[$_{TP}$ **太郎が笑い** [$_{T}$ Ø]]**（そして）**[$_{TP}$ **二郎が泣いた**]]

b. [[$_{TP}$ **太郎が笑い** [$_{T}$ Ø]]**（そして）**[$_{TP}$ **二郎が泣いた**]] **理由**

c. *[[$_{TP}$ **太郎の笑い** [$_{T}$ Ø]]**（そして）**[$_{TP}$ **二郎の泣いた**]] **理由**

しかしやはり(195c)**のように「が/の」交替は許されないことから，時制辞を欠いた述語等位接続構造を（空の** T **の存在を仮定することで）**TP & TP **と分析することはできないことがわかる**[31]**。**

４．３．５．「テ形」と「が/の」交替

日本語には，述語等位接続構造によく似た(196)**のような接続形式がある**[32]**。**

(196) **太郎が笑って 二郎が泣いた**

(196)**は，伝統文法で「テ形」と呼ばれる接続形式で，先行する述語が連用形の形を取り，これに「テ」が付随して前後の節が連結される。この節では，テ形と述語等位接続構造が別の派生を持つ（互いに独立した）構造であることを，引き続き「が/の」交替の現象から示していく。**

４．１．７で，「違う」「異なる」「別々の」といった表現が持つ内的解釈が，等位接続構造の診断に用いることができることを見た。Takano (2004:174)**は，「テ」によって接続された構造が内的解釈を許さないことから，テ形は等位接続を含まないとした。**

---

[31] (152a)**の「連体形←（そして）」の条件では，**(195c)**を排除できない。空範疇ではあっても** Ø **が連体形であると仮定しているからである。**(195c)**の非文法性は，一種の経済性の原理に原因を帰すことができるかもしれない。** Ø **が空範疇であるという理由により，**(195c)**の（左の）等位節は，** Ø **の挿入された** TP **の場合と，** Ø **の存在しない** TP **よりも小さな投射の場合とで音声的に区別がつかない（** Ø **によって** TP **が投射されていることが音声的に確認できない）。そのため，言語解析をする際，** Ø **が含まれない（より小さくて経済的な）構造が選ばれているのではないか。**

[32] (196)**のような接続の場合，等位接続詞「そして」が左右の節の間に入ると，かなりぎこちない文になる。**

(i) ??**太郎が笑って そして 二郎が泣いた.**

本研究では，この問題は追究せず，「そして」が無い形で接続が成立していると仮定する。

(197) ジョンが 違う/異なった/*別々の 論文を [コピーして ファイルした].

(197)では，コピーした論文とファイルした論文が別であるという解釈は得られない。よって，内的解釈だけを要求する「別々の」を用いると非文となる。また「違う」や「異なった」を用いると，当該論文とは別の論文があって，それとは「違う」あるいは「異なった」論文を「コピーしてファイルした」という外的解釈だけが可能となる。したがって，(197)のように１組の動詞を「テ」によって連結しても等位接続構造は形成されないことがわかる。

しかし、動詞単独ではなく，主語-動詞という連続要素を連結した場合，テ形でもこれらの表現の内的解釈が問題なく得られる。

(198) a. 違う/異なった/別々の日に [太郎が山に行って 二郎が川へ行った].
b. 違う/異なった/別々の理由で [太郎が笑って 二郎が泣いた].

このことから，少なくても主語までを含む述語の連結である場合，テ形が等位接続構造を構成することがわかる。そうだとすれば，テ形から何らかの統語的操作を経て述語等位接続構造を導くことができる可能性がある。とりわけ，Nakatani (2004)，内丸 (2006a, b)らは，テ形で接続された構造が TP までの投射を含んだ等位接続であるとする分析を提案しており，テ形と述語等位接続構造を区別することは本研究にとって重要である。何らかの操作でテ型の接続構造の左の等位節から T 要素（と「テ」を）を取り除き，述語等位接続構造を導くことができるなら，述語等位接続構造の左の等位節が T を含むことは無いとする本研究での主張に対する重大な反証となる。

しかし，テ形と述語等位接続構造が別の構造であることは，再び「が/の」交替によって示すことができる。(195c)で見たように，述語等位接続構造の左の等位節では，「が/の」交替が許されない。これに反し，テ形の接続構造では，左の等位節でも「が/の」交替の適用が可能である。

(199) a. [太郎の笑って 二郎の泣いた] 理由
b. [太郎の図書館で勉強して 二郎の教室で勉強した] 理由

４．３．３で見たように，等位節部分削除は「が/の」交替の適用の可否に影響

を及ぼさない。もし等位節部分削除によってテ形から述語等位接続構造が派生されているのだとしたら，テ形の(199a)に，等位節部分削除を適用することで(195c)を派生させることができるはずである。しかし実際には(195c)は非文である。このことは，テ型から等位節部分削除の適用によって述語等位接続構造を派生させているのではないことを示している。

また，４．３．２で見たように，「が/の」交替を適用するには T の要素が必要である。テ形の(199)の例文で「が/の」交替が適用可能であるという事実は，Nakatani (2004)，内丸 (2006a, b)らの「テ形の構文に TP による等位接続が関与している」という主張を経験的に裏付けることになる。

内丸 (2006a, b)にしたがって，(199)のようなテ形の構造は，「テ」が等位接続詞として機能する TP & TP の構造であると仮定してみよう。そうだとすれば，テ形の構造の左の等位節で「が/の」交替が可能であるという事実は，４．３．４で提案した，音声的に空の連体形 T 要素 Ø を用いることで説明することが可能である。この音声的に空の T を用いると，(199)の例は(200)のように分析されることになる。

(200) a. [$_{TP}$ [$_{TP}$ 太郎の笑っ[$_{T}$ Ø]] て [$_{TP}$ 二郎の泣いた]] 理由
b. [$_{TP}$ [$_{TP}$ 太郎の図書館で勉強し[$_{T}$ Ø]] て [$_{TP}$ 二郎の教室で勉強した]] 理由

(200)では，左の等位節の T 位置に Ø が生成され，等位節全体が TP まで投射されている。(200)の左の等位節の「が/の」交替は，この音声的に空の T によって認可されていると考えることができる（(193)の説明と同趣旨の説明が可能となる）[33]。

[33] Kato (2006:189)の指摘する次のような対比も，テ形による構造と述語等位接続構造が別の構造を持つ別の構文であることを示唆する。

(i) a. *太郎がリンゴを食べまし コーヒーを飲みました.
b. 太郎がリンゴを食べまして コーヒーを飲みました.

(ia)のように，述語等位接続構造では，丁寧表現の「ます」を左の等位節に入れることはできない。これに対し，テ形の(ib)ではこれが可能である。

４．４．残された問題点

以上のように，主語を含み時制辞を排除する述語等位接続構造を，等位節部分削除や空の T によって TP として分析することはできないことを「が/の」交替の現象から示した。ここでは，これまでの議論では解決されていない問題を明確にしておく。

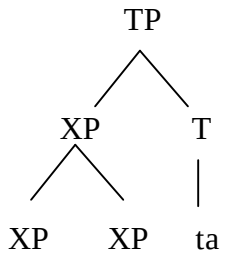
第１の問題は,「が/の」交替の認可のより正確な特定と理論化である。４．３では，(201)のように等位節が時制辞を含まない場合,「が/の」交替が不可能であることを指摘し，これにより TP 分析を排除した。

(201) a. *[太郎の昨日書斎で読み]（そして）[二郎の今日図書館で読ん] だ 論文

b. *[太郎の今年船で行き]（そして）[二郎の去年飛行機で行っ] た 国

(201)が非文であることから，時制辞 T は等位接続の外側にあることになる。今等位節を仮に XP として記述すると，これまでに示してきたのは，述語等位接続構造が(202)の構造をしているということである。

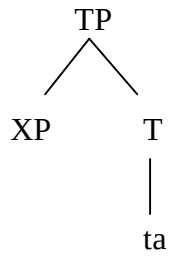
(202)



(202)では，各々非時制の２つの XP 等位節が，XP という上位の等位接続構造をつくり，これ全体を TP が支配する形となっている。XP 内に時制辞が含まれないことで，XP 内では「が/の」交替が適用できないことが説明される。

等位接続を含む文の基本構造と等位接続を含まない文の基本構造が同じであるとすれば，等位接続を含まない文でも（(202)に倣って）T 要素は XP の外側に生起するはずである。

(203)



これまで見たように，(202)の構造で XP に含まれる主語は，「が/の」交替が許されない。しかし，通常の文でも(203)のように T 要素が XP の外に位置しているなら，「が/の」交替が許されないはずであるが，もちろん，そんなことはない。

(204) a. [[$_{XP}$ 太郎が/の泣い] た] 理由
b. [[$_{XP}$ 太郎が/の笑っ] た] 理由

したがって，少なくとも何らかの形で等位節とそうではない場合とを分けて，後者の場合だけ「が/の」交替が可能であることを保証しなければならない。

これと関連する第２の問題は，（これまでは触れてこなかったが），述語等位接続構造の一番右の等位節では，「が/の」交替が可能なことだ。３つの等位節を含む(205)のような場合，他の２つの等位節で「が/の」交替が起こっていなければ，最後の等位節の主語は「の」格となりえる。

(205) a. [[太郎が怒り] [二郎が泣き]（そして）[三郎が笑っ] た] 理由
b. *[[太郎の怒り] [二郎が泣き]（そして）[三郎が笑っ] た] 理由
c. *[[太郎が怒り] [二郎の泣き]（そして）[三郎が笑っ] た] 理由
d. [[太郎が怒り] [二郎が泣き]（そして）[三郎の笑っ] た] 理由
e. *[[太郎の怒り] [二郎の泣き]（そして）[三郎が笑っ] た] 理由
f. *[[太郎の怒り] [二郎が泣き]（そして）[三郎の笑っ] た] 理由
g. *[[太郎が怒り] [二郎の泣き]（そして）[三郎の笑っ] た] 理由
f. *[[太郎の怒り] [二郎の泣き]（そして）[三郎の笑っ] た] 理由

(205a)は，すべての等位節で交替が起こらずに文法的である。残り一つ文法的な(205d)では，１つめと２つめの等位節で交替が起こらず，最後の節だけで交替が起きている。等位節の数をいくら増やしても同じで，「が/の」交替が許されるの

は，最後の等位節だけである。これも説明が必要である。現象自体は，表面的に至って単純に思える。すなわち，見かけ上，主格を含む直接の節に連体形の時制辞がある場合にだけ「が/の」交替は許される，ということである。しかし，この一般化を理論的に説明するには，さらに日本語の句構造に関して詳細な分析が必要である。

最後の問題は，主格の認可である。Takezawa (1987)以来，日本語の主格「が」は，時制辞 T によって認可されると考えられている。(202)の左の XP では，所有格「の」は認可されないが，主格の生起は問題がないことから，「が」と「の」に関して別の認可手段を想定しないといけないことになる。これらの問題は，日本語の基本的な句構造とその派生に密接な関わりがある。５章では，日本語の句構造に関する本研究の実質的な提案をしつつ，その中でこれらの問題を解決していきたい。

５．分析

これまでに，日本語の TP 領域への繰り上げを確かに示す現象として「否定のスコープとかき混ぜ」「不定代名詞の認可」「数量詞の遊離」「否定極性項目の認可」の４つの現象を見た。そしてこれらの現象が，否定辞の生起を許さない述語等位接続構造の等位節に現れることを示した。さらに，（時制辞を含まない）述語等位接続構造を，従属接続構造であると分析したり，TP 等位接続であると分析したりはできないことを示した。３章の最後に見たように，こうした矛盾した現象（非時制節で TP 領域への繰り上げを示す現象が観察されること）を解決する，いま１つの手立ては，TP の下，そして vP/VP の上にもう一つ別の範疇があり，一見 TP 領域への繰り上げと見える現象は，実はその中間範疇への繰り上げであると考えることである。本章の目的は，その当該範疇が PolP であるということを示すことである。PolP が，（より明確な形態素である）否定辞を含まない場合でも，述語の肯定の値を示すために TP と vP/VP の間に投射されると仮定することで，矛盾した現象に一貫した説明を与えることができると主張する。また，否定辞がない場合でさえ PolP を想定することは，形態的にも意味的にも統語的にも裏付けがあることを見る。さらに，提案する句構造とその派生の詳細を提示するとともに，４章末に指摘した「が/の」交替に関する問題の解決を試みる。

５．１では，TP と vP/VP の間に投射される範疇の候補として，AgrP，AspP，Modal，FocP を検証し，主に主要部同士の線形順序の点からこれらの分析を退ける。５．２では，TP と vP/VP の間に投射されるのは PolP であるという，本研究の中心的な分析を示す。５．３では，PolP 分析の詳細を論じ、４章の最後に指摘した，「が/の」交替の適用に関する制約の説明を試みる。５．４では，述語等位接続構造の歴史的な変化を指摘し，本研究での枠組みでもその事実を扱うことができる可能性を示唆する。５．５では，形容詞や形容動詞が述語となっている否定文について観察し，本研究で主に論じている動詞が述部として用いられた否定文とは性質が異なることを示す。

５．１．XP

TP 領域への繰り上げを示す現象が時制辞を伴わない等位節でも観察される。従属節による分析や TP 理論が退けられた今，残された考え方は，TP の下，vP/VP の上にもう一つ別の最大投射が存在すると考えることである。その仮想の最大

投射をここでは XP と呼ぶことにする（後に XP = PolP と主張することになる）。XP も，様々な範疇である可能性がある。ここでは，AgrP（Pollock 1989，Chomsky 1995, Watanabe 1993, Koizumi 1995, Ura 1996, 2000 等），AspP（Borer 1994, Cinque 2003，Fukuda 2007），ModalP（Koizumi 1993），そして FocP（Yanagida 2005）がいずれも XP としての意図した機能は果たさないことを見ていく。

５．１．１．AgrP

日本語は，英語や他の多くの言語と異なり，通常主語が述語や時制辞などに対して数や，性，人称などの一致を見せることはない。

(1) a. They *is/are friendly.
b. He *play/plays the guitar.
(2) a. 彼らがリンゴを 食べる/食べた.
b. 彼がリンゴを 食べる/食べた.

英語では，主語が３人称複数なら，現在時制の be 動詞はそれに対応した形の are であって，is は使えないし(1a)，３人称単数現在時制では，語彙動詞に一致の形態素「s」が現れる(1b)。これに対し，日本語では，現在形/過去形を問わずそうした一致は見られない(2)。しかし，日本語でも，主語や目的語で表される人物に話者が敬意を示したい場合，述語が特別の形を取る。

(3) a. 田中先生がリンゴを 食べる/お食べになる .
b. 田中先生がギリシャ語を 話す/お話しになる.
(4) a. 私は田中先生を 助けた/お助けした.
b. 私は田中先生をメアリーに 紹介した/ご紹介した.

(3)では，主語に，そして(4)では目的語に対応する形で，動詞が尊敬の形（「お～になる」「お～する」）となっている。こうした表現は，ある種の一致現象であるとして，Harada (1976)以来，日本語の生成文法研究で繰り返し取り上げられてきた（柴谷 1978，Suzuki 1989，Toribio 1990，Ura 1996，Boeckx and Niinuma 2004, 2006 などがそうした分析を支持する立場，Namai 2000，Bobaljik and Yatsushiro 2006 などが反対の立場である）。これらの表現は，一致関係が一貫していて（「お

～になる」の一致は必ず主語が引き起こし，「お～する」の一致は必ず目的語が引き起こす），かつ，形態的にきわめて生産的であるため，一種の一致現象として分析することが可能である。この一致が，T とは独立した範疇 AgrP を投射するとすると，上記 XP の候補となりうる。

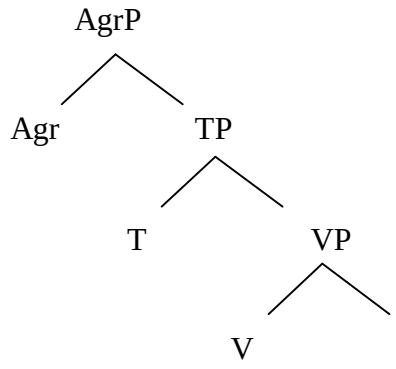
Pollock (1989)は，当時 IP とされていた通常の S（文）が，さらに２つの機能範疇 TP-AgrP へと分化されると主張し，広く受け入れられた。通常 Agr の形態素は，T の形態素の外側に現れることから，実際に広く採用された句構造は（Pollock の提案とは逆の支配関係となる）AgrP-TP の形である（Haegeman and Guéron 1999:313）。(5)はフランス語の動詞の変化形のパラダイムであるが，常に V-T-Agr という順序で形態素が現れている。

(5) a.

主語	V	T	Agr
je (I)	parl	ai	s
tu (you)	parl	ai	s
il (he)	parl	ai	t
	speak	PAST	人称/数

このことは，フランス語の句構造が，(6)のように AgrP-TP-VP と分析されるべきであることを示している。

(6)



しかし，日本語の場合，主語に対する尊敬の形態素であれ，目的に対する尊敬の形態素であれ，それらは時制要素の内側に生起する。

(7) a. お食べに なる/なった

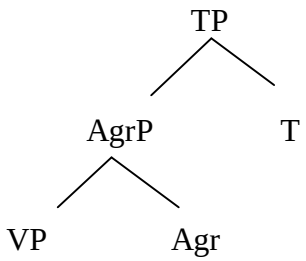
b. **お飲みに なる/なった**

(8) a. **お助け する/した**

b. **ご紹介 する/した**

したがって日本語では，(6)**とは逆の**(9)**が句構造として仮定されることになる。**

(9)



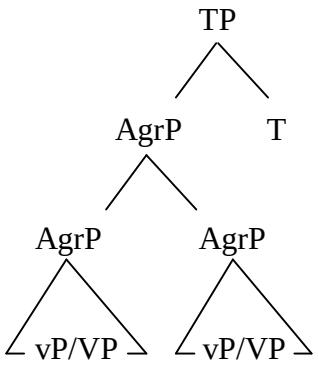
**　また，日本語のこうした一致形態素を時制辞が含まれない等位節に埋め込むことが可能である（**Hirata 2006b**）。**

(10) a. **[[田中先生にギリシャ語がおわかりになり]（そして）[山田先生にラテン語がおわかりにな]] る.**

b. **[[田中先生に娘をご紹介し]（そして）[田中先生に息子をご紹介し]] た.**

(10)の各文では，尊敬の形態素を伴った動詞が，非時制の等位節の中に時制辞とは独立した形で現れている。したがって，AgrP **による分析は，本研究で問題にしている，なぜ時制辞の除外された等位節で，**TP **領域への繰り上げを示す現象が観察されるのか，という問題に直接の解決をもたらす。**TP **の下に２つの** AgrP-VP **という構造が投射された(11)のような構造を仮定すればいいのである。**

(11)



(11)の構造では，各等位節において，vP/VP の上に AgrP が投射されていて，時制辞を伴わない等位節中の繰り上げ現象は vP/VP（NegP）から AgrP への移動であると説明することができる。これが Hirata (2006b)の提案である。

AgrP は，１章で示した，「機能範疇が満たすべき条件」も概ね満たす。

(12) （機能）範疇の満たすべき条件

a. 他の形態素の出現に依存しない独立した形態素を持ちうる.

b. 意味解釈上の影響を与えうる.

c. 範疇の選択関係に影響を与える.

すでに見たように，尊敬語が独立した形態素「お～になる」「お～する」を持っていることは明らかだ（(12a)を満たしている）。また，尊敬語は対象の人物に話者の敬意を示すために用いられるのであるから，少なくても語用論的な意味解釈をもつといえるであろう（(12b)も満たしている）。

最も証明が難しいのは，範疇の選択関係(12c)である。しかし，範疇の選択に関しても, AgrP だけを選択する, というケースがある。Suzuki (1989)および, Ivana and Sakai (2007)は，「の＋名詞」という文脈では，尊敬語化した句だけが現れうることを指摘している[1]。

(13) a. [$_{AgrP}$ 先生がお書き]-の 本

b. *[$_{TP}$ 先生が書いた]-の 本

(14) a. [$_{AgrP}$ 電車をお降り]-の 際は

[1] Suzuki (1989)，Ivana and Sakai (2007)では，(13)-(14)が尊敬語化された連用形表現が名詞化している例証としてと挙げられている。

b. *[$_{TP}$ 電車を降りた]-の 際は

(13)-(14)では各々，尊敬語の形態素がついた形だけが文法的で，「の＋名詞」がAgrP だけを下位範疇化していると見ることも可能である。そうだとすれば, AgrPが(12c)の基準も満たしていることになる。

以上の様に，XP = AgrP による分析には利点が多いが，それでも本研究ではこの分析を採用しない。その理由は，少なくとも TP 領域への繰り上げを示す現象の１つが，AgrP による分析では解決が難しいからである。３章では，英語と異なり，日本語では主語にある否定極性項目が否定辞に認可されることを見た。

(15) a. *Anybody does not read books.
b. 誰一人本を読まない.

そして Kishimoto (2007, 2008)はその理由を，日本語には Neg-to-T の移動があるからだとした。しかし３章で指摘したように，時制辞を含まない等位節でも，主語の否定極性項目は認可される。

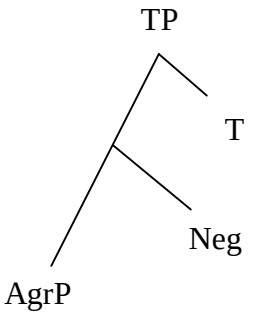
(16) [誰一人本を読まず]（そして）[誰一人論文を書かなかっ] た.

(16)の事実を説明するのには，Neg が繰り上がることのできる，T より下の位置が等位節内に存在することが必要である。AgrP がその位置を提供するには，語順でいえば，V-Neg-Agr-T という形である必要がある。しかし，否定辞と尊敬語の形態素の順番を調べてみると，必要な順番とは逆（V-Agr-Neg-T）であることがわかる。

(17) a. お読みに-なら-な-い
b. ご紹介し-な-い

言い換えれば，尊敬語化の形態素が AgrP を仮に投射しているにしても，それは Neg 要素よりも下，ということになる。

(18)



そうだとすると, 依然として Neg が TP の下で繰り上がることができる位置は保証されていないことになる。これが本研究で AgrP = XP による分析を採用しない１つめの理由である[2]。

AgrP による分析を採用しないもう一つの理由は, Ivana and Sakai (2007)が主張するように，尊敬語化で現れる補助動詞「する/なる」が，軽動詞の v であると考えられるからである。Harada (1976)は，尊敬語化によって現れる補助動詞が, 通常許される先行要素の削除を許さないという性質を持っていることを指摘する。

(19) A: 太郎はもう大学生になりましたか？
B: ええ e なりました.

(20) A: 山田先生はもうこの本をお読みになりましたか？
B: *ええ e なりました.

（Ivana and Sakai 2007:177）

通常の（語彙動詞としての）「なる」では，(19A)の問いかけに対し，(19B)のように答えることが可能だ。(19B)では，「大学生に」の部分が削除されているが, この部分は「なりました」から補うことが可能である。これに対し，尊敬語化の補助動詞として「なる」が用いられた(20)の場合には，(20B)のように,「なる」を残して残りの要素を削除することはできない。「なる」という尊敬語の形態素だけでは(20A)の「この本をお読みに」を補うことはできないのである。

[2] （否定極性項目である）主語自体が，SpecNegP までしか繰り上がらないと考えれば, Neg がそれより上の主要部に繰り上がらなければならないと考える必要はもはやなくなる。以下ではそうした分析が提案される。しかし, それが正しいとするなら, (18)のように NegP の下に AgrP の投射を仮定するメリットはなくなる。以下の議論を参照されたい。

同様の制約が,「心配する」「心配になる」「驚愕する」等の漢語系の複合動詞に現れる「する」「なる」にも見られると Ivana and Sakai (2007)は指摘する（Saito and Hoshi (2000)の研究に基づく）。

(21) A: ご家族は心配になりましたか？
B: *ええ e なりました.
(22) 太郎が驚愕した．*直子も e した.
（Ivana and Sakai 2007:180）

(21B)のように,「心配になる」の一部「心配に」を削除したり，(22)のように「驚愕した」の一部「驚愕」を削除することはできない。Grimshaw and Mester (1988), Grimshaw (1990)が主張するように，こうした漢語に付随して現れる「する」が軽動詞であるとするなら，(20)-(22)の平行性から，尊敬語化に表れる「する」「なる」も軽動詞 v として分析できることになる。この分析が正しいとすると，尊敬語化の形態素の一部が v であることになって，尊敬語の形態素の生起を理由に，vP/VP の上に，AgrP の投射を想定することは不適切であるということになる。

５．１．２．AspP/ModalP

次に検討するのは, TP-XP-VP の構造で, XP が相の助動詞であると考える AspP 分析や，様態（modal）の要素であるとする ModalP 分析である。確かに日本語には「はじめる」「続ける」「終わる」「終える」等の相を表す動詞表現があり，生成文法の枠組みでも研究の対象となってきた（Shibatani 1973, 柴谷 1978, Kuno 1987，Nishigauchi 1993，Koizumi 1995, 1998，Matsumoto 1996 など）。そして相の助動詞は, 独自の投射 AspP を形成するという分析も提案されてきた（Borer 1994, Cinque 2003，Fukuda 2007）。また，日本語には様態を示す「ようだ」「らしい」等の表現があり，これらも ModalP を形成すると考えることで，XP の候補となりうる（Koizumi 1993）。

しかし，実際に現れる形態素の順序を考慮すると，これらはいずれも XP ではありえないことがわかる。５．１．１でも見たように，等位節の繰り上げ現象を TP に頼らずに説明するには，XP の主要部 X は，T よりも下，Neg よりも上でなければならない。

(23)　V/v-Neg-X-T

しかし，日本語の相を示す要素は，否定辞よりも動詞に近い側に現れる。

(24)　a.　　食べ-始め-なかっ-た
　　b.　　飲み-終わら-な-い

否定辞と相の表現の順番を逆転させると容認不可能となる。

(25)　a.　　*食べ-な-始め-た
　　b.　　*飲ま-な-終わ-る

したがって，XP = AspP 分析は採用できない。
　逆に様態の表現は，TP よりも上に現れる。

(26)　a.　　食べ-なかっ-た-ようだ
　　b.　　飲ま-な-い-らしい

したがって，XP = ModalP という分析も維持されない。

５．１．３．FocP

　Yanagida (2005)は, TP と VP の間に強調を表す係助詞や副助詞を主要部とする FocP（Focus Phrase）が投射されると主張する。この主張は，wh 句の生起が，動詞に付加された係助詞や副助詞によって制限される場合があるという興味深い観察が根拠になっている。日本語の疑問文の wh 句は，英語と違い，義務的に文頭へと移動することはない。(27)は目的語が wh 句となり，それが基底生成位置にとどまっている例である。

(27)　太郎が何を買ったの？

また，動詞には係助詞「は」「も」や副助詞「さえ」などを付加することが可能

である。

(28)　太郎が［$_{VP}$ リンゴを 買いは/も/さえ］したの？

ところが，このような助詞が動詞に付加されると，目的語の wh 句が認可されなくなる。

(29)　*太郎が何を 買いは/も/さえ したの？

Yanagida は，こうした事実から，係助詞や副助詞が動詞に付随した場合，VP の上に，係助詞・副助詞（焦点）を主要部とする FocP（Force Phrase）が投射されていると主張する。

(30)　*太郎が［$_{FocP}$ OP［$_{VP}$ 何を 買い］は/も/さえ］したの？

(30)の構造では，Foc を主要部とする最大投射 FocP が TP と VP の間に割り込む形で生成され，その指定部には，音声的に空の演算子 OP が生起している（この OP は，FocP の主要部である焦点要素（「は」「も」「さえ」）に認可されると仮定されている）。日本語の wh 句も，可視統語部門（Watanabe 1992）か不可視統語部門（Nishigauchi 1986）のいずれかで SpecCP に移動するとすると，(29)/(30)の非文法性は，最小連鎖条件（Minimal Link Condition）の違反として説明することができることになる。いずれの部門の操作であっても，「何を」が SpecFocP にある OP を超えて SpecCP へと移動されることになるからである。

しかしこの FocP も，やはり本研究で問題としている繰り上げの現象を説明することはできない（正確には上記の XP を FocP と考えることはできない）。というのも，否定辞が Foc の要素である「は」「も」「さえ」に後続するからである。

(31)　太郎が［$_{FocP}$ リンゴを 買いは/も/さえ］しなかった.

(31)のように FocP が VP の上に投射されても，この投射が Neg の外側に繰り上げの着地点を提供することにならない。よって，XP = FocP と想定することはできない。

５．２．PolP 分析

この節では，TP-XP-vP/VP の XP が，述部の肯定/否定の値を指定する最大投射 PolP であるという（本研究の中心的な）分析を示す。PolP は，否定辞のような具体的な形態素が現れる場合だけではなく，一見具体的な形態素が現れない場合にも投射されると仮定する。（したがって，ここで PolP と呼ぶ範疇は，Laka 1990 が ΣP と呼んだ範疇と同じである。また，肯定の述部にも NegP が投射されると考えるのであれば，PolP は NegP とも同一視される。この提案は，Frampton 1991，Zanuttini 1991，Haegeman 1995，Akahane 2006, 2008 等に見られる。）否定辞が現れる場合，主要部 Pol が[neg]（negative） 素性を持つ PolP であると仮定し，否定辞が現れない場合， Pol が[aff]（affirmative）素性を持つ PolP であると仮定する。[neg]の PolP に比べ，[aff]の PolP はより慎重な議論が必要となる（普通の文脈では形態素が現れない）。５．２．１では主に[neg]の PolP を想定する動機付けと，それに基づく繰り上げ現象の分析を提示し，５．２．２では[aff]の NegP を想定する理論的，経験的裏付けを行う。

５．２．１．[neg] PolP

日本語でも，否定辞が独自の投射 NegP（本研究での[neg] PolP）を形成するとする分析はこれまでに数多く提案されてきた（Takahashi 1990，Aoyagi and Ishii 1994, Nishioka 1994, Yoshimoto 1998, Watanabe 2004, Han, Storoshenko, and Sakurai 2005，Akahane 2006, 2008，Kishimoto 2007, 2008 など）。本節でははじめに，否定辞がある場合に PolP という範疇をもうけることが適切であるかどうか検討し，その後，PolP による繰り上げ現象の説明を試みる。

５．２．１．１．範疇[neg] PolP の動機付け

本研究では，機能範疇の存在を想定するにあたり，(32)の条件を課している。

(32) （機能）範疇の満たすべき条件

a. 他の形態素の出現に依存しない独立した形態素を持ちうる．

b. 意味解釈上の影響を与えうる．

c. 範疇の選択関係に影響を与える．

[neg]の PolP がこれらの条件を満たしているか，十分に検討したい[3]。まず，形態素の(32a)に関してはまずクリアしていると考えられる（明らかに「ない」が用件を満たしている）。また意味解釈(32b)も問題なく満たしている（「ない」の出現で文は否定される）。ただし，形態素に関してはさらに注意深く検討する必要がある。というのは，否定辞「ない」は，基本的に一般の形容詞と同じ変化形式を持つからである（Kato 1985，Kishimoto 2007, 2008）。

(33)

	未然	連用	終止	連体	仮定
白い	かろ	かっく	い	い	けれ
ない	かろ	かっくず	い	い	けれ

(33)は語彙的形容詞「白い」と否定辞「ない」の活用を比べたものである。「ない」では，連用形で（連用中止法で）古い形「ず」が用いられるが，その点を除いては両者が同じ活用形を持つ。したがって，形態的には否定辞を形容詞と分類することもできる[4]。

しかし，多くの点で否定辞は形容詞にはない選択的特徴を示す。Kishimoto (2007, 2008)が示すように，動詞「ほしい」は，補部述語として動詞だけを取り(34a)，形容詞は取らない(34b)[5]。

(34) a. ジョンは [メアリーが来て] ほしかった.
b. *ジョンは [メアリーがいつまでもかわいくて] ほしかった.
c. ジョンは [メアリーが来ないで] ほしかった.
（Kishimoto 2008:390）

[3] Sells (1995)は，日本語に NegP（PolP）のような範疇を設定することに異を唱えている。また Koopman (2005)では，Kayne (1994)の枠組みで日本語の（否定辞を含む）複合述語の形成過程が提案されている。
[4] 日本語の否定辞は，助動詞系の「ず」から形容詞系の「ない」へと変遷を遂げる過程にあるといえる。この点に関して，注 9 も参照せよ。
[5] ほかに「〜している」も同じ分布を示す（「食べている」「食べないでいる」「*若くいる」）。

それでも(34c)のように否定辞の「ない」は「ほしい」の補部として機能することから，「ほしい」は VP/PolP を選択し，AP は選択しないと考えることができる（PolP と AP を範疇として区別する必要がある）[6]。

逆のことが「思う」の補部でいえる。「思う」の補部は動詞ではなく(35b)，形容詞でなければならない(35a)。

(35) a. ジョンは [メアリーをかわいく] 思う．（Kishimoto 2008:391）
b. *ジョンは [本を売れ] 思う．
c. ?*ジョンは [本を売れなく] 思う． （Kishimoto 2008:391）

それでも(35c)のように，動詞を否定する「ない」は「思う」の補部として機能しないことから，否定辞の「ない」は独自の範疇 PolP を形成し，「思う」は AP だけを選択していると考えることができる[7]。

また，「たい」と「そうだ」の対比は，範疇によって PolP を選択するものとしないものがあることを示す。「たい」も「そうだ」もともに一見，非時制述語（vP/VP）の連用形を補部として取っているように見える。

(36) a. 私はリンゴを食べ たい．
b. 私は大きな声で笑い たい．
(37) a. 彼はリンゴを食べ そうだ．
b. 彼は大きな声で笑い そうだ．

---

[6] Kishimoto (2007, 2008)は，NegP が機能範疇であることから，X-NegP-Y の階層構造で，NegP が X の Y に対する選択関係を阻害しない，と議論している。(35)に関する議論も同じである。

[7] 「～なる」「～する」は，ここで見ているような，「動詞対形容詞」ではなく「動詞変化述語対形容詞述語変化」の選択を見せる。すなわち，通常の動詞はこれらの補部にはなれないが，動詞の否定形や形容詞は補部として働く。

(i) a. *食べなる
b. 食べなくなる
c. かわいくなる

範疇ではなく，形態による選択をする場合もあるということは，ここでの主張にとって問題となることを率直に記しておく。

ところが，否定辞「な（い）」が入れるのは，「そうだ」の方だけである。

(38) a. *私はリンゴを食べな たい.
b. *私は大きな声で笑いな たい.
(39) a. 彼はリンゴを食べな そうだ.
b. 彼は大きな声で笑わな そうだ.

したがって「そうだ」は PolP を，「たい」は vP/VP を選択していると考えることが可能である。

また，統語的な振る舞いにおいても，否定辞の「ない」と語彙的形容詞では異なる。「（～し）たい」は，否定辞「ない」と同様に語彙動詞と T の間に生起する形容詞である。通常他動詞文では，目的語は対格「を」で表され，主格を用いることはできない(40a)。しかし「（～し）たい」が追加されると，目的語を「が」でマークすることが可能となる(40b)。

(40) a. 太郎がリンゴを/*が食べた.
b. 太郎がリンゴを/が食べたい.

これは，「食べたい」全体がいわば形容詞化しているため，動詞から目的語への格付与が行われないからであると考えることができる。しかし，否定辞「ない」は，形態的には形容詞であるが，このような機能がない（Han, Storoshenko, and Sakurai 2005）。

(41) 太郎がリンゴを/*が食べない.

「（～し）やすい/にくい」も同様に，語彙動詞と T の間に現れる形容詞である。そして，「（～し）やすい/にくい」を用いた文では，語彙動詞の目的語は対格を付与されず，主格名詞となって現れる。これも語彙動詞と形容詞が全体で形容詞化されている証拠であると考えることができる(42a)[8]。

[8] 「やすい」「にくい」などの日本語の難易構文の詳細な分析は，三木 (2001)を見よ。

(42) a. **リンゴ*を/が食べやすい/にくい.**

b. **リンゴを/*が食べない.**

しかし，否定辞「ない」にはこのような機能はなく(42b),「ない」が形容詞の形態的特徴を持っているにもかかわらず，形容詞としての機能は保持していないことがわかる[9]**。**

また，最後に，アクセント核による否定辞と形容詞の違いを確認しておく。日本語の形態音声的な１語（１文節）は，ただ１つだけアクセント核（ピッチが下がる位置）を持つ。「語彙動詞-否定辞-時制要素」という複合述語の場合，全体で１つのアクセント核を持つ（アクセント核の位置は大文字で示している）。

(43) a. nomA-na-i/*nomA nA-i

b. yomA-na-i/*yomA nA-i

これに対し,「語彙動詞-形容詞-時制要素」という複合の場合, 語彙動詞が１つ, そして形容詞-時制要素で１つ, という具合に全部で２つのアクセント核を持つ。

(44) a. nomI tA-i/*nomI-ta-i

b. yomI tA-i/*yomI-ta-i

これは，否定辞がすでに独立した語彙範疇としてではなく，機能範疇として形態音声的に実現されていることの証拠と考えることができる[10]**。**

以上のように，否定辞が現れる[neg]**の** PolP **は，機能範疇の持つべき形態的，意味的，そして範疇選択的基準をすべて満たす。「ない」は，活用の型だけを見ると形容詞に属するものの，数多くの点で他の形容詞が持つ語彙範疇の特徴を失っている。このことから，**PolP **という機能範疇を設定することが必要である**

---

[9] **日本語の否定辞は，助動詞派生の「ぬ」から形容詞派生の「ない」に移行している途中である（小林** 1968**）。**(i)**のように，連用中止法では，古い形の「ず」が普通用いられる。**

(i) **太郎がリンゴを食べず（そして）二郎がイチゴを食べない.**

しかし，連用中止法においても形容詞語源の「ない」が用いられ始めていることが金澤 (1997)**で報告されている。**

[10] **この現象に関する包括的な研究は，金田一** (1974)**を見よ。**

と結論づけられる。

５．２．１．２．[neg]の PolP に基づいた繰り上げの説明

この節では，[neg]の PolP が vP/VP の上，そして TP の下に投射されるという仮説の元，述語等位接続構造の非時制等位節に見られる繰り上げの諸現象がどのように説明されるかを順番に見ていく。説明されるべき現象は(45)-(48)である。

(45) 否定のスコープとかき混ぜ規則の相互作用

a. [太郎が全員をほめず]（そして）[次郎が全員をしからなかっ] た.
（全員＞ない，全員＜ない）

b. [全員がそのテストを受けず]（そして）[全員が単位をとれなかっ] た.
（全員＞ない，*全員＜ない）

c. [そのテストを全員が t 受けず]（そして）[その単位を全員が t とれなかっ] た. （全員＞ない，全員＜ない）

(46) 不定代名詞の認可

a. [太郎が何を買いもせず]（そして）[次郎が何を売りもしなかっ] た.

b. *[誰が花子を褒めもせず]（そして）[誰が昌子を叱りもしなかっ] た.

(47) 数量詞の遊離

[車が泥棒に t ２台盗まれ]（そして）[泥棒が警察に t ２人捕まえられ] た.

(48) 主語の否定極性項目の認可

[誰一人本を読まず]（そして）[誰一人論文を書かなかっ] た.

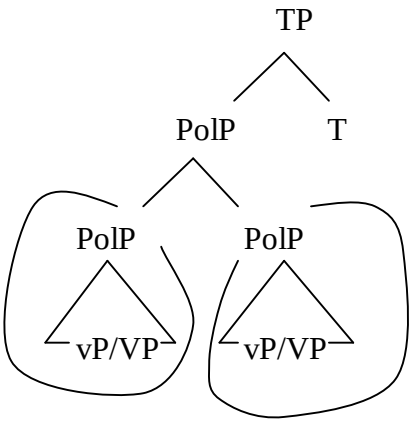
はじめに，PolP が，等位節の内部に（時制辞を除外する形で）生起し得ることを確認する。

(49) a. [$_{PolP}$ [太郎が泣かず]（そして）[二郎も泣かな]] い.

b. [$_{PolP}$ [太郎が酒を飲まず]（そして）[二郎も酒を飲まな]] い.

したがって，(49)の各文は，(50)のように分析することが可能である。

(50)



あと示すべきことは，(50)の枠で囲った各々の PolP-vP/VP の構造で，上記(45)から(48)の事実がすべて説明できればいいことになる。以下では，スペースの省略のため，各現象とも(50)の枠内（の１つ）だけを表示するが，すべて(50)に埋め込むことが可能であることに注意されたい。

はじめは，否定のスコープとかき混ぜ規則の相互作用である。

(51) 否定のスコープとかき混ぜ規則の相互作用

a. [太郎が全員を褒めず]（全員＞ない，全員＜ない）

b. [全員がそのテストを受けず]（全員＞ない，*全員＜ない）

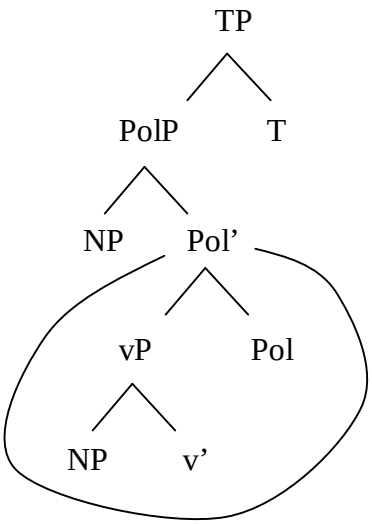
c. [そのテストを全員が t 受けず]（全員＞ない，全員＜ない）

この現象の主要な点は，SOV の語順では，主語が「ない」のスコープから外れるのに対し，OSV の語順では主語も「ない」のスコープに入ることであった。Miyagawa (2001)，Arikawa and Miyagawa (2007)の説明は以下のようなものであった。範疇 T は EPP 素性を持ち，SpecTP の位置は通常は主語がしめる。この場合語順は SOV となり，主語は Neg の c 統御領域から外れ，そのスコープに入らない。OSV の語順の場合には，目的語が T の持つ EPP 素性によって SpecTP に移動される。この場合，T の EPP 素性は，目的語によって満たされているため，主語は SpecvP にとどまることができる。そのために，OSV の語順の時には，主語は否定のスコープ内に入ることができる。

しかし，この説明は PolP-vP/VP による句構造に翻訳することが可能である。Miyagawa (2001)，Arikawa and Miyagawa (2007)とは違い，EPP 素性を持つのが T ではなく Pol であるとしよう。そうすると，何らかの要素で埋められなければな

らない位置は SpecTP ではなく SpecPolP であることになる。３．１．４で見たように,「全員」などの数量詞が否定のスコープに入るには，否定辞に数量詞が c 統御されている必要がある。そうだとすると，SpecPolP にある数量詞は Neg（本研究の立場では[neg] Pol）に c 統御されず，そのスコープから外れることになる。EPP 素性を含む範疇を T から Pol に想定し直しても，繰り上げられた要素が否定辞のスコープから外れることは説明できるのである。また，SpecvP は常に Pol に c 統御されるので，OSV の語順で主語が否定辞のスコープに入ることは，もとの説明を維持することができる。(52)がこの説明を図示する。

(52)



Pol のスコープが及ぶ範囲

(52)の表示は，１つの PolP-vP の構造であるが，これはもちろん(50)に埋め込むことが可能で，(45)で観察されるかき混ぜ規則とスコープの相互関係は PolP による分析でもすっきりと説明されることになる。

次に(46)に見られる，不定代名詞の認可を説明する。この現象の肝要な点は，語彙動詞に「も」が付随する場合に，不定代名詞の認可に主語/目的語の非対称性が見られることであった。

(53) 不定代名詞の認可

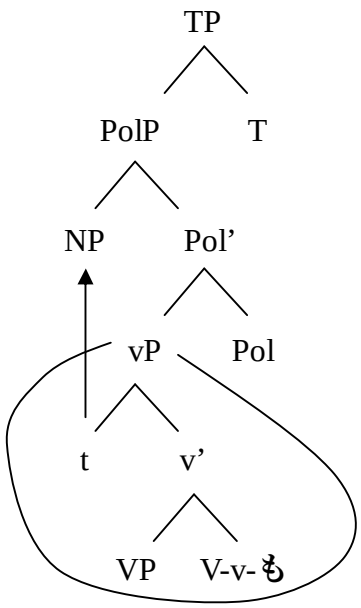
a. [太郎が何を買いもせず]（そして）

b. *[誰が花子を褒めもせず]（そして）

Kishimoto (2001)の説明は以下の通りである。主語は T の持つ EPP 素性を満たすために，SpecTP に移動され，そのため，「も」の不定代名詞の認可領域である vP をはずれる。よって主語の不定代名詞は認可されない。逆に目的語は vP の中の位置にあって，語彙動詞に付加された「も」に適切に認可される。

こうした不定代名詞の認可も，かき混ぜとスコープの相互関係と同様の形で PolP 理論により説明が付く。再び，EPP 素性を持つのが T ではなく Pol であると想定してみる。すると，主語が移動するのは SpecTP ではなく SpecPolP であることになる。Kishimoto (2001)の仮定によれば，語彙動詞に「も」が付加された場合，その認可範囲は vP よりも下の領域ということになる。したがって，主語の着地地点が SpecTP ではなく SpecPolP であっても，問題となっている主語/目的語の非対称性は説明されることになる。

(54)



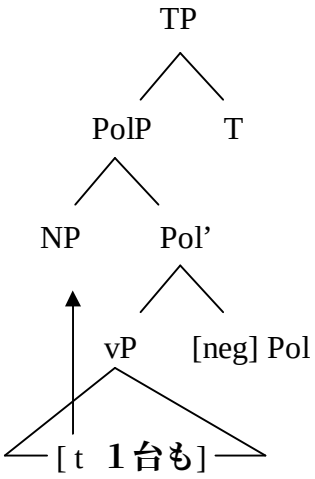
「も」の認可が及ぶ範囲

数量詞の遊離現象(47)では，主語であれ，目的語であれ vP 内部から SpecTP に移動した名詞句を修飾する数量詞が，vP 内部に残留することができるのであった。この節では，[neg]による PolP 分析に限って議論をしているので，(47)に代え，(55)のような，否定辞を含む例文での数量詞遊離を議論する。

(55) **数量詞の遊離**
[車が泥棒に t **１台も盗まれず]（そして）**

こうした主格名詞句の移動と，それを修飾する数量詞の残留についても，EPP **素性を持つのが** T **ではなく** Pol **であると考えることで，問題なく説明される。**

(56)



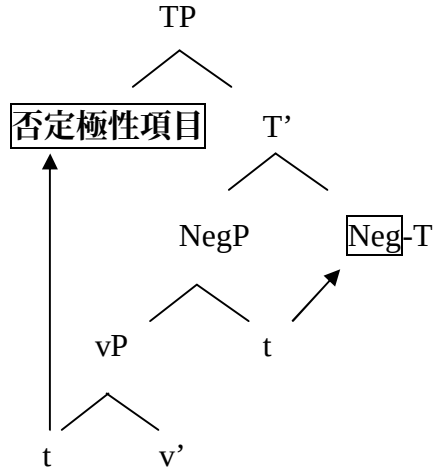
(56)**のように，主語が数量詞を残留する形で** SpecPolP **へと移動すれば，動詞句内には，動詞句内要素-主語の痕跡-主語修飾数量詞という要素がこの語順で残されることになる（数量詞遊離現象が説明される）。**

最後に検証するのは，主語の否定極性項目の認可(48)/(57)**である。**

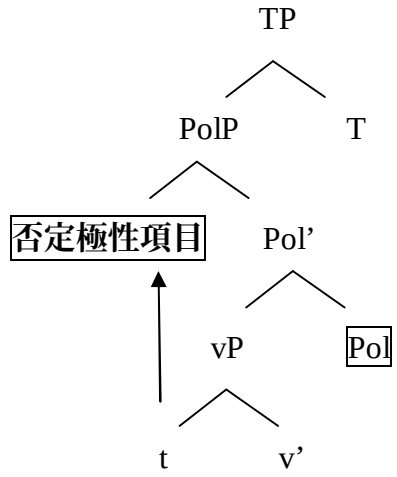
(57) **主語の否定極性項目の認可**
[誰一人本を読まず]（そして）

Kishimoto (2007, 2008)**は，この事実を** Pol-to-T（Neg-to-T）**移動に基づいて説明する。**Pol-to-T **移動によって，**Pol **が認可できる否定極性項目の範囲は** TP **まで広がる。その結果，**EPP **素性を満たすため** SpecTP **に移動した主語の否定極性項目も，**T **位置に移動した** Pol **によって認可される。しかし，これまでに見てきたように，**EPP **素性を持つのが** T **ではなく** Pol **であるとすると，**Pol-to-T **移動がなくても主語の否定極性項目は** Pol **の認可の範囲に収まる。**(58)**が** Kishimoto **の説明，**(59)**が** PolP **による説明を表示する。**

(58)



(59)



どちらの表示でも，否定極性項目は，その認可子である Neg/Pol **が主要部（の一部）となった最大投射の指定部にあって，それらの構造上の相対的位置関係は同じである。したがって，主語の繰り上げが** SpecTP **ではなく，**SpecPolP **をターゲットとしているとするなら，**Neg-to-T **の移動を仮定しなくても，主語の否定極性項目の認可を説明することができる**[11]**。**

以上，見てきたように，[neg]**の** PolP **の言語環境では，**PolP **投射を利用することで，**TP **領域への繰り上げを示すすべての現象が説明される。**TP **領域への繰り上げを** PolP **領域へと再解釈することで，時制辞を欠いた述語等位接続構造内部**

[11] Kishimoto (2007, 2008)**が** Neg-to-T **移動を想定するもう一つの大きな根拠は，**Neg **と** T **を助詞と補助動詞を用いて分断することができないという事実である。**

(i) ***食べ-なく-も ある**

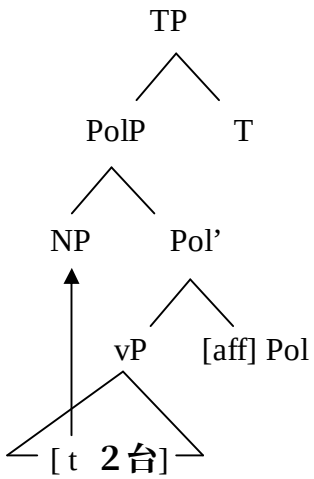
この問題は５．３．４で詳しく取り上げる。

で TP への繰り上げを示す現象が現れることが保証される。これまでに見てきた繰り上げを示す４つの言語現象のうち，かき混ぜ規則とスコープの相互作用，不定代名詞の認可，そして否定極性項目の認可の３つの現象は，いずれも否定辞が現れる文脈での現象であった。残された１つ，すなわち数量詞の遊離に関しては，否定辞が現れない場合でももちろん可能である。

(60)　数量詞の遊離（主語の繰り上げ）
　　[車が泥棒に t　２台盗まれ]（そして）

これまでの PolP 理論による説明を踏襲しようとすると, (60)のような場合でも，等位節内に[aff]指定を受けた PolP が存在すると仮定することができる。そうだとすると，(60)は，(56)と平行な形で，[aff]の PolP が投射された(61)のような構造によって分析することが可能になる。

(61)



もちろん，通常は，否定辞が現れなければ，主要部 Pol/Neg の存在を示すものがなく，（多くの場合暗黙的に）PolP/NegP は投射されていないと仮定される。したがって，否定辞が現れない場合にでも確かに PolP が投射されていると示すことが PolP 分析を首尾一貫させる上で重要である。次の節では，否定辞が現れない場合でも, [aff]指定の PolP が投射されていると仮定することが, 概念的にも，意味的にもまた形態的にも裏付けられることを見ていく。

５．２．２．[aff]の PolP

否定辞が現れない場合でも，否定の NegP に対応する肯定の機能範疇（PolP）が投射されているとする分析は，たびたび提案されてきた（Klima 1964，Laka 1990，Frampton 1991，Zanuttini 1991，Haegeman 1995，Akahane 2006, 2008）。そのような分析によれば，(62a)と同様に(62b)でも音声的に空の Pol が，最大投射 PolP を形成していると分析される[12]。

(62) a. John did [$_{PolP}$ not play the guitar].
b. John will [$_{PolP}$ E play the guitar].

概念的に，このような仮定は十分な動機付けがあるといえる。というのも，ある文なり，述語が肯定であるのか，否定であるのかということは，その言語表現が成立するにあたり，あるいは使用されるにあたり，不可欠な情報であるからだ（文や述語は，必ず肯定か否定のどちらかである）。

この考え方は，典型的な機能範疇である CP のケースと照らし合わせて考えるとより説得力がある。一般に[+interrogative]の指定を受ける場合，補文標識 C は省略が不可能である。

(63) a. I asked him [*(whether) she might join us].
b. I wonder [*(if) she will join us].

[+interrogative]の補文標識は，意味的な貢献もあり，また形態音声的な形も明確である。それに対し，[-interrogative]の補文標識 that は，音声的に具現される場合もあるが，省略が可能な場合が多い。

(64) a. I told him [(that) she might join us].
b. I think [(that) she will join us].

それでも通常，「that が省略された」と仮定するのであって，that がない場合に CP が投射されていないとは考えない。疑問文であるか断定文であるかという情

[12] 以下では，音声的な実現を持たない[aff]指定の Pol を「E」と表すことにする（一般的な空範疇の「e」と区別するための便宜である）。

報は文（TP）にとって不可欠で，[-interrogative]は，否定的な素性ではなく，「疑問文ではない」ということを示す積極的な素性であると考えることができるからであろう[13]。言い換えれば，[-interrogative]の CP は，「疑問ではない」ということを明確に示すために，常に TP に被さる形で投射されているといえる。同様に，[aff]も，「否定ではない」という消極的な素性としてではなく「肯定である」という積極的な素性として，文や述語の意味解釈に貢献していると考えられる。その具体的な実現として，[aff]指定の PolP が vP/VP の上に常に投射されていると仮定することができるだろう。

CP 補文に that がない場合には，投射されているのが CP ではなく，TP であるとする考えもある（Bošković 1996, 1997）。しかし，TP の EPP 素性は T が単独で持つのではなく，C から転写されるとの Chomsky (2007, 2008)の示唆が正しいとするなら，少なくとも定型の時制を持つ TP の上には CP が投射されていると考えざるをえない。

また，位相（phase）の観点からも，補文標識がない場合でも CP が投射されていると考えるのが適切である。通常，(65a)のように，埋め込み文の目的語位置に現れる再帰代名詞を主文の主語が束縛することはない（束縛原理 A）。

(65) a. *John$_i$ was told [that his wife still loved himself$_i$].
b. Which pictures of himself$_i$ was John$_i$ told [(that) his wife threw away t]?
c. …John$_i$…[$_{CP}$ which pictures of himself$_i$ (that) [$_{TP}$…

それでも，(65b)のように目的語が wh 移動によって文頭へ移動されると，主節主語 John が，目的語内の himself を束縛することが可能である（Barss 1986）。これは，wh 句が，位相である CP を通過する際，その指定部に立ち寄り(65c)，その位置で束縛原理 A が満たされるためであると通常説明される。この束縛領域の変化は，補文標識 that の有無に関係なく起こるので，that がない場合でも，(65b)の補文は CP となっていて，wh 句の移動の中継点となっていると考えざるをえない[14]。

---

[13] Rizzi (1997)はこうした考えを精密化した研究といえる。

[14] (65)の主節で, 受け身文を用いているのは, 主節が他動詞であるなら, vP も位相（phase）として働き，再構築効果が生まれると予測されるからである。

(i) a. *John$_i$ said [that Mary liked some pictures of himself$_i$].

また，意味的，形態的，統語的にも[aff]の PolP を想定するべき根拠がある。はじめに意味的な動機付けを見ていく。(66)は普通の肯定文で，[ ]は通常 vP と分析される[15]。

(66) a. 太郎が [$_{vP}$ リンゴを食べ] る.
b. 太郎が [$_{vP}$ イチゴを食べ] る.
(67) a. 太郎が [$_{PolP}$ [$_{vP}$ リンゴを食べ] な] い.
b. 太郎が [$_{PolP}$ [$_{vP}$ イチゴを食べ] な] い.

(67)の否定文は，表示のように，否定辞の投射する PolP に vP が含まれた構造をしていると仮定するのが一般的である。ここで，(66)の２つの vP を「そして」を用いて連結すると，(68a)のようになる。

---

b. Which pictures of himself$_i$ did John$_i$ [t" say [t' [(that) Mary liked t the best]?
c. John$_i$…[$_{vP}$ which pictures of himself...

(ib)では，wh 句が（SpecCP に加え）SpecvP も通過している。(ic)で示したように，その段階で束縛が成立している可能性がある。vP の指定部も SpecCP と同じように再構築による束縛が成立する位置であることは，(ii)-(iii)のパラダイムで確認できる。

(ii) a. *John$_i$ considered Mary to be very much proud of himself$_i$.
b. *John$_i$ made Mary talk about himself$_i$.
(iii) a. Which picture of himself$_i$ did John$_i$ consider Mary to be very proud of t?
b. Which picture of himself$_i$ did John$_i$ make Mary throw away t?

(ii)のように例外的格付与構文や小節でも，その埋め込み文の目的語は，主節の主語を先行詞として取ることはできない。それでも(iii)のように，wh 句の文頭への移動によって，主節主語が目的語内の再帰代名詞を束縛することが可能となる。例外的格付与構文や小節は，通常 CP の投射を伴わないと仮定されている。そうであるなら，(iii)の束縛関係を説明するには，wh 句が(ic)のように SpecvP を通過し，そこで束縛原理 A が満たされたと考える他はない。通常(ib)のような例文が，wh 句が SpecCP を通過することの証左として用いられるが，正確には(65b)のように，主節の vP が「弱い」形でなければ，議論は成立しない。

[15] (66)の各文は，vP の中に主語の痕跡が残されていると考えられるが，表示の簡素化のため省略する。（以下同様とする。）また，(i)のように左の等位節だけに主語が現れる等位接続の場合，右の等位節の主語位置には pro があると考えられるが，これも特に議論に関係がない場合は省略して表示する。

(i) 太郎がリンゴを食べ（そして）pro 水を飲んだ.

さらに，右の等位節の主語が pro で，全体が[PolP & PolP] T となっているような(69)の構造でも，自由に主語を PolP の外に表示する。これは表示を簡素にして論点を明確にしたいためで，理論的な意味合いはない。

(68) a. [$_{vP}$[$_{vP}$ リンゴを食べ]（そして）[$_{vP}$ イチゴを食べ]]

b. 太郎が [$_{PolP}$ [$_{vP}$[$_{vP}$ リンゴを食べ]（そして）[$_{vP}$ イチゴを食べ]] な] い.

そして(68a)の vP & vP の構造を，(67)のどちらかの文の vP のスロットに埋め込むと(68b)が派生される。しかし驚くべきことに，(68b)は，vP & vP の等位接続構造全体が，その上の PolP に否定されるという（予測された）解釈を持たない（Kato 2006:98，Hirata 2006a:note 15）。(68b)で唯一可能な解釈は，「太郎がリンゴを食べる」という命題と「太郎がイチゴを食べない」という命題を組み合わせた解釈である[16]。(68b)の表示のように，vP & vP が PolP に埋め込まれているのであれば，左の等位節も Pol に c 統御され，否定のスコープに入ることになる。(68b)の左の等位節が否定のスコープから外れるという事実は，左の等位節が，見かけに反し，右の PolP 等位節と同等の PolP 相当の範疇まで投射されていることを示している[17, 18]。

(69) 太郎が [$_{PolP}$ [$_{PolP}$ リンゴを食べ E]（そして）[$_{PolP}$ イチゴを食べな]] い.

(69)の左の等位節には，vP の上に，[aff]指定で音声的に空の主要部 E が生成され，これが PolP を投射して右の PolP と等位接続構造を形成している。E の存在により左の等位節は PolP まで投射され，左の等位節が否定のスコープから外れることが正しく説明される。この分析が正しいとすると，等位接続を含まない(66)の各文でも，見かけに反し，E を主要部とする PolP が vP の上に投射されていると考えなければならない。

(70) a. 太郎が [$_{PolP}$ [$_{vP}$ リンゴを食べ] E] る.

b. 太郎が [$_{PolP}$ [$_{vP}$ イチゴを食べ] E] る.

---

[16] (68b)を両否定に解釈できるとする話者がいる。Fukushima (1999)は，そうした話者を対象とした論考であると考えられる。また石井透氏からも，同趣旨の指摘を受けた。この問題や，中古の時代までには(68b)のような形で両否定が可能であったことは５．４で取り上げる。

[17] Kato (2006:note 2)にこうした分析の可能性が示唆されている。

[18] [vP & vP]を PolP に埋め込むことができる場合もある。以下の議論を参照のこと。

また，左の等位節だけが否定辞を含んだ(71b)のような例文でも，右の等位節に E が含まれていると考えざるをえない。

(71) a. 太郎が [$_{PolP}$ [$_{PolP}$ リンゴを食べず]（そして）[$_{PolP}$ イチゴも食べな]] い.
b. 太郎が [$_{PolP}$ [$_{PolP}$ リンゴを食べず]（そして）[$_{PolP}$ イチゴを食べ E]] る.

等位接続詞が，等しい範疇同士だけを接続できるという（一般的な）仮定にしたがえば，(71b)の左の等位節の範疇である PolP に合わせる形で，右の等位節も PolP まで投射されていなければならない。そのためには，否定辞の現れていない右の等位節に，音声的に空の E が含まれていると仮定する必要がある[19]。

以上見てきたように，E を仮定することは，等位接続された左右の範疇が同じであることを保証するためと，右の等位節だけに否定辞が現れた場合，左の等位節が否定のスコープから外れることを説明するために必要である。E を想定することは，統語的にもまた，意味的にも動機付けがあるのである（E もしくは[aff]指定の Pol が，数量詞遊離という繰り上げの現象とは全く独立して動機付けられていることに注意）。

また，E は，形態音声的にも実質的な範疇として機能する。１章と３．２．１

---

[19] Munn (1993)，Johannessen (1998)などでは，左右の範疇が異なる等位接続の例が報告されている。

(i) a. We talk about [Mr. Colson] and [that he had worked at the White House].
b. You can depend on [my assistant] and [that he will be on time].
(ii) a. *We talked about [that Mr. Colson had worked at the White House].
b. *You can depend on [that my assistant will be on time].
（Munn 1993:80）

しかし，そうした場合，(ii)で見られるように，一方の等位節は主文中に現れることが許されない形となる。今議論の対象となっている vP/PolP の場合は，どちらも問題なく主文に現れるので（(66)-(67)を参照のこと），このケースと Munn らが議論している例とは別の言語現象として理解されるべきである。

また Sag 他(1985)では，(iii)のような，左右非対称の等位接続が議論されている。

(iii) John is [a Republican and proud of it].

日本語でも，(iv)のように，名詞（＋断定の助動詞「だ」）と形容詞句を等位接続し得る。

(iv) 太郎が医者で（そして）腕もいい.

これも，否定の述部と肯定の述部が接続された(66b)のような例とは別の現象と考えられる。

節で，複合述語内に副助詞「さえ」や係助詞「も」「こそ」「は」などが介在すると，補助動詞「する」が挿入される現象を見た。

(72) a. 食べ-る/食べさえ す-る
b. 殴ら-れる/殴りも され-る
c. 飲み-続ける/飲みも し-続ける
d. 笑わ-ない/笑いも し-ない

(72)のように，現在の時制辞「る」，受け身の助動詞「される」，相の動詞「続け」，否定辞「ない」の，先行する動詞に副助詞や係助詞が付くと，後続する要素に「する」挿入が適用される。Keiko Miyagawa (1998)が明確に指摘するように，これら「する」挿入が適用される対象は多様で，「する」挿入は一定の統語的主要部をターゲットとする操作ではなく，形態音声的要因に基づいて適用されていると思われる（３．２．１の議論を参照されたい）。記述的には，A-B という形で複合述語が形成されている場合，助詞の介在で B の要素が形態音声的に不安定になり，B の要素を支えるために「する」挿入が起こると考えることができる[20]（これは，Aoyagi 1998a, 1998b，Keiko Miyagawa 1998，Sakai 1998，酒井 2000らの分析の概略であるといえる）。

以上の（一般的な）説明を念頭に(73)-(74)を観察する。

(73) a. 太郎が [[リンゴを食べず]（そして）[イチゴも食べな]] い.
b. 太郎が [[リンゴを食べもせず]（そして）[イチゴも食べはしな]] い.
(74) a. 太郎が [[リンゴを食べ]（そして）[イチゴを食べな]] い.
b. 太郎が [[リンゴを食べもし]（そして）[イチゴを食べはしな]] い.

(73a)は，左右の等位節に否定辞が含まれた例である。(73b)では，左右の等位節の否定辞の前で，助詞の挿入とそれに伴った「する」挿入がで行われている。(73b)の等位節の「する」挿入は，B の要素にあたる否定辞「ず」と「な」の形態音声的安定性のために適用されていると考えることができる。(74a)は，左の等位節が肯定，右の等位節が否定の述語等位接続構造である。そして，両等位節で助

[20] ５．３．３でより正確な形での「する」挿入規則を提示する。

詞の介在とそれに伴う「する」挿入が適用可能である(74b)。(74b)の右の等位節の「する」挿入も，B 要素にあたる否定辞「な」の安定性のために適用されていると考えることができる。問題は，(74b)の左の等位節である。ここには「する」挿入を促す B の形態素が現れていない。それにもかかわらず「する」挿入が適用されている（左の等位節に T が存在しないことは４章で詳述した通りである）。この「する」挿入は一体何のために行われているのか。それは，[aff]指定の Pol である E の形態音声的安定性のためであると考えられる。ここで提案している E の存在を想定すると，(74a)の左の等位節は(75a)のように分析されることになる。

(75) a. [$_{PolP}$ リンゴを 食べ-E]
b. [$_{PolP}$ リンゴを 食べも し-E]

(75a)では複合述語の A 要素としての語彙動詞「食べ」に，B 要素としての[aff]の E が後続している（E の存在は(74a)の左の等位節が，否定のスコープに入らないことを保証するという意味的/統語的要請によりすでに動機付けられている点に注意）。そして(75b)のように A に助詞が付加されると，B 要素である E を支えるために「する」挿入が適用されると考えることができる。

(74b)では，右の等位節に形態音声的な実質を持つ否定辞「な（い）」が現れていて，（右の等位節の「する」挿入同様）左の等位節の「する」挿入も，何らかの形で，この否定辞によって要請されていると考えることはできるだろうか。もしそうだとすれば，左の等位節で挿入された「し（する）」も時制辞前の否定辞「な（い）」に統語的に連絡することになり，(74b)は，(76)のように分析されることになる。

(76) 太郎が [リンゴを食べもし（そして）イチゴを食べはし] ない.

確かに，形態的には(76)の左右の等位節の述語が共通の形（食べ も/は し）になる。しかし，(74b)は，(76)のようには分析できない。というのも，(74b)の左の等位節は，(74a)の左の等位節と同様，否定のスコープから外れるからである。(76)の表示では，補助動詞「し」で終わる左右の等位節が，文末の否定辞に両否定を受けることになるはずである。しかし(74b)にはこの解釈が不可能であるから，(74b)の左の「する」挿入を促しているのが，T の前の否定辞であると考え

ることはできない。

このように，[aff]の指定を受けた Pol（E）が，V と T 要素の間に独立した最大投射 PolP を投射することは，統語的にも（等位接続の被接続要素の範疇を一致させる），意味的にも（E が付随する等位節を否定のスコープを外す），そして形態音声的にも（「する」挿入を駆動する）動機付けられていることになる。本研究では，機能範疇を設定するにあたって，(77)の原則を設けていた。

(77) （機能）範疇の満たすべき条件

a. 他の形態素の出現に依存しない独立した形態素を持ちうる.

b. 意味解釈上の影響を与えうる.

c. 範疇の選択関係に影響を与える.

[aff]の主要部 E は，直接に形態素を持つことはないが，「する」挿入を促すという点で，他の B の述部と実質的に同じ機能を果たしており，(77a)は満たされていると考えられる（「食べも し-E」の形では，E の存在は「食べも」に依存していないことに注意）。また，等位節を否定のスコープから外す効果が E にはあるから（あるいは述部の解釈が肯定であることを明示する機能が E にはあるから），意味的基準(77b)も満たされている。

範疇の選択(77c)に関しては，５．２．１．１で議論した，「ほしい」「思う」の範疇の選択を思い出されたい。

(78) a. ジョンは [メアリーが来て] ほしかった.

b. *ジョンは [メアリーがいつまでもかわいくて] ほしかった.

c. ジョンは [メアリーが来ないで] ほしかった.

(79) a. ジョンは [メアリーをかわいく] 思う.

b. *ジョンは [本を売れ] 思う.

c. ?*ジョンは [本を売れなく] 思う.

５．２．１．１では，「ほしい」が VP/PolP を選択し，「思う」は（VP/PolP ではなく）AP を選択すると考えた。しかし，E を想定する枠組みで考えると，「ほしい」は PolP を選択し（(78a)では[aff]の E が選択されている），「思う」は PolP ではなく AP を選択すると再解釈される。このように考えれば，同じ述語が複数の

範疇を補部として取るという複雑性を取り除くことができ，間接的ながら(78)-(79)のデータは, [aff]の PolP も範疇の選択に関与する証左と見なすことができる。

同節で扱った「たい」と「そうだ」による範疇の選択も同じことを示している。(80)-(81)のように，どちらの述部も一見動詞句を補部として取るように思える。

(80) a. 私はリンゴを食べ たい.
b. 私は大きな声で笑い たい.
(81) a. 彼はリンゴを食べ そうだ.
b. 彼は大きな声で笑い そうだ.
(82) a. *私はリンゴを食べな たい.
b. *私は大きな声で笑いな たい.
(83) a. 彼はリンゴを食べな そうだ.
b. 彼は大きな声で笑わな そうだ.

しかし，(82)-(83)のように，否定辞「ない」が入るのは「そうだ」の述部だけである。[aff]の PolP を仮定しなければ,「たい」は VP だけを選択し,「ほしい」は VP と PolP の両方を選択すると言わなければならない。しかし[aff]の PolP を想定するなら,「たい」は VP を，そして「そうだ」は PolP を選択していると簡単な形で選択関係を記述することができる。したがって，[aff]の PolP を想定することは，統語的選択関係を記述する上でも有益なのである。

このように, 形態的音声的に一見空である E を想定し，それに伴い[aff]指定の PolP が TP と vP/VP の間に投射されていると考えることは, 統語的にも，意味的にも，形態音声的にも，そして範疇選択の記述の上でも，必要である。PolP を想定することの必要性は,「主語の数量詞遊離現象が，否定辞を含まない等位節でも観察される」という事実の説明とは全く独立して動機付けられていることを，今一度認識する必要がある。([aff]素性の場合を含み）PolP を想定することで，首尾一貫した，そして簡素な日本語の記述が可能となるのである。

５．３．繰り上げ

日本語の統語構造に関して本研究で提案してきた内容をまとめると(84)のよ

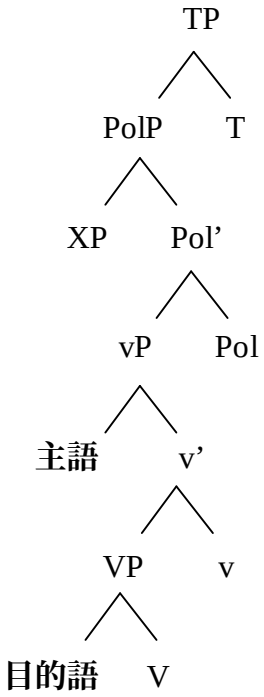
うになる。

(84) a. SpecPolP は，何らかの要素で埋められていなければならない（Pol は EPP 素性を持つ）.

b. PolP は, 否定辞が現れない場合にも TP と vP/VP の間に投射される.

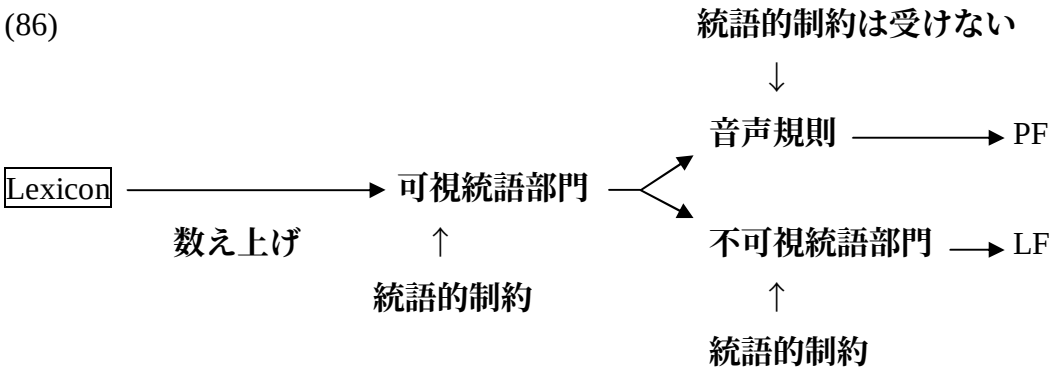
(84)の内容を樹状図で表すと(85)のようになる。

(85)



さらに検証する必要があるのは，(84a)がどのレベルで適用されるか，という問題と, 語彙動詞と Pol, Pol と T がどのレベルでどのように関係づけられるのか, という問題である。本研究では，現在の生成文法研究において標準的と思われる(86)の派生モデルを採用している（２．２節）

(86)



この節では，(85)の句構造と(86)の派生モデルを前提に，日本語の言語表現の生成過程をより詳細に検討する。

５．３．１．EPP

本研究の出発点となった，SpecTP への繰り上げ移動を主張する研究では，どれも移動は可視統語部門での操作であるとされる。かき混ぜとスコープの関係を論じた Miyagawa (2001)，主語の不定代名詞の認可について論じた Kishimoto (2001)，数量詞遊離現象を論じた Miyagawa and Arikawa (2007)，どの研究でも，T が EPP 素性を持つとされ，これは「可視統語部門において SpecTP に何らかの要素が入らなければならない」ことを意味する。また実際，そう考えるべき理由が，これらの研究で示されている。たとえば，かき混ぜとスコープの関係を思い出してみよう。この現象の要点は，通常主語の数量詞が否定のスコープから外れるにも関わらず，目的語が前置されることで，主語の数量詞も否定のスコープに入ることであった。

(87) a. 太郎が全員を褒めなかった．（全員＞ない，全員＜ない）
b. 全員がそのテストを受けなかった．（全員＞ない，*全員＜ない）
c. そのテストを 全員が t 受けなかった．（全員＞ない，全員＜ない）

ということは，目的語の移動が LF での（主語の数量詞のスコープという）解釈に影響を与えることになり，これは可視統語部門での移動でしかありえないことになる。この繰り上げが PF 部門であるなら，意味解釈への影響を及ぼさないはずであるし，またこの繰り上げが LF 部門であるとするなら，語順の変化が音声的に実現されないはずである（これは明らかに事実と異なる）。

提案している(85)の構造では，（彼らの主張と違い）移動の着地点が SpecPolP である。しかし，移動には音声的に判別可能な効果があって，しかもそれが意味解釈に影響を及ぼすことは明らかなので，彼らの主張にしたがい，SpecPolP への移動は可視統語部門で起こると考える。言い換えれば，日本語では，EPP 素性が T ではなく，Pol に実現されると考える。理論的にそう考えてはいけない積極的な理由はない。

もともと EPP（拡大投射の原理）は，（特に英語において）意味役割を付与されないような節の主語位置も，何らかの要素（虚辞）で埋められていなければいけないという旨の，いわば stipulation であった（Chomsky 1982:10）。

(88) a. (*There) are a lot of flowers in the garden.
b. (*It) seems that John is unwilling to help me.

(88)の各文で，それぞれ主語位置は意味役割を付与されない要素がしめているが，それでもこれらの要素がないと文は非文法的となる。(88)は，主節の定型節の例である。このことから，（T の性質である）定型と EPP が何らかの関連持つと考えられるだろうか。節として実現された主語は，(89a)のように時制変化を伴った形でも，(89b)のように不定の形でもよい。

(89) a. That John should say such a thing is surprising.
b. For John to say such a thing is surprising.
(90) a. John should say such a thing.
b. *For John to say such a thing.

しかし(90)のような主節の場合，不定型は許されない。統語論において明示的に論じられることは少ないが，主節は定型でなければならない。これは（少なくとも英語に関して）最も基本的な，独立文に対する制約の１つである。そしてもちろん（EPP の要請から）主節にも主語が必要なので，主節には常に主語が現れることになる。しかし，定性と EPP が独立した現象であることは，不定型の SpecTP 位置にも EPP の効果が現れる（すなわち，SpecTP に意味役割を担った項が移動してこなければ虚辞が挿入される）ことから明らかである。

(91) a. I believe [it to be clear that John was lying].

b. I believe [there to be some typos in this manuscript].

(91)の各例では，不定型節である例外的格付与構文の SpecTP 位置に，虚辞の it と there が現れている。このことは定性と EPP が独立した現象であることを示している。したがって，EPP を T の定性の問題に収束させることはできない。

結局のところ EPP は，現在でも，その性質は十分に解明されているとは言い難く，それゆえ，EPP 素性という形で記述的一般化の形を取っていると思われる。そして，実際 EPP 素性が T と不可分の関係にある必然性は指摘されていない。そうだとすれば，（Lexicon で）素性を束ねて単語へと産出していく過程において，EPP 素性が T とともに１単語化される言語に加え，EPP 素性が Pol とともに１単語化される言語があることは不思議ではないだろう。

むしろ究極的には，EPP とは一体何なのかという問題が問われなければならないだろう。Chomsky (1995:265)は，PF 部門での収束が EPP に関与している可能性を示唆している。より具体的にいえば，言語内的に EPP とそれに関係する操作は不要であるが，言語外的な要請（PF 部門での言語外システムとのインターフェースの要請）によって EPP のメカニズムが言語システム内に組み込まれている可能性がある。ここでは，短くこの可能性について考察してみたい。言語研究では，伝統的に「主語-述語」という文の分割が大きな役割を果たしてきた（呼び名は，主題-題述など様々であるが，その意図している内容は概ね同じであると考えられる）。生成文法においても，動詞句内主語仮説によって，主語が動詞から直接に意味役割付与を受けるという考えが一般化するまでは，主語の意味が主語と動詞句全体との関係（主述関係）によって決まるとされていた（Chomsky 1981:42）。

しかし，その後，動詞句内主語仮説が一般化し，主語の意味役割付与も VP（もしくは vP）内部で直接に行われると考えられるようになってから，少なくとも形式的には，生成文法において主語-述語という分割の果たす役割はなくなった。確かに，能動文(92a)と受動文(92b)とでは，論理的意味が同じであり，(92a)が真であれば，(92b)も真である。

(92) a. John made the cake.

b. The cake was made by John.

したがって，（主語が何であるかに違いがあっても）どちらの文も同じ意味で，同じ LF 部門での解釈を受けるであろう。

しかし，言語使用の実際を想定してみると，(92a)と(92b)は明らかに「違う意味」である。(92a)は，「John に関する文」で，(92b)は「the cake に関する文」である。文が実際に使用される場面では，意味役割の情報に加え，文には必ずその主語，題目，話題があると感じられる。そして，その要素が，何らかの形で文の他の部分と区別される必要がある（そうでなければ主語，題目，話題を特定できない）。この観点から見ると，A 移動とは「主語」を明確にする移動であると考えられる。(92a)では vP 内部から John が繰り上げられ，文は「John に関する文」となる。逆に(92b)では，the cake が繰り上げられ，文は「the cake に関する文」となる。

このように，一般的に言語使用において，「文は何かに関する文でなければならない」という制約があると仮定してみよう。そうであるなら，どの文も必ず(93)の形をとることになる。

(93)　主語/題目 $_i$　　[t_i 他の要素]

(93)では，文の中から１つ主語/題目が選ばれ，それだけが他の要素から分離して現れている。主語/題目の意味役割自体は，（動詞句内主語仮説により）[ ]内部で与えられている。主語/題目が移動するのは，その文が何に関する文であるか明瞭にする，という言語使用の要請に応えるための操作であると考えることができる[21]。また EPP 素性とは，言語生成システムが，そうした言語使用の要請を取り込んだ，具体的な仕組みであると理解することができる。このような考察が正しいとすると，EPP 素性が常に T 要素に実現されなければいけないと考える理由はないことになる。他の要素から１つの要素を際だたせることができれば，EPP 素性が T に実現されても，また Pol に実現されてもいいはずである。さらに言えば，このような「言語外」からの要請は，T や Pol といった「言語内」のシステムに踏み込んだ要請をしていないと考えるのが自然である。「言語外」のシステムは「言語内」のシステムを判読することはできないと考えられるか

[21] Kiss (2002)，Landau (2007)に同趣旨の提案がある。また Williams (1994)の主述関係による意味役割付与の理論も，同じ直感を理論化したものと見ることもできる。

らである。あくまでも「言語外」からの要請は「文中で１つの話題を，他の要素と区別する形で提示せよ」といった，素朴な形をとって，それを各言語が，言語システム内部に，様々な形で翻訳し取り込んでいるのではないか。多くの言語で T がそのシステムの実行を担っているかもしれないが，それが Pol であってはいけないという必然性はない。以上のような考察から，本研究では，日本語の EPP 素性は Pol が持つと結論づけることにする。

もちろん，各言語で EPP がどの範疇に実現されるかは，主要部のパラメターや，複合述語の現れ方といった個別言語の特性からある程度予測可能であるかもしれない。また，それはそれ自身独立した，研究に値するテーマであろう。以下では，この問題はこれ以上考察せず，日本語では Pol が EPP 素性を持つという仮定すると，どのように文の産出が行われるか，その詳細を検討していきたい。

５．３．２．語彙動詞と Pol の関係

語彙動詞と Pol および T の要素は，（通常）形態音声的に１語化している。これは，これらの要素の間に間投詞「ね」を挿入できないことや，全体で１つのアクセント核しか持たないことで確認できる（肯定の述語も，V と T の間に，[aff] の主要部 E があることに注意）。

(94) a. 食べ-E-る
b. 食べ-な-い

(95) a. 食べ（*ね）E（*ね）る
b. 食べ（*ね）な（*ね）い

(96) a. tabEru/*tabErU
b. tabEnai/*tabEnAi

この節と５．３．４では，このような複合表現がどのレベルで，そしてどのようなプロセスで生成されるかを考察する。この節では語彙動詞と Pol の関係を扱い，５．３．４では Pol と T の関係を考える（次の節では「する」挿入の現象を集中的に論じる）。

語彙動詞と Pol は，別の範疇ではなく，たとえば，Pol の形態素が語彙動詞の変化パラダイムの１つとして実現されるという可能性はもちろんある（Sells

1995)。しかし，副助詞や係助詞で両者を分断することが可能である[22]。

(97) a. 食べは し-E（そして）
b. 食べは せ-ず（そして）

このことは，語彙動詞と Pol が，それぞれが別々に句構造に導入され，派生の過程で合成されることを示唆している。そうだとすれば，V と Pol との合体は，可視統語部門における主要部移動か，PF 部門における形態的併合で行われることになる。Lasnik (1995a)以来，それまで主要部移動で説明された多くの現象（の一部）が，PF 部門での形態的併合によるものである，と主張されるようになってきた。日本語でも，Aoyagi (1998a, 1998b)，青柳 (2001, 2006, 2008)，Keiko Miyagawa (1998)，Sakai (1998)，酒井 (2000)，Takano (2004)をはじめとする数多くの形態的併合の理論が提唱されている。

しかし，本研究では，V と Pol との関係が，統語的主要部移動によってなされると敢えて主張する。その一番大きな理由は，(97)に見られるような，V と Pol との合体/分離が，文の解釈に影響を与えることがあるからである（Hirata 2008）。再び左の等位節は否定辞を含まず，右の等位節だけが否定辞を含む(98)のケースを考察する。

(98) a. 太郎が [$_{PolP}$ [リンゴを食べ-E]（そして）[イチゴを食べな]] い.
b. 太郎が [$_{PolP}$ [リンゴを食べもし-E]（そして）[イチゴを食べはしな]] い.

(98a)で重要な観察は，左の等位節が，否定のスコープから外れることであった。その事実を，表示のように[aff]指定の範疇 E を想定することで説明した。そして，(98a)の両等位節で，助詞と補助動詞を用いて V と Pol を分断することが可能であった(98b)。これを念頭に(99)の文の解釈を考える。

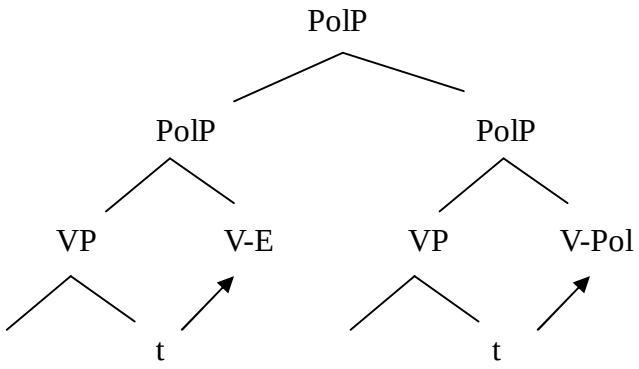
(99) 太郎が [$_{VP}$ [リンゴを食べも]（そして）[イチゴを食べも]] しない.

[22] (97)では，T の問題と分けて Pol を議論するために，左の等位節内の例を用いている。(左の）等位節内に T が現れないことは 4 章で確認済みなので，等位節内の例では，T の可能性を除去した上で V と Pol の関係を調べることができる。

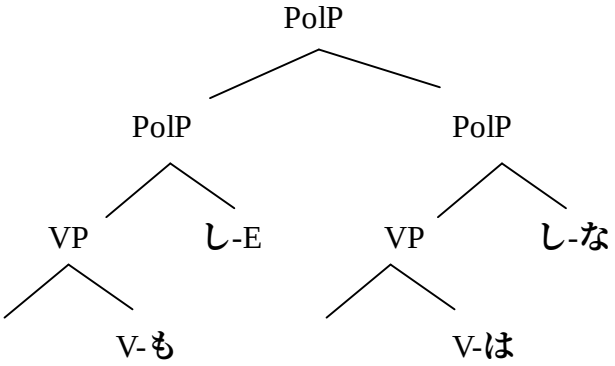
(99)は，(98b)の左の等位節から「し-E」の部分を取り除いた例文である。面白いことに，(99)では（表示のように）左右の VP が等位接続構造を作り，VP 全体が Pol の否定のスコープに入る，[VP & VP] Pol の解釈が可能である（左の等位節も否定された解釈が得られる）。この事実は，日本語に統語的な V-to-Pol 移動があると考えることで説明が可能である。(98a)では，左の等位節で統語的な V-to-Pol が起こり，等位節全体が PolP まで投射される。その結果，この[aff]の PolP は，右の[neg]の PolP と等位接続され，（右の等位節が持つ）否定辞のスコープから外れることが説明される。(98b)の左の等位節では，V-to-Pol の移動自体は助詞「も」によって抑制されているが，Pol の主要部として E が現れ，それを形態音声的に支えるために「する」挿入が適用されている。(98b)も，まさしく左の等位節に E が選択されているという事実から，PolP & PolP の構造が成立している（左の等位節が右の否定辞のスコープから外れている）。

これに対し，(99)では，左右の等位節の動詞に助詞「も」が付加され，これによって V-to-Pol の移動が左右の等位節で阻害されている。そのため VP & VP という等位接続構造が形成され，全体の VP が[neg]の「（し）ない」に否定される解釈が与えられている。(98)-(99)の句構造の概略は以下のようになる。

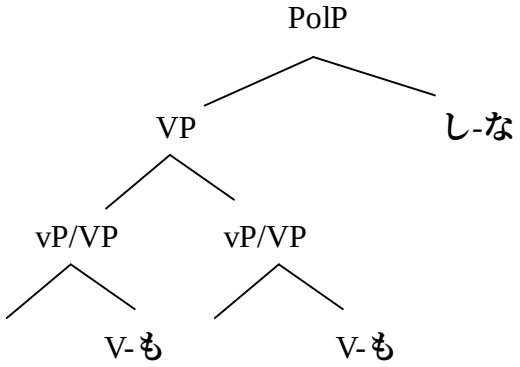
(100) (98a)の句構造の概略（の一部）



(101) (98b)の句構造の概略（の一部）



(102) (99)の句構造の概略（の一部）



このように，V-to-Pol の関係が，構成素と等位接続の可能性に変化をもたらすという事実は，当該現象が PF 部門ではなく，可視統語部門で起こっていることを示唆している。

また，V-to-Pol の関係は，等位構造制約にもしたがう。

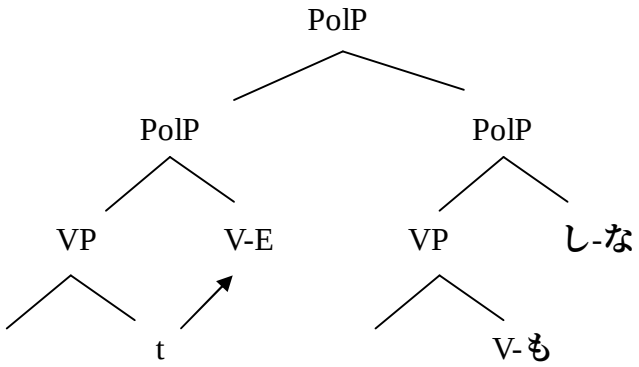
(103) a. 太郎が [$_{PolP}$ [$_{PolP}$ リンゴを食べ-E]（そして）[$_{PolP}$ イチゴを食べもし-な]] い.

b. *太郎が [$_{PolP}$ [$_{VP}$ リンゴを食べも]（そして）[$_{VP}$ イチゴを t] 食べ-な]] い.

(103)の例では，等位節のどちらか一方だけで，助詞の付加（とそれに伴う主要部移動の阻止）が起きている。右の等位節だけに操作が加わった(103a)は文法的であるのに対し，左だけで操作を行った(103b)は非文となる。これは次のように説明される。(103a)の左の等位節では，動詞に助詞が付加されていないので，そ

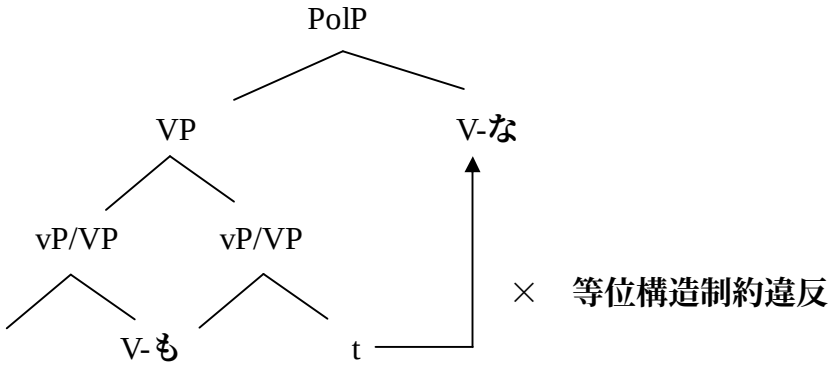
のまま V-to-Pol 移動が起こる[23]。そして右の等位節では V-to-Pol 移動が助詞の介在で阻害され，Pol を形態音声的に支えるため「する」挿入が適用される。その結果[aff] PolP & [neg] PolP の構造が作られ，この派生は問題がない。

(104) (103a)の句構造の概略（の一部）



(103b)では，左の等位節で助詞が動詞に付加され，V-to-Pol 移動が阻止されている。(98b)とは異なり，(103b)では，左の等位節で E が選ばれていない。そのため左の等位節は PolP まで投射されることなく（また「する」挿入が適用されることもなく），右の等位節とともに VP & VP という構造を形成する。ところが，その上に PolP が投射されると，右の動詞には助詞が付いていないので V-to-Pol 移動が起こることになる。しかし，この移動は明らかに等位構造制約に違反する。

(105) (103b)の句構造の概略（の一部）



[23] (103a)の左の等位節が PolP まで投射されなければいけない理由は以下で述べる。

(103)の文法性の対比は，V と Pol との関係が，等位構造制約にしたがうことを示している。(86)で示した文産出のモデルによれば，PF と LF への分岐が済んだ後，PF 部門には PF 部門に関連のある要素だけが存在するはずであるから，「等位構造制約」は定義することができない（構造自体が存在しないという考え方であるため）。ということは，等位構造制約にしたがう V-to-Pol の移動が，PF 部門での操作ではなく，統語部門での操作であるということになる[24, 25]。

---

[24] 等位構造制約が PF の現象であるとする研究に，Pesetsky (1997, 1998), Lasnik (2000), Merchant (2001)，Bošković (2002)がある。これに対し，Kato (2006:chapter 5)は詳細な反論を展開している。等位構造制約が PF の現象であるとする主張は，PF での削除によって等位構造制約の違反が回避されることを根拠としている。

(i) Bob ate dinner and saw movie that night, but he didn't say which ~~[movie Bob ate dinner and saw t]~~.
(Merchant 2001:223)

(i)では，右の等位節からだけ which (movie)が摘出移動を受けているが，等位接続構造を含む TP 全体が削除を受けているため，非文となることを免れている。Merchant によれば，統語部門で等位構造制約を違反すると，PF 部門で解釈が不可能な素性が構造に付与されることになる。そのため，そのまま派生が継続すると，この素性が PF 部門で解釈されずに非文となる。しかし，当該違反素性が PF で削除されれば，非文法性も回避される。この説明でも，等位構造制約違反そのものは，統語部門で起こることに注意されたい。

[25] 英語の Affix Hopping は，いち早く主要部移動に代わって形態的併合による説明が一般的となった言語現象である（Marantz 1988, 1989, Halle and Marantz 1993, Lasnik 1995a など）。Lasnik (1995a)は，次のような PF 部門での形態的併合理論を提唱する。

(i) a. The gorilla -s [VP eat apples].
b. The gorilla eats apples.

(ia)では，T 要素である三人称単数の形態素-s と語彙動詞 eat は隣接しているため，PF 部門で併合して eats となる(ib)。(iia)のように not が両者の間に介在すると，両者の隣接性が失われるため，形態的併合が妨げられる。

(ii) a. The gorilla -s not [VP eat apples].
b. The gorilla does not eat apples.

その場合には，(iib)のように do 挿入を適用し，-(e)s を救済する形となる。この説明を念頭に(iiia)を観察する。

(iii) a. The gorilla -s [$_{VP}$ eat apples and drink orange juice].

(iiia)では，等位接続された VP の左右にそれぞれに，原形のままの動詞，eat と drink が現れている。ここで T の要素-s と，左の被接続要素内の eat は隣接しているので，形態的併合の条件は満たされている。しかし，これを適用すると，非文となる。

(iii) b. *The gorilla eats [$_{VP}$ t apples and drink orange juice].

動詞句前置に関する制約も，V-to-Pol が統語的移動であることを示している。(106)のように日本語も，助詞で語彙動詞と時制の形態素を分断し，補助動詞を挿入すると動詞句前置の操作が可能となる（Tateishi 1991，Yatsushiro 1999 他）。

(106) a. 太郎がリンゴを食べた.
b. 太郎が [リンゴを食べも] した.
c. [リンゴを食べも] 太郎が t した.

(106c)では助詞「も」が動詞句に付き，「する」挿入によって時制辞が孤立することがないため，動詞句前置が許されている。しかし，このような動詞句前置の適用には，助詞が動詞句に付加することが前提となる。助詞がない場合には（「する」挿入を適用しても）前置は不可能となる。

(107) *[リンゴを食べ] 太郎が t した.

現在多くの研究者が主張しているように，V と T（本研究の枠組みでは V と Pol）との併合が PF 部門で行われるとしたら，(107)の非文法性は説明ができない。PF 部門での併合理論によれば，(107)は(108)のような派生をたどるはずである。

(108) a. 太郎が [$_{vP}$ リンゴを食べ] た.
b. [$_{vP}$ リンゴを食べ] 太郎が t た.
c. *[$_{vP}$ リンゴを食べ] 太郎が t し-た.

(iv)のように，主節が疑問文である場合，三人称単数の形態素-(e)s は T から C 位置へと繰り上げられ，その後に do 挿入が適用される。この派生は文法的である。

(iv) Does the gorilla [$_{VP}$ eat apples and drink orange juice]?

(iiib)と(iv)の差は，VP の等位接続構造から，非全域的適用の形で語彙動詞と T 要素の-s の併合が行われているかどうかだ。併合が行われる(iiib)は非文法的で，そうではない(iv)は文法的である。よって，一般的に形態的併合であると考えられている，英語の Affix Hopping の現象でも，等位構造制約が働いていると考えられる。このことは，Affix Hopping の現象を統語的操作としてとらえ直す可能性もあることを示している。５．３．４で再びこの問題を考察する。

統語部門での表示の(108a)では，仮定により動詞「食べ」と T（本研究の枠組みでは E）が併合を起こしていない。この段階で動詞句前置が起こると(108b)となる。そして PF 部門では V と T（E）が隣接していないため「する」挿が適用されて，(108c)が生成される。この派生には問題が無いはずであるが，実際は非文である。

しかし，V-to-Pol 移動が（助詞の介入により阻止されない限り）義務的であると考えれば，(108c)の非文法性は直ちに説明される。(108c)では，動詞句の前置により語彙動詞「食べ」の V-to-Pol（あるいは V-to-T）移動が阻まれていて，V の持つ主要部移動を促す何らかの素性が満たされていないと説明することができる（詳細は５．３．４を見よ）。

このように，V と Pol の関係は，併合が行われるか否かによって構成素関係とそれに伴う意味解釈に影響がある。両者の合体の過程は統語的な制約にもしたがう。また，動詞詞句前置の制約も V と Pol との関係が統語部門で形成されていることを示唆している。したがって，本研究では V-to-Pol が統語的な主要部移動と考えるのが適当であると結論する。

５．３．３．主要移動と「する」挿入のメカニズム

前の節では，日本語の V と Pol が，統語部門での主要部移動によって関係付けられることを，両者の関係が阻害された場合に構成素関係やそれに伴う LF での解釈が変わることなどをもとに示した。その際，(103a)の派生に関する問題が未解決のままになっていた。(103a)の例文で，左の等位節が否定のスコープから外れる理由を，左の等位節の VP の上に E が挿入され，等位節全体が PolP まで投射されるためであると説明した。しかし，左の等位節で E が選択されないという可能性もある。右の等位節ではいずれにしても助詞による V-to-Pol 移動の阻害があるので，左の等位節で E が選ばれなければ，[リンゴを食べ（そして）イチゴを食べも]という VP が形成され，VP 全体が否定辞に否定されるという解釈が得られるはずである。

(109) 太郎が [$_{PolP}$ [$_{VP}$ リンゴを食べ]（そして）[$_{VP}$ イチゴを食べも]] し-な]] い.

しかし，実際には(109)の左の等位節が否定のスコープに入ることはない。この節では，この事実も含め，V-to-Pol や，助詞の付加，並びに「する」挿入の細か

いメカニズムを論じる。

日本語の述語は様々な形で複合的な形を取る。そして一般に述語（動詞，形容詞，形容動詞，名詞＋断定の助動詞）が単独で現れることはなく，時制要素，否定辞，使役や受け身等の他の述語を伴う。

(110) a. 食べ（-E）-る
b. 食べ（-E）-た
c. 食べ-な-い
d. 食べ-させ（-E）-る
e. 食べ-続け（-E）-る
f. リンゴを 食べ-E（そして）

一見，述語等位接続構造の左の等位節には，何も後続しない「裸の」連用形述語が現れるように見える（「リンゴを食べ（そして）」のように）。しかし，(74)-(75)で見たように，このような場合も[aff]指定の Pol 主要部 E が後続していると考えられ，これは(110f)のように表示される。以下では，２つの述語的要素が連結されている場合，前の述語を「先行述語」，後の述語を「後続述語」と呼ぶことにする。前節で見たように，先行述語から後続述語への移動は統語部門で行われることになる。したがって，先行述語は(111)のような素性の指定を受けていると考えられる。

(111) 先行述語の統語的素性（の一部）
[+後続要素]

(111)は，先行述語が，統語的になんらかの後続要素と併合されなければならないということを述べている。

次に後続述語について考える。後続述語の一般的な特性は，それ単体では述語として成立せず，必ず先行述語を必要とするということである。(112)の後続述語は，いずれも単独で使うことができない[26]。

[26] (112a)の形は，「水がない」のような用法では可能であるが，助動詞としての「ない」を単独で用いることはできない。(112d)も「勉強を続ける」のような形は可能であるが，「動作の継続」を意味する助動詞的な使い方では，先行述語が必ず必要である。

(112) a. **食べ-ない/*ない**
b. **飲ま-せる/*せる**
c. **食べ-られる/*られる**
d. **飲み-続ける/*続ける**

これらの述語は，先行する述語があってはじめて機能するのであって，単独では意味的にも統語的に不完全である。したがって，(111)に平行する形で，後続述語は(113)の統語的特性を持っていると考えられる。

(113) **後続述語の統語的素性（の一部）**
[+**先行要素**]

(113)は，後続述語が，統語部門においてかならず何らかの先行要素と併合されなければならないということを表している。

通常，これら[+後続要素]と[+先行要素]の素性は，先行述語から後続述語への主要部移動によって照合され，削除されると仮定する。(114)がこれを表す。

(114) a. **食べ** **ない**
[+**後続要素**] [+**先行要素**]
b. t **－主要部移動→** **食べ-ない**
~~[+**後続要素**] [+**先行要素**]~~

(114b)では「食べ」が「ない」に主要部移動を起こし，その結果互いの持つ統語素性が照合・消去されている。

次に助詞が先行述語と後続述語の間に介在する場合を考察する。

(115) a. **食べ-ない/*食べ-もない/食べ-も（ね）し-ない**
b. **飲ま-せる/*飲み-もせる/飲み-も（ね）さ-せる**
c. **食べ-られる/*食べ-もられる/食べ-も（ね）さ-れる**
d. **飲み-続ける/*飲み-も続ける/飲み-も（ね）し-続ける**

(115)のように，先行述語と後続述語の間に助詞が介在すると，そのままの形では，非文となり，後続述語の前に「する」挿入を適用すると文法的となる。また，その際には，（先に見たように）間投詞「ね」が，助詞の後，そして挿入された「する」の前に現れうる。このことは，助詞の介在によって，先行述語＋後続述語の複合語が，「先行述語-助詞」と「し/さ-後続述語」の２つの単語（分節）に分断されることを示している。

(116) a. 先行述語-後続述語
b. 先行述語-助詞　し/さ-後続述語

係助詞や副助詞も必ず何らかの語（述語には限られないが，ここでは議論を述語に絞っておく）に付随しなければいけないから，[+先行要素]の素性を持っていると考えられる[27]。また，「する」挿入によって挿入される補助動詞も，（「する」を語彙動詞として使った場合と異なり）必ず，後続する述語が必要であるから，[+後続要素]の素性を持っていると考えられる。これをまとめると(117)-(118)となる。

(117) 助詞「も」「は」「こそ」「さえ」の統語的素性（の一部）
[+先行要素]
(118) 補助動詞「する」の統語的素性（の一部）
[+後続要素]

これらの仮定で，助詞の介在と「する」挿入のプロセスが説明される。通常「食べ-ない」は，(114)のように主要部移動をすることで互いの素性を消去する。ところが，「食べ」が句構造に導入された直後に助詞が付加されると，主要部移動以前に「食べ」の素性の照合が済んでしまう。

[27] Aoyagi (1998a, b)，青柳 (2001, 2006, 2008)の主張するように，述語につく副助詞や係助詞は，接語的付加詞と分析するのが正しいと思われる。ただ，その場合でも，本研究で示しているようなメカニズムが事実の説明には必要であることに注意。

(119) a. **食べ　　も**
[+後続要素]　[+先行要素]
b. **食べ-も**
~~**[+後続要素] [+先行要素]**~~

すると,「食べも」を移動する駆動力がなくなり，主要部移動の適用は回避される。その後，後続述語である「ない」が句構造に導入される。通常は「食べ」が主要部移動することで「ない」の[+先行要素]の素性は照合・消去されるが,すでに「食べ」の素性は助詞が消去してしまっている。そこで「する」挿入が適用されることによって,「ない」の[+先行要素]の素性が消去される。

(120) a. **食べ-も**　　**ない**
~~**[+後続要素] [+先行要素]**~~　[+先行要素]
b. **食べ-も**　　**し-ない**
~~**[+後続要素] [+先行要素]**~~　~~**[+後続要素] [+先行要素]**~~

この説明によると，助詞が先行述語に付加されると，自動的に主要部移動は阻止されるので,「*食べもない」のような形は生成されないことになる。

３．２．１で指摘したように，先行述語に付加される係助詞や副助詞は，語彙同士の選択関係を阻害するような，それ自身最大投射を形成するような主要部ではないと考えられる。それでも，[+後続要素]と[+先行要素]の素性の組み合わせを仮定すれば，助詞が結果的に（主要部移動の制約に頼らない形で）主要部移動を阻害することを説明することができる。

この節の初めに指摘した問題は，この仕組みで解決される。問題は，(121)のように左の等位節の「リンゴを食べ」を（E なしの）VP までの投射とし，助詞の介在した右の VP 等位節「イチゴを食べも」と等位接続させ，全体を否定辞のスコープに入れることがなぜできないのかであった。

(121) **太郎が** [$_{PolP}$ [$_{VP}$ **リンゴを食べ**]（**そして**）[$_{VP}$ **イチゴを食べも**]] **し-な**]] **い.**
[+後続要素]

(121)の右の等位節では,「食べ」と「も」，そして「し」と「な（い）」がそれぞ

れ互いの統語的素性を照合し，消去している。ところが，左の等位節では，先行述語である「食べ」が単独で存在し，それが持つ[+後続要素]の素性が照合されないままになっている。(121)の構造が不可能なのは，この「食べ」の持つ統語素性が消去されていないことが原因であると説明されることになる。「食べ」の持つ[+後続要素]の素性を消去するには，[+先行要素]の素性を持つ要素を左の等位節に入れる他はない。E や「ない」を入れれば（E も[+先行要素]の素性を持つ後続述語である），左の等位節は PolP まで投射され，助詞を入れれば，VP の投射が可能であるが，それぞれ構造に応じて否定のスコープが変わる。

(122) a. [$_{PolP}$ リンゴを食べ-E]（そして）[$_{PolP}$ イチゴを食べも し-な]
b. [$_{PolP}$ リンゴを食べ-ず]（そして）[$_{PolP}$ イチゴを食べも し-な]
c. [$_{PolP}$ [$_{VP}$ リンゴを食べ-も]（そして）[$_{VP}$ イチゴを食べも] し-な]

以上のように，助詞と「する」挿入によって分断可能な複合述語は，統語的主要部移動によってその合体の過程が説明可能である。このような複合述語の他に，決して分断ができない複合動詞がある。

(123) a. 食べ歩く/*食べも歩く/*食べもし歩く
b. 食べ散らかす/*食べも散らかす/*食べもし散らかす

このような複合述語は，もちろん１つだけのアクセント核を持つ。

(124) a. tabearUku/*tabEarUku
b. tabetirakAsu/*tabEtirakAsu

したがってこの類の複合述語は，統語部門ではなく，Lexicon で複合化が行われれ，統語部門に導入される時にはすでに１語化していると分析するのが適切であろう（こうした類の複合述語の性質に関しては，影山 1993, 1996，Nishiyama 1998，由本 2005，Fukushima 2005 等を参照されたい）。

最後に「する」挿入の理論的側面を考察しておく。「『する』挿入」という表現自体が明確に示しているように，「する」や「ある」といった形式動詞は，それ自身が項構造を持つことのない形式的な言語要素である。この節での説明に

よれば，これらの要素も[+後続要素]の素性を持つことによって，助詞によって先行述語との統語的併合が阻まれた後続述語の[+先行要素]の素性を照合・消去し得るのであった。問題は，こうした補助動詞の挿入が派生のどの段階で行われるかである。上での説明が正しいとすれば，補助動詞の挿入が可視統語部門での操作であるということになる[28]。先行述語と後続述語の結合は，通常統語部門での主要部移動で行われる。それが阻止されて補助動詞の挿入が起こるのであるから，その適用も統語部門で起こると考えるのが自然である。この考えにしたがうと，「『する』挿入」という言い方は適切ではない。補助動詞「する」や「ある」も Lexicon からの語彙の数え上げの時点で，独立した言語要素として選ばれていることになる。「食べさえ し-E-た」の「し」が E の前に挿入されるプロセスは，他の言語要素がしかるべきスロットに挿入されるプロセスと同じということになる。

補助動詞挿入が PF 部門の操作であると考えられている理由は，述語同士の隣接性とその阻害が規則の適用の条件になっていると思えるからであろう。しかし，３．２．１節で見たように，（英語の do 挿入とは異なり）日本語の補助動詞挿入には，動詞と，形容詞・形容動詞との間で「する」と「ある」の使い分けが見られる。このことは，補助動詞挿入に統語的な情報（範疇に関する情報）が必要なことを示している。もちろん，それでも範疇の情報を音声的な素性の一部に組み込んで，補助動詞挿入を PF 部門で行うことも可能であろう。しかし，本節での考察に基づくと，可視統語部門が補助動詞挿入（補助動詞の統語構造への導入）を担っていると考えるのが理論全体の整合性から望ましいと考えられる。

５．３．４．Pol と T の関係

５．３．２節，および５．３．３節では，日本語に V-to-Pol の主要部移動が存在し，この移動は助詞の介在によって駆動力を失うと提案した。次に，もう１つの主要部の関係である，Pol と T の併合について考える。Kishimoto (2007, 2008) は，日本語に Neg-to-T（Pol-to-T）の主要部移動があると主張した。その主な理由は２つである。第１の理由は，３．１．４や，５．２．１．２で見たように，

[28] 技術的には，[+後続要素]の素性照合だけが統語部門で行われると仮定することで（[+先行要素]の素性照合が PF 部門で構わないとすれば），「する」挿入を PF 操作と考えても支障はない。

英語と違い日本語では，主語位置に否定極性項目が現れることであった（それは必ずしも Pol-to-T 移動に頼らなくても説明がつくことはすでに見たとおりである）。第２の理由は，３．２．１の最後に指摘したように，Pol と T との形態を，助詞や形式動詞を用いて分断することができないことである。

(125) a. 美しい/美しくもある
b. 忙しい/忙しくもある
(126) a. 食べない/*食べなくもある
b. 飲まない/*飲まなくもある

(125)は通常の形容詞と時制辞の結合で，それは助詞と補助動詞「ある」によって分断することが可能である。これに対し，否定辞「ない」は，変化形式が通常の形容詞と同じであるにもかかわらず，助詞と形式動詞によって時制辞から分離することができない(126)。このことは，日本語に義務的な Pol-to-T 移動があるからであると Kishimoto は主張する。Kishimoto の説明は，(127)のような仮説に基づく。

(127) a. 日本語の複合述語形成は，統語部門での主要部移動による場合と，PF 部門での（隣接性に基づく）形態的併合による場合がある。
b. PF 部門で（隣接性違反によって）述語同士の形態的併合が阻まれると，補助動詞の挿入が適用される。
c. 助詞が派生的複合語の内側に含まれてはならない。

まず，(125)のような，語彙的形容詞と時制辞の場合，その関係は PF 部門の併合で行われると主張される。そのため，助詞によって両者の隣接性が損なわれると，「ある」挿入が適用され，文法的な形が派生される(127b)。一方，否定辞と時制辞の複合述語は，統語的な Pol-to-T 移動によって形成される。そのため，助詞が否定辞についても，そのまま Pol-to-T 移動が起こる。その結果「*なく-も-T」という複合語が形成され，これは，派生的複合要素の内側に助詞が含まれる形となるので，非文となる(127c)。また，補助動詞の挿入は PF 部門のことなので，主要部移動が起こった後の，「*なく-も-T」に「ある挿入」を適用し，(127c)の違反を回避することはできない。

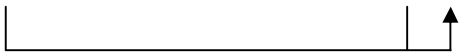
しかし，このような Pol-to-T の理論は，等位接続に関する基本的な事実を説明することができできない。たとえば，述語等位接続構造では，時制要素を除外しかつ否定辞を含む等位節同士を連結することができる(128)。

(128) [太郎が笑わず]（そして）[二郎が泣かな] い.

しかし，もし Pol-to-T 移動が義務的であるとしたら，少なくとも(128)左の等位節で Pol-to-T 移動が起こっていない理由が説明できないことになる。また，Pol-to-T 移動による説明は，(129a)に誤った解釈を与えてしまう。

(129) a. 太郎がリンゴを食べ（そして）イチゴは食べない.

b. 太郎が [$_{PolP}$ [リンゴを食べ t]（そして）[イチゴは食べ t]] な-い.



繰り返し見てきたように，通常の肯定の述語の等位節と否定の述語の等位節を「そして」を用いて接続すると，左の等位節は，右の等位節中の否定のスコープから外れる。しかし，もし Pol-to-T 移動が義務的であるとしたら，(129a)は(129b)の派生を持つことになる。(129b)では，等位接続された否定辞を含む左右の等位節から，否定辞が全域的適用の形で T 位置へと繰り上げられている[29]。この派生が正しいとするなら，(129b)で，左右の等位節が否定されるはずである。しかし実際には，(129b)の左の等位節は否定のスコープから外れる。したがって Kishimoto (2007, 2008)の説明は，少なくともこれらの事実を説明する，何らかの別の手立てが必要である。

本研究では，Kishimoto の「否定辞と時制辞を分断することはできない」という重要な観察をもとに，Pol と T の複合関係について別の分析を提示したい。Kishimoto の研究の出発点の１つでもある Lasnik (1995a)は，英語の時制辞と動詞の併合関係が２種類あることを，（疑似）削除の現象から示した。

[29] （Pol-to-T 移動が起こるという仮定の下では）(129b)の右の等位節だけが否定辞を含んでいると考えることはできない。そうであるなら，Pol-to-T 移動が右の等位節からだけ適用され，等位構造制約違反が引き起こされてしまうからである。

(130) a. John slept, and Mary will (sleep) too.
b. *John was here, and Mary will (be) too.

語彙動詞の場合，(130a)のように，先行する動詞が過去形（slept）であっても，削除される動詞は原形（sleep）であってよい。しかし，be 動詞の場合，先行動詞が過去形（was）で，削除された方が原形（be）という組み合わせは許されない(130b)。この事実は，次のように説明される。助動詞としての be や have は，時制に対して完全に変化を伴った形で句構造に導入される。逆に語彙動詞は時制変化なしに句構造に導入され，PF 部門で T 要素との併合が行われる。この仮定のもとでは，(130)の各文は，移動や併合が行われる前に(131)のような形を取ることになる。

(131) a. John T sleep, and Mary will ~~sleep~~ too.
b. *John T was here, and Mary will ~~be~~ too.

語彙動詞の(131a)では，この段階で左右の動詞の形態が完全に一致し，完全な形態的一致の条件の下で削除が可能になる。反対に be 動詞の例(131b)では，移動や併合の前であっても，形態の一致は見られず，削除の適用ができないとされる。

(125)-(126)で，語彙的形容詞と時制辞は助詞と補助動詞を用いて２つの単語へと分断できるのに対し，否定辞と時制辞はそのような分断ができないことを見た。これと同じように，語彙動詞と助動詞としての be/have も，２つの単語へと分解が可能であるかどうかに関して対比を示す。

(132) a. John ate apples.
b. John did not eat apples.
(133) a. The apples were eaten.
b. *The apples did not be eaten.
c. The apples were not eaten.
(134) a. John has eaten apples.
b. *John does not have eaten apples.
c. John has not eaten apples.

語彙動詞は not の介在によって時制辞から分離することができるが(132)，助動詞の be/have は分離が不可能である(133)-(134)。こうした事実から，Lasnik は，be/have が完全に時制変化をした形で V のスロットに導入されるのに対し，語彙動詞は原形のまま句構造に導入されると主張する。

英語の語彙動詞と be/have，そして日本語の語彙的形容詞と否定辞の対比をより忠実な形でとらえようとするなら，日本語の否定辞も時制辞を伴ったまま句構造に挿入されるという可能性が出てくる[30, 31]。本研究ではこの可能性を追求したい。このアプローチには様々な利点がある。まず第１に，Kishimoto の，否定辞と時制を助詞と補助動詞で分断することはできないという観察が，Pol-T がもともとこの形のまま句構造に導入されると考えれば，自動的に説明がつく。句構造に導入された段階で１語化している要素を，２つの単語へと分断するという操作は実際ありそうにないからである。

４．３．３で見た等位節部分削除の適用制約も，時制辞が Lexicon から Pol の一部として実現されるという仮説を支持する。４．３．３では，(135)のような例で「が/の」交替が不可能であることから，T 単独に等位部分削除を適用することができないと主張した。

(135) [[太郎が/*の笑い~~った~~]（そして）[二郎が/の泣いた]] 理由

(135)では，左右に時制辞を伴った等位節が現れ，左の等位節の T 要素単独に等位節部分削除が適用されている。一般に等位節部分削除は「が/の」交替の適用を妨げない。(135)の左の等位節で「が/の」交替が許されないことから，(135)のような，T 要素単独に適用される等位節部分削除は存在せず，（非時制の）述語等位接続構造は，基底生成時から T 要素を含んでいないと主張した。さらに，T 要素単独に等位節部分削除を適用できないのは，形態音声的に１語となっている V-T のような要素の一部に削除規則を適用できないからであるとした。また，助詞と補助動詞で V と T を分断すると，（V と T が別の言語単位へと分断される

30 日本語の形容詞・形容動詞・名詞＋断定の助動詞が述部として用いられる(125)のような例に関しては，５．５で議論する。

31 Sells (1995)の提案を一部受け入れた形となる。また Fukushima (1999)でも同様の趣旨の分析が提示されている。Kitagawa (1986)がこうした分析の先駆けであると考えられる。

ため）T 要素単独への削除が可能であると指摘した。

(136) [[太郎が/の笑いも~~した~~]（そして）[二郎が/の泣きもした]] 理由

[aff]の主要部 E を想定したこの章での PolP 理論で再解釈すると，(136)の例文が示しているのは，V と T が分断されると T 単独に等位節部分削除が適用できるということではなく，V と Pol-T が分断されると Pol-T に等位節部分削除が適用できるということである。これまで示してきたように，否定辞を含まない述語の場合でも，語彙動詞と T の間に音声的に空の，[aff]指定の主要部 E が生成されていると考えられる。これを勘案すると，(136)の正確な表示は，補助動詞と T の間に E を挟んだ(137)となる。

(137) [[太郎が/の笑いも ~~し E た~~]（そして）[二郎が/の泣きも した]] 理由

(137)の表示では，明らかに削除を受けているのは Pol-T（し-E-た）である。このことは形態音声的具現を持つ[neg]の主要部「ない」を用いて削除を調べるとより明確になる。

(138) [[太郎が/の笑いも ~~しなかった~~]（そして）[二郎が/の泣きも しなかった]] 理由

(138)で削除されているのは，単独の T ではなく，Pol-T で，しかも削除が起こっても「が/の」交替が可能である。したがって，（助詞と補助動詞で V から切り離すと）Pol-T 全体への等位節部分削除の適用は可能であることになる。

(135)の例文に戻ると，この例文が示しているのは，V-T という複合述語の T 単独への等位節部分削除が許されない，ということではなく，Pol-T という複合述語の T 単独への等位節部分削除が許されないということである（すなわち，１語化しているのは V-T ではなく Pol-T であるということになる）。述語同士の関係が明確になるように，左右の等位節で助詞と補助動詞によって V と Pol-T を分断した例でこれを確認してみよう。

(139) [[太郎が/*の笑いも し-E-た]（そして）[二郎が/の泣きも し-E-た] 理由
(140) [[太郎が/*の笑いも せ-ず-た]（そして）[二郎が/の泣きも し-なかっ-た] 理由

(139)は左右に肯定の TP が接続された述語等位接続構造で，(140)は否定の TP 等位接続の例である。それぞれ V と Pol-T が助詞と補助動詞によって分離されている。各々の例の左の等位節で，Pol-T の複合述語から T 要素だけが削除されている。表示の文法性が示すように，削除が起こった場合は，「が/の」交替は許されず，これらの例が，Pol-T から T 部分を削除して派生しているのではないことがわかる。（基底生成時から PolP & PolP の等位接続であると考えられる。）

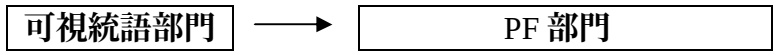
整理すると，V-Pol-T という複合体の V と Pol-T を助詞と補助動詞で分断すると，Pol-T への等位節部分削除の適用が可能となる。これは，(137)や(138)の例文で「が/の」交替が可能であることからわかる。(139)や(140)のように，Pol-T という連続の一部を削除すると「が/の」交替は不可能となる。これは，Pol-T という複合述語の T 部分に単独で等位節部分削除を適用することはできないことを示している。Pol-T の T 部分単独に削除規則を適用できないのは，Lexicon の段階から全体が 1 語化して句構造導入されるためであると説明できる。英語の助動詞 have/be も時制変化を伴って句構造に導入される。has や was から時制要素を取り去って have や be の形で削除規則を適用することができないように(131b)，Pol-T という形態で導入された 1 単語の一部を削除規則の対象とすることはできないのである。

英語の「語彙動詞と時制」や日本語の「語彙動詞と Pol-T」のように潜在的に分断することが可能な複合述語の場合，その一部を削除することが可能であるという一般化が得られた。しかし両者に違いもある。英語の場合，具体的に語彙動詞と時制を分断しなくても削除が可能であるのに対し(131a)，日本語の場合，たとえ潜在的に分断が可能でも，実際に分断がされていない場合は削除ができない(135)。これは，英語の場合，語彙動詞と時制の併合が PF で行われ，日本語の V と Pol-T との併合が統語部門で行われると考えることで説明される[32]。どち

[32] 注 25 で示したように，英語の Affix Hopping も等位構造制約の効果を示す。そうだとすると，Affix Hopping が適用された時点で，統語構造が存在しているとになる。この結論は，「英語の Affix Hopping が PF の現象である」とするここでの主張にとって問題となる。しかし，Affix Hopping に関しては，この他未決の問題が多い。たとえば，なぜ通常の副詞は否定辞と違い，Affix Hopping を妨げないのか，PF 部門での形態的併合理論では説明がつ

らの言語でも，削除規則は構成素といった統語的単位にとらわれない形で適用することが可能なので，PF 部門での操作であると考えられる。日本語の場合，V は（助詞と形式動詞で分断しない限り）統語部門で Pol-T と合体している。そのため，PF 部門で Pol-T だけに削除規則を適用することができない（助詞と補助動詞で分断している場合にはもちろん，削除規則の適用が可能）。これに対し，英語では，Spell-Out 後も，はじめは V と T が別の形態のままである。ここで左右の等位節の V が同じ形態であるという条件の下，削除規則が働けば V 単独の削除が可能となる（(131a)で実際に削除を受ける右の述部は，派生を通じて V と T は合体しないが，左右の V の形態が一致していることが削除の条件であることに注意）。削除規則が適用されなければ，PF の後の段階で V と T は形態的な併合を受ける。(141)がこれらの操作の順序関係を示す。

(141)



日本語の V-to-Pol　　削除規則　　英語の V と T の併合

さらに５．３．２で見た，動詞句前置に関する制約も時制辞が句構造に導入される時点で Pol と一体となっているとする主張を裏付ける。日本語の動詞句前置では，前置を受ける要素が助詞を伴っていないと非文となるのであった。

(142) [リンゴを食べ *（さえ）] 太郎が t し-た.

時制辞が常に Pol とともに句構造に導入されるとすると，(142)の「する」挿入は，T 要素に対してではなく，Pol（E）に対して行われていることになる（Pol と T は分断できないので，T 単体を支えるような「する」挿入は起こらないことになる）。

かない。

(i)　John never/often eats vegetables.

Baker (1991)が主張するように，英語の Affix Hopping の現象は，「周縁的な」現象として，独自の（個別文法による）説明をするのが適切であるのかもしれない。

(143) [$_{vP}$ リンゴを食べ *（さえ）] 太郎が t し-E-た.
[+後続要素]

そうだとすれば, この例文で移動されている要素は（PolP ではなく）確かに vP/VP であるといえる。(143)において助詞「さえ」がないと，非文となるのは語彙動詞「食べ」の持つ[+後続要素]の素性が照合・消去できないからであると説明することができる。

この説明で, 時制辞が常に Pol の一部として句構造に導入されるという仮定が決定的な役割を果たしている。もし，Pol と T が分断可能で，T の形態素を「する」挿入によって救うことができるなら，(142)の例文は，PolP 前置による(144)の構造を持つことができるはずである。

(144) [$_{PolP}$ リンゴを食べ-E] 太郎が t し-た.
~~[+後続要素] [+先行要素]~~ ~~[+後続要素] [+先行要素]~~

(144)の構造では,「食べ」の持つ[+後続要素]の素性が，E の持つ[+先行要素]の素性と照合され消去される。また挿入された「し」が T の持つ（と仮定し得る）[+先行要素]の素性を照合・消去し，文法的な派生が可能であると予測される。しかし, 実際には（「さえ」が前置された句に付随しないと）(142)は非文であり，(144)の派生を阻止する手立てが必要である。Pol（E）と T が句構造に導入された時点で一体化していると考えれば，(144)のような，（E と T が動詞句前置によって分断された）構造は作りようがない。そして例文(142)に対する，唯一可能な構造は(143)ということになる。しかし（上で見たように）(143)において助詞が付加されなければ,「食べ」の持つ[+後続要素]の素性が消去されず，文は排除されることになる。

本節では日本語の時制辞が句構造に導入された段階で Pol 上に実現されていることを，等位節部分削除と動詞句前置の制約に基づいて示した。次に考えなければならないのは，主要部移動の問題である。英語の be/have は時制形態素を伴って句構造に導入され, その後統語部門において V-to-T 移動を起こす。では, 日本語の時制辞を伴って句構造に導入された Pol は, 統語部門で Pol-to-T 移動を起こすのだろうか。これは,「が/の」交替の現象で棚上げとなっていた問題と密接に関連しており，次の２つの節で慎重に議論する。

５．３．５．Pol-to-T

前の節では，Lasnik (1995a)，Kishimoto (2007, 2008)の研究を足がかりに，日本語の否定辞と時制辞が初めから１つの言語単位として句構造に導入されるという提案をした。また，４章の最後で，述語等位接続構造のうち，最後の等位節だけが「が/の」交替を許すことを，未決の問題として残していた。

(145) a. [[太郎が怒り] [二郎が泣き]（そして）[三郎が笑っ] た] 理由
b. *[[太郎の怒り] [二郎が泣き]（そして）[三郎が笑っ] た] 理由
c. *[[太郎が怒り] [二郎の泣き]（そして）[三郎が笑っ] た] 理由
d. [[太郎が怒り] [二郎が泣き]（そして）[三郎の笑っ] た] 理由
e. *[[太郎の怒り] [二郎の泣き]（そして）[三郎が笑っ] た] 理由
f. *[[太郎の怒り] [二郎が泣き]（そして）[三郎の笑っ] た] 理由
g. *[[太郎が怒り] [二郎の泣き]（そして）[三郎の笑っ] た] 理由
f. *[[太郎の怒り] [二郎の泣き]（そして）[三郎の笑っ] た] 理由

(145)は，３つの非時制等位節を持つ述語等位接続構造である。それぞれの主語名詞句に「が/の」交替を適用すると，全部で８通りの組み合わせができる。しかしそのうち，３つの等位節のすべてで「が/の」交替の起きていない(145a)と，最後の等位節でだけ交替の起きている(145d)だけが文法的である。この理由については４章で未解決のままであった。この節では，はじめに，Pol+T（以降，範疇としての Pol や T と区別し，時制辞を伴った Pol の形態を「Pol+T」と表示する）は Pol-to-T 移動を引き起こさないという主張をする。言い換えれば，Pol のスロットに導入された Pol+T が，統語部門ではこの位置に止まり続けるという主張をする。次節では，この仮定に基づいて(145)のパラダイムの解明を試みる。

前節では，基本的に「Pol と T が同じ１つの言語単位」として（Pol+T の形で）句構造に導入される，という主張をした。Pol-to-T 移動の問題を考えるに先立って，この主張の厳密な内容を検討しておく。否定辞が時制辞と独立に現れうることは，明らかである。

(146) a. リンゴを食べず（そして）
b. [リンゴを食べな] そうだ
c. [リンゴを食べないで] ほしい

述語等位接続構造の左の等位節(146a)や，非時制の補部内(146b, c)で，否定辞が現れうるからである。逆に，時制辞は，必ず否定辞（あるいは[aff]の Pol）を伴って現れる。筆者の知る限り，時制辞が現れうる場面で，その直前に否定辞が現れえないという言語環境は日本語に存在しない。（通常否定辞が現れない「食べる」「食べた」のようなケースも，本研究の枠組みでは「食べ-E-る」「食べ-E-た」と分析されることに注意。）そうだとすると，Pol と T の関係でいえば，(147)が一番正確な言い方になる[33]。

(147) T の形態素は必ず Pol（の一部）に実現される。

(147)は，逆は真ならず，すなわち「Pol の形態素は必ず T を伴って実現される」とは限らない，ということが含意されている。

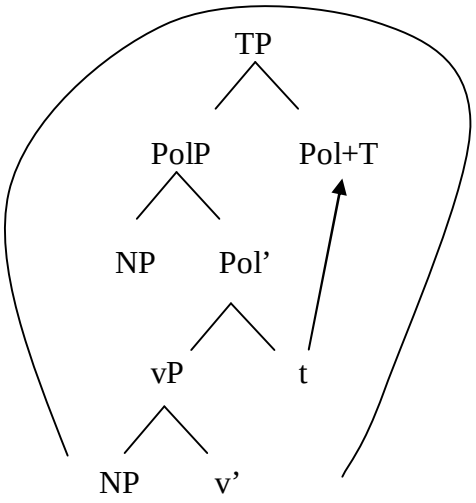
以下では，(147)の一般化を前提に，日本語の時制辞を伴った否定辞が，主要部 Pol に基底生成され，ここから移動されることはなく（統語部門での）派生を終える，という分析を提示する。３種類の経験的事実がこの分析を支持する。まず，（語彙動詞を伴うにせよ，伴わないにせよ）Pol+T が T のスロットまで繰り上がるとすると，Miyagawa (2001), Miyagawa and Arikawa (2007)で提示された，主語の数量詞句が，否定のスコープから外れるという事実が説明できなくなる。

(148) 全員がそのテストを受けなかった.（全員＞ない，*全員＜ない）

(148)の主語「全員が」は否定辞のスコープから外れ，「誰もそのテストを受けなかった」という解釈だけが(148)に可能である。SpecPolP にある主語の数量詞が，Pol のスコープから外れることを保証するには，Pol がその位置にとどまることが必要である（否定辞が数量詞をそのスコープに入れるには，前者が後者を c 統することが条件であると仮定している）。しかし，Pol+T が，Pol-to-T 移動を起こせば，SpecPolP にとどまるっている主語の数量詞が，Pol+T に c 統御され，部分否定の解釈が与えられると誤って予測されてしまう。

[33] (147)を言い換えれば，時制の形態素は，句構造に導入される際に，すでに Pol の一部に併合された形を取っているということになる・

(149)



Pol のスコープが及ぶ範囲

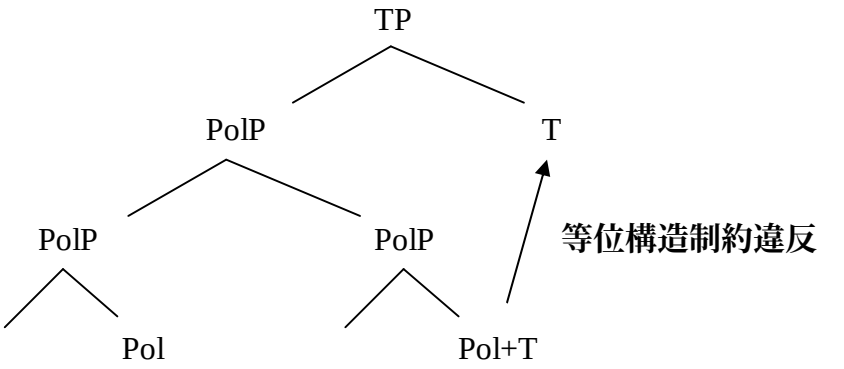
したがって，Pol+T は LF への解釈に影響がある統語部門において，Pol の位置にとどまっていると考えることができる。

次に，統語部門で Pol+T が Pol-to-T 移動を受ければ，その移動は等位構造制約にしたがうと予測される。しかしこの予測は正しくない。このことを(150)を例に考える。

(150) 太郎が笑わず（そして）二郎が泣かない.

(150)は，左右の等位節が V-Pol を含んだ述語等位接続構造である。そして時制辞は文末に１つだけ現れている（「い」が時制辞である）。(147)によれば，時制辞は Pol の一部として実現される。だとすれば，(150)のような述語等位接続構造では，左の等位節には Pol（時制辞を含まない否定辞の形態）が，右の等位節には Pol+T（時制辞を含む否定辞の形態）が生起していると考えられる。右の等位節から Pol+T が Pol-to-T 移動をすれば，等位構造制約の違反を引き起こすと予測される。

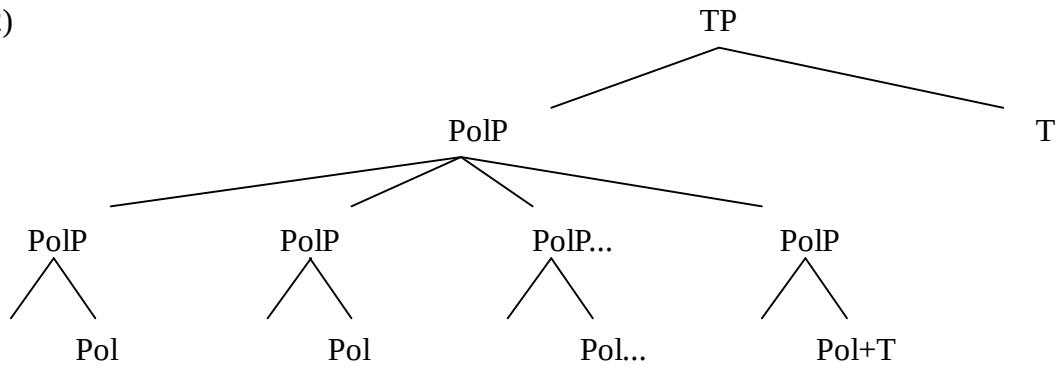
(151)



実際，述語等位接続構造において，主要部移動が等位構造制約にしたがうことは確認済みなので（(105)の説明を思い出されたい），(150)が文法的であることから，Pol+T は主要部移動を起こしていないということがわかる[34]。

Pol-to-T 移動が起こらないと考える最後の理由は，そのように想定することで，等位節内における「が/の」交替の適用可能性の差異(145)を説明できるからである。(145)のパラダイムから，（時制辞が末尾の等位節以外には含まれない）述語等位接続構造では，最後の PolP だけで「が/の」交替が許される，という一般化が引き出せる。この一般化を説明するには，最後の等位節だけが何らかの意味で「特別」であると仮定しなければならない。最後の等位節だけが，（Pol ではなく）Pol+T を含むと考えることでこれが可能となる。

(152)



(152)の構造によれば，最後の PolP だけが Pol+T を含むという意味で「特別」なので，これが等位節内における「が/の」交替の非対称性を説明する手がかりを与えてくれる。(152)の構造で（等位構造制約の問題は棚上げにするにしても）

[34] Kato (2006:chapter 4)では，否定極性項目の認可のために，Neg（[neg] Pol）が等位構造制約にしたがわずに主要部移動を受けることがあると主張されている。

最後の PolP から Pol+T が T 位置に繰り上げられてしまうと，すべての等位節がいわば「平等」の立場になり，問題となっている非対称性を説明できなくなってしまう。これを回避するには，「が/の」交替の認可時（これは統語部門であると仮定する）には Pol+T が最終等位節内にとどまっていると考えることが必要なのである。

以上の考察から，日本語の時制辞は常に Pol の一部として実現され，そのように生成された Pol+T は，少なくとも統語部門において，Pol 位置にとどまることがわかった。それでも，Pol+T と T は，派生のどこかで意味と形態の一貫性を確認する必要がある（T の持つ時制の指定と Pol+T の持つ形態の間の一貫性が保たれる必要がある）。Pol+T と T とは，Lexicon において別の範疇に属するので，Lexicon でこれらの一貫性を確認するすべはない。また，今見たように，統語的には Pol+T と T は主要部移動による相互確認はしていないと考えられる。残された可能性は２つである。１つは，統語部門において，Pol+T と T が（主要部移動ではなく）素性の移動によって関係しているという可能性である（素性の移動には，等位構造制約がかからないというさらなる仮定が必要である）[35]。もう一つの可能性は，Pol+T と T との相互確認が PF 部門で行われるという可能性である[36]。本研究では，後者の可能性を追求する。Pol+T と T の認可関係の成立が，統語的な階層関係ではなく，線形順序の隣接性が条件となっていると考えられるからである。

Pol+T が Pol の位置にとどまり，T との関係が統語的な素性の移動によって行われるとしたら，述語等位接続構造で等位節のどれか１つが Pol+T を含んでいればいいはずである（T 自身は文末に１つ生成されるだけであるから）。ところが，最後の等位節以外に Pol+T が入った(153a, b)は非文である。

(153) a. *[太郎が笑った（そして）二郎が泣き（そして）三郎が怒り] T.
b. *[太郎が笑い（そして）二郎が泣いた（そして）三郎が怒り] T.

[35] 素性の統語的移動に関しては，Chomsky (1995), Lasnik(1995b), Ochi (1999), Agbayani (2006)等を参照のこと。

[36] Takano (2004)は，日本語に「[コピーし&ファイルし] た」という形の V & V の等位接続が可能であることから，このような構文では，右の等位節の V と時制辞 T が PF 部門で形態的併合を受けると提案する。以下の議論は，この提案の部分的修正と拡張であると考えることができる。

(153a)では，３つある等位節のうち，初めの等位節だけが Pol+T を含み，(153b)では，２つめの等位節だけが Pol+T を含んでいるが，どちらも非文法的である。(152)の樹状図から明らかなよう，どの等位節の Pol も T に対して構造上同じ位置にある（Pol はすべて T に c 統御されている）。しかし，それでも(153a. b)の例は非文で，Pol+T は最後の等位節になければならない。

(153) c. [太郎が笑い（そして）二郎が泣き（そして）三郎が怒った] T.

(153a, b)と(153c)の対比は，Pol+T と T に課せられた局所性は，統語構造上の c 統御関係ではなく，音声的な隣接条件であることを示している[37]。

かつて主要部移動や，適正統率の概念でとらえていた現象の多くが，ミニマリストプログラムの枠組みでは，PF での形態的併合として再分析されてきた（Bošković 1997，Bošković and Lasnik 2003 など）。その際，大きな役割を果たしたのが「隣接性」の概念である。原理とパラメターの枠組みでは，補文標識 that の省略現象は，適正統率の概念でとらえられていた（Stowell 1981）。しかし，その基本的な例で，空の補文標識（「Ø」と表示している）と，その認可子である V とが，隣接していることが認可に重要な役割を担っていることは明らかである。

(154) a. It seems [that/Ø Sally is pregnant].
b. It seemed at that time [that/*Ø Sally was pregnant].
c. [That/*Ø Sally is pregnant] is clear.

認可子であると考えられる語彙動詞と Ø が隣接した(154a)では，that の省略が可能である。これに対し，語彙動詞と Ø が副詞表現「at that time」で隔てられていたり(154b)，(154c)のように主語に that 節が用いられると，動詞と Ø の隣接性が阻害され that の省略は不可能となる。Bošković and Lasnik (2003)は，このような観察に基づいて，空の補文標識は，V 要素への接辞であると主張する。そして Ø の接辞化は，隣接性の条件の下 PF 部門で行われると提案する。そうだとすると，Ø と V の隣接していない(154b, c)では，補文標識の that が省略できないこ

[37] James Huang 氏の指摘による。

とが説明できることになる。

that の省略現象と Pol+T の認可の平行性は，Pol+T と T との関係が，PF での併合によって説明されるべきであることを示唆していると思われる。そこで，ここでは具体的に，Pol+T の形態素は，Spell-Out での PF への分岐後に照合・消去されなければならない形態音声的素性[+T]を持つと仮定する。Pol+T は，さらに現在形[present]と過去形[past]の素性を，Pol+T の形態に応じて持つとする。これに対し T は，Pol+T 上の形態音声的素性を照合・消去するための素性[+T]を持ち，さらに現在形は[present]の指定の形態音声的素性を，そして過去形は[past]の形態音声的素性を，それぞれ意味素性の指定に応じて持つと仮定する。また Pol+T は意味素性として[negatibve]/[affirmative]だけを持ち，T は意味素性として[present]/[past]だけを持つと仮定する。以上の仮定を，「（食べ）ない」を具体例に考える。

(155) a. 統語部門

	否定辞（Pol+T）	現在時制（T）
音声素性	nai	Ø
	[+T, present]	[+T, present]
意味素性	[negative]	[present]

b. LF

	否定辞（Pol+T）	現在時制（T）
意味素性	[negative]	[present]

c. PF

	否定辞（Pol+T）	現在時制（T）
音声素性	nai- Ø←形態的併合－	
	~~[+T, present]~~	~~[+T, present]~~

統語部門(155a)では，それぞれの語彙項目が独立して，指定された素性を持っている。音声素性として（実際には照合・消去される）[+T, present]の素性を双方が持つことが仮定されている[38]。LF と PF 部門への分岐後，LF 部門では[negative]と[present]という，形態に適合した意味が出力される。PF 部門では，形態的併合

[38] PF 部門で形態的併合を誘発させる必要のある理論では，このような「発音されない」形態音声的素性があることを仮定せざるをえない。

によって，それぞれが持つ[+T, present]が消去されている。述部が[affirmative]であれば，「（食べ）E-ru」が Pol+T として選ばれ，(155)と同様の過程を経て，形態音声的素性の照合が（隣接性の条件の下に）行われることになる。

(153a, b)のように，T と隣接しない等位節が Pol+T を含むとどうなるであろうか。そうすると，PF で，(156)のような形が残ることになる。

(156) a. Pol+T [+T, past] Pol Pol T [+T, past]

b. Pol Pol+T [+T, past] Pol T [+T, past]

(156a)では初めの等位節が Pol+T を持ち，(156b)では，２つめの等位節が Pol+T を持っている。これらの PF 表示では，Pol+T と T が隣接していない。そのため形態的な併合が行えず，[+T, past]という素性の消去ができない。これらは，音声形式を持つ素性ではないので，PF のインターフェースで解釈されず，文は適切に排除されるのである。

現在時制が T で選ばれていて，過去形の Pol+T の形態素が選ばれたらどうなるであろうか（T 自体は音声形式を持たないので，これを除外できる仕組みになっていることが必要である）。

(157)

	否定辞（Pol+T）	現在時制（T）
音声素性	nakat-ta	Ø
	[+T, past]	[+T, present]
意味素性	[negative]	[present]

この場合は，「nakat-ta」という形態に合わせて，Pol+T は[+T, past]という素性を持つことになる。この素性は T の持つ[+T, present]とは違う素性なので，形態的併合によって消去できずに，非文となる。

(158) PF

	否定辞（Pol+T）	現在時制
音声素性	nakat-ta- Ø ←形態的併合－	
	*[+T, past] *[+T, present]	
	↑ ↑	
	素性が異なるので消去されずに残る	

以上，見てきたように，時制辞を伴って Pol へと導入された Pol+T は，統語部門で T 位置への移動を引き起こすことがなく，Pol の位置にとどまる。そして T の意味素性（現在/過去の指定）と Pol+T の形態の一致は，PF 部門での形態的併合によって確認される。主要部移動ではなく，PF 部門での併合によって両者の関係が確認されると考える理由は, Pol+T と T との間に隣接性の条件が課せられているからであった。

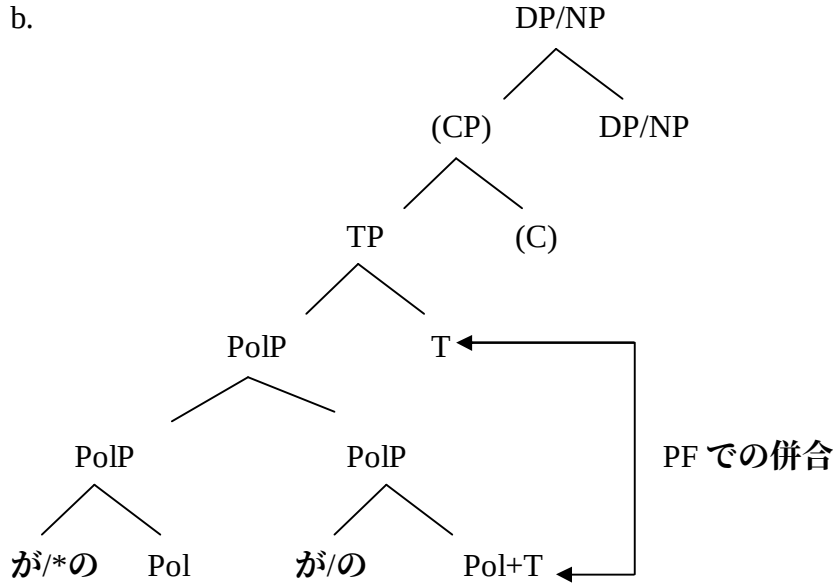
５．３．６．「が/の」交替と Pol+T

前節では，　日本語の時制辞が常に Pol の上に現れ，Pol+T という形を取ること，Pol+T は統語部門で Pol 位置にとどまること，そして Pol+T と T は，PF 部門の形態的併合によって形態の一貫性が保証されること見た。この節では，これらの仮定に基づいて，PolP を等位節とする述語等位節接続構造のうち，最後の等位節だけで「が/の」交替が可能であることを説明する。また提案するシステムによって，等位接続構造を含まない通常の複合名詞句内で「が/の」交替が可能であることも保証されることを見る。

(159a)は，従属節に（非時制の）述語等位接続構造を持つ複合名詞句である。それぞれの等位節で「が/の」交替が適用されているが，左の等位節では「の」格が許されない。

(159) a. [太郎が/*の笑い（そして）二郎が/の泣いた] 理由

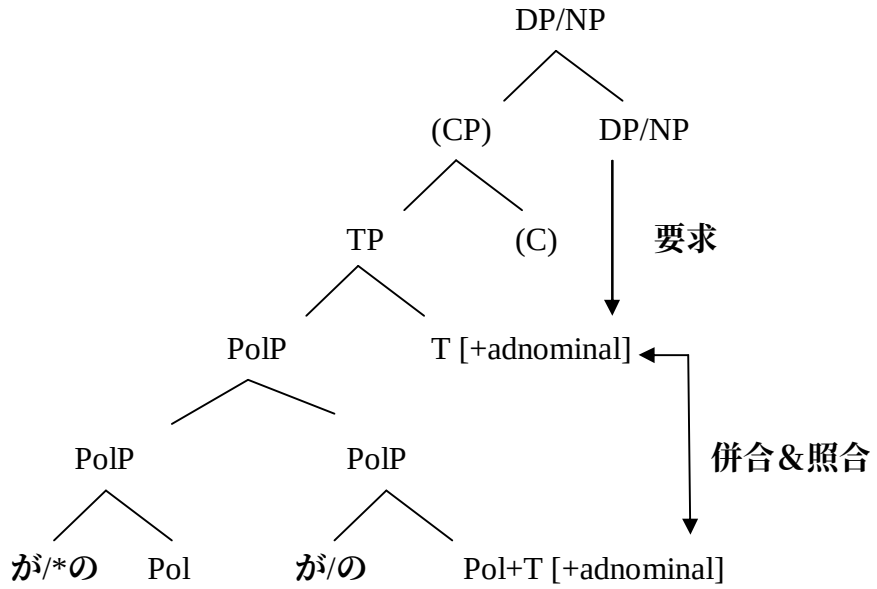
b.



このような述語等位接続構造では，最後の PolP だけが Pol+T を含み，Pol+T と T は，PF で形態的併合を受ける。(159b)がこの分析を示す[39]。複合名詞句の従属節では，T が連体形の形態素を持つ。これは DP/NP によって要求されていると考えた。また，具体的な連体形の形態自体は Pol+T が持つ。連体形に関する T と Pol+T の照合も PF での併合で行われるとすると，(159b)は(160)のように精密化される（連体形に関する素性は[+adnominal]と表示する）。

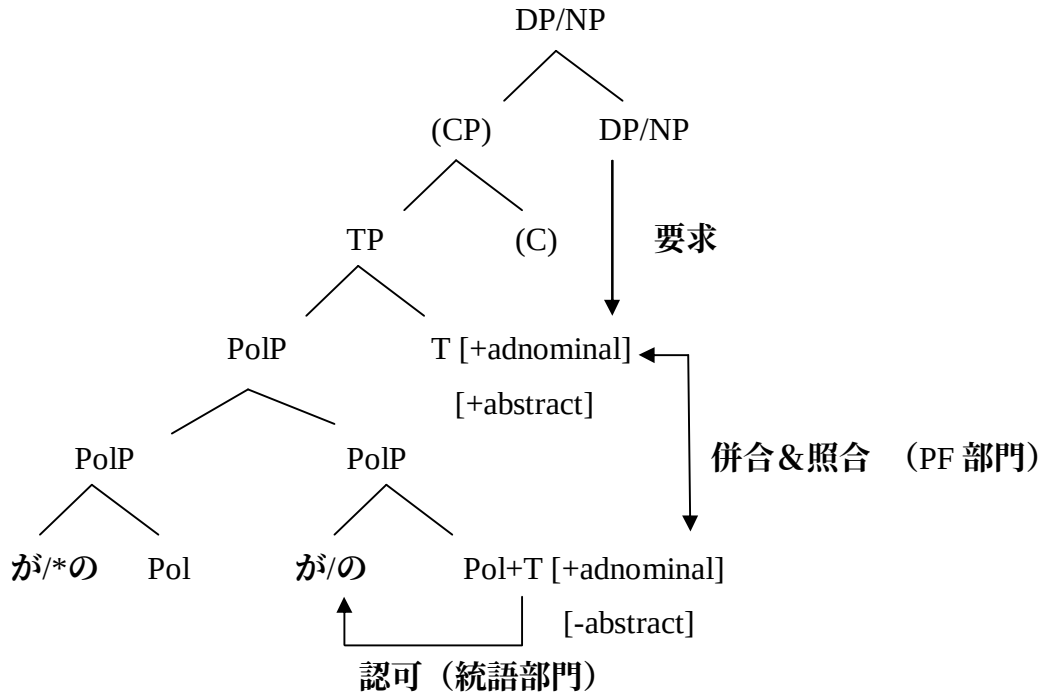
[39] 日本語の複合名詞句の従属節が，CP まで投射しているのか，あるいは，直接 TP が従属節となっているのか議論の分かれるところである。Murasugi (1991)は明確に CP 投射を否定し，Watanabe (1996)は CP の投射を仮定している。Ishii (1991)，Kayne (1994)，Hiraiwa (2005)の議論も参照せよ。本研究では，CP の投射に関して中立の立場を取っておく。

(160)



(160)では DP/NP が埋め込み文の T に連体形[+adnominal]であることを要求し，これに対応する形で，実際に形態を担う Pol+T も[+adnominal]の素性を持っている。(160)の構造で，T 自身は，左右の PolP とそれに含まれる左右の主語を c 統御するので，T の持つ[+adnominal]が，「が/の」交替を認可すると考えたのでは，「が/の」交替に関する非対称性が説明されない。非対称性を説明するには，T ではなく，実際に連体形の形態を持つ Pol+T が名詞句上の「の」格を認可すると仮定する必要がある。(160)の表示で T に付与された素性[+adnominal]は，（実際には音声的具現を持たないという意味で）抽象的な素性であるのに対し，Pol+T の[+adnominal]は実際に連体形の形態を持つ具体的な素性であると考えられる。この差をさらに[±abstract]の素性で表現すると，(160)は(161)のように書き換えられる。

(161)



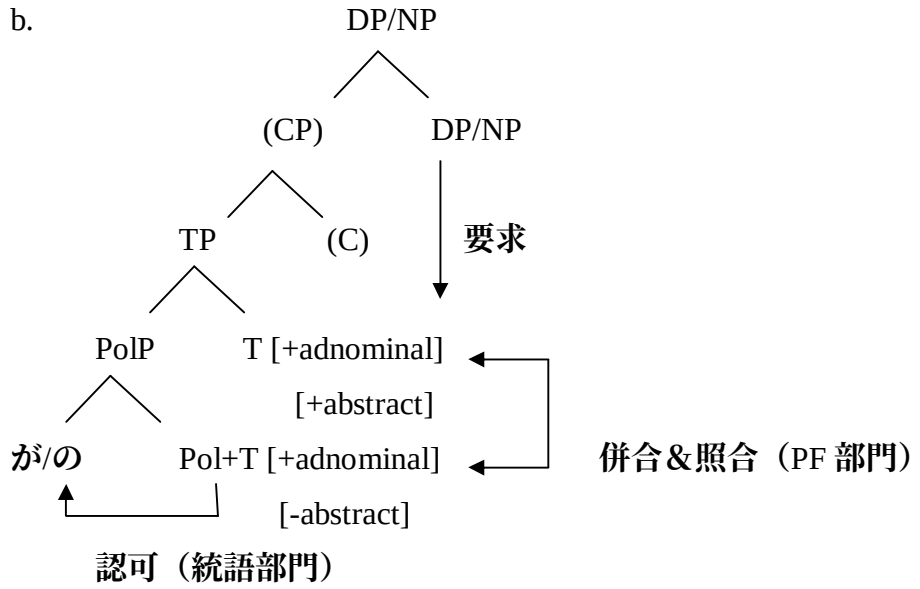
(161)の表示によって, 左右の等位節の非対称性が適切に表現される。すなわち, 右の等位節の Pol+T だけが持つ, [+adnominal]と[-abstract]の素性の組み合わせが, 主語上の「の」格を認可すると考えればよいのである。

PF 部門で, T と Pol+T の併合後, 両者の[+adnominal]と[±abstract]の素性が（これらは音声的に解釈可能な素性ではないので）照合・消去されると仮定すると, PF 部門では, 左右の PolP を区別することができない（そのため,「が/の」交替の差を PF 部門で説明することはできない）。そこで, (161)の「が/の」交替（あるいは「の」格認可）は, PF/LF 分岐前の統語部門で行われると仮定することにする。派生の順番でいえば, まず統語部門で[+adnominal]と[-abstract]の素性を持つ Pol+T が（右の等位節で）「の」格名詞句を認可する。左の等位節では, 主要部 Pol が,「の」格認可に必要な[+adnominal]と[-abstract]の素性を持たないため,「の」格は認可されない。左右の等位節を c 統御する T は, [+adnominal]の素性は持つものの, [-abstract]は持たないため, やはり左の等位節の「が/の」交替を認可しない。PF 部門では, 隣接性の条件の下, 右の等位節内の Pol+T と T が形態音声的に併合され, それぞれの持つ非音声的素性（PF のインターフェースで解釈されない素性）が削除される（[+adnominal]に関しては, 素性の同一性によって削除が行われ, [±abstract]に関しては互いの素性を確認する形で削除が行われると仮定する）。

等位接続構造を含まない複合名詞句での「が/の」交替も同じ形で説明される。

(162) a. [太郎が/の笑った] 理由

b.



複合名詞句主要部の DP/NP に要請される形で T が[+adnominal]の素性を持ち，これに合わせる形で Pol+T も[+adnominal]の素性を持つ。また，T は連体形の形態素自体は持たないため[+abstract]の素性を持ち，Pol+T は逆に具体的な形態素を持つため[-abstract]の素性を持つ。「の」格は Pol+T の持つ[+adnominal]と[-abstract]の素性の組み合わせにより，統語部門で認可を受ける。さらに PF 部門で Pol+T と T は併合され，[+adnominal]と[±abstract]の素性の照合・消去が行われる。このように Pol+T の持つ具体的な連体形の形態素が「が/の」交替を認可すると考えることで，述語等位接続構造の最終等位節でだけ交替が可能なこと，そして，等位節を含まない複合名詞句の補文でも交替が可能なことが説明できる。

その一方で，主格に関しては，等位節内の述語が Pol であるのか，Pol+T であるのかに関係なく認可されている。日本語の主格は T 要素によって認可されるという Takezawa (1987)の仮定にしたがえば，(161)や(162b)で，T が SpecPolP の名詞句に対して「例外的格付与」の形で主格を認可していると考えることができる[40]。とりわけ(161)においては，T が等位接続された２つの PolP の各々の指定部にある名詞句の主格を例外的格付与の形で認可していると考えることがで

[40] 時制辞によらない主格付与の分析には，Kuroda (1965, 1978, 1983)，Fukui (1986)，Fukui and Takano (1998)，Fukui and Sakai (2003)等がある。

きる。この主格の認可は，英語の例外的格付与による目的語の認可と平行した関係となる。

(163) a. John believes [her to be a teacher].
b. John believes [me to be a doctor] and [her to be a teacher].

(163a)では，believes が，埋め込み文の指定部にある名詞句の目的格を認可し，(163b)では，全域的適用の形で２つの埋め込み文指定部の目的格名詞句を認可している。

日本語の主格認可が，このように最大投射をまたぐ形で行われることは，Takezawa (1993, 1994)で提案されている（３．１．３で部分的にその主張をすでに見ている）。日本語の「思える」「見える」のような述語は，非時制の節を補部として取る。

(164) a. ジョンに [メアリーがとても素敵に] 思えた.
b. ジョンに [メアリーがとても美しく] 思えた.

そしてこれらの埋め込み文中の主格名詞句は，この位置にとどまることができるのであった（３．１．３の議論を参照されたい）。そうだとすれば，(164)において，埋め込み文の主格主語は，「外側から」格付与（認可）をされていると考えるしかない。Takezawa (1993)は，(164)のような文で主節の V-T が，埋め込み文の主語に対し，（埋め込み文の範疇をまたいだ）例外的格付与を行っていると主張する。

これまで本研究では，日本語の主語が SpecPolP までしか繰り上がらないことを見てきた。T が主格の認可を行っているとするなら，実は(164)のような例は例外ではなく，常に主格の認可は「例外的格付与」の統語構造で行われているということになる（(162b)の構造を参照のこと）。(159a)で例外的格付与が全域的適用の形で行えるように，(164)のような例でも，単一の認可子（主節の T）が等位接続された複数の節の主格主語を同時に認可することができる。

(165) ジョンに [[メアリーがとても素敵に]（そして）[サリーがとても美しく]] 思えた.

(165)では，２つの埋め込み文の主語「メアリーが」と「サリーが」が，文末の時制辞「た」によって，同時に主格の認可を受けている。このことも，日本語の主格認可が c 統御の条件の下，１対多の関係でなされうることをさらに裏付けているといえる。

５．３．７．分散形態論による対案

前節では，述語等位接続構造での「が/の」交替の適用可否に関する等位節間の非対称性が，連体形の時制形態素を伴った Pol（Pol+T）の生成位置に基づいて説明されると主張した。この節では，分散形態論（Distributed Morphology）の枠組みでの対案を検討する。対案は，前節の説明よりも優れた点があるものの，不自然な仮定もしなければならないことを見る。

分散形態論は，Marantz (1988, 1989)，Halle and Marantz (1993)らが提唱する，生成文法（ミニマリストプログラム）と整合性のある形態論の理論である。分散形態論の一番の特徴は，言語要素が（はじめに）統語構造へと導入される際，その形態音声的な情報が伴わない，という仮説である。その代わりに可視統語部門と PF の間に，形態構造（Morphological Structure）という表示のレベルを設け，そこで形態音声的に１語化した要素に語彙挿入が行われるとされる。また，「形態音声的な１語」は，統語的な構造での終端要素（terminal elements）として定義されるので，形態構造の段階でも統語構造が存在すると仮定されている（Halle and Marantz 1993:114）。

前節で見た，等位節間での「が/の」交替の非対称性は，この分散形態論によれば次のように説明されるだろう。まず，形態音声は形態構造まで導入されないので，連体形の T の存在が前提となる「の」格の認可は，（可視統語部門ではなく）形態構造で行われることになる。語彙の挿入は，主要部移動や，形態的併合の適用の後，形態音声的な１語が決定してから行われる。「太郎が笑い（そして）二郎の泣く理由」という例で，具体的に派生を示すと(166)のようになる（議論と表示の簡素化のため E は省略している）。

(166) a. [[NP-NOM V] & [NP-POSS V] T] NP 可視統語部門

認可

b. [[NP-NOM V] & [NP-POSS V]←T] NP 形態構造

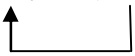
形態的併合

c. [[NP-NOM V] & [NP-POSS V-T]] NP 形態構造

↑

語彙挿入

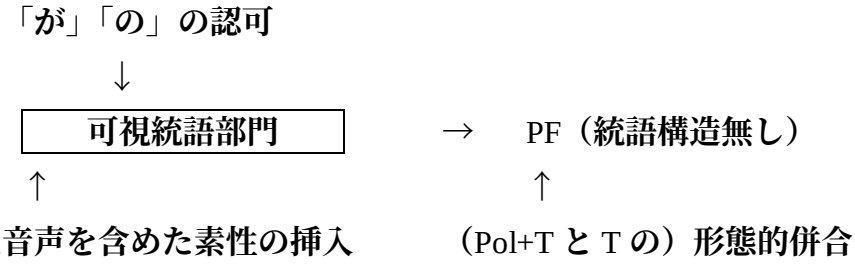
d. [太郎が 笑い]（そして）[二郎の 泣く] 理由 形態構造



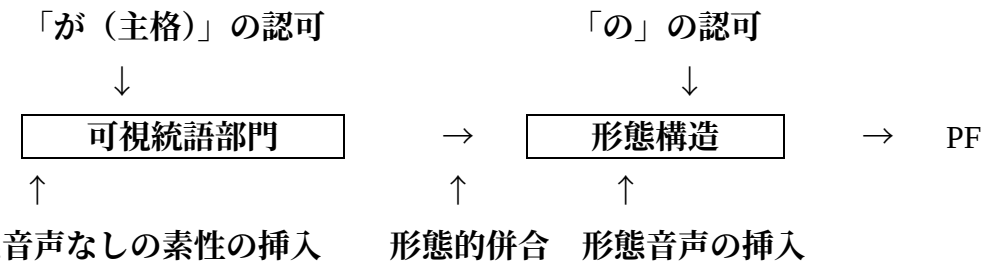
認可

(166a)では，形態音声を持たない素性の束としての言語要素が統語構造に導入され，述語等位接続構造を含んだ複合名詞句を形成している。この段階で T が左の等位節の名詞句の主格を（c 統御の条件のもとで）認可している（右の等位節の主語が主格の場合には，右の等位節にも同じことが起こる）。派生が形態構造に進んだ(166b)では，右の等位節にある V と T が（隣接性の条件のもとで）形態的併合を受けている（T が V へと併合されると仮定する）。その後，(166c)で，それぞれの統語構造の終端要素に形態音声素性が挿入される（語彙挿入）。時制形態素を伴った「泣く」は，形態音声的な１語として，右の等位節の V-T の節点へと挿入されることになる（複合名詞句内なので V-T は連体形である）。左の等位節は V が単独で現れるため（本研究では V-E ということになるが），これに合わせる形で連用形の「笑い」が挿入される（分散形態論でのこうした動詞の変化形の挿入プロセスについては，田川 2008 が詳しい）。この後（すなわち動詞の形態が決定した後），「の」格の認可が行われると考える。すると，右の等位節には V-T のスロットに連体形の「泣いた」があるため，その主語の「の」格が認可される。逆に左の等位節には，連用形の「笑い」しかないために，「が/の」交替がおこらないことが説明される（V-T の併合が起こった後には V-T が右の等位節内に含み込まれていることに注意）。(167)-(168)は，本研究の枠組みでの派生の進行と，分散形態論での派生の進行を並べて示している（LF への分岐は省略し，□は，統語構造が存在することを示している）。

(167) **本研究での枠組み**



(168) **分散形態論の枠組み**



この分散形態論による対案は，前節で提案した説明よりも優れている点がいくつかある。まず，本研究の説明では，左の等位節の V のスロットには「笑い」を，そして右の等位節の V のスロットには「泣く」を，派生のはじめから非対称的な形で挿入すると仮定しなければいけない。対し，分散形態論の枠組みでは，統語部門と形態構造での操作が済んだ段階ではじめて語彙（形態音声素性）が挿入されるので，この非対称性が解消されている。

また，「が/の」交替に現れる「の」格は，T 要素の連体形によって認可される。上記の分散形態論の説明よれば，「の」格認可が形態音声の挿入の後でなければならない。しかし，形態がない段階では当然認可ができないので，語彙の挿入後に「の」格認可が行われるという順序も（とりわけ指定する必要もなく）自然と説明がつく。

「の」格の認可が行われるときには，統語的な構造が必要である。連体形がある側の等位節（右の等位節）の「の」格を認可する必要がある一方で，連体形が無い側の等位節（左の等位節）の「の」格は認可しないようになっていなければいけないからである（その区別は統語的になされていると考えられる）。しかし，このことも形態構造の存在を想定し，そこで利用できる統語構造に基づいて語彙の挿入が行われるという仮定から自然と説明される。語彙挿入が起こった後，直ちに「の」格認可が行われれば，この時点では統語構造が残って

いると考えられるからである。

さらに,「が/の」交替の説明とは別に，分散形態論による説明は，述語等位接続構造の形態の非対称性に関する問題も綺麗に解決する。述語の等位接続構造では，左右の等位節の統語的な範疇が同じでも，接続の組み合わによって等位節間に形態の違いが出ることがある。中でも，注 9 で指摘したように，左の等位節に否定辞が現れた場合，その形態は「ない」ではなく「ず」となる。右の等位節にも否定要素「ない」が現れると，左右で否定の形態素が非対称的になる。

(169) [太郎がリンゴを食べず]（そして）[二郎がイチゴを食べな] い.

本研究の枠組みでは，左右の否定の形態をあらかじめ指定するか，あるいは正しい組み合わせと間違った組み合わせの両派生を生成させ，正しい組み合わせの派生だけが収束する，といった仮定しなければいけない。（これは本研究だけの問題ではなく，分散形態論を採用しない枠組みでは，いずれにせよ対処しなければならない問題である。）しかし，分散形態論によれば，可視統語部門-形態構造と派生が進んで，すべての計算が済んだ後に語彙の挿入が行われる。「ず」や「ない」の形態は，例えば「連用中止法では『ず』を，現在時制を伴う場合には『ない』を挿入せよ」といった形で指定することが可能である。

こうした利点の一方で，分散形態論による「が/の」交替の説明には，1 点大きな問題がある。それは，(166b)の形態的併合を，等位構造制約に違反する形で行わなければならないことである。先に見たように，併合の後に統語構造に基づいて「の」格の認可を行う必要があることから，併合の段階で統語構造が存在すると仮定することはどうしても必要である。しかし，そのためには，併合が等位構造制約に従わない形で行われると考えなければならない。注の 25 でも見たように，英語の Affix Hopping でも等位構造制約の効果が見られる。Affix Hopping は，いち早く分散形態論で取り上げられ，形態的な併合によって説明された現象である。したがって,「形態的併合は等位構造制約の適用を受けない」と主張することもできない。この理由から，本研究では，最終的に分散形態論による対案を採用しない。しかし，上で見たように，分散形態論には，述語等位接続構造を説明する上で有利な点が多々ある。等位構造制約の問題の克服も含め，分散形態論での述語等位接続構造の分析は今後の大きな研究課題として

おきたい。

５．３．８．「が/の」交替の局所性

前節で,「が/の」交替は Pol+T が認可していること，そして主格認可は T が例外的格付与の形で行っていることを見た。この非対称性から，当然主格主語に比べて所有格主語の分布はより制限されることになる。また，これまでも，主語上の「の」格には様々な条件が課せられていることが指摘されてきた（４．３．２を参照のこと)。この節では，さらにこれまでは指摘されることのなかった「が/の」交替の条件を提案し，今後の研究の指針としたい。

(170)のような「思える」「見える」を主節動詞とする文は，複合名詞句の補文としても用いられる。

(170) a. [ジョンに [メアリーがとても素敵に] 思えた] 理由
b. [ジョンに [メアリーがとても美しく] 思えた] 理由

「思えた」が，名詞の修飾文として用いられているので，これら動詞が連体形であることがわかる。しかし，この環境では，埋め込み文主語に対し主格の代わりに所有格を用いることはできない。

(171) a. ??[ジョンに [メアリーのとても素敵に] 思えた] 理由
b. ??[ジョンに [メアリーのとても美しく] 思えた] 理由

T と埋め込み文主語の統語的位置は(170)でも(171)でも変わらないので，所有格認可には，主格認可よりも厳しい局所性が課せられていることがわかる。より具体的には, T と埋め込み文主語の間には, 節の境界があり,「が」格の場合は, これをまたぐ形の認可が可能であるのに対し,「の」格の場合はこれが許されないと考えることができる。

これまでも，交替の対象となる名詞句が，別の CP 節に埋め込まれると「が/の」交替が不可能となることは知られていた（Ura 1993, Watanabe 1996, Hiraiwa 2002, 2005)。

(172) a. [将来大地震が/の起きる] 可能性

b. [[将来大地震が/*の起きると] いう] 可能性

（Hiraiwa 2005:129）

(172a)に対し，(172b)では「と（いう）」という C 要素が追加され，これによって交替が阻止されている。(171)の事実は，これよりもさらに厳しい局所性が，「が/の」交替に課せられていることを示している。

「が/の」交替を節の境界をまたぐ形で適用することができないことは，V-A の形式を取る複合述語と「が/の」交替の相互作用を観察することによっても裏付けられる。日本語の動詞の目的語は，通常対格でマークされ，主格を用いることはできない[41]。

(173) a. [私は英語を/*が話す] T.

b. [私はリンゴを/*が食べる] T.

ところが，動詞に形容詞「れる/られる」「たい」などが付加して複合述語となると，全体が形容詞化して，(174)のように主格目的語が現れるようになる（このような主格目的構文の分析に関しては，Tada 1992，Takezawa 1993, 1994，Koizumi 1995, 1998，Yatsushiro 1999 等を参照のこと）。

(174) a. [私は英語を/が話せる] T.

b. [私はリンゴを/が食べたい] T.

このような構文を複合名詞句に埋め込むと，もちろん「が/の」交替が可能である。

(175) a. [私の英語が/の話せる T] 理由

b. [私のリンゴが/の食べたい T] 理由

しかし，(175)で，先行する動詞述語と連体形の時制が現れている後続述語とを，助詞と形式動詞を用いて分離すると，埋め込み文内部での「が/の」交替の適用

[41] 本研究の提案にしたがい(173)では，主要部 T を主語と Pol+T を含む句の外に表示している。

が難しくなる[42]。

(176) a. [私の [[英語が/??の話せも] する] T] 理由
b. [私の [[リンゴが/??の食べも] したい] T] 理由

(176)の埋め込み節で「が/の」交替が適用できない理由は，(171)と同じく，所有格名詞の認可子である連体形の形態が，所有格名詞句を含む節の外側にあることが原因であると考えられる。

こうした所有格名詞句の認可の条件がどのように説明されるかは，今後の研究に委ねたいと思うが，ここでは１つの可能性を示唆しておきたい。直感的には，「が/の」交替を支配するのが「名詞性」であることが明らかだ。そもそも，「が/の」交替は複合名詞句の中で典型的に観察される。また，本研究での，「連体形の形態素を持つ Pol+T が所有格を認可する」という仮定に含まれる「連体形の形態素」は，「名詞性」と深く関連している。そこで，（非公式的には）「名詞化された領域でだけ『が/の』交替は可能だ」という言い方ができるよう思える。連体形が「名詞性」領域を作り，その領域では交替が可能となると考えるのである。「名詞性」領域を網掛けで示すとすると，「が/の」交替は(177)のように表示することが可能だ。

(177) a. [太郎が/*の泣いた] T
b. [[太郎が/の泣いた] T] 理由

(177a)は，主節なので T は連体形ではなく，交替は許されない。これに対し，複合名詞句の(177b)では，T の連体形により補文全体が名詞性を帯びている。これにより，主語上の「が/の」交替が認可される。(171)や(172b)，(176)では，節の切れ目が連体形の形態素と交替の対象となる名詞句の間に存在するため，この

[42] (174)のような主格目的語構文で，主格目的語が埋め込み節内にあることは，この節を前置することが可能であることから確認できる（Yatsushiro 1999:96, Kishimoto 2001:606）。

(i) a. [英語が話せも] 太郎が t する.
b. [リンゴが食べも] 私は t したい.

主格目的語が，主節まで繰り上がるとする分析もある（Tada 1992, Koizumi 1995, 1998）。

名詞性領域が途切れてしまうと考えられる。

(178) [　　[が/*の　　]　　T] DP/NP

そのため，埋め込み節中は「名詞性」を持たないので，「の」格が認可されないと説明することができる。

この説明は，「が/の」交替の，目的語の制約にも拡張することが可能である。Harada (1971)は，主語と（名詞を修飾する）述語との間に目的語が介在すると，「が/の」交替の適用が難しくなることを指摘した。

(179) a.　[太郎が/の食べた] リンゴ
　　b.　[太郎が/??の リンゴを食べた] 理由

(179b)のように，主語と動詞の間に対格名詞句「リンゴを」が介在すると，「が/の」交替の適用は難しくなる。これは，対格名詞句が「動詞性」を要求するためであると考えられる。

一般に日本語の後置詞は，名詞句の中に現れる。以下の(b)の例では，(a)の動詞表現に対応する形で，後置詞「へ」「から」「と」「で」が名詞句の中に現れている。

(180) a.　神戸へ旅行する
　　b.　神戸への旅行
(181) a.　アメリカから来日する
　　b.　アメリカからの来日
(182) a.　業者と交渉する
　　b.　業者との交渉
(183) a.　図書館で勉強する
　　b.　図書館での勉強

したがって，これらの後置詞は「名詞性」の領域に現れることがわかる。これらの後置詞句が，主語名詞句と動詞の間に介在しても，「が/の」交替の適用が難しくはならない。

(184) a. [太郎が/の神戸へ旅行した T] 理由
b. [太郎が/のアメリカへ旅行した T] 理由
c. [太郎が/のその業者と交渉した T] 理由
d. [太郎が/の図書館で勉強した T] 理由

網掛け部分が名詞化して（主語の所有格を認可して）も，これらの後置詞句は名詞性の領域に現れうるので，非文とはならない。

これら後置詞表現に対し，対格「を」は，名詞句の中に入ることができない(185b)。

(185) a. リンゴを試食する
b. *リンゴをの試食

そしてこれに対応する形で，所有格主語と連体形述語の間に対格目的語が入った(186a)は非文となる。「が/の」交替のために節は名詞化される必要があるが，そうなると対格の要求する「動詞性」と相容れなくなるためである。

(186) a. *[太郎のリンゴを食べる T] 理由
b. [太郎がリンゴを食べる T] 理由

一方(186b)のように，交替が起こらなければ対格目的語が生起することが可能である。この場合，連体形による節の名詞化が起こっていないと考えることができる（したがって名詞化は随意的であると考えられる）。「が/の」交替が要求する「名詞性」と，対格の要求する「動詞性」が同じ節で同時に満たされることがないので(186a)は非文となるのである。

「動詞性」を要求するのは，あくまでも対格であって，目的語自身ではない。「を」ではなく，副助詞の「だけ」が目的語につく場合，目的語が生起しても主語の「が/の」交替が可能であるからだ。

(187) [太郎のリンゴだけ食べる T] 理由

この場合は，節全体が名詞化していると考えることができる。予測通り「だけ」に導かれる目的語は，名詞句の中に現れる。

(188) a. リンゴだけ試食する
b. リンゴだけの試食（でもいいですよ）

したがって，記述的には，「連体形によって（随意的に）名詞化された節の内部でだけ『が/の』交替は可能」であり「連体形のもたらす名詞化は，節の区切れ目を超えることはできない」と一般化することができるようである。この一般化が，文法体系の中でどのように整合的に理論化されるか，今後の研究課題としたい。

５．３．９．日本語の TP の不完全性について

日本語の TP に関して，（１）T の形態素は必ず Pol（の一部）に実現される(147)，（２）T の形態素を伴った Pol（Pol+T）は，統語部門を通じて Pol の位置にとどまっている，と結論した。これが正しいとすると，日本語の TP という投射は，統語的に不完全であることになる。派生を通じて形態音声的実態のある要素が，その主要部をしめることがないからである。（PF 部門での Pol+T と T の形態的併合は，隣接性の条件のもと構造とは関係なく行われていると仮定している。PF 部門に構造自体が存在しないと仮定しているので，形態的併合が起こる時点で統語構造は失われている。）本研究の枠組みでは日本語の SpecTP が果たす役割はほとんど無いが（SpecPolP がその役割を果たしているので），それはこの２つの結論から自然と理解される。主要部に形態音声的実態がある要素が無いので，それに対応する形で TP 全体も不完全にしか機能していないものと考えることができる。その結果 SpecTP も積極的な役割がない[43]。

日本語では PolP が実質的な投射として機能するのに対し，英語では TP がその役割を果たす。この対比は，英語では T の独立性が高く，日本語では Pol の独立性が高い，という両言語の形態素の性質の違いに理由を求めることができるであろう。例えば，英語では T が統語的環境による形態的な変化を受ける（am/

[43] Fukui (1986)は，日英語の様々な基本的相違に基づいて，日本語には英語の TP/IP に相当するような最大投射が存在しない可能性を示唆した。本研究での TP に関する結論は，Fukui の洞察の一部を再度裏付けることになるかもしれない。

are/is などのように)。それに対し，否定辞は唯一 not の形態しか持たない。これに対し，日本語の[neg] Pol は（５．２．１．１で見たように），形容詞と同等の形態的変化を示す。このことは日本語の否定辞（[neg] Pol）が，英語と比べ相対的に重要な統語的役割を果たしていることを示唆しているといえるだろう。

次のような英語と日本語の対比も，同様のことを示す。英語では，T の要素が VP 補部内の主要部の動詞に様々な形態的制限を課す。

(189) a. John was singing.
b. John has sung.
c. John will sing.

進行形の be 動詞は V が現在分詞であることを要求し(189a), 完了の have は V が過去分詞であることを要求し(189b)，未来の助動詞 will は V が原形不定詞であることを要求する(189c)。これらの形態的依存関係は，not の介在によって妨げられることはない。

(190) a. John was not singing.
b. John has not sung.
c. John will not sing.

したがって，英語の否定辞は形態の依存関係に関して「透明」であるといえる。

一方日本語の現在形形態素は，動詞に対して「る」が用いられ，形容詞に対して「い」が用いられる（別の言い方をすれば,「る」が動詞を範疇選択し,「い」が形容詞を範疇選択する，ともいえる。）

(191) a. 食べ-る
b. *食べ-い
(192) a. *若-る
b. 若-い

(191b)，(192a)の非文法性が示すように，逆の組み合わせは許されない。ところが，(191a)の動詞述語「食べ」が否定されると，動詞に対する現在形「る」では

なく，形容詞に用いられる「い」が現れる。

(193) a. *食べ-な-る
b. 食べ-な-い

つまり，英語の not とは異なり，日本語の「な（い）」は，T と V との形態的（範疇的）依存関係を阻害する要素として働くのである。この点でも，日本語の否定形態素（[neg] Pol）は，英語の否定形態素に比べ，統語的独立性が高いといえるだろう。

５．４．等位節両否定の可能性

５．２．２では，(194)のような文に関して，左の等位節が否定辞のスコープから外れる解釈しかないとの観察をした。

(194) 太郎がリンゴを食べ（そして）イチゴは食べなかった.

その説明として，「食べ」は先行述語として後続述語 E（音声的に空の[aff]指定を受けた主要部 Pol）を取り，両者が V-to-Pol の統語的主要部移動によって１語化しているためであると主張した。この提案にしたがえば，(194)の統語部門での構造は(195)のようになる。

(195) [$_{PolP}$ 太郎がリンゴを 食べ-E]（そして）[$_{PolP}$ pro イチゴは食べ-なかった] T.

左の等位節の「食べ」の持つ統語素性[+後続要素]が，後続する E の持つ[+先行要素]と照合･削除され，(195)の左の等位節は PolP まで投射される。それにより，(195)は PolP の等位接続となって，左の等位節が否定のスコープから外れることが説明される。

しかし，注 16 で指摘したように，(195)を両否定に解釈可能であるとする話者がいる。また，歴史的（上代，中古，近世）には，「VP & VP Pol」のような形で，両等位節を否定することが可能であったことが伝統文法家の間では知られている（橋本 1948，橘 1952，此島 1967，山口 1987，佐佐木 1999）。此島（1967）は

次のような例を挙げる[44]。

(196) a. [[いささか痩せおとろへ] [色も変ら]ず]
（浜松中納言物語：77，216，14）
b. みずから [[はかばかしく] [すくよかなら] ぬ] 心ならひに
（源氏物語：14，169，1）
c. [[おのづから女房とかたらひ] [はかなきことをだにのたまわせ] ざり] けるに （大鏡：21，136，13）

これらの例では，（文脈や意味を考慮すると），否定辞が先行する２つの述部の両方を否定している考えざるをえない（と此島は主張する）。こうした事実はどのように説明されるであろうか。

これは非常に大きな問題で，本研究でその完全な解決を提示することはもちろんできない。その代わりに，本研究の枠組みにおいても，これらの現象の，すくなくとも基本部分は説明するできる可能性があることを示しておきたい。

(194)-(195)の説明の肝要な点は，[+後続要素]と[+先行要素]を（統語部門で照合される）統語的素性であると考えた点である。左の等位節の「食べ」の持つ[+後続要素]の素性と E の持つ[+先行要素]の素性が，統語的主要部移動によって照合・消去されると考えるため，この表現は全体で PolP まで投射されることになる。(194)の両否定の解釈や歴史的な事実を説明する上で，この仮説を捨て，代わりに，否定辞だけが PF で先行する要素と形態的併合を受けなければいけない，と考えるとどうであろうか。この仮定の下では(194)に対し，(197)の統語的表示が可能である。

(197) 太郎が [$_{VP}$ [$_{VP}$ リンゴを食べ]（そして）[$_{VP}$ イチゴは食べ]] なかった T.

(197)では，どちらの等位節の「食べ」も，仮定より[+後続要素]の統語的素性を持たない。その結果，左の等位節に E が存在しなくても，不要な素性が残らない。したがって左の等位節は VP でありうる。また右の等位節でも「イチゴは食べ」という VP が形成され，VP & VP という構造が可能になる。これ全体を Pol

[44] 以下の古日本語の例は岩波書店刊行の日本古典文学大系から採る．数字は順に，巻数，ページ数，行数を示す。

が（c 統御して）否定すれば，意図した解釈が得られることになる。

(194)を両否定の解釈ができるとする話者も，否定辞前の述語に助詞がつくと，補助動詞の挿入が必要であると判断するし，歴史的にも同様の現象が観察される。

(198) a. 食べも*（し）ない
b. 心のうちを忘れしもせず （源氏物語：15，182，10）

したがって，述語の両否定を許容する話者においても，V と Pol とは少なくとも PF 部門で一体化している必要がある。そこで，(197)の構造が PF に送られた後，後ろの等位節の「食べ」と「なかった」が隣接性の条件の下形態的併合を引き起こすと考えてはどうか。もちろん，より詳しいデータの調査と正確な理論化がこの現象全体を説明するには必要であるが，このように述語の合体を統語部門から PF 部門に移すことで，言語の歴史的変化や，個人差が説明できる可能性があることを示唆しておきたい。

５．５．動詞以外の述語の否定

本研究を終えるにあたり，これまでは意図的に避けてきた，動詞以外の述語の否定を考察する。この節の主な意図は，動詞以外の述語の否定が，本研究で追究してきた理論をそのままの形であてはめることのできない，独立した研究分野であることを示すことである。それでも（前節と同じように）本研究で提示した枠組みが，動詞以外の述語の否定の基本的な部分はとらえることができることを示したい。

日本語の独立文には，動詞，形容詞，形容動詞（名詞＋断定の助動詞）のどれか１つが必ず必要である。

(199) a. 太郎がリンゴを食べる.
b. 太郎が優しい.
c. 太郎が頑固だ.

これらを否定にすると，すべて「ない」が用いられ，一見，述語の種類に関係なく否定の分析ができるように見える。

(200) a. **太郎がリンゴを食べない.**
b. **太郎が優しくない.**
c. **太郎が頑固で（は）ない.**

しかし，実際には動詞を述部とする場合と，形容詞・形容動詞（名詞＋断定の助動詞）を述部とする場合で，かなりその統語的振る舞いが違う（Nakau 1973 **にこの対比に関する包括的な観察が見られる）。否定に関しても両者が違う振る舞いを見せることは，**Kato (1985)**などで報告されている。**

本研究で見てきた現象に関しても，２つのカテゴリーは一貫して違った振る舞いを見せる。まず，V-Pol-T **の形態素の連続では，アクセント核が１つだけ置かれるのであった（これらの形態素が，音声的に１語となっていることを示している）。これに対し，形容詞・形容動詞では，語彙的部分と** Pol-T **の部分がそれぞれ独立したアクセント核持つ（日本語記述文法研究会** 2007:224 **でも指摘されている）。**

(201) a. tabE-na-i/*tabE-nA-i
b. *yasasIku-na-i/yasasIku-nA-i
c. *gAnkode-na-i/gAnkode-nA-i

動詞と否定辞の複合表現では, アクセント格が１つで(201a)**, 述語が形容詞**(201b)**や形容動詞**(201c)**の場合，アクセント格が２つである。**

また動詞と否定辞との間に助詞が介在すると補助動詞の挿入が起こるが，形容詞・形容動詞と否定辞との間では，補助動詞の挿入が起こらない。

(202) a. **食べも　*（し）-ない**
b. **優しくも　（*し）-ない**
c. **頑固でも　（*し）-ない**

両者は形態の上でも差を示す。動詞否定の「ない」が述語等位接続構造の非最終等位節で用いられた場合，その形態は助動詞「ぬ」由来の「ず」となる。これに対し，形容詞・形容動詞否定の場合，形容詞由来の「なく」が用いられ

る（５．２．１．１の議論も参照のこと）。

(203) a. 太郎はリンゴを 食べず/??食べなく（そして）水を飲まない.
b. 太郎は *優しくず/優しくなく（そして）賢くない.
c. 太郎は *頑固でず/頑固でなく（そして）親切でない.

最後に，動詞否定の「ない」は，（やや文語的なニュアンスを伴うものの）古い否定の助動詞である「ぬ」と置き換えることが可能であるが，形容詞・形容動詞の否定の場合この置き換えが不可能となる。

(204) a. 食べ ない/ぬ
b. 優しく ない/*ぬ
c. 頑固で ない/*ぬ

これらの事実から，動詞の否定の PolP と，形容詞・形容動詞否定の PolP を同等に扱うことはできないことは明確である。(201)-(202)の事実を勘案すると，動詞は Pol へと主要部移動を起こしているのに対し，形容詞や形容動詞は Pol への主要部移動を起こしていないと考えるのが自然である[45]。

(205) a. t －主要部移動→V-Pol
b. A/NA Pol

また，それでも，A/NA-Pol と T とを助詞と補助動詞で分断することはできないから，A/NA の文脈でも時制辞は Pol 上に Pol+T の形で実現されていることがわかる。

(206) a. *食べなくもある
b. *優しくなくもある
c. *頑固でなくもある

[45] A は Adjective，NA は Nominal Adjective の略である。

したがって，語彙的部分と Pol，T の関係は(207)のようにまとめられる。

(207) a. t －主要部移動→V-Pol+T
b. A/NA Pol+T

(207b)のように，形容詞，形容動詞は派生を通じて Pol+T とは独立している。また時制辞は Lexicon の段階で否定辞と合体していて，その形のまま句構造に導入されることが表されている。(207)の分析からいくつかの予測ができる。そしてそれらの予測は概ね正しい。V-Pol の関係では，これらが統語部門で１語化しているため，通常[VP & VP] Pol という形で等位接続構造全体を否定することはできないのであった。したがって，(208)の左の等位節「リンゴを食べ」を否定のスコープに入れて解釈することはできない。

(208) 太郎が [リンゴを食べ]（そして）[水飲まなかった] T.

しかし，形容詞や形容動詞の場合，派生を通じて A/NA と Pol は分離しているので，[AP/NAP & AP/NAP] Pol という形での両否定が可能であると予測される。判断は非常に微妙であるが，語彙を注意深く選択すると，この予測は正しいように思える[46]。

(209) a. ?花子はもう [$_{PolP}$ [$_{AP}$ 若く（そして）美しく] ない] T.
b. ?太郎はもう [$_{PolP}$ [$_{ANP}$ 体が健康で（そして）心が健全で] ない] T.

また，V-Pol-T では，時制辞が句構造に導入の段階から Pol の上に実現されているので（Pol+T），T 部分に単独で等位節部分削除を適用することができないのであった。

[46] (209)は，本研究で提案している理論から予測される程度には容認可能でないかもしれない。(209)の A/AN に助詞をつけると完全に両否定の解釈が可能になる。

(i) a. 花子はもう [$_{PolP}$ [$_{AP}$ 若くも（そして）美しくも] ない] T.
b. 太郎はもう [$_{PolP}$ [$_{ANP}$ 体が健康でも（そして）心が健全でも] ない] T.

理論的にはこの場合，A/AN に助詞をつけても構成素性は変わらない（A/NA と Pol は派生を通じて独立しているから）。したがって(i)が，より適切な例文である可能性もある。

(210) [太郎が/*の笑わ [ず-ぬ]]（そして）[二郎が/の泣かない] 理由

(210)の左の等位節では「が/の」交替が不可能であり，このことは，左の等位節に派生を通じて T の要素が生起していないことを示している（(210)は TP & TP ではなく，PolP & PolP である）。同じことをが，A/AN-Pol-T にも予測され，この予測は正しい。

(211) a. [背が/??の高く [なく-ぬ]]（そして）[色が/の白くない] 女性
b. [体が/??の健康で [なく-ぬ]]（そして）[心が/の健全でない] 人

最後に，V-Pol-T は，主要部移動を通じて１語化しているため，通常 Pol-T（Pol+T）に等位節部分削除を適用することはできない。

(212) [太郎が/*の笑い [な-ぬ]]（そして）[二郎が/の泣かない] 理由

(212)は，そもそもこの形で等位節部分削除を適用することができないので，(「が/の」交替とは関係なく）意図した解釈「太郎が笑わない理由＆二郎が泣かない理由」が得られない。その点は無視しても，左の等位節で「が/の」交替が適用できないことから，通常 V-Pol-T の，Pol-T（Pol+T）に等位節部分削除を適用することができないことがわかる。A/AN の場合は，A/AN と Pol-T は派生を通じて独立しているので，Pol-T（Pol+T）に等位節部分削除が適用できると予測される。

(213) a. [背が/の高く [ない]]（そして）[色が/の白くない] 女性
b. [体が/の健康で [ない]]（そして）[心が/の健全でない] 人

判断は再びかなり微妙であるが，「高く」および「健康で」が「ない」にかかるように読むと，左の等位節で「が/の」交替が可能であるように感じられる。

(213)で，左の等位節が右の否定辞のスコープから外れる解釈も可能である。この場合，左の等位節は「ない」が省略されているのではなく（すなわち TP まで投射されるではなく），音声的に空の否定辞 E が基底生成することによって

PolP まで投射されていることになる。

(214) a. [背が/*の高く E]（そして）[色が/の白くない] T 女性
b. [体が/*の健康で E]（そして）[心が/の健全でない] T 人

そのような解釈では，予測通り左の等位節で「が/の」交替は適用できない。これらの判断が正しいとすれば，A/AN が（V とは異なり）派生を通じて Pol-T とは独立しているという仮定が経験的に裏付けられることになる。

この分析が試論であるということを再び強調しておきたい。この節で示したのは，形容詞や形容動詞の否定で用いられる「ない」は，本研究で明らかにしてきた PolP による分析がそのままの形ではあてはまらない，独立した研究分野であるということである。本研究で提示した理論が，形容詞や形容動詞の否定についても扱うことができる可能性を持つことを最後に示唆した。しかし，経験的事実は本研究の予測ほどには明瞭でなく，さらなる形容詞や形容動詞の否定の研究が必要である。

６．まとめ

本研究を終えるにあたり，本研究で提案した句構造と，現在比較的広く受け入れられている日本語の句構造との違いを，経験的な事実と対応させながら確認しておく。

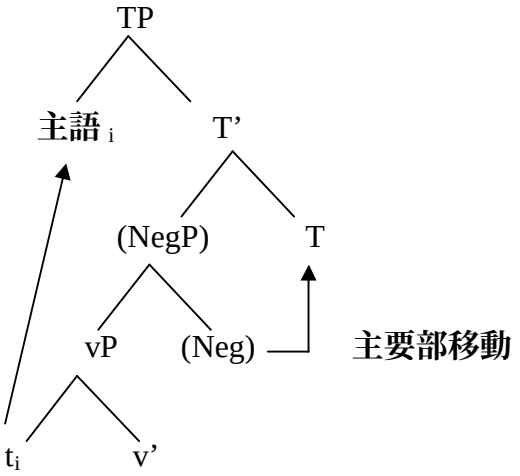
まず，多くの研究で日本語の EPP 素性は T が持つ（可視統語部門で，主語名詞句が SpecTP にある）とされる。本研究では，これに対し，Pol が EPP 素性を持つと提案した。時制辞を含むことができない（そして否定辞を含む）等位節でも，EPP の効果が現れるからであった（３章(89)-(92)）。

通常 NegP（[neg] PolP）は，否定辞が現れる場合にだけ投射されていると考えられている。本研究では，否定辞が現れない場合にも述語の肯定の値を指定する PolP（[affirmative]指定の NegP/PolP）が投射されていると主張した。肯定と否定の等位接続が可能なことがその主な根拠であった（５章(68)-(69)）。

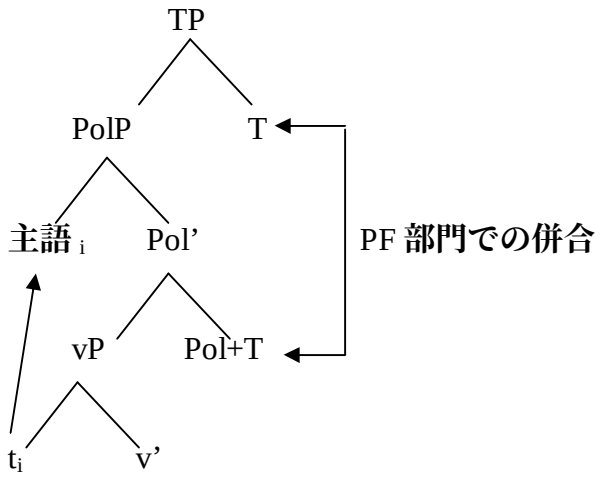
日本語の時制の形態素は T のスロットに基底生成されるというのが多くの一致した考え方である。これに対し，本研究では，時制辞が Lexicon においてすでに Pol の形態素と合体しており，全体として Pol のスロットに生成されるという分析を示した。「が/の」交替が，述語等位接続構造の等位節で適用不可能な場合があるからであった（５章(145)）。

そして，Pol/Neg-to-T の主要部移動を仮定する代わりに，EPP 素性が Pol にあると考えた。Pol/Neg-to-T 移動の動機付けの一部は，TP 指定部が EPP 素性を満たすために埋められなければならないということを前提にしている。しかし，TP 指定部ではなく，PolP 指定部が常に名詞句移動によって埋められる位置であるとすれば，Pol/Neg-to-T 移動がなくても，Pol/Neg-to-T 移動が起きた場合と同等の作用域が保証されるという考え方であった。(1)が比較的広く受け入れられている日本語の句構造で，(2)が本研究で提案した日本語の句構造である。

(1)　**比較的広く受け入れられている日本語の句構造とその派生の一部**



(2)　**本研究で提案した日本語の句構造とその派生の一部**

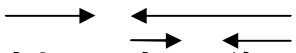


本研究を終えるにあたり，本研究の主張の一部と，伝統文法での論考である北原 (1981)の主張の一部が，興味深い一致を見せていることを指摘しておきたい。本研究は生成文法の枠組みでの研究で，基本的な仮説や理論立ては生成文法に立脚している。北原の研究は伝統的「国語学」を踏襲した研究で，両者の出発点は全く別であるといっていい。しかしながら，主格名詞句と否定辞との関係のとらえ方において両者の考えは基本的に一致している。

北原 (1981)は，時枝 (1941)，渡辺 (1971)の「構文論」的文法研究を拡大発展させた研究で，その主張や分析は生成文法的研究にかなり近い。渡辺-北原の提唱する構文論の最も重要な概念は「展叙」と「統叙」である。「統叙」というのは概ね述語のことで，「展叙」はほぼ主語や目的語，あるいは項にあたる概念で

ある。そして展叙と統叙が一体となって文（言語表現）が形成されると考える。両者の関係は矢印で示される。

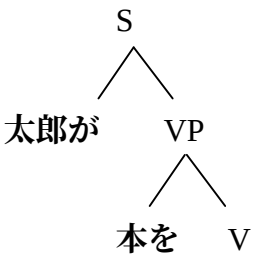
(3)



太郎が　本を　読む.　　（北原 1981:77）

(3)では「本を」という展叙に対し，「読む」が統叙として働き，さらにその上の階層で「太郎が」という展叙に対し「本を読む」が統叙として働いている。北原の研究の優れた点は，従来の伝統的国語学とは違い，文の内部構造を平坦な形に分析せず，複数のレベルの階層を用いて立体的に分析している点にあるだろう。そして，(3)の立体的分析は，(4)のような生成文法的句構造を彷彿とさせる。

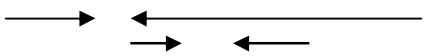
(4)



生成文法では，コントロールの構造として分析される(5)の文にも，(6)のような展叙と統叙の分析がなされる。

(5)　次郎が　本を　読んで　みる.

(6)



次郎が　本を　読んで　みる.　　（北原 1981:75）

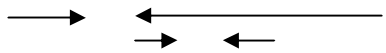
(6)の表示が，（北原の主張を大きく曲げることなく）(7)の生成文法的句構造の表示に翻訳可能であることは明らかだ。

(7)　[次郎が [本を読んで] みる].

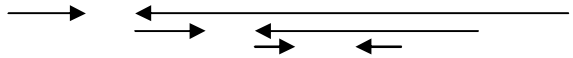
そして北原 (1981:130-131)は，否定辞「ない」が統叙として，（展叙としての）

主語名詞句と関係を結ぶという分析をしている。

(8)



a. 太郎は　本を　読ま　ない



b. 太郎は　次郎に　本を　読ま　せ　ない

(8)の各々の分析では，他の述語とその項を含んだ述語句全体が否定辞「ない」によってまとめられ，これが主語名詞句と関係を結ぶと分析されている。否定辞は，「目的格などから対象格までの展叙成文を包んで（＝埋め込んで），主格展叙成分と関係するものであるということができる」とされている。

本研究で提唱した(2)の句構造と派生の分析によると，主語名詞句は，SpecPolP へと移動した後，動詞の持つ他の項と動詞，そして否定辞を含み込んだ Pol’全体と関係を結ぶことになる。これは(8)の分析と趣旨が同じであり，両者が同じ言語直感を別の枠組みで理論化したものと解釈することができる。生成文法であれ，伝統的国語学であれ，同じ言語を対象として分析しているのであるから，このような結論は当然といえば当然のことであるが，この一致によって本研究の主張の一部がさらに支持されることになるといえよう。

[参考文献]

Abe, Jun and Hiroto Hosi (1997) "Gapping and P-stranding," *Journal of East Asian Linguistics* 6, 101-136.

Agbayani, Brian (2006) "Pied-Piping, Feature Movement, and *Wh*-Subjects," Wh-*Movement: Moving On*, ed. by Lisa Lai-Shen Cheng and Norbert Corver, 71-94, MIT Press, Cambridge, MA.

Akahane, Hitoshi (2006) "Inner Islands: A Minimalist Approach," *English Linguistics* 23, 315-346.

Akahane, Hitoshi (2008) "Intervention Effects in Overt Movement Constructions," *Gengo Kenkyu* 133, 1-29.

Aoyagi, Hiroshi (1998a) "Particles as Adjunct Clitics," *NELS* 28, 17-31.

Aoyagi, Hiroshi (1998b) *On the Nature of Particles in Japanese and Its Theoretical Implications*, Doctoral dissertation, University of Southern California.

青柳宏 (2001) **「日本語における述語と時制要素の膠着について」『アカデミア』（文学・語学編）第** 70 **号，** 1-30**，南山大学，名古屋.**

青柳宏 (2006)**『日本語の助詞と機能範疇』，ひつじ書房，東京.**

青柳宏 (2008)**「とりたて詞の形態的，統語的，意味的ふるまいについて」『日本語文法』** 8 **巻** 2 **号，** 37-53**.**

Aoyagi, Hiroshi and Toru Ishii (1994) "On NPI Licensing in Japanese," *Japanese/Korean Linguistics* 4, 295-311.

Baker, C. L. (1991) "The Syntax of English *Not*: The Limits of Core Grammar," *Linguistic Inquiry* 22, 387-429.

Baker, Mark C. (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*, University of Chicago Press, Chicago.

Barss, Andrew (1986) *Chains and Anaphoric Dependence: On Reconstruction and Its Implications*, Doctoral dissertation, MIT.

Basilico, David (2003) "The Topic of Small Clauses," *Linguistic Inquiry* 34, 1-35.

Bedel, George (1972) "On *No*," *UCLA Papers in Syntax: Studies in East Asian Syntax*, 1-20, UCLA, Los Angeles.

Bobaljik Jonathan David and Kazuko Yatsushiro (2006) "Problems with

Honorification-As-Agreement in Japanese: A Reply to Boeckx and Niinuma," *Natural Language and Linguistic Theory* 24, 355-384.

Boeckx Cedric and Fumikazu Niinuma (2004) "Conditions on Agreement in Japanese," *Natural Language and Linguistic Theory* 22, 453-480.

Boeckx Cedric and Fumikazu Niinuma (2006) "Honorification as Agreement," *Natural Language and Linguistic Theory* 24, 385-398.

Borer, Hagit (1994) "The Projection of Arguments," *Functional Projections: University of Massachusetts Occasional Papers* 17, 19-48.

Bošković, Željko (1996) "Selection and the Categorical Status of Infinitival Complements," *Natural Language and Linguistic Theory* 14, 269-304.

Bošković, Željko (1997) *The Syntax of Nonfinite Complementation*, MIT Press, Cambridge, MA.

Bošković, Željko (2002) "On Multiple *Wh*-Fronting," *Linguistic Inquiry* 33, 351-383.

Bošković, Željko and Howard Lasnik (2003) "On the Distribution of Null Complementizers," *Linguistic Inquiry* 34, 527-546.

Bresnan, Joan W. (1977) "Variables in the Theory of Transformations," *Formal Syntax*, ed. by Peter W. Culicover, Thomas Wasow, and Adrian Akmajian, 157-196, Academic Press, New York,

Carlson, Greg (1987) "*Same* and *Different*: Some Consequences for Syntax and Semantics," *Linguistics and Philosophy* 10, 531-565.

Chomsky, Noam (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (1972) "Some Empirical Issues in the Theory of Transformational Grammar," *The Goals of Linguistic Theory*, ed. by Stanley Peters, 63-130. Prentice-Hall, Englewood Cliffs, NJ.

Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dohdrecht.

Chomsky, Noam (1982) *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding*, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, MA

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-59, MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, Noam (2007) "Approaching UG from Below," *Interfaces + Recursion =*

Language?: Chomsky's Minimalism and the View from Syntax-Semantics, ed. by Uli Sauerland and Hans-Martin Gärtner, 1-29, Mouton de Gruyter, Berlin.

Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero, and Maria Luisa Zubizarreta, 133-166, MIT Press Cambridge, MA.

Cinque, Guglielmo (2003) "The Interaction of Passive, Causative, and 'Restructuring' in Romance," *The Syntax of Italian Dialects*, ed. by Christina Tortora, 50-66, Oxford University Press, Oxford.

Citko, Barbara (2005) "On the Nature of Merge: External Merge, Internal Merge, and Parallel Merge," *Linguistic Inquiry* 36, 475-496.

Culicover, Peter W. (1991) "Topicalization, Inversion, and Complementizer in English," *Going Romance, and Beyond, Fifth Symposium on Comparative Grammar*, ed. by Denis Delfitto, Martin Everaert, Arnold Evers, and Frits Stuurman, Onderzoeksinstituut voor Taal en Spraak, Faculteit Letteren, 1-44, University of Utrecht.

Culicover, Peter W. (1993) "The Adverb Effect: Evidence against ECP Accounts of the *That*-t Effects," *NELS* 23, 97-110.

Culicover, Peter W. and Ray Jackendoff (1997) "Syntactic Coordination Despite Semantic Coordination," *Linguistic Inquiry* 28, 195-217.

Culicover, Peter W. and Ray Jackendoff (2005) *Simpler Syntax*, Oxford University Press, Oxford, UK.

Deane, Paul (1991) "Limits to Attention: A Cognitive Theory of Island Phenomena," *Cognitive Linguistics* 2, 1-63.

Emonds, Joseph (1976) *A Transformational Approach to English Syntax*, Academic Press, New York.

Endo, Yoshio (2007) *Locality and Information Structure*, John Benjamins, Amsterdam.

Farmer, Ann (1984) *Modularity in Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.

Frampton, John (1991) "Relativized Minimality, A Review," *The Linguistic Review* 8, 1-46.

Fukuda, Shin (2007) "Projections of Aspect in Japanese," *MIT Working Papers in Linguistics* 55, 37-48.

Fukui, Naoki. (1986) *A Theory of Category Projection and Its Applications*, Doctoral

dissertation, MIT.

Fukui, Naoki and Margaret Speas (1986) “Specifiers and Projections,” *MIT Working Papers in Linguistics* 8, 128-172.

Fukui, Naoki and Yuji Takano (1998) “Symmetry in Syntax: Merge and Demerge,” *Journal of East Asian Linguistics* 7, 27-86.

Fukui, Naoki and Hiromu Sakai (2003) “The Visibility Guideline for Functional Categories: Verb Raising in Japanese and Related Issues,” *Lingua* 113, 321-375.

Fukushima, Kazuhiko (1999) “Bound Morphemes, Coordination, and Bracketing Paradox,” *Journal of Linguistics* 35, 297-320.

Fukushima, Kazuhiko (2003) “Verb-Raising and Numeral Quantifiers in Japanese: Incompatible Bedfellows,” *Journal of East Asian Linguistics* 12, 313–347.

Fukushima, Kazuhiko (2005) “Lexical V-V Compounds in Japanese: Lexicon vs. Syntax,” *Language* 81, 568-612.

Goldsmith, John (1985) “A Principled Exception to the Coordinate Structure Constraint,” *CLS* 21, Part I, 133-143.

Greenberg, Joseph H. (1963) “Some Universals of Grammar with a Particular Reference to the Order of Meaningful Elements,” *Universals of Language*, ed. by Joseph H. Greenberg, 73-113, MIT Press, Cambridge, MA.

Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.

Grimshaw, Jane and Armin Mester (1988) “Light Verbs and Theta-Marking,” *Linguistic Inquiry* 19, 205-232.

Grosu, Alexander (1973) “On the Nonunitary Nature of the Coordinate Structure Constraint,” *Linguistic Inquiry* 4, 88-92.

Grosu, Alexander (1981) *Approaches to Island Phenomena*, North-Holland, Amsterdam.

Gunji, Takao and Koiti Hasida (1998) “Measurement and Quantification,” *Topics in Constraint Based Grammar of Japanese*, ed. by Takao Gunji and Koiti Hasida, 39 –79, Kluwer, Dordrecht.

Haegeman, Liliane (1995) *The Syntax of Negation*, Cambridge University Press, Cambridge.

Haegeman, Liliane and Jacqueline Guéron (1999) *English Grammar: A Generative*

Perspective, Blackwell, Malden.

Hale, Kenneth (1980) "Remarks on Japanese Phrase Structure: Comments on the Papers on Japanese Syntax," *MIT Working Papers in Linguistics* 2, 185-203.

Hale, Kenneth (1983) "Warlpiri and the Grammar of Non-configurational Languages," *Natural Language and Linguistic Theory* 1, 5-47.

Halle, Morris and Alec Marantz (1993) "Distributed Morphology and the Pieces of Inflection," *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, ed. by Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser, 111-176, MIT Press, Cambridge, MA.

Han, Chung-hye, Dennis Ryan Storoshenko, and Yasuko Sakurai (2005) "Scope of Negation and Clause Structure in Japanese," *BLS* 30, 118-129.

Hankamer, Jorge (1973) "Unacceptable Ambiguity," *Linguistic Inquiry* 4, 17-68.

Harada, S.-I. (1971) "*Ga-No* Conversion and Idiolectal Variation in Japanese," *Gengo Kenkyu* 60, 25-38.

Harada, S.-I. (1976) "Honorifics," *Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar*, ed. by Masayoshi Shibatani, 499-561, Academic Press, New York.

Hasegawa, Nobuko (1984/5) "On the So-called 'Zero Pronoun' in Japanese," *The Linguistic Review* 4, 289-341.

長谷川信子（編）(2007)**『日本語の主文現象』，ひつじ書房，東京．**

橋本進吉 (1948)**「国語の形容詞について」『国語法研究』，橋本進吉博士著作集第２冊，**84-113**，岩波書店，東京．**

Hiraiwa, Ken (2002) "Nominative-Genitive Conversion Revisited," *Japanese/Korean Linguistics* 10, 546-559.

Hiraiwa, Ken (2005) *Dimensions of Symmetry in Syntax: Agreement and Clausal Architecture*, Doctoral dissertation, MIT.

Hirata, Ichiro (2005) "Predicate Coordination and the Phrase Structure in Japanese," *Gengo Kenkyu* 127, 141-157.

Hirata, Ichiro (2006a) " Predicate Coordination and Clause Structure in Japanese," *The Linguistic Review* 23, 69-96.

Hirata, Ichiro (2006b) "Coordination, Subject Raising, and AgrP in Japanese," *Linguistic Inquiry* 37, 318-329.

Hirata, Ichiro (2008) "Head Movement or Morphological Merger: A Case Study of

Complex Predicate Formation in Japanese," *JELS* 25, 61-70

平田一郎 (2010)**「肯定の意味素性指定を受けた** NegP **と形式動詞の挿入について」『言語研究』**137**,** 81-94**.**

Hoji, Hajime (1985) *Logical Form Constraints and Configurational Structure in Japanese*, Doctoral dissertation, University of Washington.

Hoji, Hajime (1998) "Null Object and Sloppy Identity in Japanese," *Linguistic Inquiry* 29, 127-152.

Huang, C.-T. James (1982) *Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar*, Doctoral dissertation, MIT.

Huang, C.-T. James (1984) "On the Distribution and Reference of Empty Pronouns," *Linguistic Inquiry* 15, 531-574.

Huang, C.-T. James (1988) "Comments on Hasegawa's Paper," *Proceedings of Japanese Syntax Workshop: Issues on Empty Categories*, ed. by Tawa Wako and Mineharu Nakayama, 77-93, Connecticut College, New London.

Huang, C.-T. James (1991) "Remarks on the Status of the Null Object," *Principles and Parameters Comparative Grammar*, ed. by Robert Freidin, 56-76, MIT Press, Cambridge, MA.

井上和子 (1976)**『変形文法と日本語』, 大修館書店, 東京.**

Ishii, Yasuo (1991) *Operators and Empty Categories*, Doctoral dissertation, University of Connecticut, Storrs.

Ishii, Yasuo (1998) "Floating Quantifiers in Japanese: NP Quantifiers, VP Quantifiers, or Both?" *Grant-in-Aid for COE Research Report* 2, 149 –171, Kanda University of International Studies, Chiba.

Ivana Adrian and Hiromu Sakai (2007) "Honorification and Light Verbs in Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 16, 171-191.

Jackendoff, Ray S. (1971) "Gapping and Related Rules," *Linguistic Inquiry* 2, 21-35.

Jayaseelan, K.A (1990) "Incomplete VP Deletion and Gapping," *Linguistic Analysis* 20, 64-81.

Johannessen, Janne Bondi (1998) *Coordination*, Oxford University Press, Oxford.

Kageyama, Taro (1992) "Dummy *Su-* and Lexical *Su-*: A Reply to Miyara," *Gengo Kenkyu* 102, 165-174.

影山太郎 (1993)**『文法と語形成』, ひつじ書房, 東京.**

影山太郎 (1996)『動詞意味論：言語と認知の接点』，くろしお出版，東京.
神尾昭雄 (1977)「数量詞のシンタックス」『言語』6-6，83-91.
神尾昭雄 (1983)「名詞句の構造」『日本語の基本構造』，井上和子編，77-126，三省堂，東京.
金沢裕之 (1997)「助動詞『ない』の連用中止法について」『日本語科学』1, 105-113.
金子義明/遠藤喜雄 (2001)『機能範疇』，研究社，東京.
片岡喜代子 (2006)『日本語否定文の構造：かきまぜ文と否定呼応表現』，くろしお出版，東京.
Kato, Natsuko and Yasuhiko Kato (1997) “Negative Polarity: A Comparative Syntax of English, Japanese, and Spanish,” *Proceedings of the Sixteenth International Congress of Linguistics*, Pergamon, Oxford.
Kato, Takaomi (2006) *Symmetry in Coordination*, Doctoral dissertation, Harvard University.
Kato, Yasuhiko (1985) *Negative Sentences in Japanese*, *Sophia Linguistica* 19, The Graduate School of Languages and Linguistics/Linguistic Institute for International Communication, Sophia University, Tokyo.
Kato, Yasuhiko (1988) “Negation and the Discourse-dependent Property of Relative Scope in Japanese,” *Sophia Linguistica* 23/24:31–37, Sophia University, Tokyo.
Kato, Yasuhiko (1994) “Negative Polarity and Movement,” *MIT Working Papers in Linguistics* 24, 101-120.
Kawashima, Ruriko (1998) “The Structure of Extended Nominal Phrases: The Scrambling of Numerals, Approximate Numerals, and Quantifiers in Japanese,” *Journal of East Asian Linguistics* 7, 1–26.
川添愛 (2002)「『と』による等位接続と遊離数量詞」『言語研究』122，163-180.
Kayne, Richard (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.
金田一春彦 (1974)『国語アクセントの史的研究』，塙書房，東京.
Kishimoto, Hideki (2001) “Binding of Indeterminate Pronouns and Clause Structure in Japanese,” *Linguistic Inquiry* 32, 597-633.
Kishimoto, Hideki (2007) “Negative Scope and Head Raising in Japanese,” *Lingua* 117, 247-288.
Kishimoto, Hideki (2008) “On the Variability of Negative Scope in Japanese,” *Journal*

of Linguistics 44, 379-435.

Kiss, Katalin É (2002) “The EPP in a Topic-Prominent Language,” *Subjects, Expletives, and the EPP*, ed. by Peter Svenonius, 107-124, Oxford University Press, Oxford.

Kitada, Shin-ichi (2009) “Two Types of Coordinate Structure,” *JELS* 26, 101-110.

Kitagawa, Yoshihisa (1986) *Subjects in Japanese and English*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.

北原保雄 (1981)**『日本語の助動詞の研究』，大修館書店，東京．**

Klima, Edward (1964) “Negation in English,” *The Structure of Language: Readings in the Philosophy of Language*, ed. by Jerry Fodor and Jerrold J. Katz, 246-323, Prentice-Hall, Englewood Cliffs, NJ.

小林賢次 (1968)**「否定表現の変遷」『国語学』**15**，** 45-62**．**

Koizumi, Masatoshi (1993) “Modal Phrase and Adjuncts,” *Japanese/Korean Linguistics* 2, 409-428.

Koizumi, Masatoshi (1995) *Phrase Structure in Minimalist Syntax*, Doctoral dissertation, MIT.

Koizumi, Masatoshi (1998) “Invisible Agree in Japanese,” *The Linguistic Review* 15, 1-39.

Koizumi, Masatoshi (2000) “String Vacuous Overt Verb Raising,” *Journal of East Asian Linguistics* 9, 227-285.

Koopman, Hilda (2005) “Korean (and Japanese) Morphology from a Syntactic Perspective,” *Linguistic Inquiry* 36, 601-633.

Koopman, Hilda and Dominique Sportiche (1991) “The Positions of Subjects,” *Lingua* 85, 211-258.

此島正年 (1967)**「かげろふの夕を待ち」『国語研究』**9**，** 17-27**．**

Kuno, Susumu (1976) “Gapping: A Functional Analysis,” *Linguistic Inquiry 7*, 300-318.

Kuno, Susumu (1978) “Japanese: A Characteristic OV Language,” *Syntactic Typology*, ed. by Winfred P. Lehmann, 57-138, University of Texas Press, Austin.

Kuno, Susumu (1987) “Honorific Marking in Japanese and the Word Formation Hypothesis of Causatives and Passives,” *Studies in Language* 11.1, 99-128.

Kuno, Susumu and Ken-ichi Takami (2003) “Remarks on Unaccusativity and Unergativity in Japanese and Korean,” *Japanese/Korean Linguistics* 12, 280

–294.

Kuroda, Shige-Yuki (1965) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*, Doctoral dissertation, MIT.

Kuroda, Shige-Yuki (1978) “Case-Marking, Canonical Sentence Patterns, and Counter Equi in Japanese,” *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, ed. by John Hinds and Irwin Howard, 30-51, Kaitakusha, Tokyo.

黒田成幸 (1980)「**文構造の比較**」『**日英語比較講座第** 2 **巻：文法**』**，國廣哲彌編，** 23-61**，大修館書店，東京．**

Kuroda, Shige-Yuki (1983) “What Can Japanese Say about Government and Binding,” *WCCFL* 2, 153-164.

Kuroda, Shige-Yuki (1988) “Whether We Agree or Not: A Comparative Syntax of English and Japanese,” *Linguisticae Investigationes* 12, 1-47.

Laka, Itziar (1990) *Negation in Syntax: On the Nature of Functional Categories and Projections*, Doctoral dissertation, MIT.

Lakoff, George (1986) “Frame Semantic Control of the Coordinate Structure Constraint,” *CLS* 22, Part II, 152-167.

Landau, Idan (2007) “EPP Extensions,” *Linguistic Inquiry* 38, 485-523.

Lasnik, Howard (1995a) “Verbal Morphology: Syntactic Structures Meets the Minimalist Program,” *Evolution and Revolution in Linguistic Theory*, ed. by Hector Campos and Paula M. Kempchinsky, 251-275, Georgetown University Press, Washington, D. C.

Lasnik, Howard (1995b) “Last Resort,” *Minimalism and Linguistic Theory*, ed. by Shosuke Haraguchi and Michio Funaki, 1-32, Hituzi Syobo, Tokyo.

Lasnik, Howard (2000) “Derivation and Representation in Modern Transformational Syntax,” *The Handbook of Contemporary Syntactic Theory*, ed. by Mark Baltin and Chris Collins, 62-88, Blackwell, Oxford.

Maki, Hideki and Asako Uchibori (2008) “*Ga*/*No* Conversion,” *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, ed. by Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito, 192-216, Oxford University Press, Oxford.

Marantz, Alec (1988) “Clitics, Morphological Merger, and the Mapping to Phonological Structure,” *Theoretical Morphology: Approaches in Modern Linguistics*, ed. by Michael Hammond and Michael Noonan, 253-270, Academic Press, New York.

Marantz, Alec (1989) “Clitics and Phrase Structure,” *Alternative Conceptions of Phrase Structure*, ed. by Mark R. Baltin and Anthony S. Kroch, 99-116, Chicago University Press, Chicago.

Matsui, Haruko (2005)「On Verb Movement in Japanese: From the Viewpoint of NPI Licensing in Coordination」『**筑波応用言語学研究**』12, 85-98.

Matsumoto, Yo (1996) *Complex Predicates in Japanese: A Syntactic and Semantic Study of the Notion ‘Word’*, Kurosio and CSLI, Tokyo and Stanford.

May, Robert (1977) *The Grammar of Quantification*, Doctoral dissertation, MIT.

McGloin, Naomi (1976) “Negation,” *Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar*, ed. by Masayoshi Shibatani, 371-419, Academic Press, New York.

Merchant, Jason (2001) *The Syntax of Silence: Slucing, Islands, and the Theory of Ellipsis*, Oxford University Press, Oxford.

三原健一 (1997)「**連用形の時制指定について**」『**日本語科学**』1, 25-36.

三原健一/平岩健 (2006)『**新日本語の統語構造**』, **松柏社**, **東京**.

三木望 (2001)「**難易構文**」『**日英対照：動詞の意味と構文**』, **影山太郎編**, 212-239, **大修館書店**, **東京**.

Miyagawa, Keiko (1998) “The Japanese Dummy Verbs and the Organization of Grammar,” *Japanese/Korean Linguistics* 7, 427-443.

Miyagawa, Shigeru (1989) *Syntax and Semantics 22: Structure and Case Marking in Japanese*, Academic Press, New York.

Miyagawa, Shigeru (1993) “LF Case-Checking and Minimal Link Condition,” *MIT Working Papers in Linguistics* 19, 213-254.

Miyagawa, Shigeru (2001) “The EPP, Scrambling, and *Wh*-in-situ,” *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 293-338, MIT Press, Cambridge, MA.

Miyagawa, Shigeru and Koji Arikawa (2007) “Locality in Syntax and Floating Numeral Quantifiers,” *Linguistic Inquiry* 38, 645-670.

Miyara, Shinsho (1991) “On the Insertion of /s/-Form (*Suru*) in Japanese,” *Gengo Kenkyu* 99, 1-24.

Mukai, Emi (2003) “On Verbless Conjunction in Japanese,” *NELS* 33, 205-224.

Munn, Alan (1993) *Topics in the Syntax and Semantics of Coordinate Structures*, Doctoral dissertation, University of Maryland, College Park.

Murasugi, Keiko (1991) *Noun Phrases in Japanese and English*, Doctoral dissertation,

University of Connecticut, Storrs.

Nakatani, Kentaro (2004) *Predicate Concatenation: A Study of the V*-te-*V Predicate in Japanese*, Doctoral dissertation, Harvard University.

Nakau, Minoru (1973) *Sentential Complementation in Japanese*, Kaitakusha, Tokyo.

Namai, Kenichi (2000) "Subject Honorification in Japanese," *Linguistic Inquiry* 31, 170-176.

日本語記述文法研究会編 (2007)**『現代日本語文法３：アスペクト，テンス，肯否』，くろしお出版，東京.**

Nishigauchi, Taisuke (1986) *Quantification in Syntax*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.

Nishigauchi, Taisuke (1993) "Long Distance Passive," *Japanese Syntax in Comparative Grammar*, ed. by Nobuko Hasegawa, 79-114, Kurosio, Tokyo.

西垣内泰介/石井康男 (2003)**『英語から日本語を見る』，大修館書店，東京.**

Nishioka, Nobuaki (1994) "Improper Movement and Polarity Items in English and Japanese," *English Linguistics* 11, 1-28.

Nishiyama, Kunio (1998) "V-V Compounds as Serialization," *Journal of East Asian Linguistics* 7, 175-217.

沼田善子 (1986)**「第２章とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』，** 105-216**，凡人社，東京.**

沼田善子 (2008)**「とりたて詞の分布と意味をめぐって」『日本語文法』**8 **巻** 2 **号，** 20-36**.**

Ochi, Masao (1999) *Constraints on Feature Checking*, Doctoral dissertation, University of Connecticut, Storrs.

Ochi, Masao (2001) "Move-F and *Ga*/*No* Conversion in Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 10, 247-286.

Ohkado, Masayuki (1991) "A Note on *Suru* in Japanese," *Linguistic Analysis* 21, 148-169.

Oshima, Shin and Katsunori Kotani (2008) "A Minimalist Analysis of Coordination: Decomposing the Coordinate Structure Constraint," *English Linguistics* 25, 402-438.

Otani, Kazuyo and John Whitman (1991) "V-raising and VP-ellipsis," *Linguistic Inquiry* 22, 345-358.

Oyakawa, Takatsugu (1975) “On the Japanese *Sika Nai* Construction,” *Gengo Kenkyu* 76, 1-20.

Pesetsky, David (1997) “Optimality Theory and Syntax: Movement and Pronunciation,” *Optimality Theory: An Overview*, ed. by Diana Archangeli and D. Terence Langendoen, 134-170, Blackwell, Oxford.

Pesetsky, David (1998) “Some Optimality Principles of Sentence Pronunciation,” *Is the Best Good Enough?*, ed. by Pilar Barbosa, Danny Fox, Paul Hagstrom, Martha McGinnis, and David Pesetsky, 337-383, MIT Press, Cambridge, MA.

Pollock, Jean-Yves (1989) “Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP,” *Linguistic Inquiry* 20, 365-424.

Postal, M. Paul (1998) *Three Investigations of Extraction*, MIT Press, Cambridge, MA.

Progovac, Ljiljana (2003) “Structure for Coordination,” *The Second Glot International State-of-the-Article Book: The Latest in Linguistics*, ed. by Lisa Cheng and Rint Sybesma, 241-287, Mouton de Gruyter, Berlin.

Radford, Andrew (2004) *Minimalist Syntax*, Cambridge University Press, Cambridge.

Reinhart, Tanya (1976) *The Syntactic Domain of Anaphora*, Doctoral dissertation, MIT.

Rizzi, Luizi (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press, Cambridge, MA.

Rizzi, Luizi (1997) “The Fine Structure of the Left Periphery,” *Elements of Grammar*, ed. by Liliane Haegeman, 281-337, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.

Ross, John Robert (1967) *Constraints on Variables in Syntax*, Doctoral dissertation, MIT.

Ross, John Robert (1969) “Guess Who?” *CLS* 5, 252-286.

Ross, John Robert (1970) “Gapping and the Order of Constituents,” *Progress in Linguistics*, ed. by Manfred Bierwisch and Karl Erich Heidolph, 249-259. Mouton, The Hague.

Sag, Ivan (1976) *Deletion and Logical Form*, Doctoral dissertation, MIT.

Sag, Ivan, Gerald Gazder, Thomas Wasow, and Steven Weisler (1985) “Coordination and How to Distinguish Categories,” *Natural Language and Linguistic Theory* 3, 117-171.

Saito, Mamoru (1985) *Some Asymmetries in Japanese and Their Theoretical Implications*, Doctoral dissertation, MIT.

Saito, Mamoru (1987) “Three Notes on Syntactic Movement in Japanese,” *Issues in*

Japanese Linguistics, ed. by Takashi Imai and Mamoru Saito, 301-350, Foris, Dordrecht.

Saito, Mamoru and Hoji Hajime (1983) "Weak Crossover and Move α in Japanese," *Natural Language and Linguistic Theory* 1, 245-259.

Saito, Mamoru and Hoshi Hiroto (2000) "The Japanese Light Verb Construction and the Minimalist Program," *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 261-295, MIT Press, Cambridge, MA.

Sakai, Hiromu (1994) "Complex NP Constraint and Case-Conversions in Japanese," *Current Topics in English and Japanese*, ed. by Masaru Nakamura, 179-203, Hituzi Syobo, Tokyo.

Sakai, Hiromu (1998) "Feature Checking and Morphological Merger," *Japanese/Korean Linguistics* 8, 189-201.

酒井弘 (2000)「**古典的類型論と比較統語論：日本語動詞形態の分析を通して**」『**京都大学言語学研究**』19，117-146**.**

佐佐木隆 (1999)『**万葉集と上代語**』，**ひつじ書房**，**東京.**

Sells, Peter (1995) "Korean and Japanese Morphology from a Lexical Perspective," *Linguistic Inquiry* 26, 277-325.

Shibatani, Masayoshi (1973) "Where Morphology and Syntax Clash: A Case in Japanese Aspectual Verbs," *Gengo Kenkyu* 64, 65-96.

Shibatani, Masayoshi (1975) "Perceptual Strategies and the Phenomenon of Particle Convention in Japanese," *Papers from the Parasession on Functionalism*, 469-480, Chicago Linguistic Society.

Shibatani, Masayoshi (1977) "Grammatical Relations and Surface Case," *Language* 53, 789-809.

柴谷方良 (1978)『**日本語の分析**』，**大修館書店**，**東京.**

Shibatani, Masayoshi and Taro Kageyama (1988) "Word Formation in Modular Theory of Grammar: Post-Syntactic Compounds in Japanese," *Language* 64, 451-484.

Sportiche, Dominique (1988) "A Theory of Floating Quantifiers and Its Corollaries for Constituent Structure," *Linguistic Inquiry* 19, 425–449.

Stowell, Timothy Angus (1981) *Origins of Phrase Structure*, Doctoral dissertation, MIT.

Suzuki, Tatsuya (1989) "A Syntactic Analysis of an Honorific Construction *o...-ni naru*

under the DP Hypothesis: Toward a Unified Theory of Honorification," *WCCFL* 8, 373-383.

橘純一 (1952)「**『平家物語』『徒然草』解釈上注意すべき語法」『解釈と鑑賞』昭和 27 年 8 月号，** 28-31**.**

Tada, Hiroaki (1992) "Nominative Object in Japanese," *Journal of Japanese Linguistics* 14, 91-108.

田川拓海 (2008)「**分散形態論による活用への統語的アプローチ：現代日本語における動詞連用形の形態統語論分析」『筑波応用言語学研究』**15**,** 59-72**.**

Takahashi, Daiko (1990) "Negative Polarity, Phrase Structure, and the ECP," *English Linguistics* 7, 129-146.

高見健一 (1998)「**日本語の数量詞について」『言語』**27-1**,** 86–95**,** 27-2**,** 86 –95**,** 27-3**,** 98 –107**.**

Takano, Yuji (2004) "Coordination of Verbs and Two Types of Verbal Inflection," *Linguistic Inquiry* 35, 168-178.

Takezawa, Koichi (1987) *A Configurational Approach to Case-Marking in Japanese*, Doctoral dissertation, University of Washington.

Takezawa, Koichi (1993) "A Comparative Study of *Omoe* and *Seem*," *Argument Structure: Its Syntax and Acquisition*, ed. by Heizo Nakajima and Yukio Otsu, 75-95, Kaitakusha, Tokyo.

Takezawa, Koichi (1994) "Movement and the Roles of Case and Agr in Japanese Nominalization Constructions," *Current Topics in English and Japanese*, ed. by Masaru Nakamura, 255-284, Hituzi Syobo, Tokyo.

Tateishi, Koichi (1991) *The Syntax of 'Subjects'*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.

Terada, Michiko (1990) *Incorporation and Argument Structure in Japanese*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.

Terazu, Noriko (1975) "Coordinate Deletion, Gapping, and Right Node Raising," *Studies in English Linguistics* 3, 19-65.

時枝誠記 (1941)**『國語學言論』，岩波書店，東京.**

Tomioka, Satoshi (1993) "Verb Movement and Tense Specification in Japanese," *WCCFL* 11, 482-494.

Toribio, Almeida Jacqueline (1990) "Specifier-Head Agreement in Japanese," *NELS* 9,

535-548.

Travis, Lisa (1984) *Parameters and Effects of Word Order Variation*, Doctoral dissertation, MIT.

内丸裕佳子 (2006a)**「動詞のテ形を伴う節の統語構造について－付加構造と等位構造との対立を中心に－」『日本語の研究』**2-1**（『国語学』通巻** 224 **号）**, 1-15**.**

内丸裕佳子 (2006b)**『形態と統語構造の相関－テ形節の統語構造を中心に－』, 博士論文, 筑波大学.**

Ueda, Masanobu (1986) "On Quantifier Float in Japanese," *University of Massachusetts Occasional Papers in Linguistics* 11, 263-309.

Ueda, Masanobu (1990) *Japanese Phrase Structure and Parameter Setting*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.

Ura, Hiroyuki (1993) "L-Relatedness and Its Parametric Variation," *MIT Working Papers in Linguistics* 19, 377-399.

Ura, Hiroyuki (1996) *Multiple Feature-Checking: A Theory of Grammatical Function Splitting*, Doctoral dissertation, MIT.

Ura, Hiroyuki (2000) *Checking Theory and Grammatical Functions in Universal Grammar*, Oxford University Press, Oxford.

Vermeulen, Reiko (2005) *The Syntax of External Possession: Its Basis in Theta-Theory*, Doctoral dissertation, University of College London.

Vermeulen, Reiko (2008) "Nonconstituent Coordination in Japanese: A Case of Phonological Reordering," *Linguistic Inquiry* 39, 345-354.

Watanabe, Akira (1992) "Subjacency and S-structure Movement of Wh-in-situ," *Journal of East Asian Linguistics* 1, 255-291.

Watanabe, Akira (1993) *Agr-Based Case Theory and Its Interaction with A-bar System*, Doctoral dissertation, MIT.

Watanabe, Akira (1996) "Nominative-Genitive Conversion and Agreement in Japanese: A Cross-Linguistic Perspective," *Journal of East Asian Linguistics* 5, 373-410.

Watanabe, Akira (2004) "The Genesis of Negative Concord: Syntax and Morphology of Negative Doubling," *Linguistic Inquiry* 35, 558-612.

渡辺実 (1971)**『国語構文論』, 塙書房, 東京.**

Whitman, John (1987) "Configurationality Parameters," *Issues in Japanese Linguistics*,

ed. by Takashi Imai and Mamoru Saito, 351-374, Foris, Dordrecht.

Williams, Edwin (1977) “Discourse and Logical Form,” *Linguistic Inquiry* 8, 101-139.

Williams, Edwin (1994) *The Thematic Structure in Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.

山口佳紀 (1987)**「各活用形の機能」『国文法講座** 2**』，** 1-36**，明治書院，東京.**

安井稔（編）(1987)**『現代英文法事典』，大修館書店，東京.**

Yanagida, Yuko (2005) *The Syntax of FOCUS and WH-Questions in Japanese*, Hituzi Syobo, Tokyo.

Yatsushiro, Kazuko (1999) *Case Licensing and VP Structure*, Doctoral dissertation, University of Connecticut, Storrs.

Yoshimoto, Yasushi (1998) “The Strong [neg] Feature of Neg and NPI Licensing in Japanese,” *Japanese/Korean Linguistics* 8, 529-541.

由本陽子 (2005)**『複合動詞の意味と統語：モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』，ひつじ書房，東京.**

Zanuttini, Raffaela (1991) *Syntactic Properties of Sentential Negation: A Comparative Study of Romance Languages*, Doctoral dissertation, University of Pennsylvania.

Zoerner, Ed (1995) *Coordination: The Syntax of &P*, Doctoral dissertation, University of California, Irvine.